

昭和56年度浪岡城跡発掘調査報告書

浪岡城跡 V

浪岡町教育委員会

浪岡城跡 V 正誤表

P 5 6		P L 2 7	写真	天地逆
P 6 1	2 行	鉄碗玉	→	鉄砲玉
P 7 7		S T 1 4 3	写真	天地逆
P 9 1	9 行	S E	→	S E 4 4
P 9 2	8 行	約 3 5 0 <i>cm</i> まえ	→	約 3 5 0 <i>cm</i> まで
P 1 4 1	5 行	全属的	→	金属的
P 1 4 8	3 2 行	皿状銅製品	→	皿状銅製品 (3 3 9)

昭和56年度浪岡城跡発掘調査報告書

浪岡城跡 V

浪岡町教育委員会

発刊にあたって

浪岡城が国の史跡に指定されたのは、昭和15年2月10日のことです。それ以前から浪岡北畠氏の居城として浪岡城跡が津軽史における重要な位置を占めていたことは周知の事実でしたが、文献記録が稀少だったため十分に意をつくされた評価を受けていたとは申せません。

しかしながら昭和40年代には、史跡地内の公有化事業に着手し、史跡指定地内の87%は公有化を完了、同52年からは歴史的解明のために発掘調査を継続してまいりました。

発掘調査によって知られるようになった数多くの事実は、まさに北畠氏居城としての豊かな経済力とそれともなう精神文化の存在をより明確にするものでした。それゆえに、浪岡城跡は先人から受け継いだ貴重な文化遺産として、後世に語り継がれ、活用されるよう保存してゆかなければならないと確信しております。

今後、浪岡城跡は「史跡公園」として整備してゆく計画ですが、未知の分野なため幾多の困難が予想されます。関係各位には、発掘調査のみならず環境整備に関しても貴重なご指導、ご鞭撻をいただきますよう切にお願い申し上げます。

昭和58年3月31日

浪岡町教育委員会

教育長 村上良民

例 言

1. 本書は、史跡浪岡城跡環境整備計画策定のため昭和56年度に実施した発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、国・県の補助を受け、総事業費12,000,000円で浪岡町・浪岡町教育委員会がおこなった。
3. 発掘調査および整理作業は、昭和56年6月1日から昭和58年3月2日までおこなった。
4. 本書は、本文5項目、挿図 (Fig.) 74枚、図版 (PL.) 102枚、表 (Ch.) 86枚で構成し、執筆はII調査の経過を唐牛芳光が、他を工藤清泰がおこなった。
5. 挿図 (Fig.)・図版 (PL.)・表 (Ch.) で示した遺物ナンバーは、報告用の通しナンバーであり、固有ナンバーは表 (Ch.) 中に表示してある。

例

<u>81</u>	<u>F 53</u>	<u>S T 113</u>	<u>d</u>	<u>フク土</u>	<u>P 827</u>
調査年度	発掘グリッド	遺構名	小区分	層位	固有No

7. 本報告書の編集に関して、昭和56年度調査の遺構・遺物に関係ある資料は既に報告済のものでも使用することとし、浪岡城跡の全体像が理解しやすいようにした。
8. 遺構の記述で、出土遺物の点数を述べたものは破片数であり、1個体分のもはそのつど記述するようにしている。
9. 発掘調査および遺構・遺物整理の段階で、下記の関係機関のご指導・ご助言をいただいた。記して感謝申し上げる次第である。

文化庁文化財保護部記念物課、青森県教育庁文化課、弘前大学教育学部考古学研究室、八戸市教育委員会、上ノ国町教育委員会、弘前市教育委員会。

本文目次

発刊にあたって

例言

I. 調査に至る経緯	2
II. 調査の経過（調査日誌より）	5
III. 検出遺構と主な出土遺物	10
1. 掘立柱建物跡	12
2. 竪穴遺構	33
3. 井戸跡	86
4. 溝跡	99
5. その他の遺構	102
IV. 出土遺物	110
1. 陶磁器類	110
2. 鉄製品・銅製品	145
3. 石製品	152
4. 古銭	156
5. その他の遺物	157
V. まとめ	157

図版 (PL.) 目次

PL. 1 浪岡城跡周辺航空写真	1	PL. 12 I 48区検出の茶臼が置かれた柱穴	27
PL. 2 発掘調査スナップ（児童による発掘調査）	9	PL. 13 ST100（東側から）	33
PL. 3 発掘調査区全景（西側から）	11	PL. 14 ST101（ 〃 ）	34
PL. 4 〃（南側から）	11	PL. 15 ST102（ 〃 ）	35
PL. 5 SB12検出状況（南側から）	19	PL. 16 ST102床面出土の刀と鉄製品	35
PL. 6 SB13 〃（南側から）	19	PL. 17 ST103・ST111・ST112（西側から）	38
PL. 7 SB14 〃（北側から）	23	PL. 18 ST103床面出土の轡	38
PL. 8 SB15 〃（ 〃 ）	23	PL. 19 ST104・ST107（西側から）	45
PL. 9 SB17 〃（ 〃 ）	25	PL. 20 ST105（北側から）	45
PL. 10 SB18・SB19検出状況（北側から）	26	PL. 21 ST106（南側から）	47
PL. 11 F・G53区柱穴出土状況（南側から）	27	PL. 22 ST108（西側から）	47

PL.23	S T 115 (西側から)	50	PL.63	青磁(2)	111
PL.24	S T 117 (東側から)	52	PL.64	白磁(1)	112
PL.25	S T 117出土遺物	53	PL.65	白磁(2)	113
PL.26	S T 118 (西側から)	54	PL.66	白磁(3)	113
PL.27	S T 119 (//)	56	PL.67	染付(1)	117
PL.28	S T 120 (南側から)	56	PL.68	染付(2)	117
PL.29	S T 121・S T 122・S X 74 (北側から)	58	PL.69	染付(3)	118
PL.30	S T 125 (西側から)	58	PL.70	染付(4)	118
PL.31	S T 127 (北側から)	59	PL.71	染付(5)	119
PL.32	S T 130・S T 131他 (北側から)	59	PL.72	染付(6)	119
PL.33	S T 132 (北側から)	68	PL.73	朝鮮系・他	121
PL.34	S T 133 (//)	68	PL.74	美濃灰釉陶器	122
PL.35	S T 134 (西側から)	70	PL.75	美濃褐釉陶器	123
PL.36	S T 135 (北側から)	70	PL.76	天目	123
PL.37	S T 137 (//)	71	PL.77	黄瀬戸手・唐津・志野・他	126
PL.38	S T 138 (//)	71	PL.78	越前	129
PL.39	S T 139 (//)	73	PL.79	信楽	130
PL.40	S T 140 (//)	73	PL.80	播鉢(1)珠洲系	131
PL.41	S T 141 (西側から)	74	PL.81	播鉢(2)越前系	133
PL.42	S T 142・S T 147 (北側から)	74	PL.82	播鉢(3)備前系	134
PL.43	S T 143 (北側から)	77	PL.83	播鉢(4)産地不詳系	135
PL.44	S T 144 (東側から)	77	PL.84	播鉢(5) //	136
PL.45	S T 145・S T 148・S T 151 (東側から)	78	PL.85	播鉢(6) //	137
PL.46	S T 145覆土出土美濃褐釉小壺	78	PL.86	播鉢(7) //	138
PL.47	S E 42発掘状況	87	PL.87	瓦器	139
PL.48	S E 42木枠出土状態	87	PL.88	かわらけ	140
PL.49	S E 43遺物出土状態	91	PL.89	溶解物付着土器・須恵器・他	141
PL.50	S E 50全景	92	PL.90	土師器・他	142
PL.51	S E 50出土陶器	93	PL.91	鉄製品(1)	146
PL.52	S E 50出土播鉢	94	PL.92	// (2)	149
PL.53	S E 51発掘状況(1)	95	PL.93	// (3)	150
PL.54	S E 51木枠出土状態(2)	95	PL.94	銅製品	151
PL.55	S E 51完掘状況(3)	96	PL.95	石製品(1)	154
PL.56	S E 55完掘状況	97	PL.96	石製品(2)	155
PL.57	S D 32 (北側から)	101	PL.97	青磁(原色)	159
PL.58	S D 32土師器・須恵器出土状態	101	PL.98	青磁・白磁(原色)	160
PL.59	S X 52 (西側から)	102	PL.99	染付(原色)	161
PL.60	S X 80 (北側から)	106	PL.100	染付・赤絵・朝鮮(原色)	162
PL.61	土師器・須恵器を出土する遺構 (S X 81・S X 86)	107	PL.101	美濃(原色)	163
PL.62	青磁(1)	110	PL.102	美濃・瀬戸・唐津(原色)	164

付 表 (Ch.) 目 次

Ch. 1 H48~H52区層序注記表	165	Ch. 44 S T142・S T147注記表	177
Ch. 2 S B05柱穴計測表	165	Ch. 45 S T143注記表	177
Ch. 3 S B10 //	165	Ch. 46 S T144 //	177
Ch. 4 S B12 //	166	Ch. 47 S T145・S T148・S T150・S T151注記表	177
Ch. 5 S B13 //	166	Ch. 48 S E42覆土層序	178
Ch. 6 S B14 //	166	Ch. 49 S E43 //	178
Ch. 7 S B15 //	166	Ch. 50 S E46 //	178
Ch. 8 S B17 //	167	Ch. 51 S E40 //	178
Ch. 9 S B18 //	167	Ch. 52 S E44 //	178
Ch. 10 S B19 //	167	Ch. 53 S E45 //	178
Ch. 11 S T100注記表	167	Ch. 54 S E48 //	178
Ch. 12 S T101注記表	168	Ch. 55 S E50 //	179
Ch. 13 S T102 //	168	Ch. 56 S E50出土陶器注記表	179
Ch. 14 S T103・S T111・S T112注記表	169	Ch. 57 S E50出土播鉢 //	179
Ch. 15 S T104注記表	169	Ch. 58 S E51覆土層序	179
Ch. 16 S T105注記表	170	Ch. 59 S X52 //	180
Ch. 17 S T106注記表	170	Ch. 60 S X53 //	180
Ch. 18 S T107注記表	170	Ch. 61 S X56 //	180
Ch. 19 S T108・S T109・S T110注記表	170	Ch. 62 S X61 //	180
Ch. 20 S T113注記表	171	Ch. 63 S X64 //	180
Ch. 21 S T115 //	171	Ch. 64 S X68覆土層序	180
Ch. 22 S T117 //	171	Ch. 65 S X72 //	180
Ch. 23 S T117出土遺物注記表	171	Ch. 66 S X80 //	180
Ch. 24 S T118注記表	172	Ch. 67 S X88 //	180
Ch. 25 S T119注記表	172	Ch. 68 青磁注記表	181
Ch. 26 S T120 //	172	Ch. 69 白磁 //	181
Ch. 27 S T121 //	172	Ch. 70 染付 //	182
Ch. 28 S T124 //	172	Ch. 71 朝鮮系・他注記表	183
Ch. 29 S T125 //	173	Ch. 72 美濃灰釉陶器注記表	183
Ch. 30 S T127 //	173	Ch. 73 美濃褐釉陶器 //	183
Ch. 31 S T128・S T129注記表	173	Ch. 74 天目注記表	184
Ch. 32 S T130注記表	173	Ch. 75 黄瀬戸手・唐津・志野・他注記表	184
Ch. 33 S T131・S X71注記表	173	Ch. 76 越前注記表	184
Ch. 34 S T132・S T152注記表	174	Ch. 77 信楽注記表	185
Ch. 35 S T133注記表	174	Ch. 78 播鉢注記表	185
Ch. 36 S T134・S X67注記表	174	Ch. 79 瓦器注記表	187
Ch. 37 S T135注記表	175	Ch. 80 かわけ注記表	187
Ch. 38 S T136・S T146注記表	175	Ch. 81 溶解物付土器 (埴塙)・須恵器他注記表	187
Ch. 39 S T137注記表	175	Ch. 82 土師器・他注記表	188
Ch. 40 S T138注記表 (含S X65覆土層序)	175	Ch. 83 鉄製品注記表	188
Ch. 41 S T139注記表	176	Ch. 84 銅製品注記表	189
Ch. 42 S T140 //	176	Ch. 85 石製品注記表	190
Ch. 43 S T141 //	176	Ch. 86 古銭計測表	191

挿 図 (Fig.) 目 次

Fig. 1	浪岡城跡の位置	4	Fig. 39	S T 132・S T 152実測図	66
Fig. 2	浪岡城跡全体図	6	Fig. 40	S T 133実測図	67
Fig. 3	発掘調査区とグリッド配置図	6	Fig. 41	S T 134・S X 67実測図	69
Fig. 4	発掘調査区全体(1)A区 (1/100) 付図	付録図	Fig. 42	S T 135・S D 32実測図	72
Fig. 5	" (2)B区 (1/100) "	付録図	Fig. 43	S T 136・S T 146実測図	76
Fig. 6	" (3)C区 (1/100) "	付録図	Fig. 44	S T 137実測図	79
Fig. 7	H48~H52区層序図	10	Fig. 45	S T 138・S X 65実測図	80
Fig. 8	S B 05実測図 (折り込み)	13、14	Fig. 46	S T 139実測図	81
Fig. 9	S B 10 " (")	15、16	Fig. 47	S T 140 "	81
Fig. 10	S B 12 " (")	17、18	Fig. 48	S T 141・S X 86実測図	82
Fig. 11	S B 13 "	20	Fig. 49	S T 142・S T 147実測図	83
Fig. 12	S B 14 " (折り込み)	21、22	Fig. 50	S T 143実測図	84
Fig. 13	S B 15 "	24	Fig. 51	S T 144 "	84
Fig. 14	S B 17 "	28	Fig. 52	S T 145・S T 148・S T 150・S T 151実測図	85
Fig. 15	S B 18 " (折り込み)	29、30	Fig. 53	S E 42実測図・S E 42木枠実測図	86
Fig. 16	S B 19実測図 (折り込み)	31、32	Fig. 54	S E 43・S E 46実測図	88
Fig. 17	S T 100実測図	36	Fig. 55	S E 40・S E 41・S E 44・S E 45実測図	89
Fig. 18	S T 101 "	37	Fig. 56	S E 48・S E 50実測図	90
Fig. 19	S T 102 " (折り込み)	39、40	Fig. 57	S E 51実測図・S E 51木枠実測図	96
Fig. 20	S T 103・S T 111・S T 112実測図 (折り込み)	41、42	Fig. 58	S X 52・S X 53実測図	103
Fig. 21	S T 104実測図	43	Fig. 59	S X 56・S X 61・S X 64・S X 68・S X 72実 測図	104
Fig. 22	S T 105 "	43	Fig. 60	S X 79・S X 80実測図	108
Fig. 23	S T 106 "	44	Fig. 61	S X 88実測図	109
Fig. 24	S T 107 "	48	Fig. 62	青磁実測図	112
Fig. 25	S T 108・S T 109・S T 110実測図	49	Fig. 63	白磁・他実測図	114
Fig. 26	S T 113実測図	49	Fig. 64	染付実測図(1)	115
Fig. 27	S T 115 "	50	Fig. 65	" (2)	116
Fig. 28	S T 117 "	51	Fig. 66	" (3)	120
Fig. 29	S T 118・S X 61実測図	55	Fig. 67	美濃 (灰袖・褐袖) 実測図	125
Fig. 30	S T 119実測図	57	Fig. 68	天目・黄瀬戸・他実測図	127
Fig. 31	S T 120実測図	57	Fig. 69	唐津・他実測図	128
Fig. 32	S T 121・S T 122・S X 74実測図	60	Fig. 70	瓦器・越前壺実測図	130
Fig. 33	S T 124実測図	62	Fig. 71	播鉢実測図	132
Fig. 34	S T 125 "	63	Fig. 72	溶解物付着土器・かわらけ・土師器・他実測 図	143
Fig. 35	S T 127 "	63	Fig. 73	鉄製品実測図	147
Fig. 36	S T 138・S T 129実測図	64	Fig. 74	銅製品実測図	153
Fig. 37	S T 130・S E 59・S X 71実測図	65			
Fig. 38	S T 131・S X 71実測図	65			



PL. 1 浪岡城跡周辺の航空写真

I 調査に至る経緯

昭和56年度の発掘調査は、下記の調査要項に則しておこなった。

昭和56年度史跡浪岡城発掘調査要項

1. 調査の目的

史跡浪岡城跡は、北畠氏の居城として県内でも有数の城館であり、浪岡町では『史跡公園』として整備する計画である。

昭和53年度から継続している発掘調査の4年目にあたり、浪岡城跡の主郭と推定される北館を中心に発掘調査をおこない、遺構ならびに遺物の検出に努める。

2. 調査期間

発掘作業 昭和56年6月1日～11月4日

整理作業 昭和56年11月5日～昭和58年3月

3. 調査対象地域と面積

浪岡城跡北館（青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡字五所地内）

3,000m²

4. 発掘参加者

特別調査顧問 虎尾 俊哉 弘前大学教育学部教授（現国立歴史民俗博物館教授）

〃 村越 潔 弘前大学教育学部教授

〃 佐々木達夫 金沢大学文学部助教授

〃 高島 成侑 八戸工業大学助教授

調査員 宇野 栄二 浪岡町文化財審議委員

〃 葛西 善一 浪岡町文化財審議委員

〃 佐藤 仁 弘前高等学校教諭

〃 奈良岡洋一 藤崎園芸高等学校講師

〃 小笠原 勲 浪岡中学校教諭

〃 村上 巖 浪岡中学校教諭

調査事務 工藤 清泰 浪岡町教育委員会

調査協力員 相田陽子・小倉睦子・伊藤康子・羽澤多鶴子・三ッ橋容子・間山祐司・奈良岡淳・及川清隆・大西善二・亀山緑・神篤志・西山剛・木村浩一・徳差義男・西野緑（以上弘前大学学生）坂本拓郎（青森大学学生）平野康人（札幌商科大学学生）武田嘉彦・対馬幸彦（東北工業大学学生）三浦寿徳（東海大学学生）

調査補助員 斎藤とも子・対馬桂子・伊藤フサ・佐藤芙美子・伊藤圭子・常田紀子・
成田和佳子・葛西静枝・唐牛芳光・工藤喜代美・清野将彦

調査作業員 工藤瑞枝・山内ヤエ・奈良岡昭枝・奈良岡英子・村岡せい子・工藤ツソ・
木村栄子・石沢ムツ・三上トキエ・小笠原昭子・工藤初枝・成田昭子・
常田節子・猪股みむゑ・有馬みよ・山田陸奥子・石村龍子・佐藤ヒサ子・
大川良子・太田とし子・山平まさ子・佐々木愛子・成田弘子・木村レイ
子

5. 調査主体者

浪岡町 町長 平野良一 青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡字稲村101の1

6. 調査担当者（事務局）

浪岡町教育委員会 社会教育課

青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡稲村 101の1 電話番号017262-3001（内線324）

教育長 村上良民

社会教育課長 小笠原武芳（昭和57年4月1日退職）〔現在 中畑康一〕

社会教育係長 常田典昭

同 主事 工藤清泰

同 主事 長谷川理

同 主事 成田和子

7. 調査項目

昭和54年度から浪岡城跡の主郭と推定される北館を中心に調査を進めてきた。本年度も、北館平場を平面的に調査し、遺構の検出と配置関係の把握に努めて遺物等の比較から当時の生活状況を復元するよう努力する。

8. 調査の方法

a) 発掘は、グリッド方式に掘り、グリッドの1単位は10m×10mである。

b) グリッドの表記は、南北線をアルファベット、東西線を算用数字で表わすものとする。

（南北線N-26°-W）

c) 実測図は、遣り方測量と平板測量を併用する。縮尺は、原則として1/20を使用するが目的によって使い分ける。

d) 堆積層の表記は、ギリシア数字とし、間層・遺構の覆土の場合は算用数字を用いる。

e) 遺構の掘り下げは、四分法に掘り、検出の早いものから通し番号を付ける。

f) 遺構の略称は以下の通りである。

掘立柱建物跡 S B 堀 跡 S H 竪穴状性格不明遺構 S X

竪穴遺構	ST	土居・土塁跡	SA
溝跡	SD	井戸跡	SE

8) 遺物の取り上げに際しては、発掘区・層位（レベル）・日付を記載し、実測図にポイントを入れる。

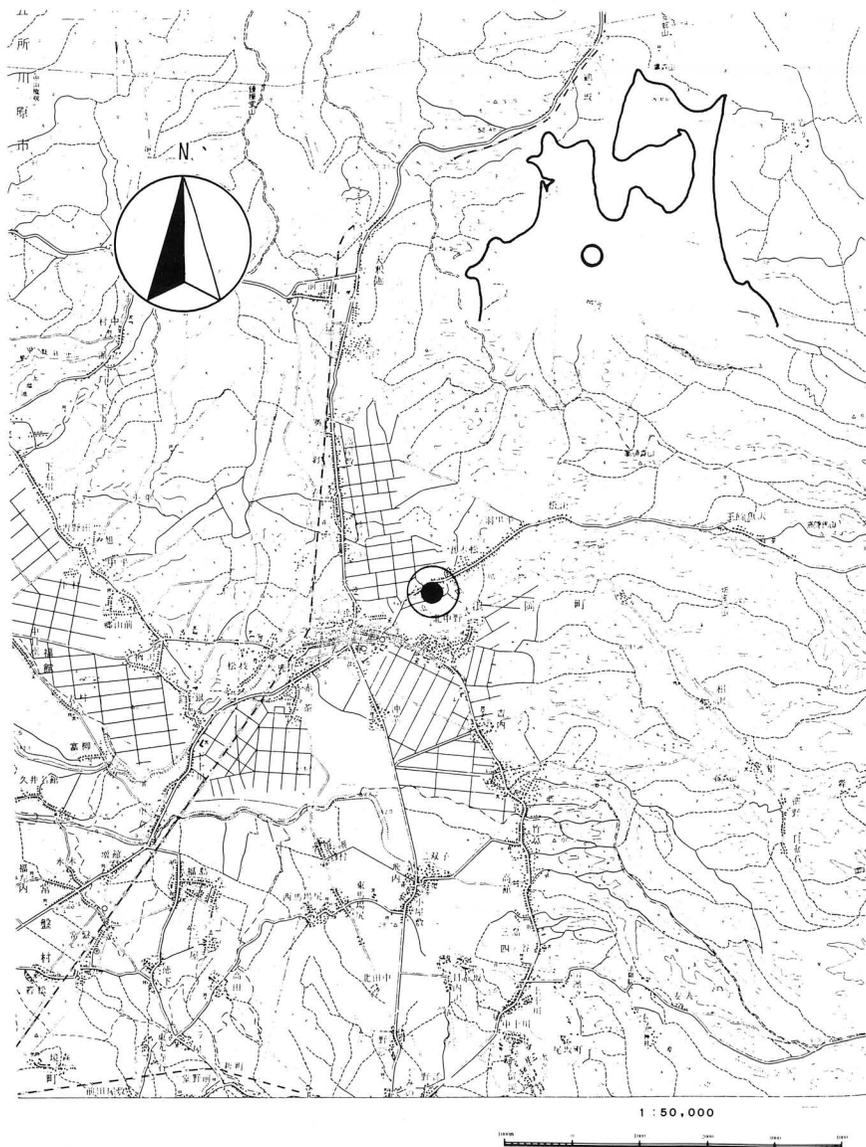
9. 発掘作業後の整理

遺物は、洗浄・注記・写真撮影等の基本整理をし、報告書作製のため遺構実測図・遺物実測図の洗浄をおこなう。

10. 報告書の刊行

浪岡町教育委員会が次年度（昭和58年3月）までに刊行する。

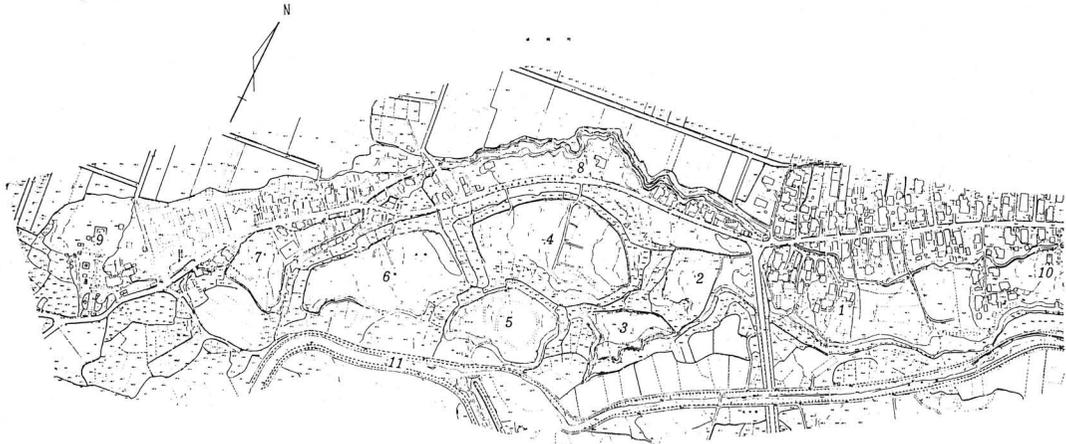
Fig. 1 浪岡城跡の位置



II 調査の経過（調査日誌より）

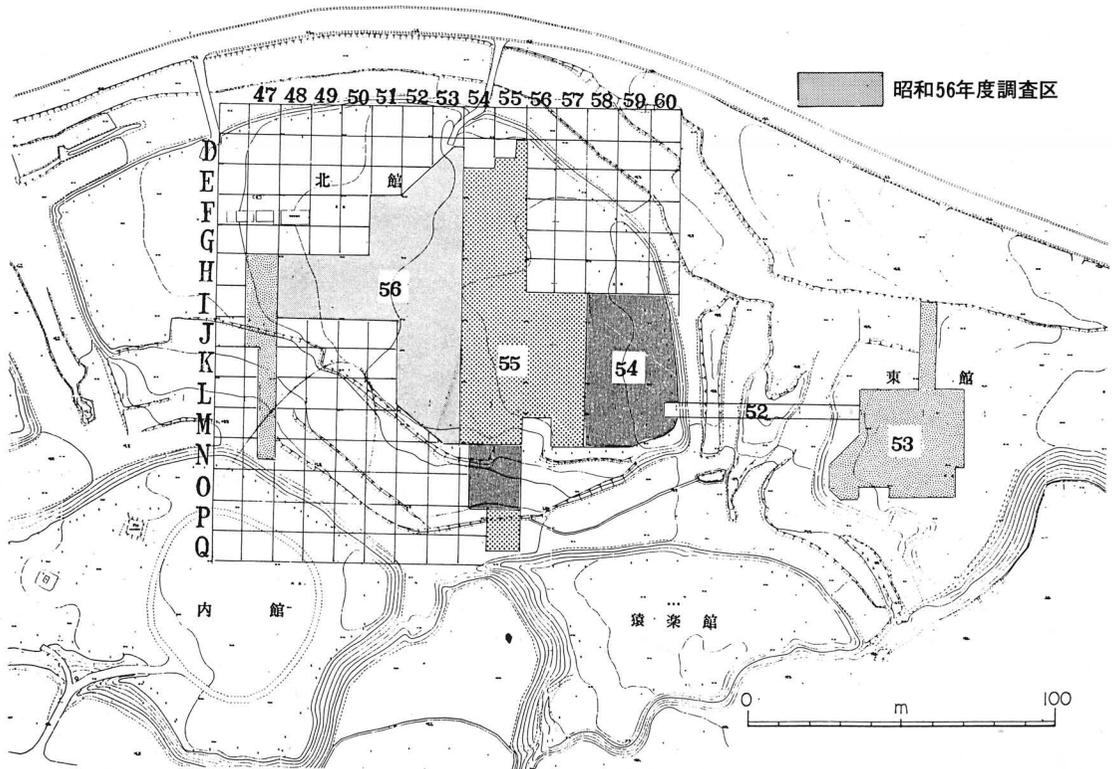
- 5・25 第1回調査打合せ会を開催。
- 6・1 発掘調査開始。グリッドを仮設。午後からは雨天となり、作業の準備に終始する。
- 6・2 昨年度の杭を基準としてグリッドを設定。M52・53区より表土剥ぎを開始。K53区第I層から漆の接合痕がみられる白磁皿が出土する。
- 6・3 B. M. L（標高37.500m）の設定。M区S X52より遺構の掘り下げを開始する。
- 6・4 L53区より罈、青磁酒会壺蓋が出土。作業経過把握の撮影のため、ロータリングタワーの組み立てを行う。
- 6・8 K53地区に、粘土で固定された礎石が検出される。S T101（80'S T83）掘り下げ開始。
- 6・9 K L53地区における柱穴配置の平板実測を行ったところ、白色粘土の入った柱穴が大規模に検出された（S B5）。
- 6・12 雨天。室内作業では、昨年度報告書作成のための主要遺物の実測等を行う。
- 6・19 D53区S T104より筭出土。E～M52・53区の素掘りがほぼ終了する。Hラインより北をA区・南をB区とする。
- 6・20 S T105を確認後D54区へ拡張する。
- 6・22 トランシットを用いてグリッドの軸を確認し基準点を設定。
- 6・24 遣り方の実測の基点となる杭を設定する。
- 6・25 S T104のフク土から銅管が出土する。
- 6・26 S T104・107の平板実測、S T100、S X52より遣り方実測を開始する。
- 7・1 E53区S T111（旧）と重複するS T103（新）のほぼ中央付近の床面より馬具（轡）が出土する。
- 7・3 E52区S T115床面より多量の炭化萱、灰が出土。
- 7・8～9 H52区S T121覆土上層に多量の灰の層が有り、この層より多量の遺物が出土する（罈、筭、小札、火箸、釘、古銭約30枚、陶器は約5片だけ）。
- 7・13 2日より掘り下げているF53区S T117は、50cm程の深さで、西側は床面だが、東側に多量の灰が検出され、これを取り除くと、更に70cm程の深さに床面が検出される。
- 7・17～8・25 弘前大学考古学研究室の学生が調査に参加する。
- 7・20～23 R A Bが、特別番組のため取材に訪れる。これは、11月に「白いたんぼぼ」としてT V放映される。
- 7・23～25 調査に参加している学生により、I 39・40区（堀）の壺掘り調査を行う。染付・青磁・志野・須恵器・木製品（桶底等）・くるみを出土する。

Fig. 2 浪岡城跡全体図



史跡指定地	215,800㎡	1. 新館	15,480㎡	6. 西館	13,830㎡
公有地	188,300㎡	2. 東館	5,400㎡	7. 校館	8,550㎡
		3. 猿楽館	3,750㎡	8. 無名の館	22,250㎡
		4. 北館	15,450㎡	9. 浪岡八幡宮	
		5. 内館	7,890㎡	10. 加茂神社	
				11. 浪岡川	

Fig. 3 発掘調査区とグリッド配置図



- 7・25 F～I51区、H・I47～50区の素掘りが終了する。
- 7・27～29 第2回児童による発掘調査を行う。この期間中に、K・L52区S T131越前壺、I52区S T102瓦器脚、K53区S T130瓦器手焙り、I51区S T134刀等が出土している。
- 8・3 I50区S E42に北東隅柱、東側板が炭化した状態で検出、8日に全体が出土する。I52区S T102より刀・火箸、釘、6日に床面直上より刀、7日に銅板が出土する。J52区S X70より土師器内黒碗が出土する。
- 8・6 J53区S T128より古銭2枚が重なって出土する。上の古銭の中心穴の角の回り4箇所に、小さい丸穴がある。
- 8・7 I52区S E43(S T126)より多量の灰が、8日には美濃・白磁・染付が何片かまとまって、17日には集石が出土するが、後にビニール片が出土し掘下げ中止となる。
- 8・9～16 盆休み
- 8・20 F53区S B13付属柱穴より銅製毛抜きが出土する。
- 8・21 昨日から掘り下げているS D32出土遺物が約70片にも上り、平板測量によりポイントを押さえる。最終的には、須恵器甕、壺、土師器甕、坏、一部酸化須恵器坏も含み約260片が出土する。この遺構は全体が黒色土に覆われていることから、北畠時代には既に廃絶されていたと考えられる。
- H50区より80'H55区S X48より出土した瓦器火鉢口縁部片の同一破片、茶臼(上)、石鉢片口部が、H51区より鋏、小刀(柄部残存)が出土する。
- 8・24 H・I48区にS B18・19の2棟が検出される。
- S E42井戸枠を取り上げる。手斧痕が明瞭である。洗浄後、拓本取り、注記を行う。
- 8・25 S E42井戸枠を深さ1m程で復元する。
- G51区S T144より鉄製品が多量に出土する。
- 8・26 トランシットを用いた未設定部に、遣り方実測の基点となる杭を設定する。
- 8・27 G51区S E48より多量の灰が検出される。
- H51区S X86(小土壇)から須恵器甕・土師器甕・須恵器赤焼き皿が出土する。
- H51区S T140より苧引金が出土する。
- F G51区S E50より多量の陶器が出土する。
- 8・29 I48区S X75(後にS E51)掘り下げ開始。
- 9・1 I48区S T145は、出土遺物が豊富なことから土壇、工房的性格と考えられる。
- 9・5 S T145より美濃瀬戸系褐釉水滴が出土する。
- 9・7 Hライン47～52区のセクション図を作成する。
- 9・9 L53区ピットを掘り下げたところ、白磁・青磁・染付が14片も出土する。
- 9・16 L53区攪乱層より径4cm、高さ4cm、3箇所に穴があり、内1箇所に輪がついている

銅製品が出土する。

- 9・18 S B13柱穴配置図作成。S Eの精査を開始する。
- 9・19 現場説明会を行う。
- 9・21 I 58区S B18柱穴より石臼が出土する。
- 9・22 S T145床面より多量の灰が検出される。
- 9・29 I 48区S X75（井戸）、K52区S X80（石組遺構）の掘り下げを開始する。
- 10・1 S X75は150cmまで掘り下げるにつれて、陶器・石、陶器・鉄製品、石、獣骨、石と出土する。それより下層は、黒色土の掘り下げによって木柁が検出される。柁内の覆土からは、鋏・下駄・桶底・杭・枝等の木製品が出土する。S E51に変更。
S X80は炭化物を含んだ多量の粘土層の下に、石組(292個の石で長方形に組んである)が検出される。
- 10・3 K52区S X81より多量の土師器・須恵器が出土する。
- 10・12 補助員は全面的に平面実測体制をとる。S D32床面より粘土塊が出土する。S T151より高台のある土師器坏、篋書記号のあるひだすき須恵器坏が出土する。
- 10・17 S T114はS E55として掘り下げを完了した。周囲にS F22有り。
- 10・23 G53区S E57より火箸が出土する。
- 11・4 今年度調査区全体の平面実測が終了し、56年度発掘作業が完了する。
- 11・7 初雪。整理作業のための引越しも終り、現場を離れる。

この後、昭和55年度発掘調査報告書作成のための整理作業が2月末まで行われる。

(唐牛芳光)

PL. 2 発掘調査スナップ



児童による
発掘調査



児童による
発掘調査
参加者



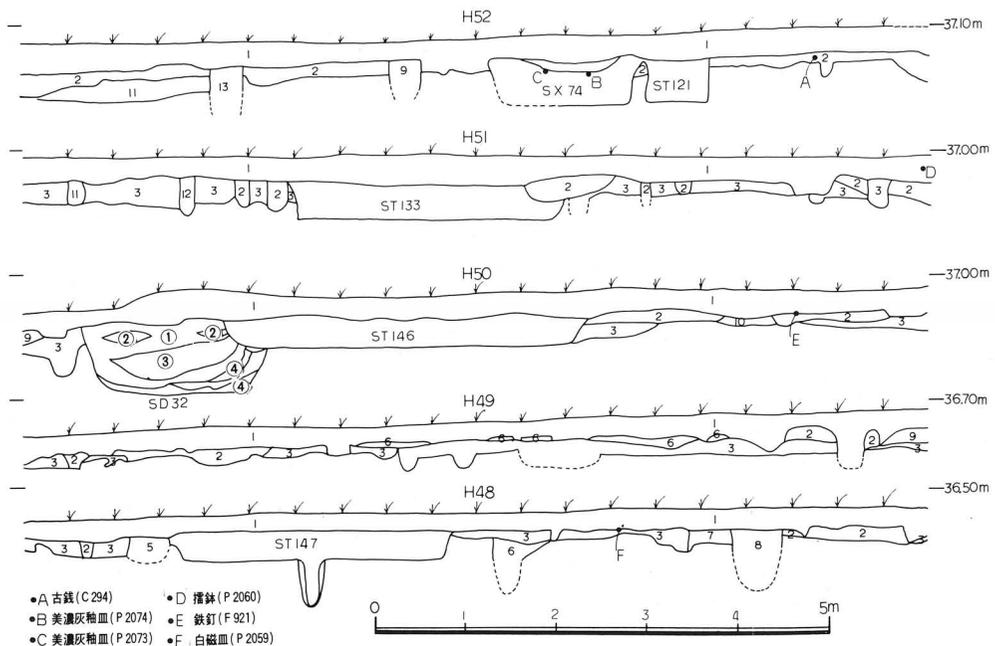
現地
説明会

III 検出遺構と主な出土遺物

本年度の主な検出遺構としては、掘立柱建物跡9棟、竪穴遺構48基、井戸跡19基、溝跡12本性格不明遺構約30基があり、他に焼土範囲の確認もあったが、かまど・炉跡と認めかねたため遺構の中には含めなかった。今回は平場だけの調査ということもあり、掘立柱建物跡の検出が特徴的で、昭和55年度調査区および昭和57年度調査区に重複するものも一括して報告するよう努めた。調査区は、北館のほぼ中央部分であり、掘立柱建物跡・竪穴遺構・井戸跡の重複はかなり激しい。特に、B区 (Fig. 5) 南半部は遺構確認面が削平されているため、遺構と遺物が混然として正確に新旧関係を把握できなかった。

発掘区の層序と時代—Fig. 7で示した層序は、発掘区中央を東西に断じたセクション図であり、比較的遺構確認面の保存が良好な部分である。1層は表土層であり旧耕作面と考えられ、2層・3層が柱穴や竪穴遺構の確認面である。3層以下の層位からは陶磁器がまったく出土しない所から3層上面が当城跡の初期形成の時期、2層は遺構検出が最も多いことから繁栄期の面とみて大異はないであろう。また、SD32はその出土遺物が土師器・須恵器に限られることから城館期以前の遺構と考えられる。いづれにしても、層序の幅が狭く攪乱が激しいため、遺構の明確な時期変遷は今後の課題として残っている。

Fig. 7 H48~52層序図



PL. 3 発掘調査区全景(西側から)



PL. 4 発掘調査区全景(南側から)



1. 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は9棟の検出であるが、F・G53区、L53区等でも柱穴の配列が認められ、建物跡ないしは柵列等の存在が予想される。しかし、精査が不十分だったため明確な把握には至らなかった。以下検出された掘立柱建物跡の概略を述べる。

S B05 (Fig. 5・Fig. 8・Ch. 2) ——K・L・M53・54区で検出した5間×7間の規模を有する建物跡。長軸方向はE-12°-Nであり、東側・南側・西側・北側の一部に一間の庇を有する。柱穴の形状は方形、深さは50cm前後のものが多い。S D16(旧・昭和55年調査)、S D06(旧・昭和55年調査)、S T101(新旧不明)、S B10(新旧不明)などと重複している。

S B10 (Fig. 5・Fig. 9・Ch. 3) ——K・L・M52・53区で検出した8間×5間の建物跡。長軸方向はN-2.5°-Wとほぼ磁北に向き、南側と西側に庇を有するようだ。北側には1間×1間の張り出しがみられ、西側北半はL字状に折れ曲った柱穴配置を呈する。主屋部分は、柱穴の大きさが外縁部より大きく構築され、配置から3部屋ほどの部屋割りが認められる。柱穴の形状は方形、大きさは一辺50~60cmのものが多く、深さは50cm以下に集中する。本建物跡と重複する遺構としては、S B05(新旧不明)、S T100(旧)、S T132(新)、S T130(新)、S D16(旧)、S X78(新旧不明)などがある。

S B12 (PL. 5・Fig. 4・Fig.10・Ch. 4) ——E・F51・52区から検出し、一部昭和57年度調査区と重複したため、図面は兩年度のものを使用して作製した。規模は7間×5間、長軸方向がE-14°-Nの示し、西側と南側に庇を有する。柱穴の形状は方形のものが大部分で、深さ50cm以上のものが多く比較的しっかりした構築である。長軸7間のうち西側3間と東側4間で、柱穴の数に相違がみられ、東側は4間×5間の広いスペースが存在し本遺構の特徴となっている。重複する遺構としては、S B20(次年度報告予定・新旧不明)・S T115(旧)がある。

S B13 (PL. 6・Fig. 5・Fig.11・Ch. 5) ——J53区検出の2間×3間の建物跡。長軸方向はやや歪んだ状態でE-4°-Nを向く。柱穴は方形の構築と思われるが、重複等によって明確な形状では検出されず、円形・不整形を呈している。深さは40~80cmとばらつきが認められる。重複する遺構としてはS T128(旧)・S E44があり、S E44は本遺構の中に内包されるが構築時期については不明である。

S B14 (PL.7・Fig. 4・Fig.12・Ch. 6) ——H・I51・52区から検出し、張り出し部分も含めて長軸8間、短軸4間の規模を有する。長軸方向はE-16°-Nであり、東側に1間×2間の張り出し、西側および南側に庇状の柱穴配置がみられる。柱穴は方形基調で、深さも一部を除き50cm前後と安定している。またPit9・Pit10・Pit20では根堅めと考えられる小石も検出した。重複する遺構には、S T102(新)・S T125(旧)・S T133(旧)・S X64(旧) S X74(新旧不明) S E43(新旧不明) S E52(新旧不明)・S D33(旧)などがある。

S B15 (PL. 8・Fig. 4・Fig.13・Ch. 7) ——F・G52・53区から検出した4間×2間の建

Fig. 8 SBO5実測図

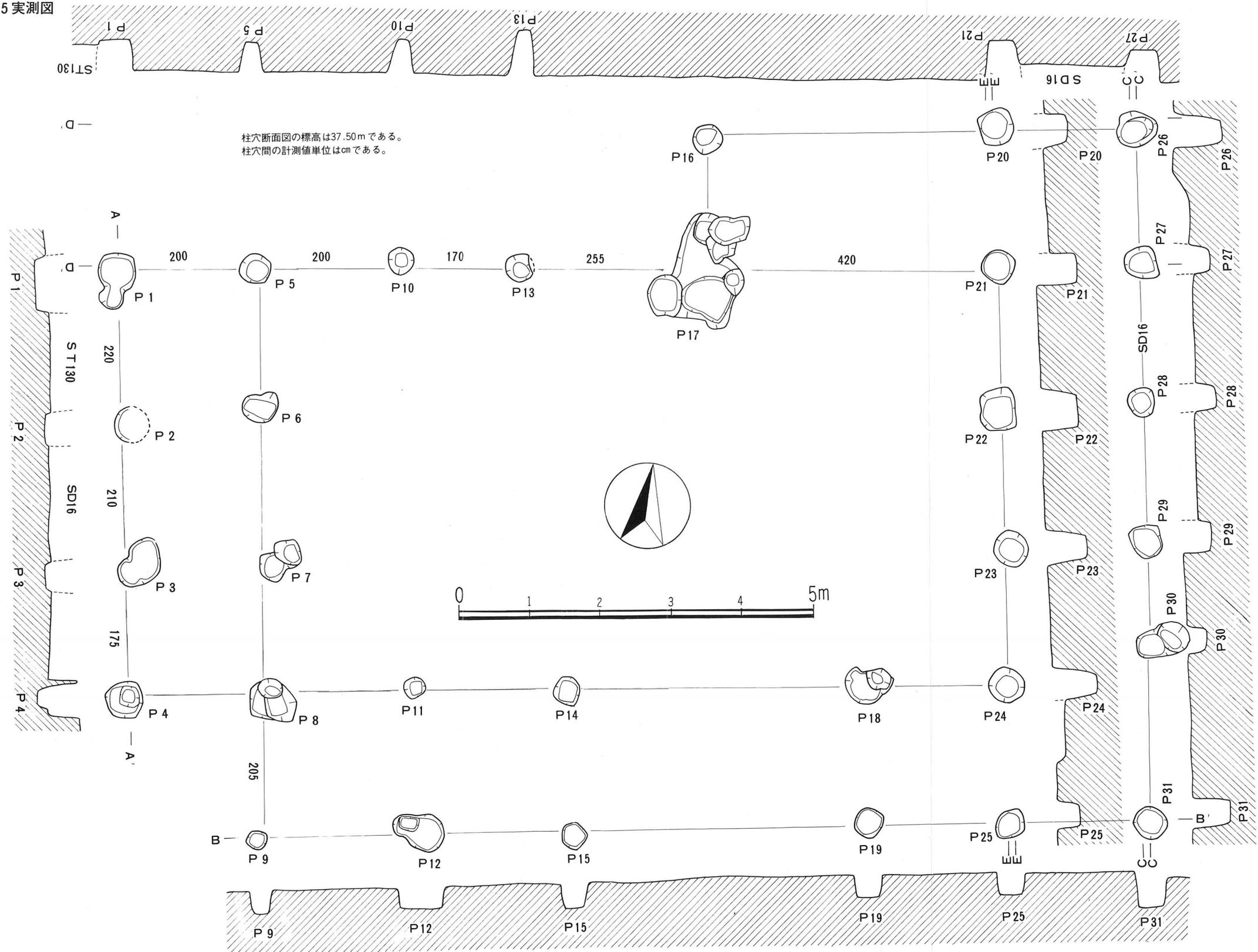
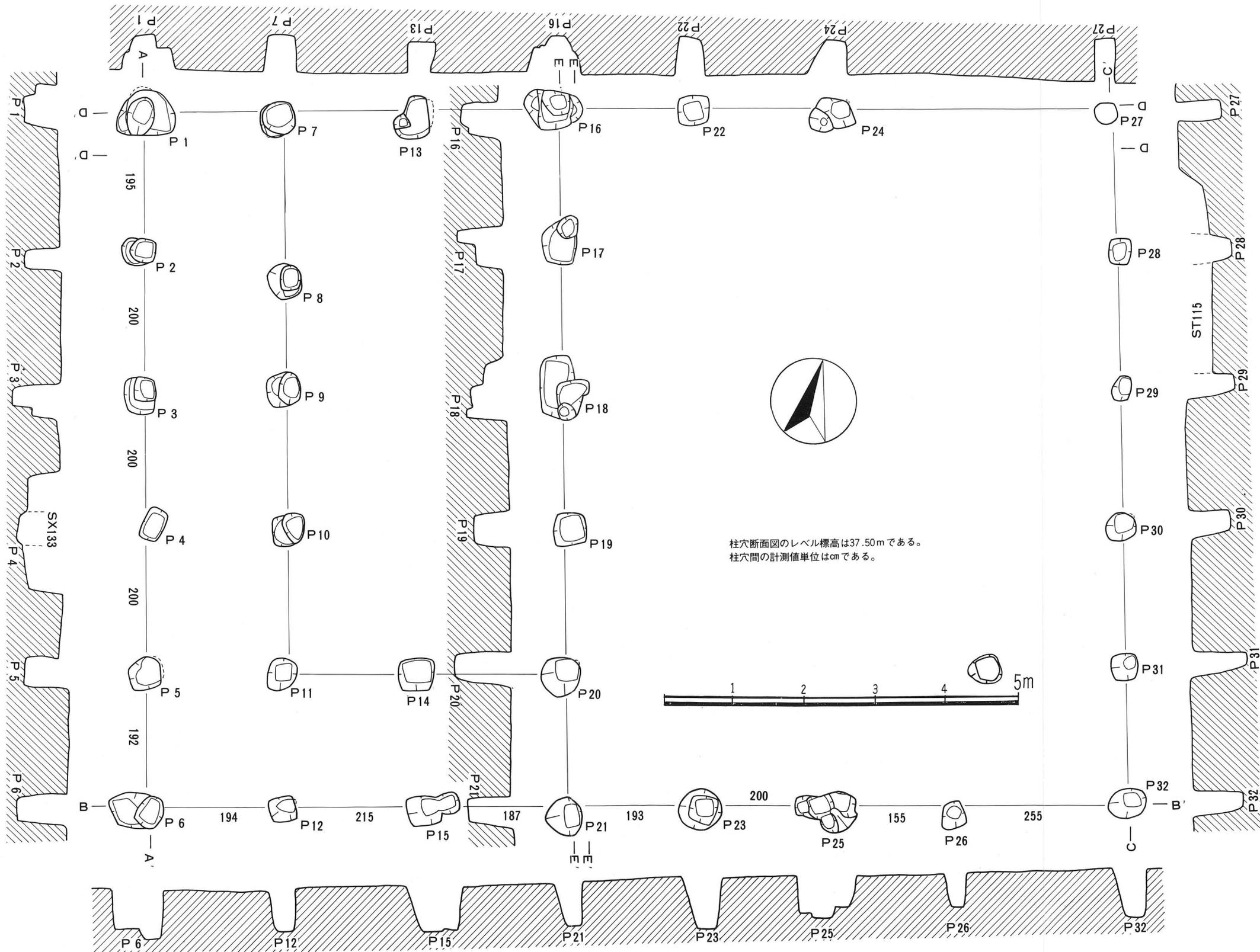


Fig. 10 SB12実測図



PL. 5 SB12検出状況(南側から)



PL. 6 SB13検出状況(西側から)

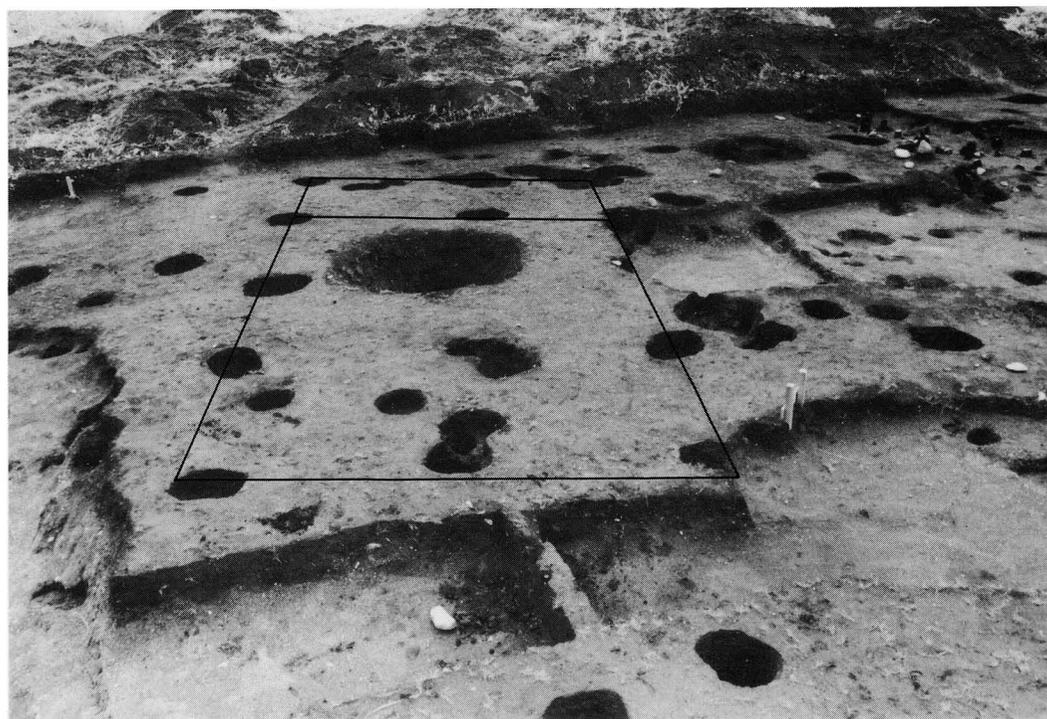


Fig. 11 SB13実測図

柱穴断面図の標高は37.50mである。
柱穴間の計測値単位はcmである。

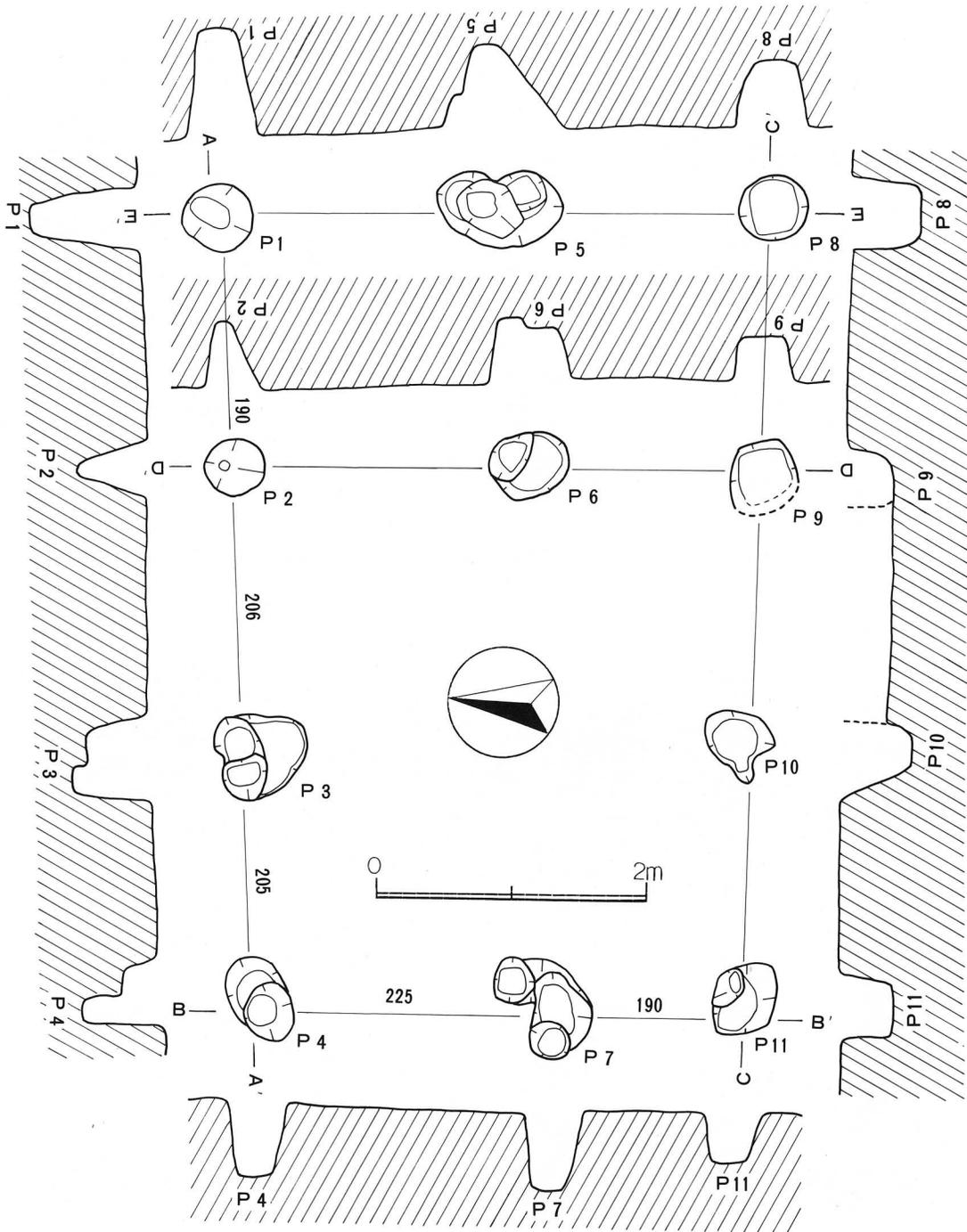
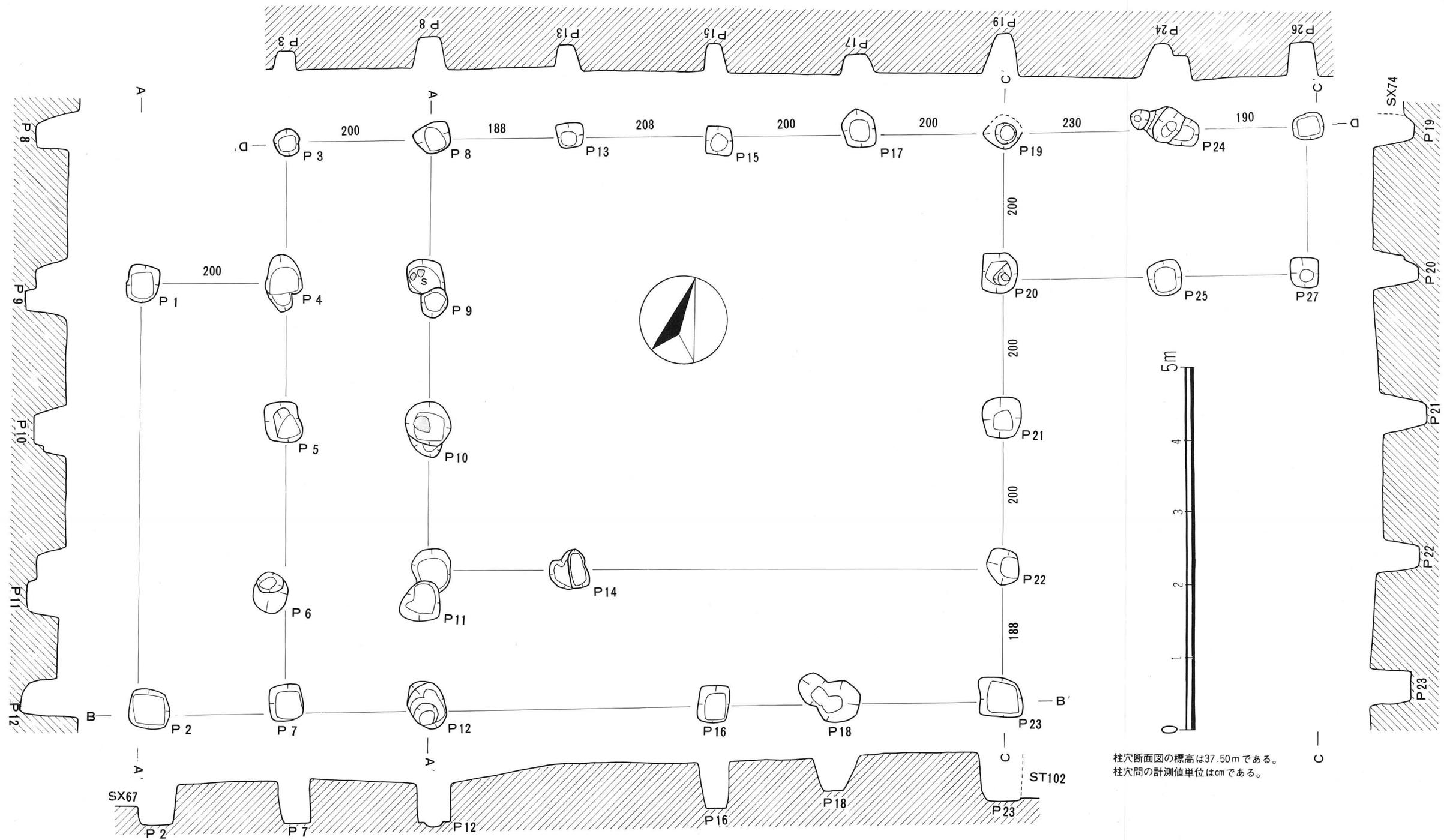
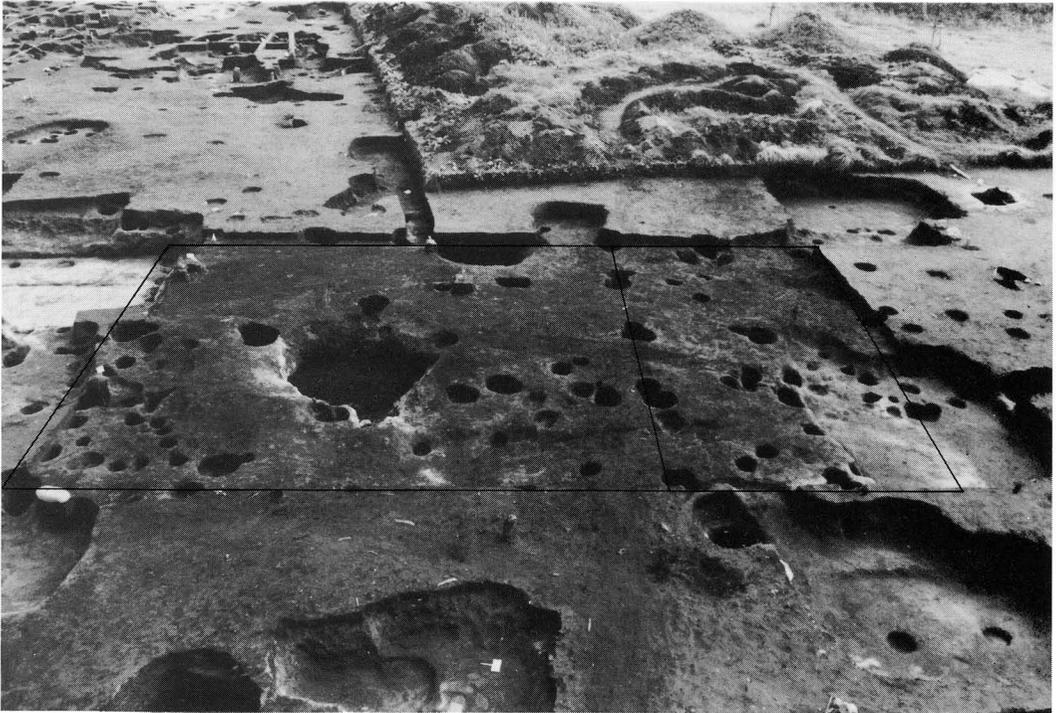


Fig. 12 SB14実測図



柱穴断面図の標高は37.50mである。
柱穴間の計測値単位はcmである。

PL. 7 SB14検出状況(北側から)

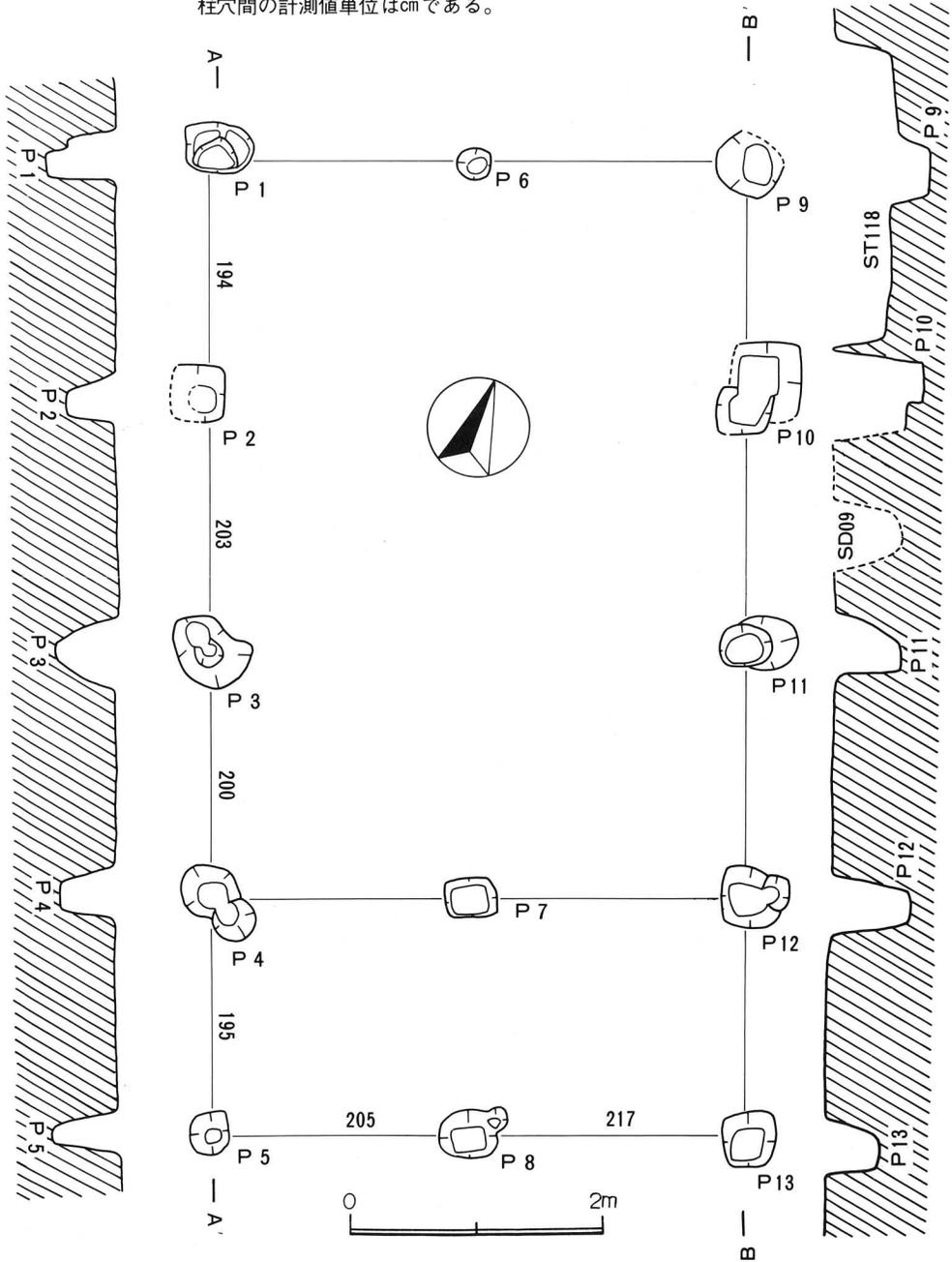


PL. 8 SB15検出状況(北側から)



Fig. 13 SB15実測図

柱穴断面図の標高は37.50mである。
柱穴間の計測値単位はcmである。



PL. 9 SB17検出状況(北側から)



物跡。長軸方向はN-21°-Wであり、南側に一間の庇状柱穴配置がみられる。柱穴は方形基調で、深さも40~70cmと幅がある。重複する遺構には、ST118(新)・ST120(旧)などがある。

SB17(PL.9・Fig.6・Fig.14・Ch.8)——H・I49区から検出した遺構で、全体に黄白色粘土を貼った上に、深さ20cm前後の柱穴配置がみられる。柱穴はN-8°-Wの方向に並び、2~3列で6間の規模を有する。柱穴の深さ、位置関係から掘立柱住居とは考えられず、柵や簡易な小屋等を推定した方が良いかもしれない。粘土もしまりが弱いところから、床面として使用していたものではないだろう。粘土の直上から無釉播鉢が一片出土している。

SB18(PL.10・Fig.6・Fig.15・Ch.9)——H・I48・49区から検出した掘立柱建物跡。母屋部分は6間×4間で、東側に2間×2間、西側に2間×1間の張り出しを有し、総規模は6間×7間となる。母屋の長軸方向はN-14°-W、底にあたる部分はみあたらず、3~4部屋の部屋割りがありそうだ。柱穴は方形基調で35~70cmほどの深さを有する。重複する遺構には、SB19(新旧不明)、ST137・ST142・ST143・ST147(新)、ST151(旧)・ST145・ST148(新旧不明)がある。

SB19(PL.10・Fig.7・Fig.16・Ch.10)——H・I・J48・49区で検出した掘立柱建物跡であるが、全体の範囲を確認するまでに至っていない。おそらく6間×5間の規模で、長軸方向がN-14°-WでSB18と同様の方向を示し東側・北側の一部に庇が存在する。柱穴は方形基

PL.10 SB18・SB19検出状況(北側から)



調で深さは60cm以上のものが多い。重複する遺構はSB18(新旧不明)、ST147(新)・ST151(旧)などがある。

以上、掘立柱建物跡についてみてきたが、この他にF・G53区(PL.11)でも7間×3間ほどの柱穴配置がみられ、L53区でも昭和55年度調査区から連続する柱穴が存在する。しかし、いずれも明確に建物跡とは認められず、柵状の遺構と考えるのが妥当であろう。また、I48区で検出された柱穴(SB19付属柱穴)の中には、使用不能になった茶臼の下臼が倒立した状態で置かれ(PL.12)、礎石とは言わないまでも柱を固定するための根堅めの機能があったと考えられる。

柱空間の長さについては、一般的に200cm前後の基準で構築されたものが多く、昨年度と同様の結果がでている。

掘立柱建物跡計測表

遺構名	規模	長軸方向	1間あたりの長さ(平均)	備考
SB05	7間×5間	E-12°-N	205.5cm	
SB10	8間×5間	N-2.5°-W	201.7cm	
SB12	7間×5間	E-14°-N	198.8cm	
SB13	3間×2間	E-4°-N	203.2cm	
SB14	8間×4間	E-16°-N	200.6cm	
SB15	4間×2間	N-21°-W	202.3cm	
SB17	6間×—	N-8°-W	141.6cm	
SB18	7間×6間	N-14°-W	203.9cm	
SB19	6間×5間	N-14°-W	197.2cm	

PL.11 F・G53区柱穴出土状況(南側から)



PL.12 I 48区検出の茶臼が置かれた柱穴

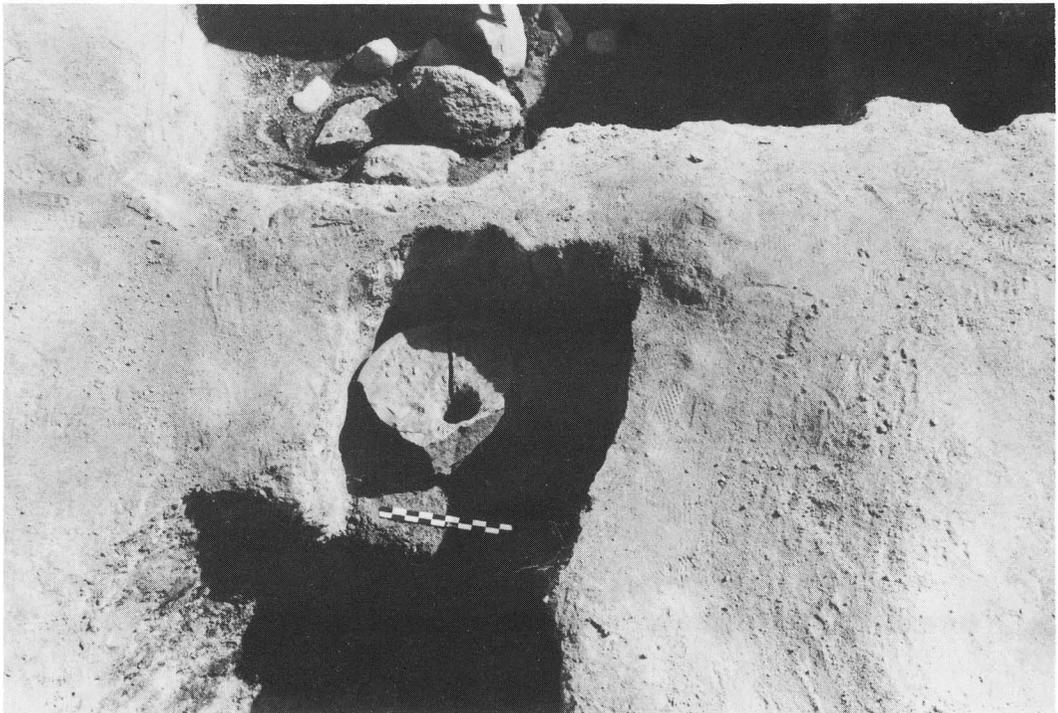
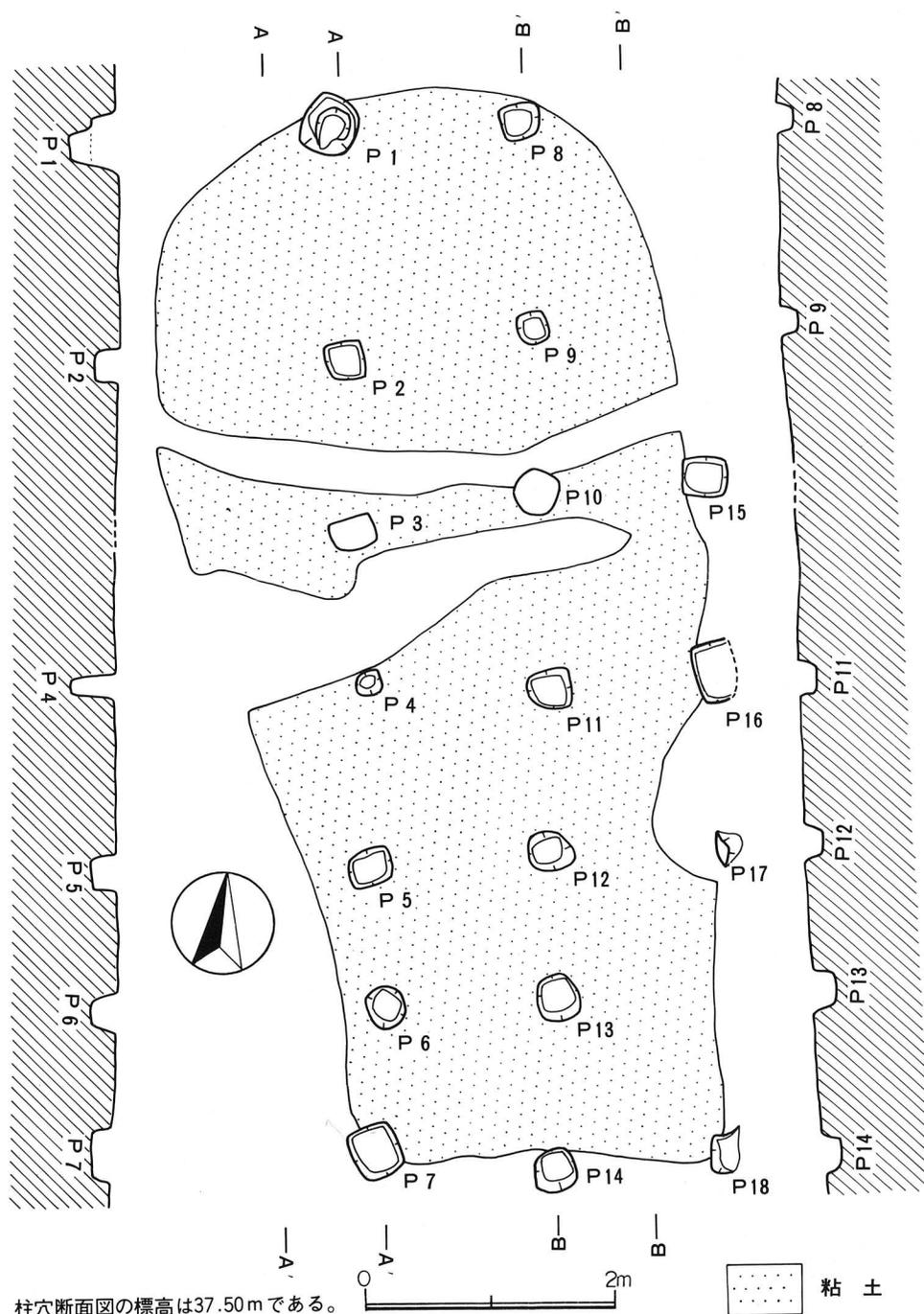


Fig.14 SB17実測図



柱穴断面図の標高は37.50mである。

Fig. 15 SB18実測図

柱穴断面図の標高は37.50mである。
柱穴間の計測値単位はcmである。

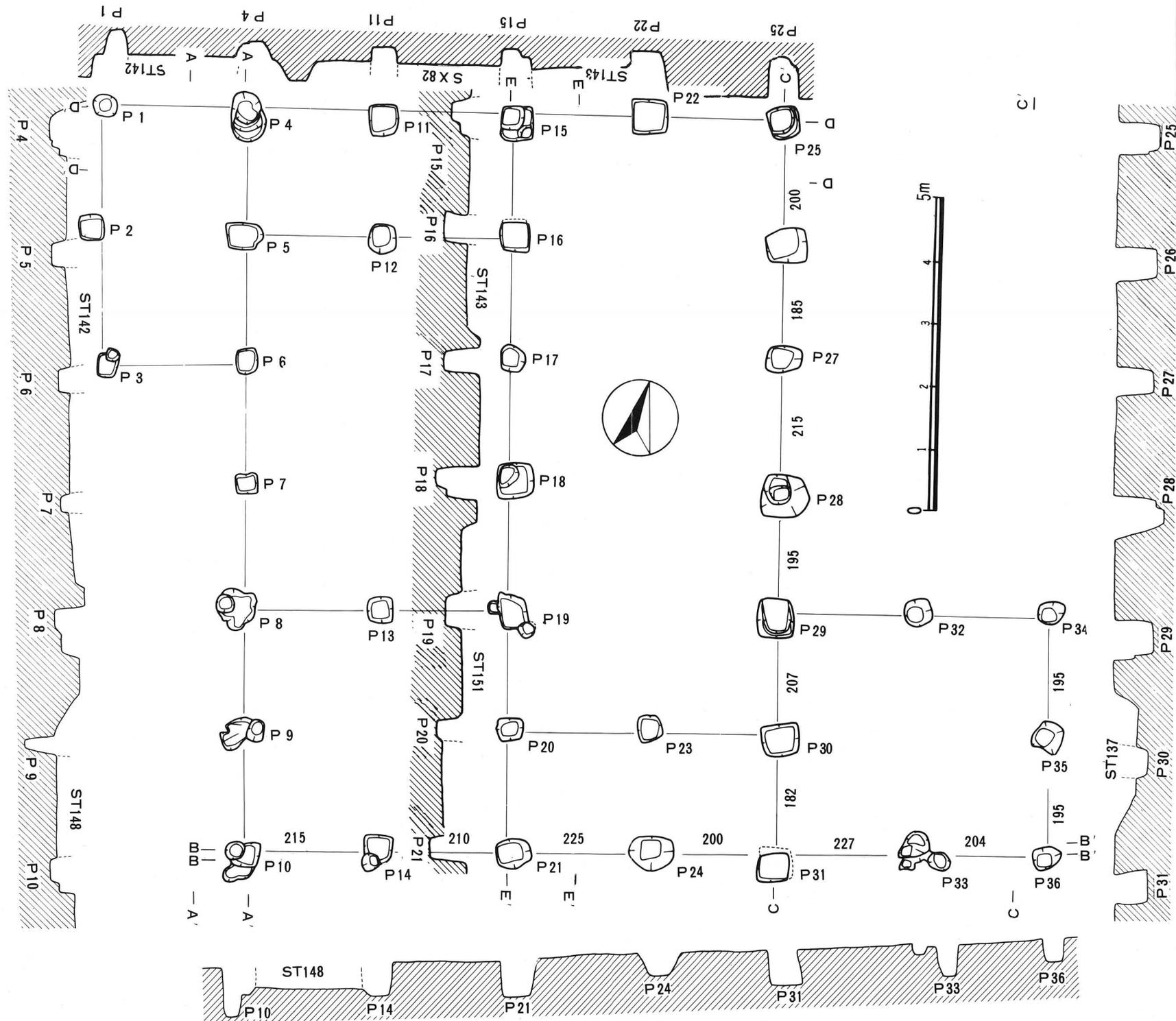
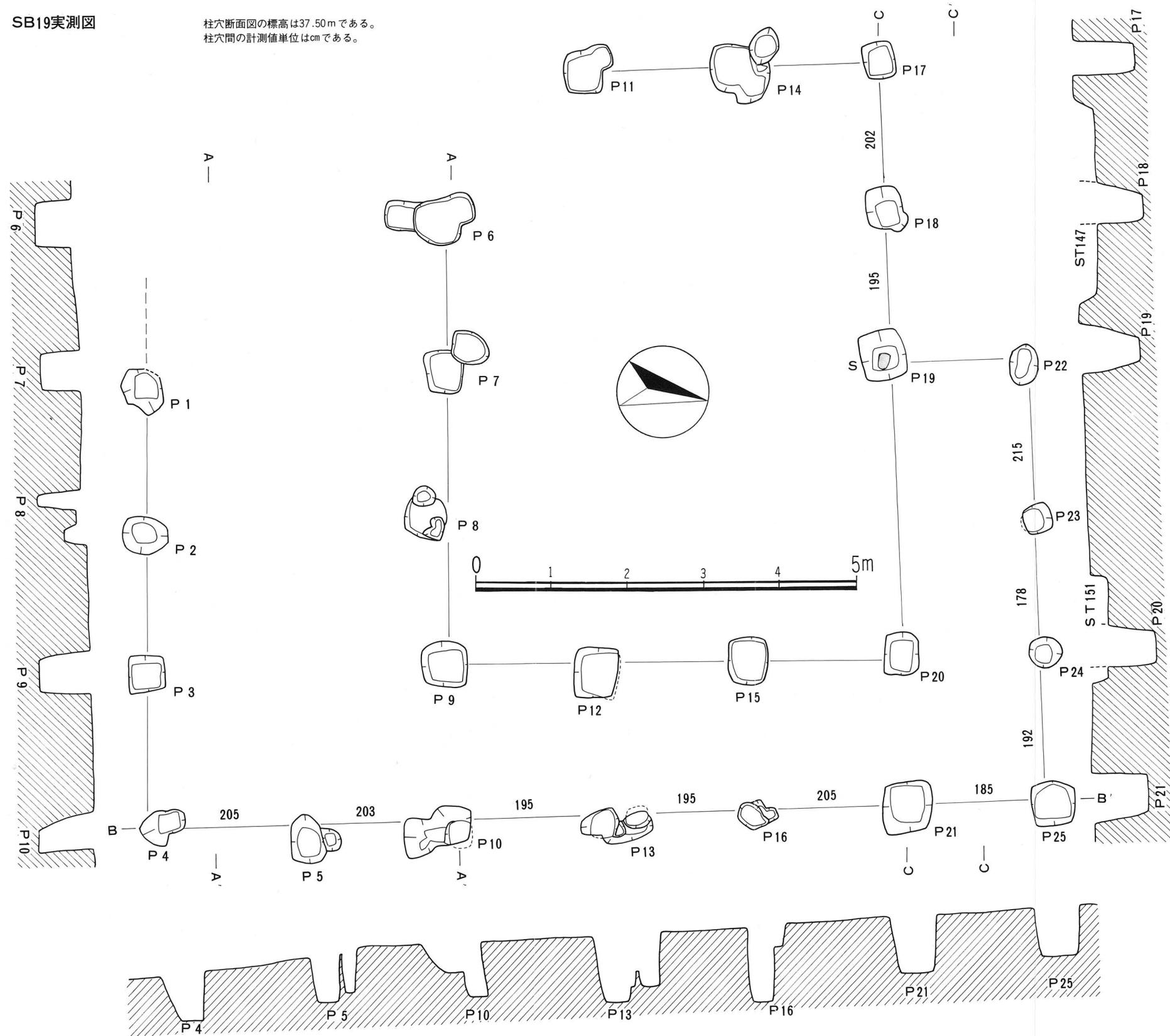


Fig.16 SB19実測図

柱穴断面図の標高は37.50mである。
柱穴間の計測値単位はcmである。



2. 竪穴遺構

竪穴遺構と報告するものの中で、付属する柱穴がなく上屋構造が明確でない一群は、土抃的な性格も有するが、調査過程での遺構ナンバーとそれと相関する遺物の対照を明確にするためあえてSTの略称を使用している。浪岡城跡検出の竪穴遺構に関する概念は以下の通りである。

(1)形態は方形基調である。

(2)床面検出の柱穴から上屋（覆屋）が存在したと認められる。

(3)廃棄時期は、覆土から出土する遺物が近世以後のものがないことから中世と考えられる。

以上の3点は基本的概念であり、他に(4)舌状スロープの出入口を有する、(5)かまど・炉跡が付属しないことから炊事はおこなわれない（ただし、この時期には移動式かまどや火鉢の類が使用されていることから一概には言えない面もある）、(6)覆土堆積が人為的埋没の状況を呈する、などの特徴がある。

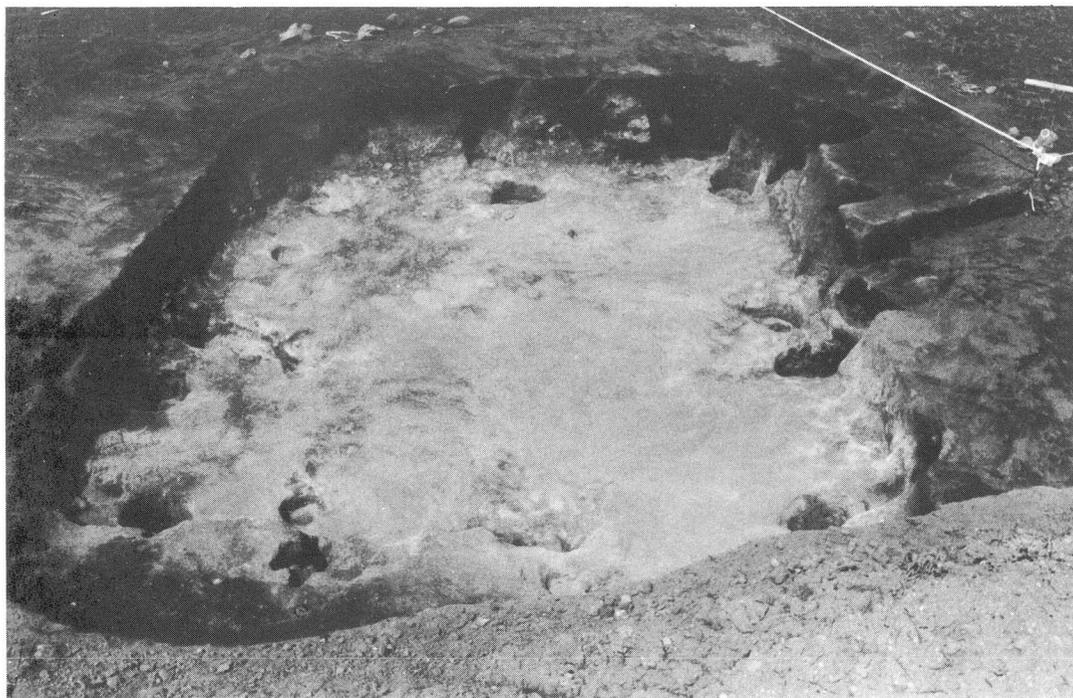
本遺構の性格については、倉庫・簡易住居・作業場などの機能を有する多目的な遺構と考えている。

ST100 (PL.13、Fig.17、Ch.11) ——M53区検出。長軸285cm、短軸275cm、深さ54cm。東側に舌状スロープの張り出しがあり、その方向はN-85°-Eである。床面直上に灰の分布がみられる。柱穴は西壁・東壁端に3個ずつ配置される。出土遺物には、青磁碗・白磁碗・美濃灰釉皿・唐津・溶解物付着土器・鉄製品・銅滓などがある。SB10（新）の重複がある。

PL.13 ST100(東側から)



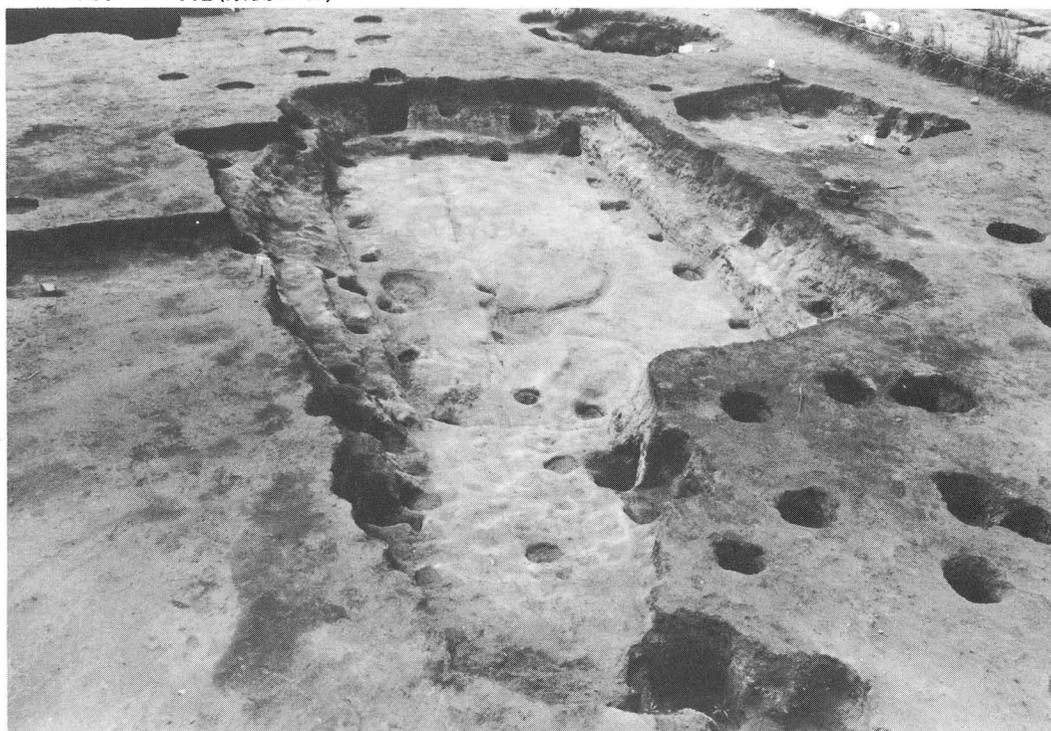
PL. 14 ST101(東側から)



ST101 (PL.14、Fig.18、Ch.12) —L53・54区検出。長軸480cm、短軸420cm、深さ66cm。東側にPit 1、Pit 2を付属する張り出しを有し、その方向はN-87°-Eである。本遺構は、昭和55年度調査区のST83と同一遺構である。柱穴配置は、壁面に隣接した状態で10個(Pit 2～Pit11)みられる。出土遺物は覆土からだけで、青磁碗、染付皿、美濃灰釉皿、同鉄釉天目、溶解物付着土器、鉄釘、古銭、土師器片などがある。SB05と重複しているが新旧関係不明。

ST102 (PL.15、PL.16、Fig.19、Ch.13) —I・J52・54区検出。長軸740cm、短軸450cm、深さ88cm。長軸方向はN-69°-Eであり、東側に存在する舌状スロープの張り出しはやや南に傾いている。この張り出しが本遺構に付属するものかどうかは疑問な点も多く、南北の壁面に一段テラス状の部分があって、遺構の重複あるいは竪穴構築時の側板固定のためのものか、関連があるとすれば考慮しなければならない。覆土層序は部分によって大きな相違がみられ、人為的に埋め戻した結果と考えられる。柱穴配置は、各壁面に接した状態で検出され、柱痕と考えられる黒色土(スクリーントーン部分)のあるものが多い。南・北壁は6間、東・西壁は3間である。出土遺物は多量にあるが、特に床面から出土した長さ60cm弱の刀(PL.16・261)は、単純な廃棄行為の所産とは考えられず、本遺構の性格を決定する重要なポイントであろう。出土遺物を列挙すると、青磁碗・皿各8片、白磁皿1・小坏1、染付皿6、美濃灰釉皿9・同褐釉2、唐津皿1、瓦器2、越前甕1、播鉢4、溶解物付着土器9、縄文時代らしい小壺(242)、その他土師器、須恵器片、鉄釘16本、小札4、火箸2本、蓮弁型銅製品(342)、小柄、古銭19

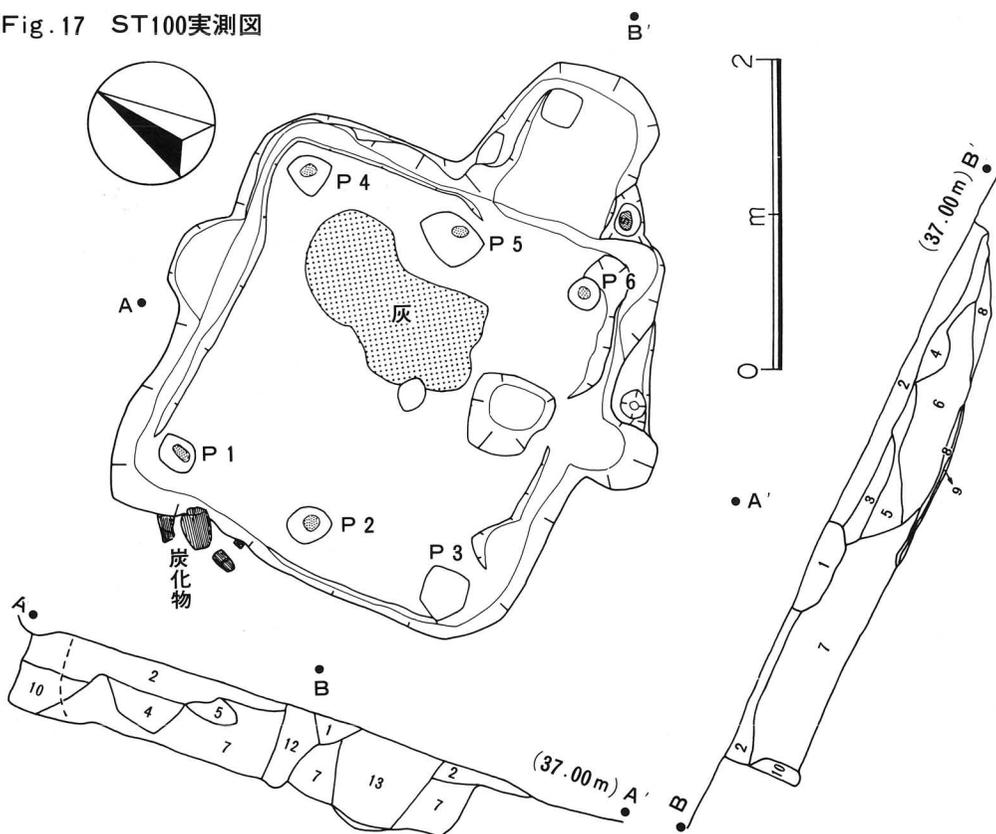
PL. 15 ST102(東側から)



PL. 16 ST102床面出土の刀と鉄製品



Fig.17 ST100実測図



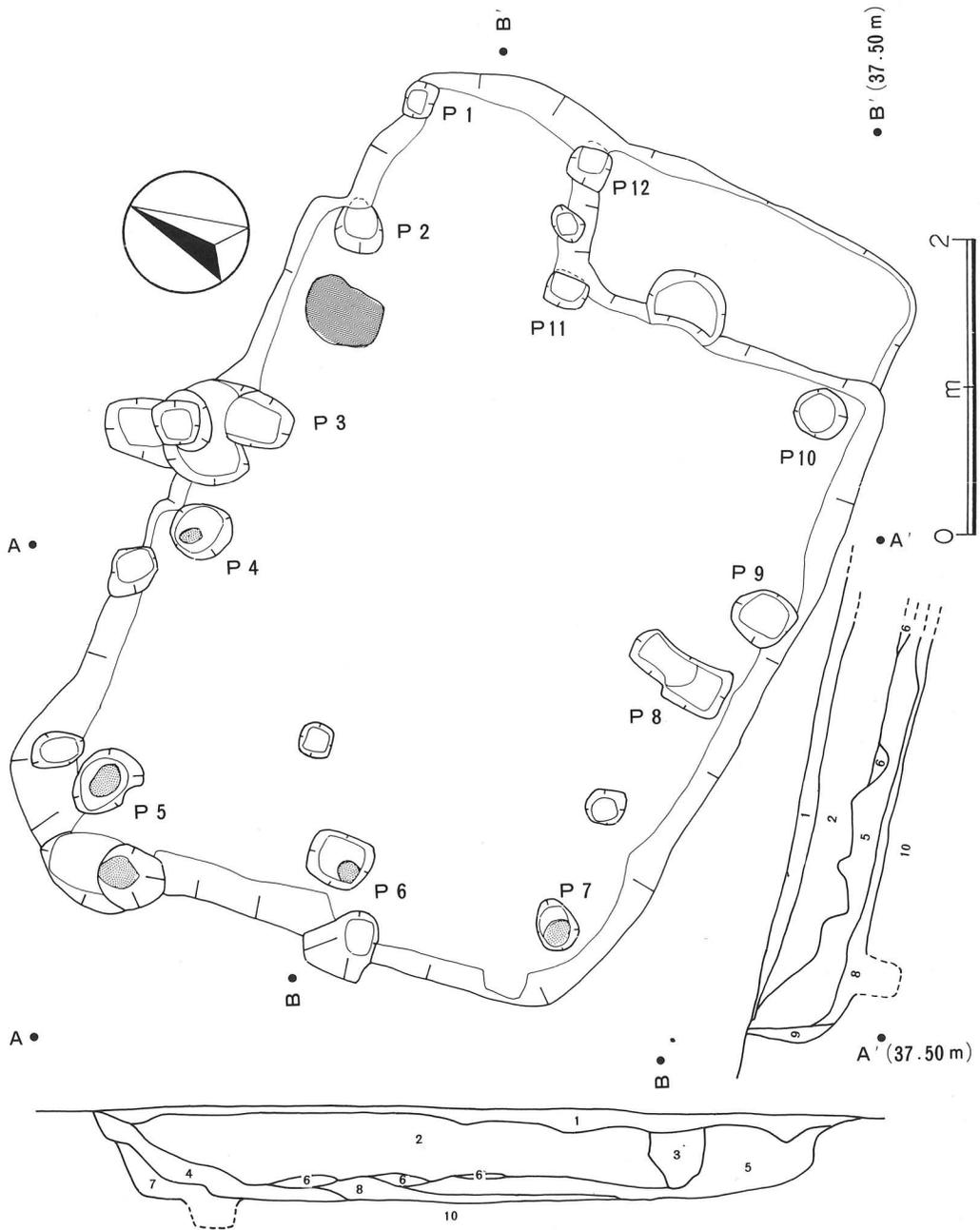
枚、石臼、砥石、火打石などである。

S B14 (旧) S D33 (旧) の重複関係がある。

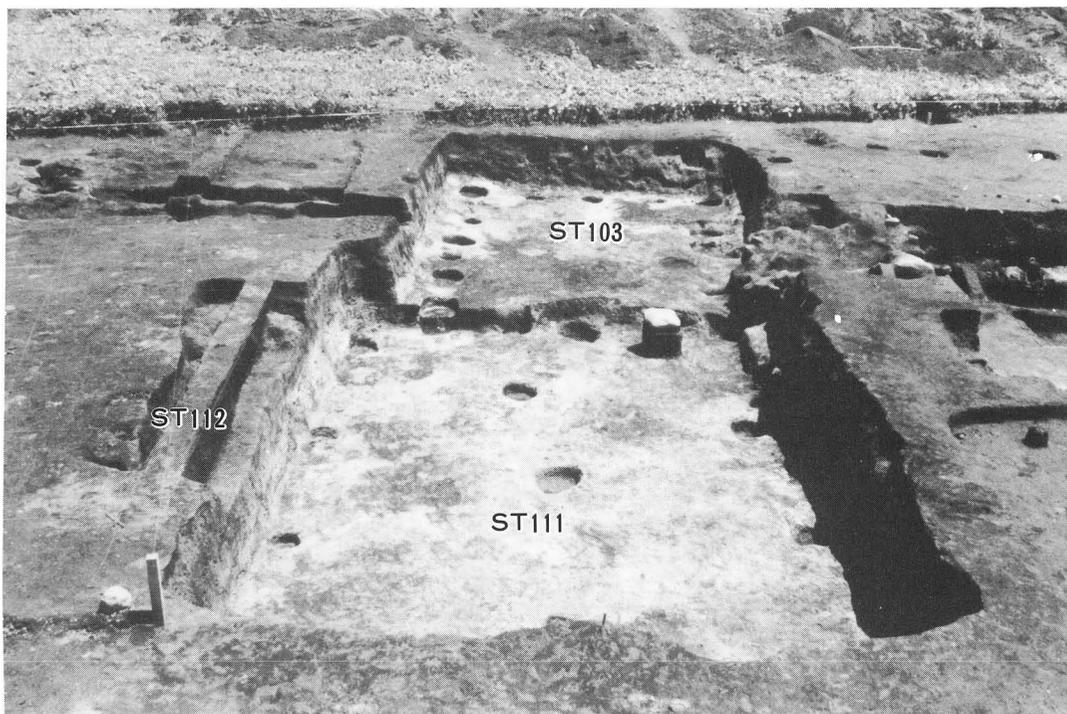
S T 103 (PL.17、PL.18、Fig.20、Ch.14) — E・F53区検出。長軸(625)cm、短軸387cm、深さ64cm。長軸方向はN—81°—E。西側がS T 111と重複していたため、壁面・付属施設は明確に把握できなかった。柱穴配置の基本型はPit 1、Pit 4、Pit 7、Pit10、Pit12、Pit15の6個であり(柱穴の深さが他の柱穴に比較して深い)、他のPitは補助的な機能が強いと考えられる。床面西側には灰の分布がみられた。また、床面中央から轡(PL18)が出土し、馬小屋に関連する遺構と考えられる点もある。他の出土遺物は、大部分が覆土内から出土したものであり、青磁碗4、同皿1、白磁皿1、染付皿1、美濃灰釉皿2、播鉢1、瓦器1、溶解物付着土器9、鉄釘7、小札2、鉄鏝1、銅製飾金具1、硯1、古銭8、土師器・須恵器片が存在する。重複する遺構にはS T 111 (旧)、S X53 (旧)、S X88 (新旧不明)があり、S X88については本遺構の張り出しとも考えられる点があり、後述の部分を参照していただきたい。

S T 104 (PL.19、Fig.21、Ch.15) — D52・53区検出。長軸310cm、短軸289cm、深さ91cmであり、東側に舌状スロープと思われる(道路部分のため全体を検出できなかった)張り出しが存在する。この張り出し方向はN—69°—Eである。柱穴は7個確認し、Pit 4に対応する南側

Fig. 18 ST101実測図



PL.17 ST103・ST111・ST112(西側から)



PL.18 ST103床面出土の罽



Fig. 19 ST102·SD33実測図

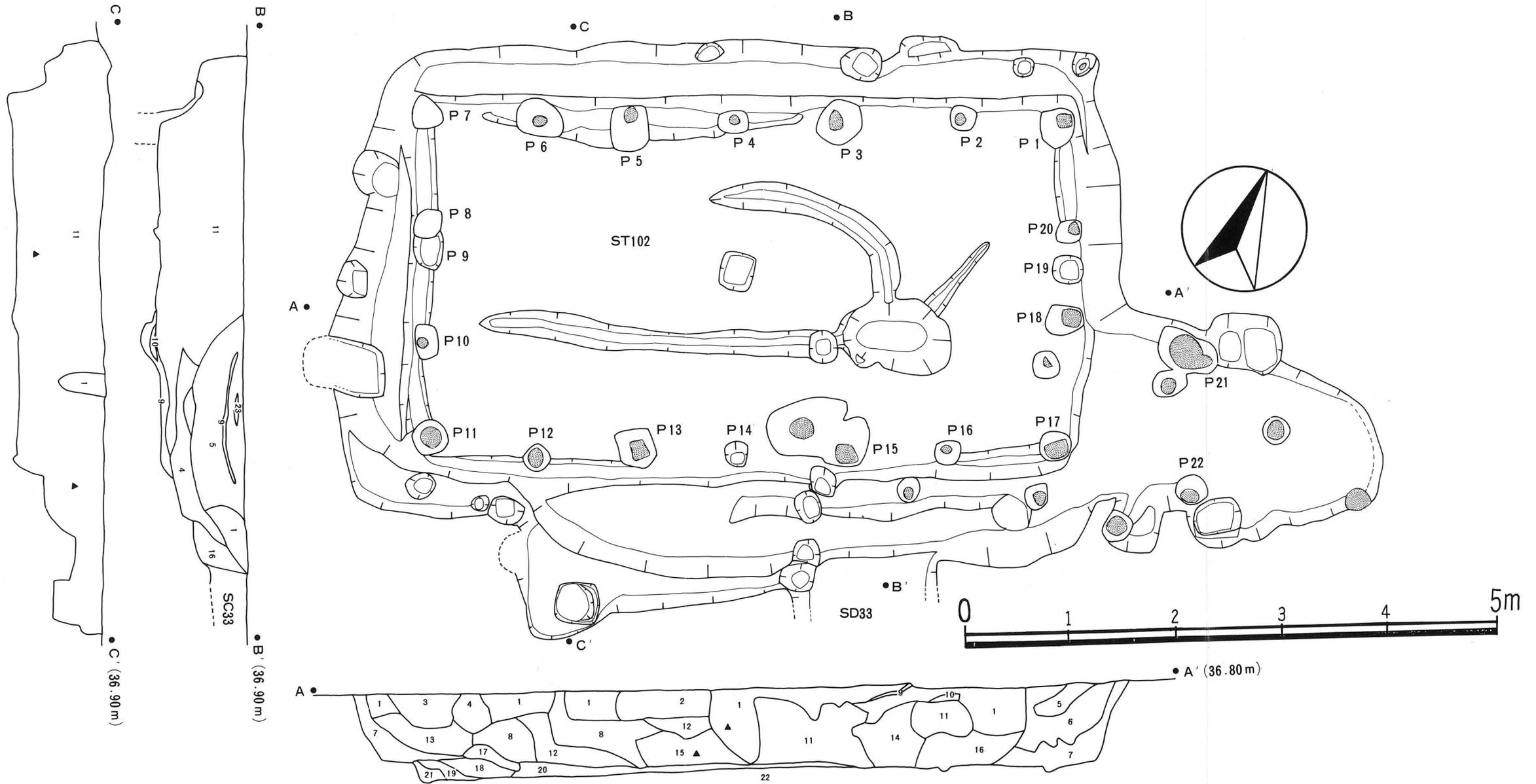


Fig. 20 ST103・ST111・ST112実測図

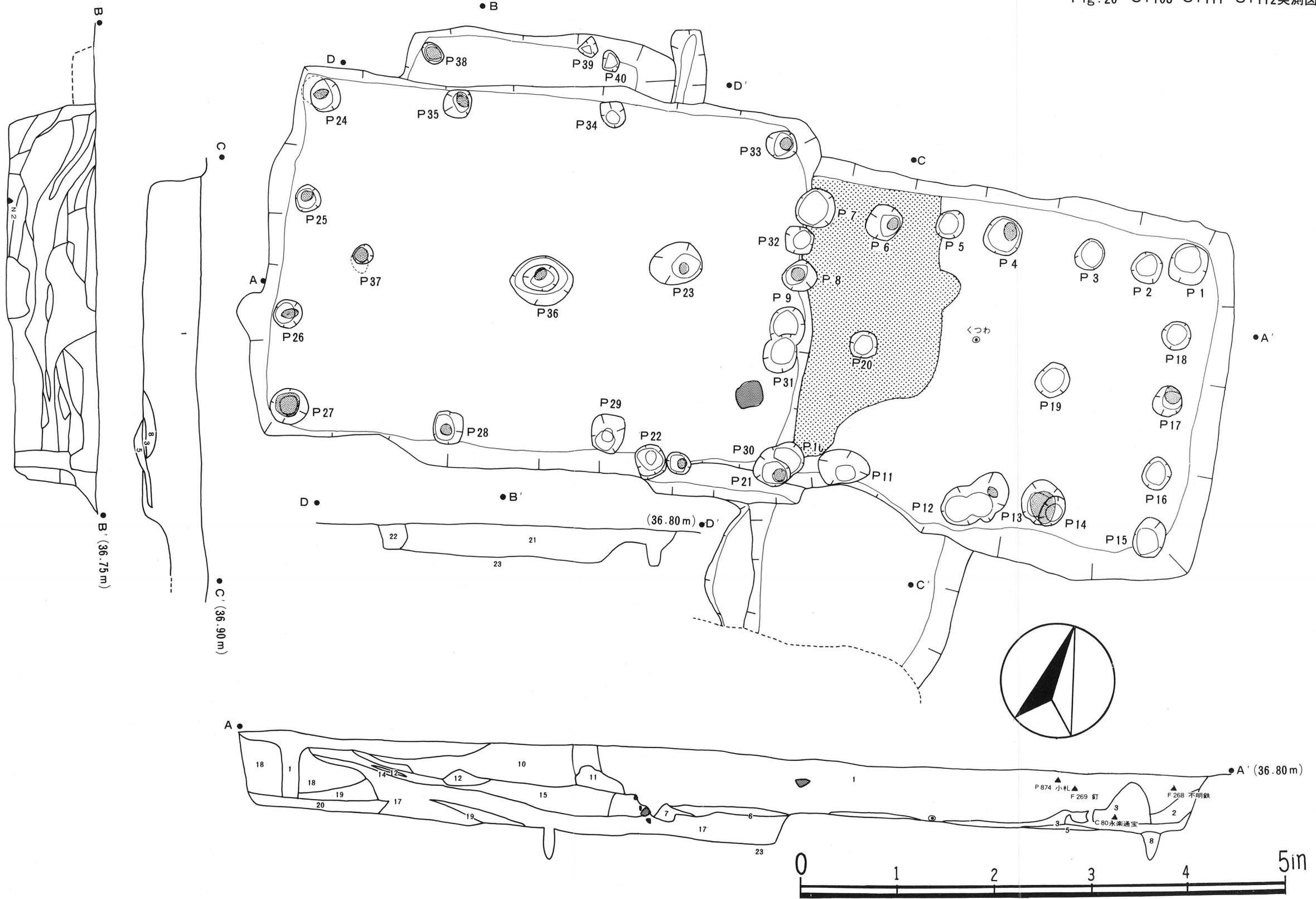


Fig. 21 ST104実測図

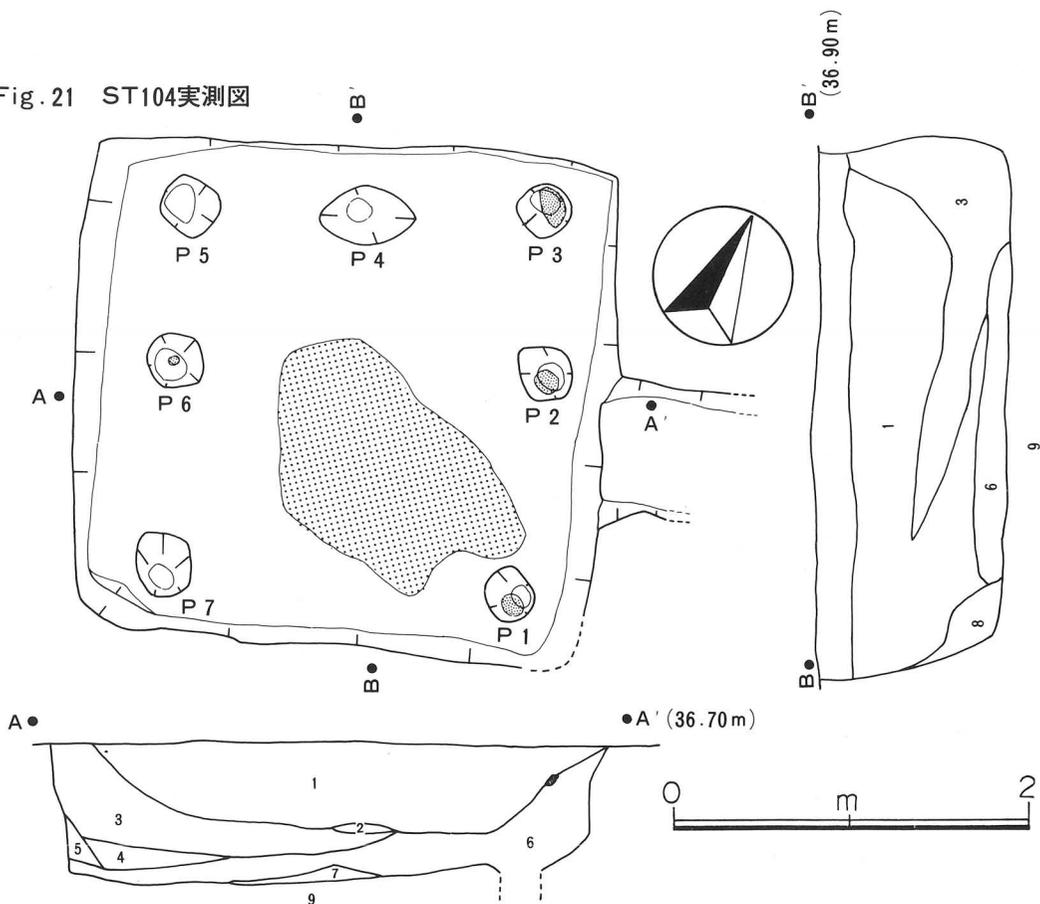


Fig. 22 ST105実測図

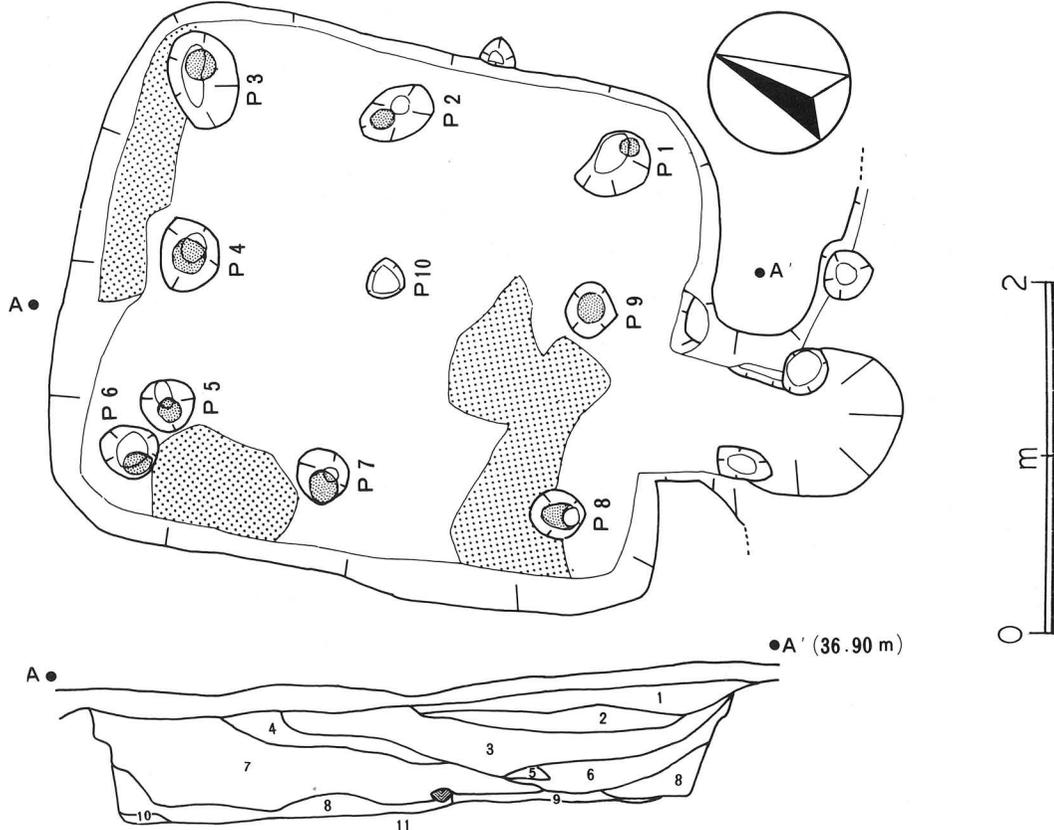
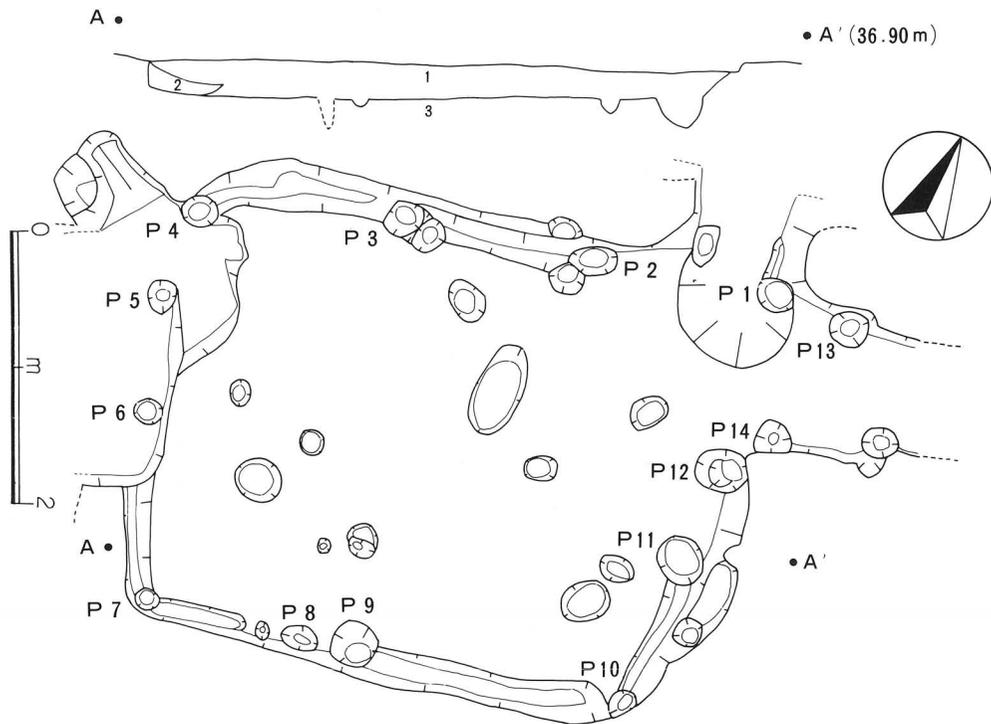


Fig. 23 ST106実測図

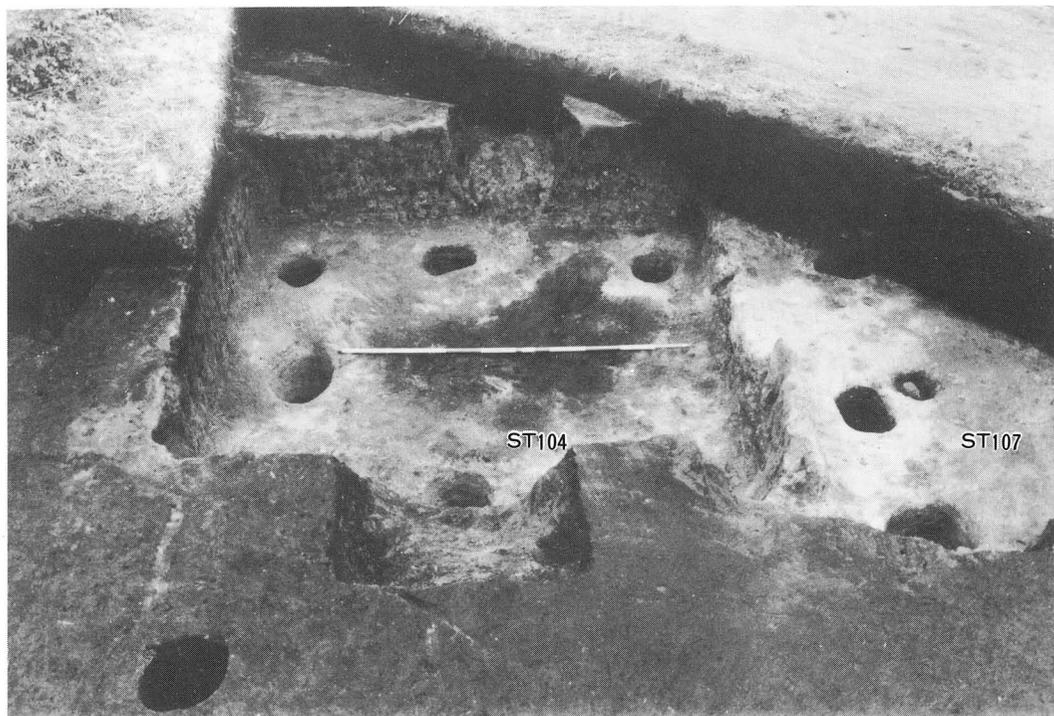


中央の柱穴がないものの、柱痕も比較的良好に検出された。床面直上には灰と炭化物の分布がみられる(スクリーントーンの部分)。出土遺物には、染付、天目、溶解物付着土器が各1点の他古銭2枚、鉄釘1本、筭(332)、銅管(345)があった。ST107(旧)と重複している。

ST105(PL.20、Fig.22、Ch.16) — D53・54区検出。長軸360cm、短軸304cm、深さ66cm。南側に舌状スロープの張り出しを有し、S—13°—Eの方向を向く。柱穴配置は各辺3個ずつの8個であり、Pit10は直接関連しない柱穴、Pit5は柱の建て替え等に関連するものと推定される。床面には部分的に灰と炭火物の分布がみられ、柱穴を覆っている所から遺構廃絶の近い時期に燃成されたものであろうか。出土遺物には、床面直上から美濃灰釉皿が1点出土している他、美濃灰釉皿が6、青磁碗1、溶解物付着土器3、鋳型1、小札1、鉄釘1、洪武通宝2、砥石1、火打石1が覆土から出土している。ST106と重複しているが新旧関係は不明。

ST106(PL.21、Fig.23、Ch17) — D・E53区検出。長軸450cm、深さ30cm。東側に柱穴を付属する張り出しがあり、その方向はN—75°—Eである。柱穴は小形で深いものが多く、Pit1、Pit3、Pit4、Pit6、Pit7、Pit9、Pit10、Pit12の配置と考えられ、四周に壁溝らしいものが確認されている。床面が浅いこともあり、関連しない柱穴が多数重複している。出土遺物には、染付1片の他、土師器坏1、縄文土器1、砥石1が覆土から、隣接する柱穴から三足を有する鉄鍋(あるいは鉄皿)が出土している。

PL.19 ST104・ST107 (西側から)



PL.20 ST105 (北側から)



S T 107 (PL.19、Fig.24、Ch.18) ——D52・53区検出。S T 104との重複と未調査の部分があったため規模は、長軸335cm、短軸310cmと推定され、深さは45cmであった。南側にスロープの張り出しがあり、S—1°—Eの方向に向いている。柱穴配置は、Pit 1、Pit 3、Pit 4、Pit 6、Pit 7、Pit 9の6個に、Pit 5も関連があるかもしれない。床面南側西隅に灰の分布がある。出土遺物としては、白磁・染付・唐津の皿が各1、溶解物付着土器1、鉄釘2が覆土から、床面から鉄釘1本がみられた。S T 104(新)の重複がある。

S T 108 (PL.22、Fig.25、Ch.19) ——D53区検出。長軸190cm、短軸158cm、深さ59cm。南側に舌状スロープの張り出しがあり、S—18°—Eの方向である。柱穴は5個確認できたが、上屋構造に伴うものかは不明。出土遺物は、床面から染付皿1、覆土から美濃灰釉皿1、無文銭1があった。規模が小形のため生活跡というより土壌の性格が強いと考えられる。

S T 109 (Fig.25、Ch.19) ——D・E53区から検出されたが、柱穴配置、壁面の確認がS T 108・S T 110と重複しているため不明瞭である。

S T 110 (Fig.25、Ch.19) ——D・E53区検出。未調査の部分があるため全形は確認できなかったが、300cm×150+ α cmの規模で深さは25cmである。柱穴配置は、Pit 6、Pit 7、Pit 8、Pit 9が付属するもので、他は関連が薄いと考えられる。出土遺物には、青磁碗1、白磁皿1、溶解物付着土器1、不明陶磁2がある。S T 109とともに周囲に炭化物・灰が存在する。

S T 111 (PL.17、Fig.20、Ch.19) ——E52・53区検出。長軸568cm、短軸388cm、深さ88cm。長軸方向はE—17°—Sであり、出入口部分は確認できなかった。柱穴配置は、壁面に接した状態で整然と2間×3間に並び、柱痕の存在するものも多い。Pit24～Pit35までがそれであり、長軸方向は1間あたり160cm、短軸方向は1間110cmを基準にしている。重複しているS T 103の覆土が単純層であるのに対して、本遺構は自然堆積の状況を呈する。出土遺物は、床面から瀬戸系瓶子と思われる褐釉の施された破片が1点、他は覆土からのもので、青磁碗・皿各1、白磁1、播鉢1、溶解物付着土器5、鋳型1、鉄釘3、古銭4などがある。S T 103(新)S T 112(旧)の重複がある。

S T 112 (PL.17、Fig.20、Ch.19) ——E53区検出。276cm×?の規模で深さは35cm。S T 111に大部分が切られているため詳細不明。用途不明の鉄製品が5点出土している。

S T 113 (Fig.26、Ch.20) ——F52区検出。長軸220cm、短軸205cm、深さ54cmで、長軸方向はN—13°—Wである。付属する柱穴はみられないが、近接して川原石を入れた柱穴が東側にある。出土遺物には、染付皿1、溶解物付着土器4、瓦器1、土師器甕1、古銭5、漆器の被膜がみられた。S B 12と重複しているが、新旧関係は不明である。

S T 114 ——S E 55・S F 22に変更。

S T 115 (PL.23、Fig.27、Ch.21) ——E52区検出。長軸350cm、短軸280cm、深さ45cm。長軸方向はN—4°—Wであり、南側に若干の傾斜面もみられるが張り出しと認定するまでには至っ

PL.21 ST106 (南側から)



PL.22 ST108 (西側から)

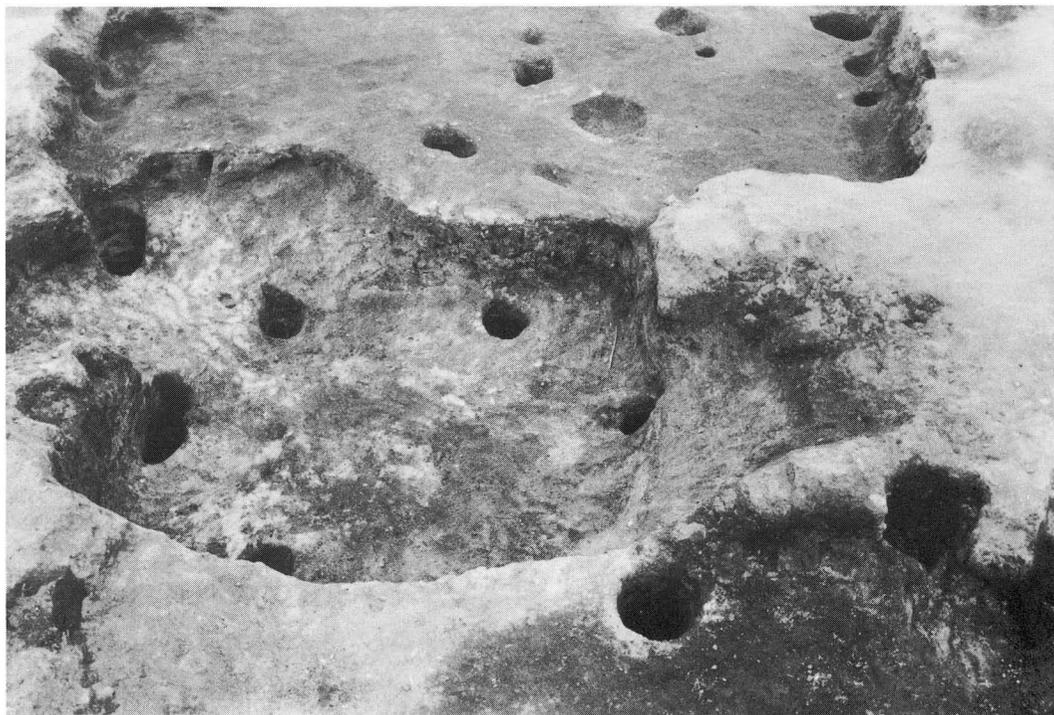
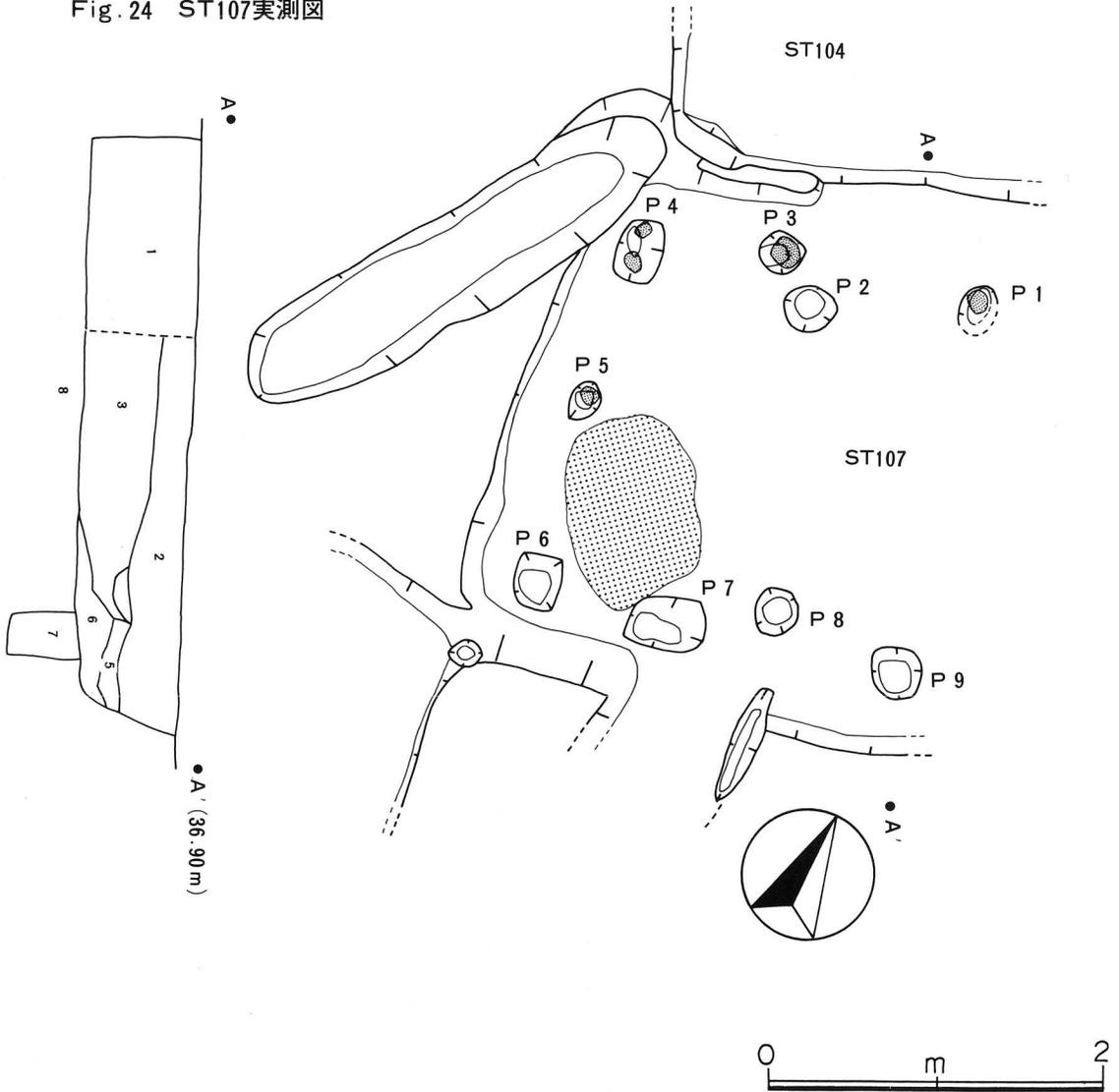


Fig. 24 ST107実測図



ていない。本遺構に付属する柱穴はみられず、S B12の柱穴が2個重複している。(スクリーン
トーン・縦線) 床面南側には灰と炭火物が分布し、茅状のものが残存していた。出土遺物には
青磁皿・碗各1、染付皿1、美濃灰釉皿2、挿鉢1、溶解物付着土器3、土師器坏1、鉄鍋1、
鉄鎌1などがある。

S T 116——S F 22に変更。

S T 117 (PL. 24, PL. 25, Fig. 28, Ch. 22, Ch. 23)——F 53区検出。本遺構は調査中に1遺
構と考えていたが、実測および整理の段階で、3遺構の重複という認識に至った。第1はPit 1
～Pit16を支柱穴とするもの (A)、第2にPit7～Pit9までの南側だけの柱穴が残っている遺構
(B)、第3にPit10～Pit14を残存している遺構 (C) ということになり A→B→Cの順に構築

Fig. 25 ST108・ST109・ST110実測図

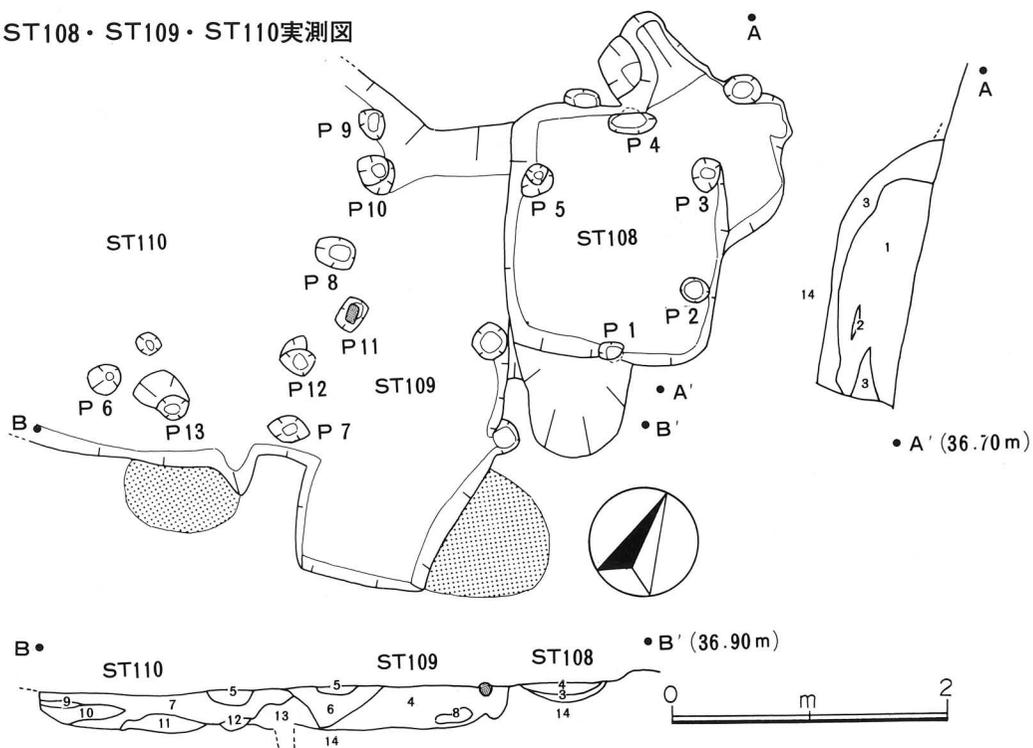


Fig. 26 ST113実測図

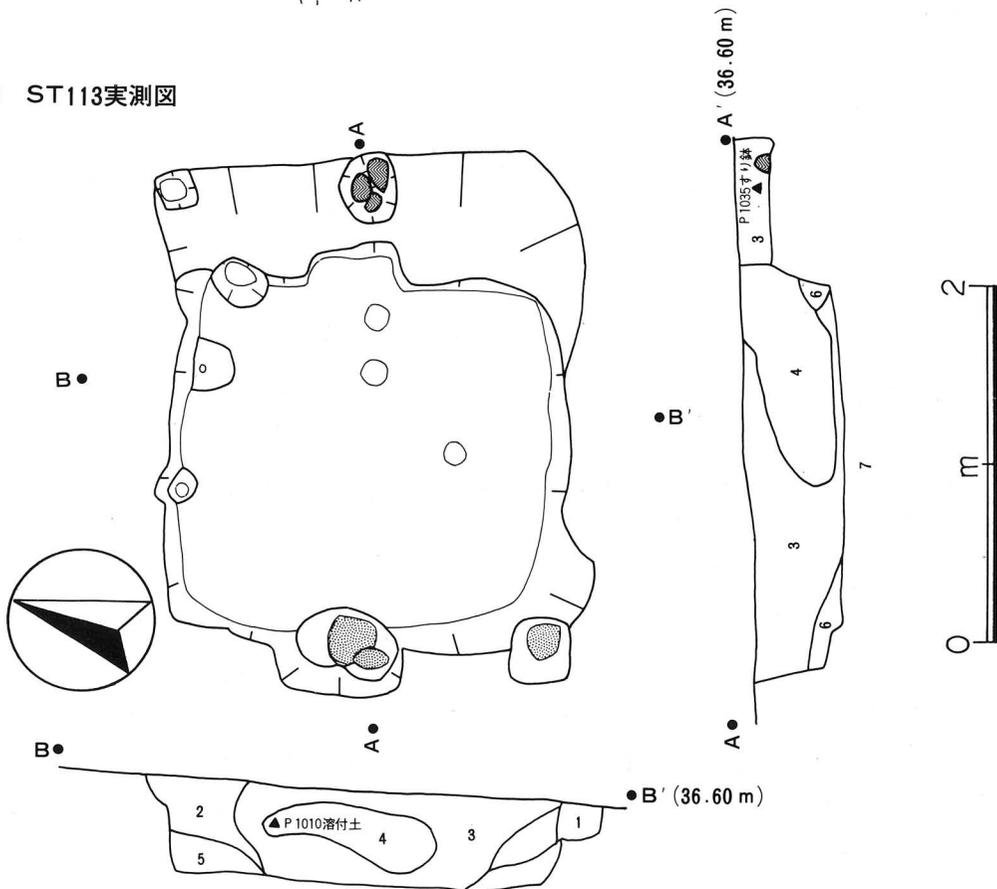
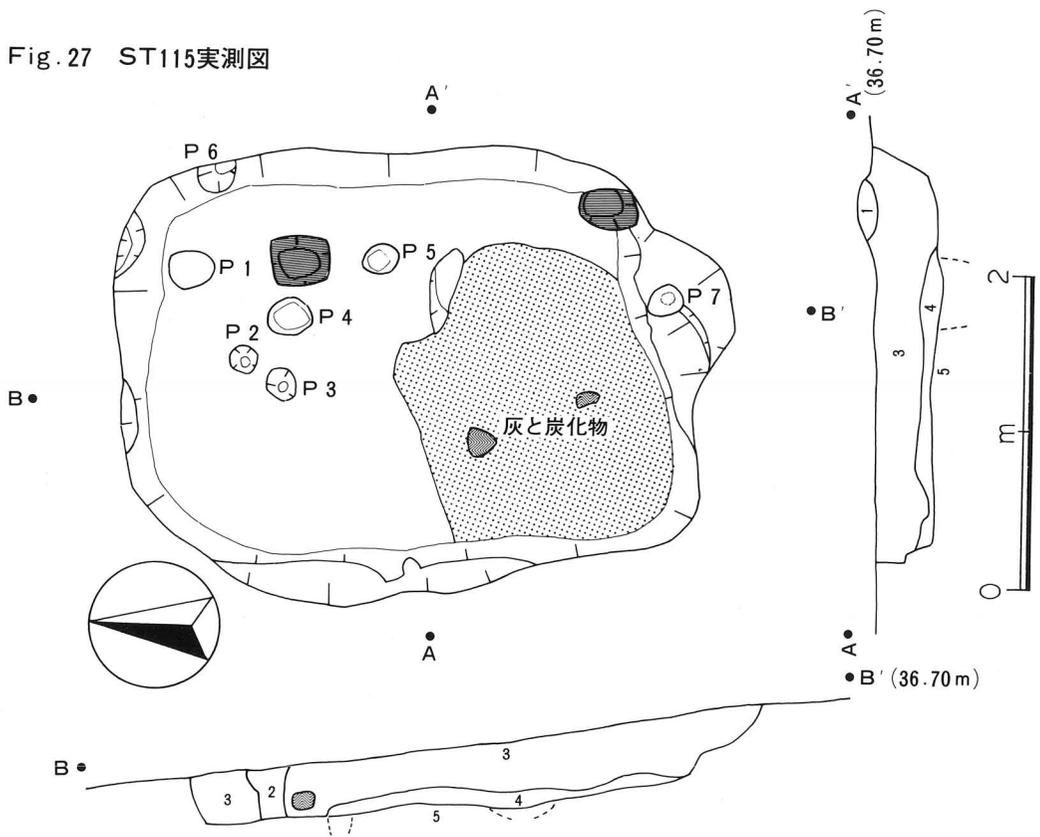
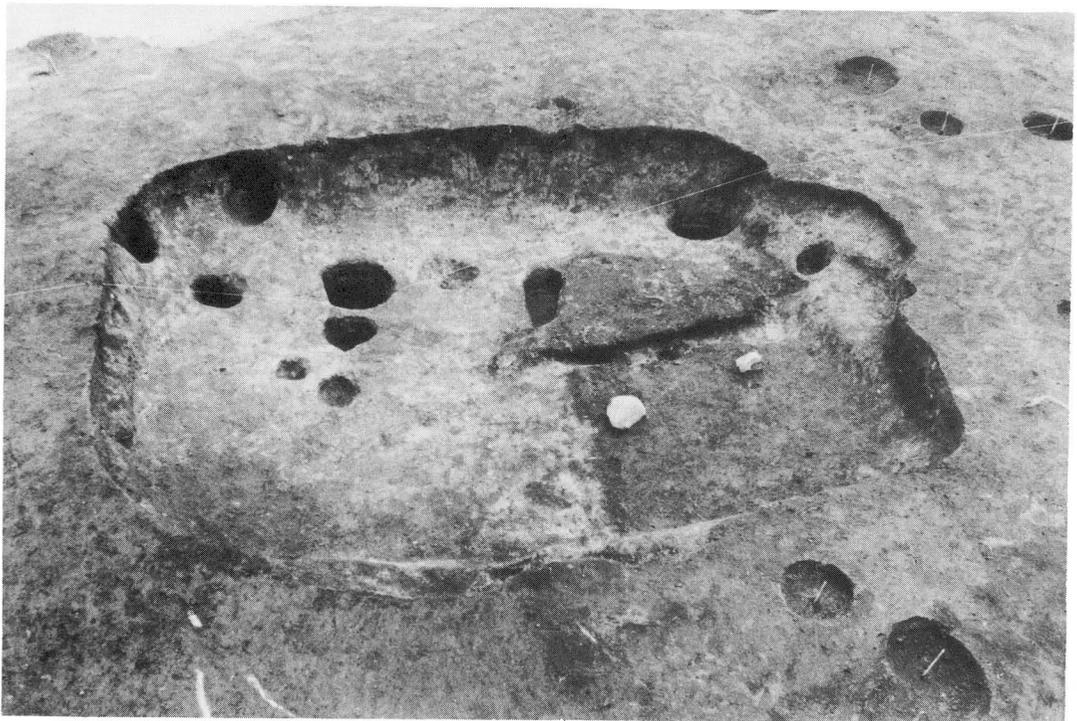


Fig. 27 ST115実測図



PL. 23 ST115 (西側から)



されたものと考えられる。

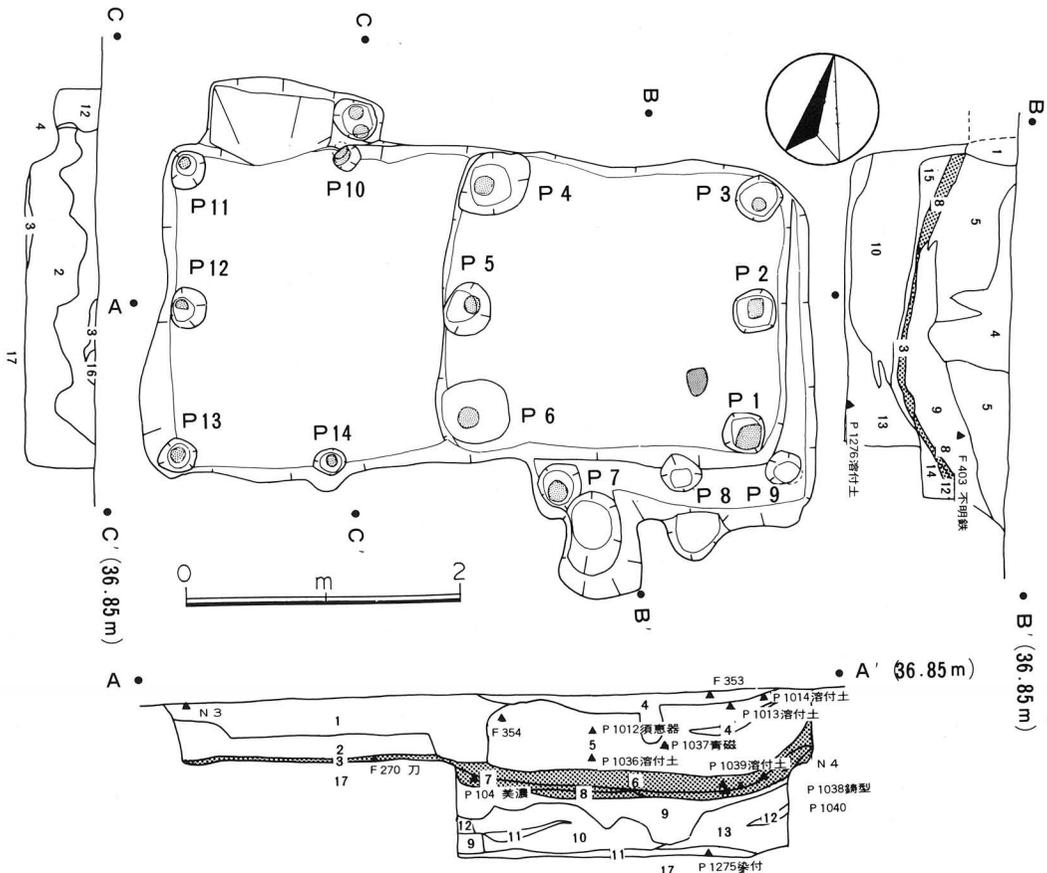
S T117Aは、長軸250cm、短軸218cm、深さ120cmの規模を有し、柱穴は、東・西壁に接して3個ずつ配置されている。柱痕は全柱穴で確認され、深さも一定の規格性を有する。

S T117Bは、長軸245cm、短軸210cmでS T117Aを90°移動したような状況で検出された。南側に3個並ぶ柱穴は、おそらく北側に存在した3個の柱穴と対峙したものであろう。本遺構の床面上には灰の分布がかなり厚くみられ、その中から溶解物付着土器や鋳型の出土が多かった。

S T117Cは、北側にN—10°—Wの方向に張り出しを有し、柱穴配置は壁面に接した状態で8個存在したと考えられるが、5個しか残っていない。規模は240cm×200cm+αcmで、深さは45cmである。床面から刀が1点出土している。

本遺構の出土遺物は前述の重複遺構に関係なく一括して取り上げたため、明確な遺構差はわからない。陶磁器類はPL25で示したものを参考にしていただきたいが、S T117Aの床面出土のものには、染付皿1、白磁皿1、溶解物付着土器の3片がある。覆土出土のものには、青磁碗8、同皿5、白磁2、染付皿7、同碗1、美濃灰釉碗5、同皿2、瓦器1、播鉢1、溶解物付着土器25、鋳型5、羽口11、土師器、須恵器、鉄釘23、かすがい1、小札2、火箸2、銅製切

Fig. 28 ST117実測図



PL.24 ST117(東側から)

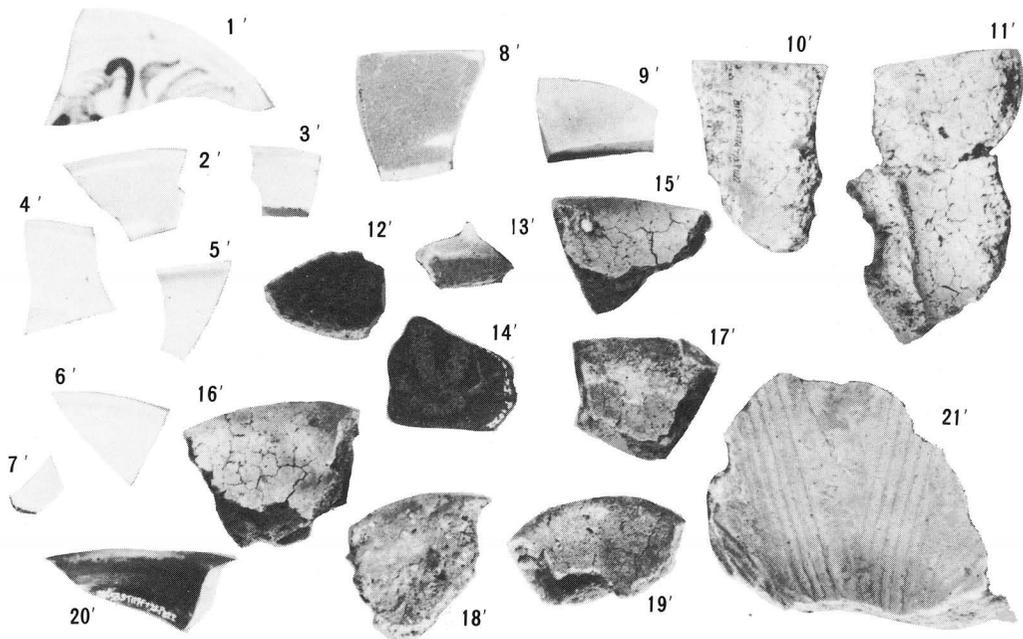
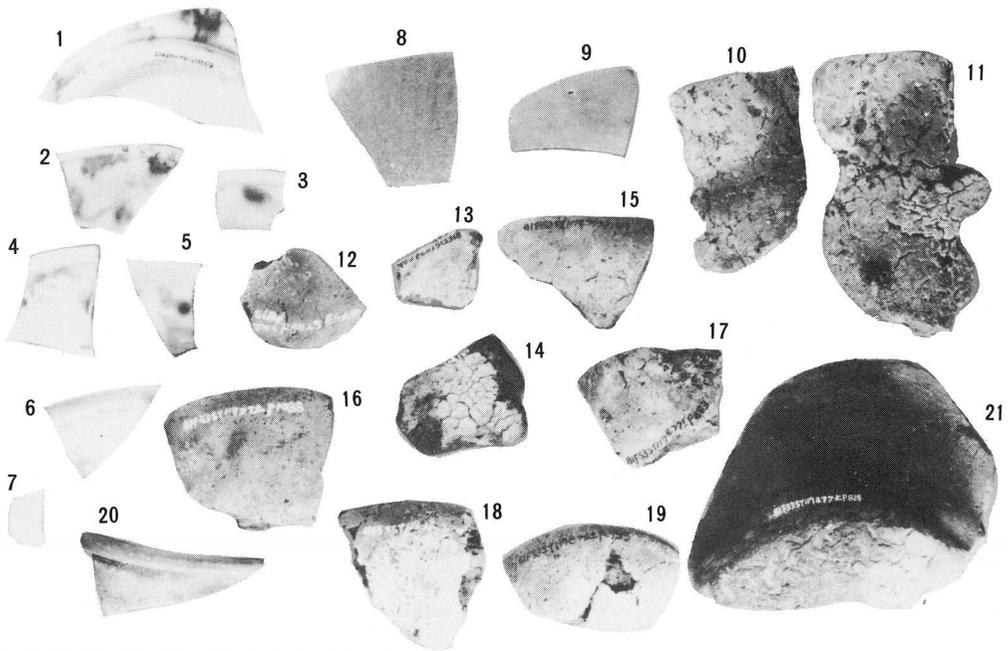


羽1、鋌形銅製品1、銅製裝飾品1、不明銅製品6、銅滓3、古銭12、石鉢1、石臼1、火打石1、漆器の被膜1などがある。特徴としては、溶解物付着土器、鋳型、銅製品、銅滓が多いことから銅製品製作に関係した工房的性格が強いのではないかと考えられる。

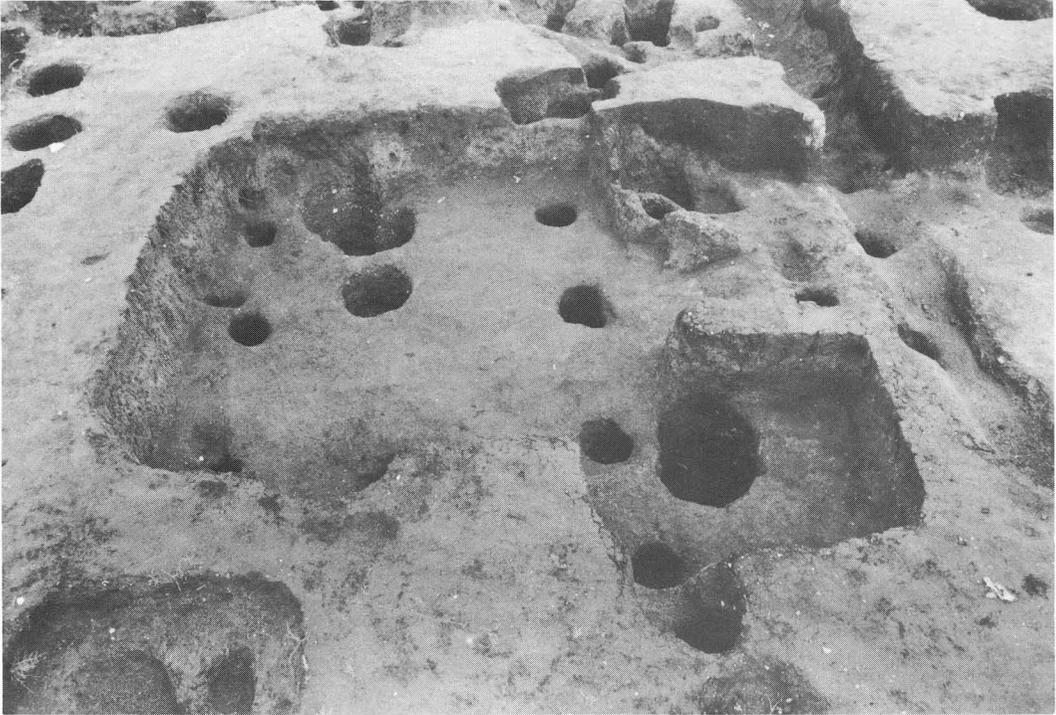
ST118 (PL.26、Fig.29、Ch.24) — F・G53区検出。長軸265cm、短軸260cm、深さ50cmで、南側にスロープの張り出しを有する。その方向はS-16°-Eである。柱穴配置は、Pit 1～Pit 6までの6個が南・北側に3個ずつ並ぶもので、Pit 7も関連するかもしれない。出土遺物には、青磁碗9、同皿4、染付皿4、美濃灰釉皿1、瓦器4、播鉢1、溶解物付着土器1、鋳型1、鉄釘5、小札1、鉄鍋1、古銭6、石臼3、などがある。SB15(旧)SX61(新旧不明)の重複関係がある。

ST119 (PL.27、Fig.30、Ch.25) — F・G52区検出。長軸337cm、短軸302cm、深さ64cm。西側に舌状スロープの張り出しを有し、W-8°-Sの方向を向く。柱穴配置は、Pit 1～Pit 8

PL.25 ST117出土遺物



PL.26 ST118 (西側から)

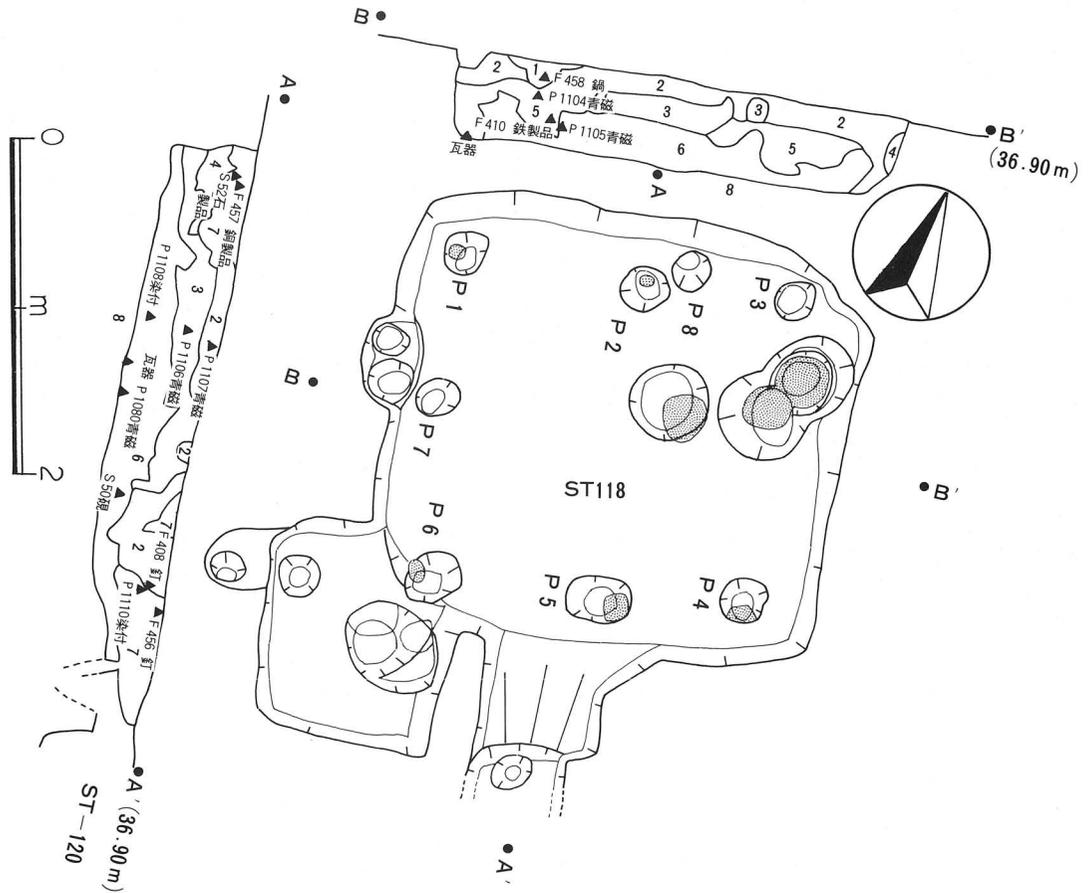


で壁面に接した状態で2間×2間と推定される。南西隅の部分に存在しないことは注意しなければならないが、一段テラス状を呈する部分と、その下の床面の関係は覆土状態から同一時期と考えられるところから構築上の特徴と言えるかもしれない。出土遺物はすべて覆土からであり、青磁皿3、染付1、美濃灰釉皿1、溶解物付着土器4、羽口1、須恵器壺1、鉄釘6、小札2、小柄(328)などがある。

ST120 (PL.28、Fig.31、Ch.26) — G53区検出。長軸317cm、短軸277cm、深さ50cm。南側に舌状の張り出しを有し、S—15°—Eを向く。柱穴配置は、南・北辺に添って3個ずつ並ぶ形態と考えられ(北西部分が欠落)、Pit1、Pit6、Pit7、Pit3がそれぞれである。出土遺物には、青磁皿1、美濃灰釉皿3、溶解物付着土器1、土師器坏2、鉄釘3、鉄鍋1、古銭3、砥石1などが覆土からあった。SD09(旧)の重複がある。

ST121 (PL.29、Fig.32、Ch.27) — H・I53区検出。長軸318cm、短軸302cm、深さ60cm。南側に舌状スロープの張り出しを有し、S—16°—Eに向く。この張り出しの両側には幅の狭い壁溝がみられる。柱穴配置は、Pit1～Pit8までの8個で壁面の近い位置に2間×2間に置かれる。出土遺物は覆土上層の灰と炭火物を含む層から、大量に出土しており、特に鉄製品・銅製品が二次加熱を受けた状態で出土した。その中には、鉄釘41、小札16、火箸2の他、鐺(324)筭(329)、鎧の銅製品、26枚の銅銭がみられる。陶磁器としては、白磁皿1、染付皿4、美濃灰釉皿10、天目碗1、播鉢1が覆土全般から出土している。ST122(旧)、SX74(新旧不明)

Fig. 29 ST118実測図



の重複関係がある。

ST122 (PL.29、Fig.32、Ch.27) — H52区検出。長軸235cm、短軸162cm、深さ38cm。長軸方向はN-20°-Wであり、その形態から土坑的な性格のものであろう。出土遺物は、青磁碗1、唐津皿1、筭(333)、釘1がある。ST121(新)の重複あり。

ST123 — SD36に変更。

ST124 (Fig.33、Ch.28) — J・I52・53区検出。昭和56・57年の調査区にまたがったため実測図を合成した。長軸方向はN-5°-W。西側北部に榊形の張り出しを有するが出入口部であるかは不明である。柱穴配置はPit1~Pit7と考えられるが深さにバラつきがみられるため確定的でない。出土遺物には、青磁1、美濃灰釉皿1、羽口1、洪武通宝1などがある。南側の柱穴を有しない竪穴は、遺構ナンバーを有していない。

ST125 (PL.30、Fig.34、Ch.29) — I52区検出。長軸303cm、短軸281cm、深さ44cm。図面に表わすことはできなかったが、南側に張り出しを有することが確認された(PL.30参照)。その方向はS-25°-Eであり、2個の柱穴を付属する。柱穴配置はPit1~Pit6までの6個で

PL.27 ST119 (西側から)



PL.28 ST120 (南側から)

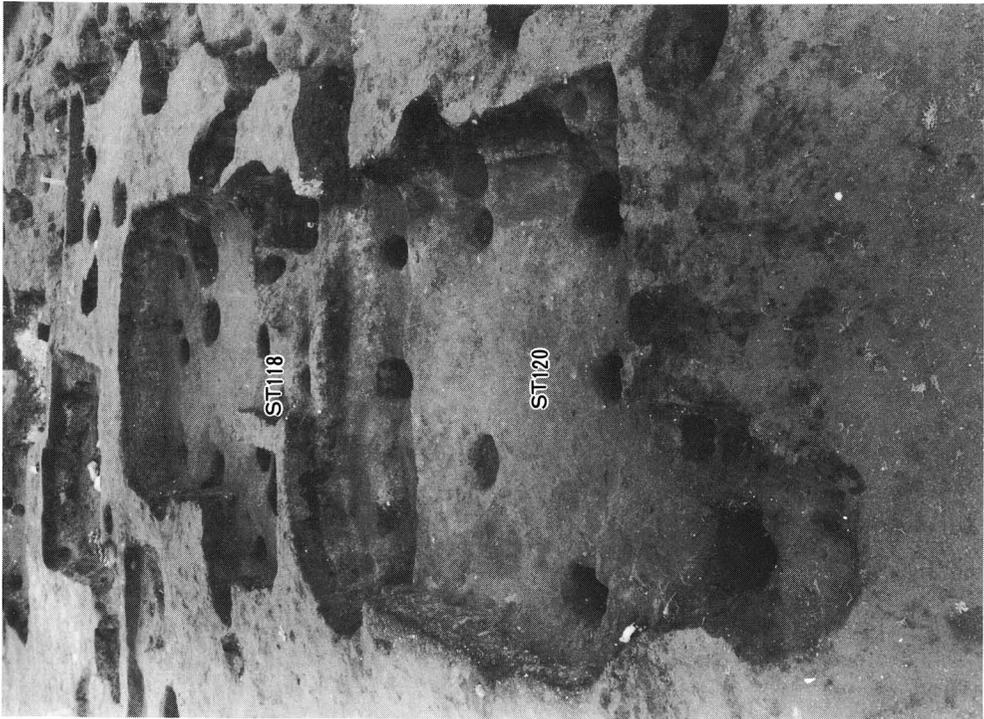


Fig. 30 ST119実測図

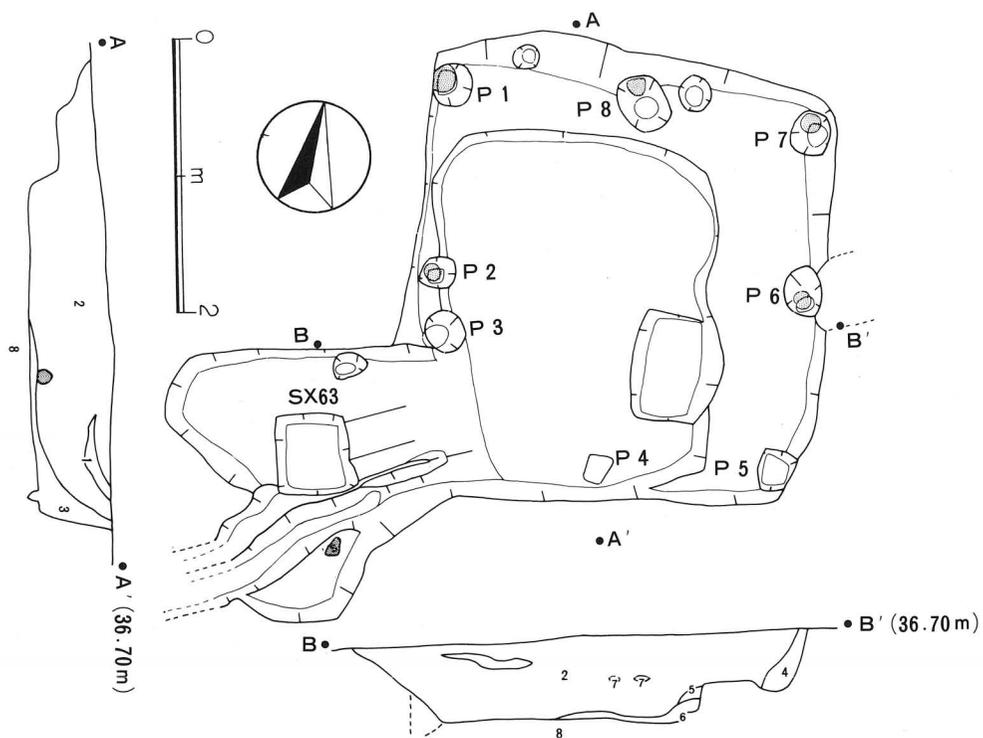
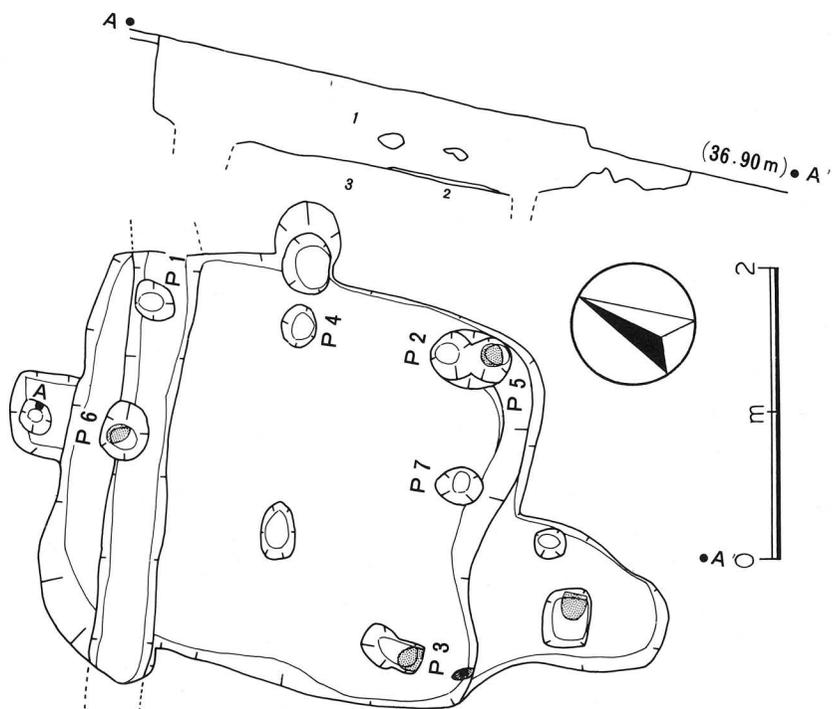


Fig. 31 ST120実測図



PL. 29 ST121・ST122・SX74(北側から)



PL. 30 ST125(西側から)



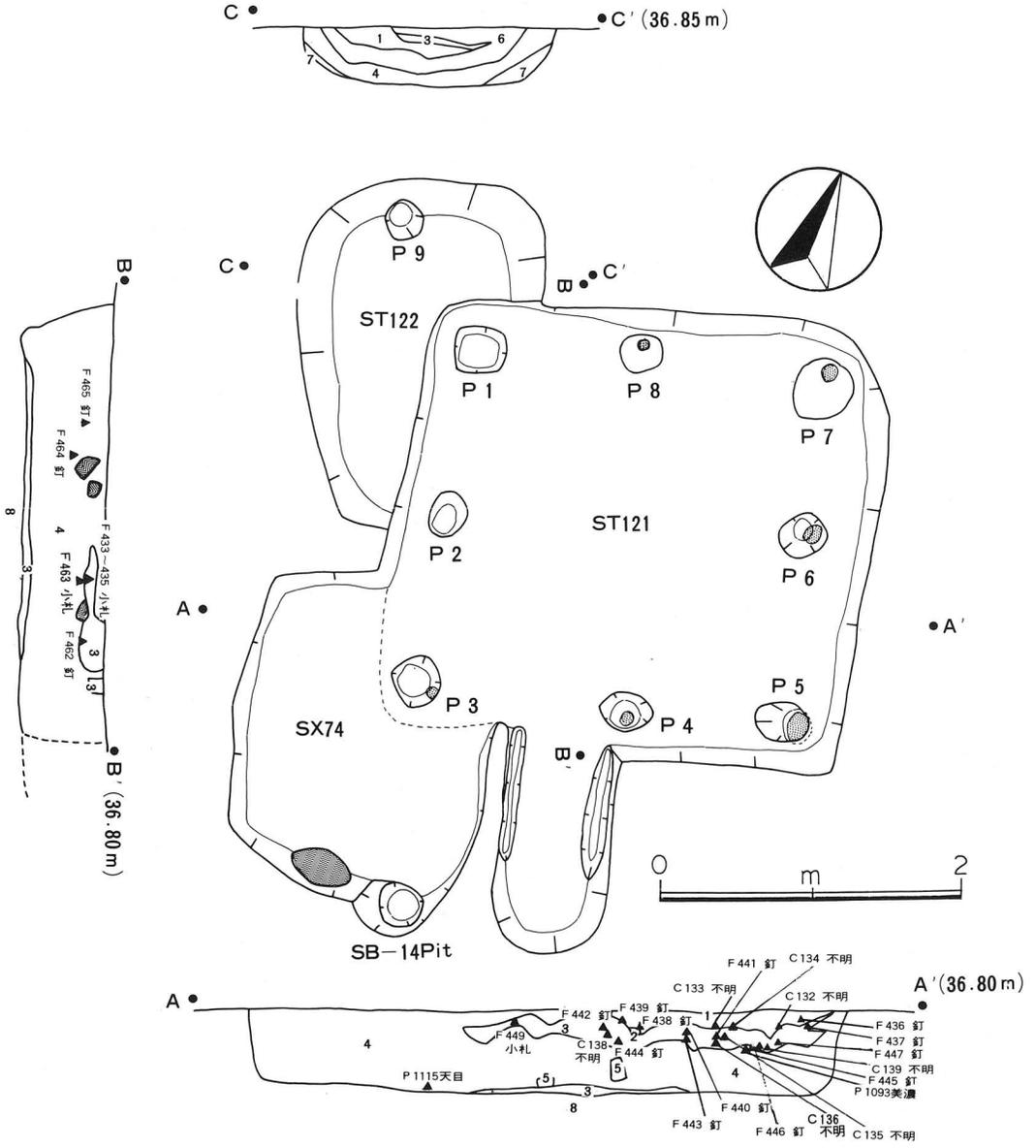
PL. 31 ST127(北側から)



PL. 32 ST130・ST131・他(北側から)



Fig. 32 ST121・ST122・SX74実測図



南・北辺に3個ずつ並び、柱痕も残っている。ただ、S B14に関連する柱穴が床面にもみられる。出土遺物としては、青磁皿1、染付皿2、美濃灰釉皿1、鉄釘1、小札1、鉄碗玉1、古銭3、砥石などがある。

S T126——S E43に変更。

S T127 (PL.31、Fig.35、Ch.30) ——G・H53区検出。長軸400cm、短軸323cm、深さ55cmの不整形の竪穴遺構である。検出された柱穴の配置から、上部構造が存在した可能性はほとんどなく西側から走るS D31に関連する遺構であろうか。出土遺物には、青磁碗3、染付皿1、美濃灰釉皿2、溶解物附着土器5、土師器などがあり、鉄釘7、小札2、熙寧元宝1、漆器の被膜なども出土している。

S T128 (Fig.36、Ch.31) ——J53区検出。長軸275cm、短軸218cm、深さ45cm。長軸方向はE—9°—Nであり、付属する柱穴はないと考えられる。出土遺物としては、床面から〇〇元宝景德元宝の古銭2枚、他に青磁皿1、同皿1、染付皿1、鉄釘3、鉄鍋1、無文銭2、石臼1、火打石1が覆土から出土している。土壇的性格と推定される。

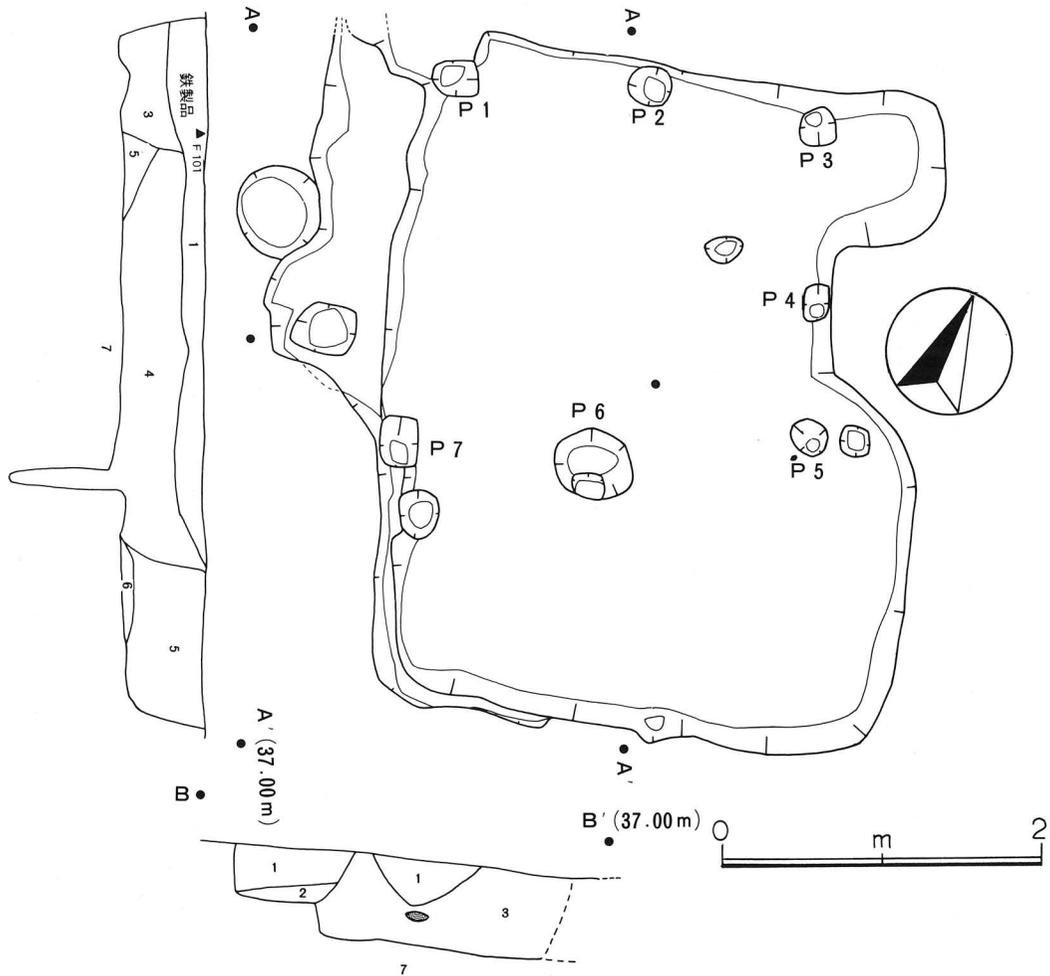
S T129 (Fig.36、Ch.31) ——J・K52区検出。長軸385cm、短軸360cm、深さ26cm。長軸方向はN—19°—Wであり、柱穴配置は不明な点が多い。本遺構の周辺は、竪穴遺構・掘立柱の建て替え等のため遺構重複が激しく、規模も明確に検出できなかった点を強調しておく。出土遺物は、青磁碗2、同皿1、白磁皿2、染付皿2、播鉢1、溶解物附着土器1、鉄鍋4、鉄釘2、鉄鎌1、天禧通宝1、石鉢1、砥石1、などが覆土から出土しており、重複する柱穴に共伴するものもみられる。S T128 (旧) の重複だけは明確である。

S T130 (PL.32、Fig.37、Ch.32) ——K52・53区検出。長軸(443)cm、短軸440cm、深さ34cmであり、長軸方向はN—12°—Wである。張り出しの有無、柱穴配置は明瞭でなく、上屋構造の存在は確実でない。S B10の柱穴が本遺構を縦断し、さらにS D16が南壁に切り合っているため遺構をより不明確にしている。出土遺物は、青磁碗2、同皿3、白磁皿3、美濃灰釉皿3、同褐釉皿1、瓦器壺1、溶解物附着土器3、羽口2、播鉢2、小札9、鉄釘5、鉄鍋1、火箸1、鉄滓、銅滓、古銭13、砥石1などがある。S X71 (新旧不明)、S B10 (新旧不明)、S D16 (旧) の重複がある。

S T131 (PL.32、Fig.38、Ch.33) ——K・L52区検出。長軸350cm、短軸268cm、深さ49cm。張り出し等はなく、長軸方向はN—5°—Eである。Pit1～Pit3が本遺構の床面から検出されていたるが、付属するかどうかは疑問であり、上屋構造は存在しなかったであろう。出土遺物は、青磁碗4、同皿1、白磁皿3、同小坏4、染付皿4、美濃灰釉皿1、同褐釉皿1、天目碗2、越前甕7 (125など)、瓦器2、鉄釘4、古銭4、硯 (358)、砥石1、石鉢などがある。S X71 (新旧不明)、S B10 (新旧不明) などの重複がある。

S T132 (PL.33、Fig.39、Ch.34) ——L・M52区検出。長軸658cm、短軸435cm、深さ47cm。

Fig.33 ST124実測図



長軸方向はN-11°-Wであり、張り出しはみられない。柱穴配置は、壁面に接するものと、長軸方向中央の棟通りに位置するPit35、Pit37が関連すると考えられ、不規則な配置をするようである。出土遺物には、青磁碗8、白磁皿2、染付皿4、美濃灰釉皿1、越前甕1、瓦器4、溶解物附着土器4、鉄釘10、内耳鉄鍋1、苧引金1、不明銅製品(341)、銅滓(321)、古銭5などがある。ST152(旧)、SB10(新旧不明)の重複関係があった。

ST133(PL.34、Fig.40、Ch.35) — H・I51区検出。長軸355cm、短軸304cm、深さ44cm。南側に舌状テラスの張り出しがありS-22°-Eの方向を向く。柱穴配置は不明瞭で、Pit1、Pit2以外は本遺構に重複する柱穴と考えられ、新旧関係も不明である。出土遺物には、青磁1、溶解物附着土器1、鉄釘2、古銭4がある。SB14(旧?)と重複している。

ST134(PL.35、Fig.41、Ch.36) — I50・51区検出。長軸402cm、短軸295cm、深さ58cm。張り出しはなく、上屋構造を推定する柱穴配置もない。出土遺物は、青磁碗1、白磁皿1、染付皿1、美濃灰釉皿1、播鉢2、瓦器2、溶解物附着土器1、刀1、不明銅製品1、古銭2、

Fig. 34 ST125実測図

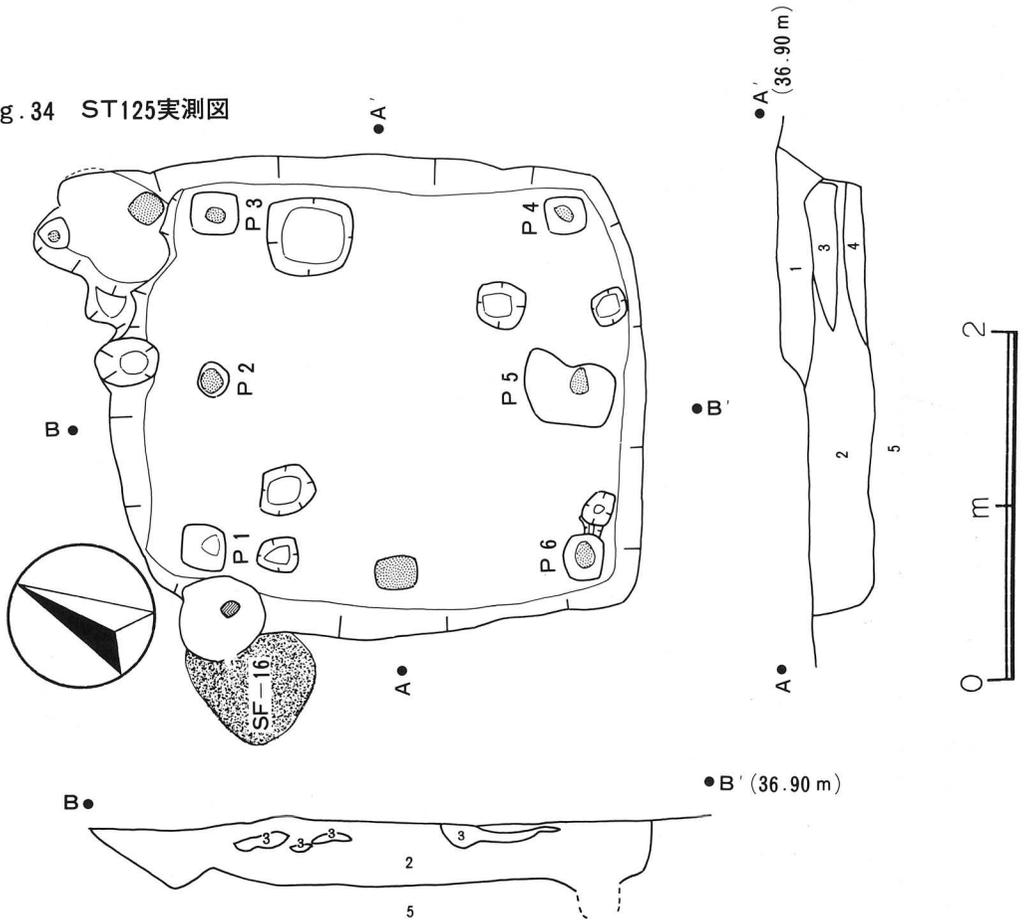


Fig. 35 ST127実測図

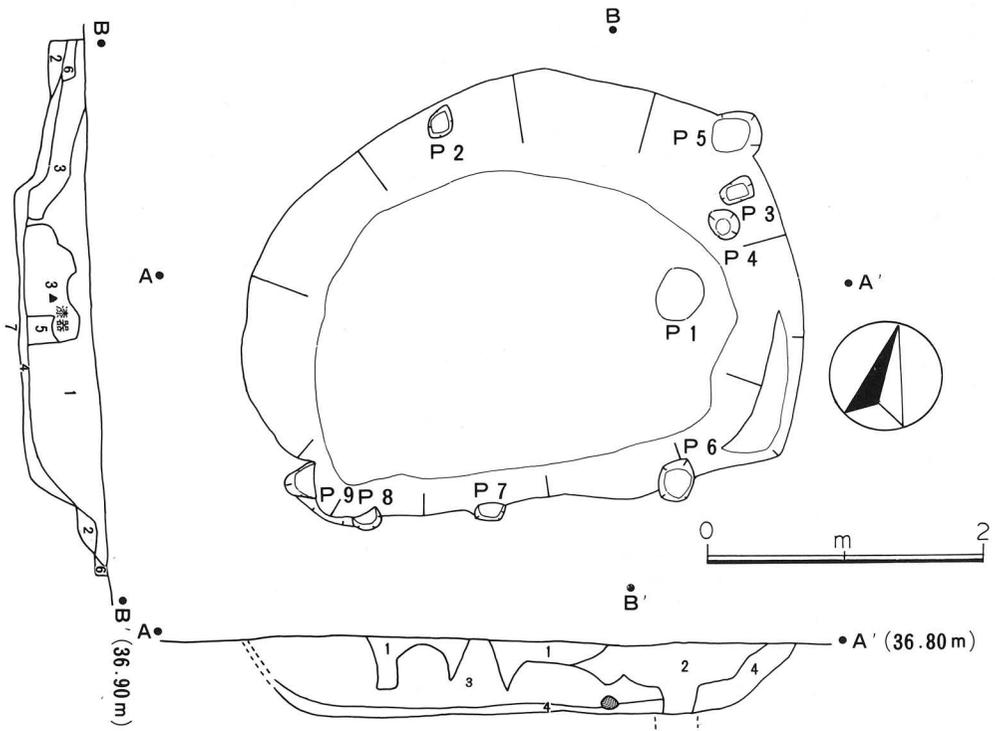


Fig. 36 ST128・ST129実測図

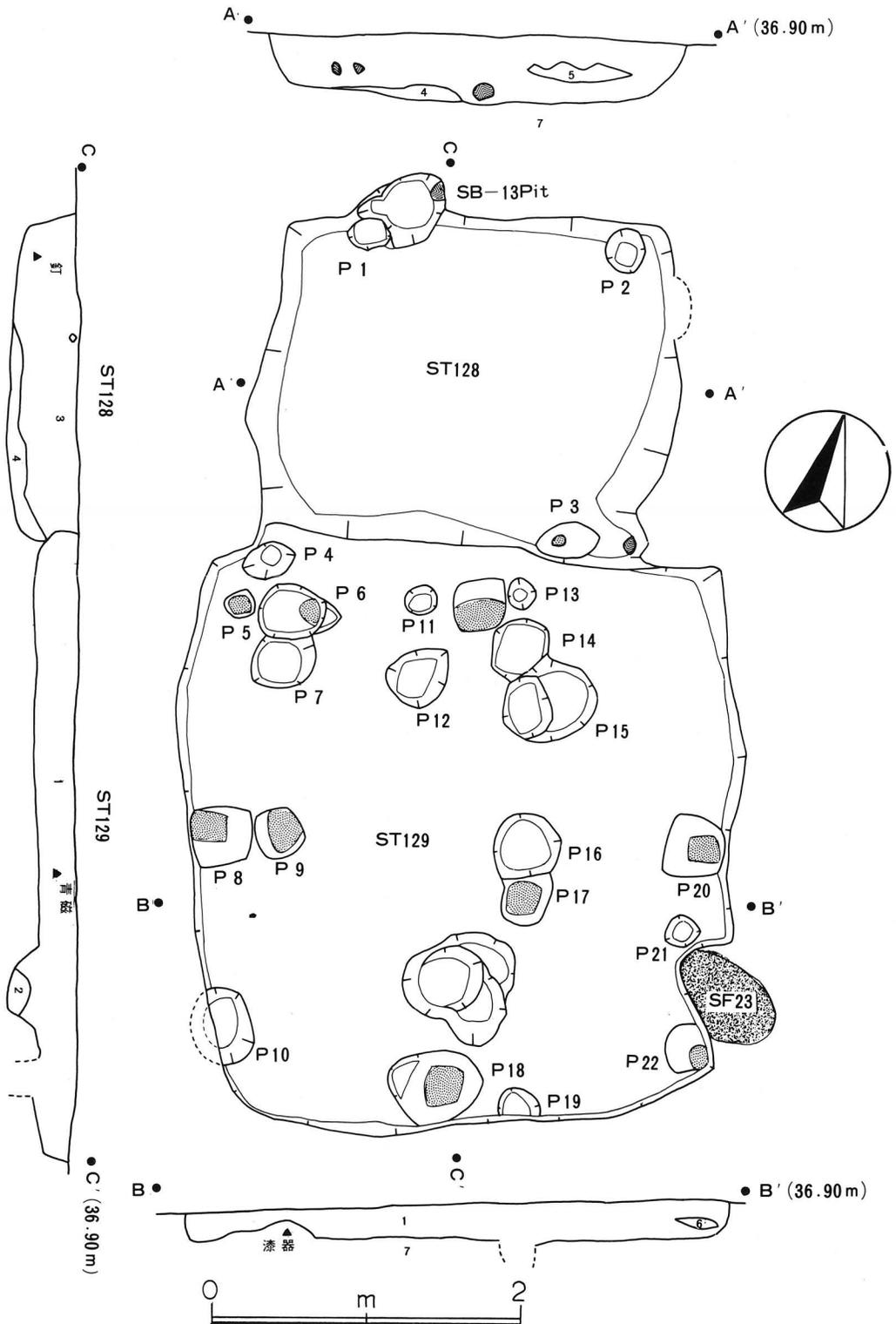


Fig. 37 ST130・SX71・SE 59実測図

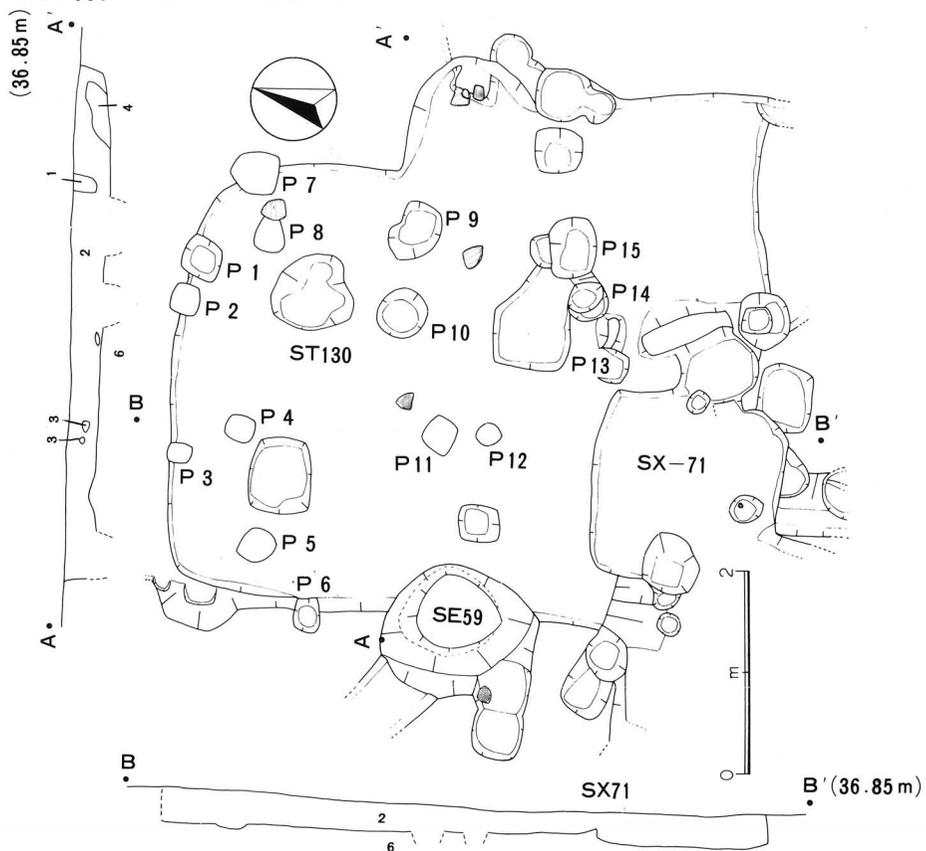


Fig. 38 ST131・SX71実測図

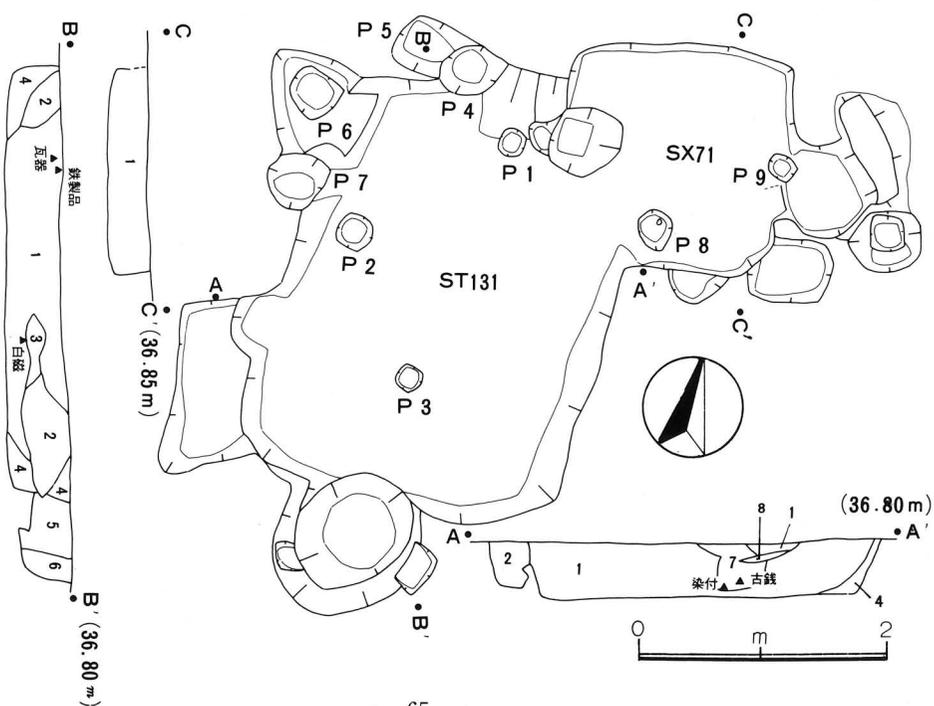


Fig. 39 ST132・ST152実測図

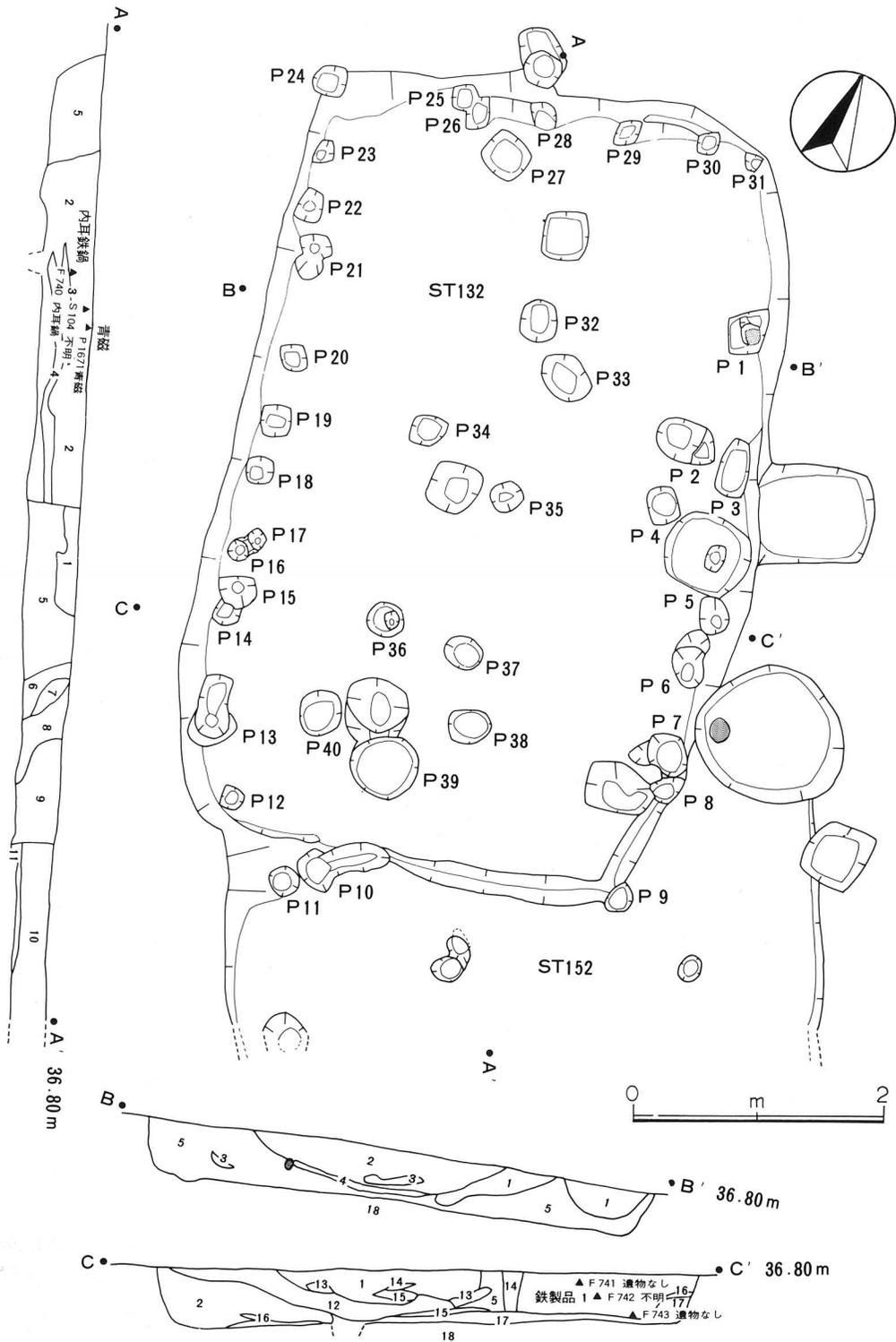
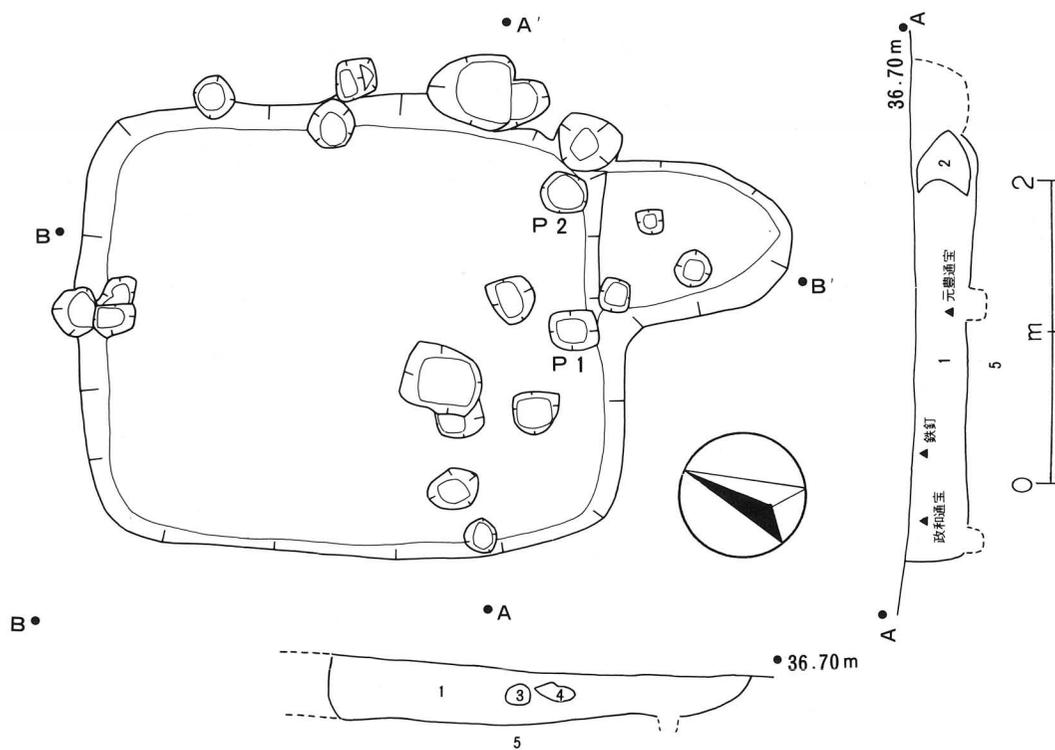


Fig. 40 ST133実測図



砥石 1 などがある。土壇的性格が強い。

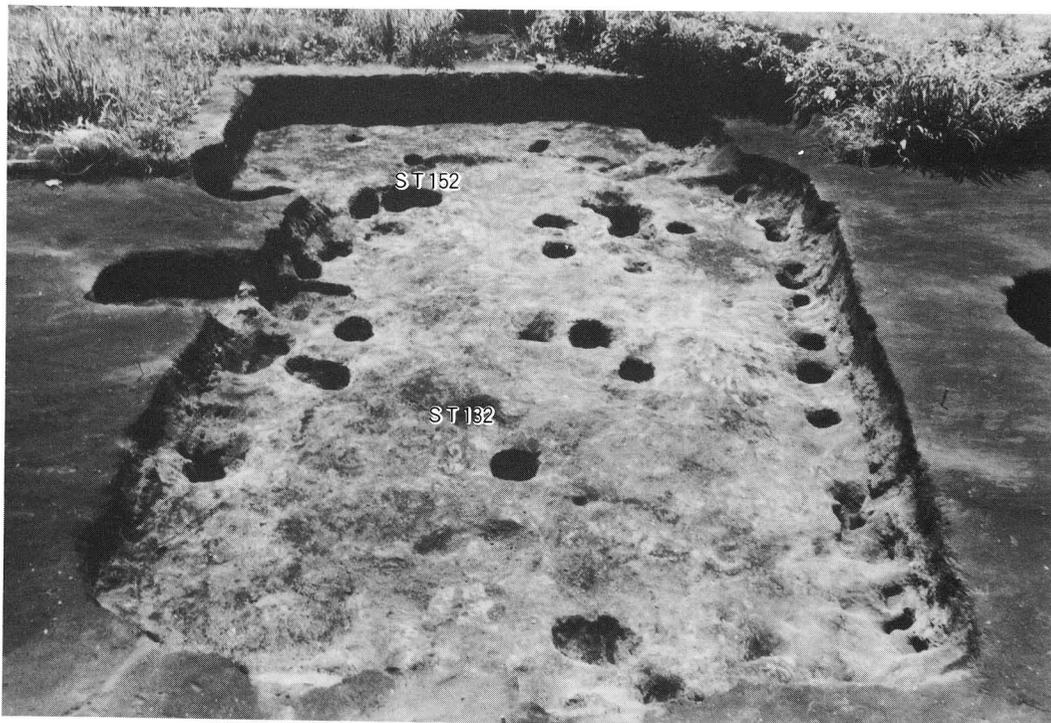
ST 135 (PL.36、Fig.42、Ch.37) — I 50区検出。長軸316cm、短軸279cm、深さ65cm。S D32 (旧) を切って構築されたため、南・北壁の確認が不明確であり、張り出しが存在した可能性も存在する。長軸方向はN-15°-Wである。柱穴配置は、南・北壁に添って3個ずつ並び、他の重複する柱穴はみられない。出土遺物は、青磁碗1、不明磁器皿1、溶解物付着土器1、播鉢10、火打石1などがあり、S D32との攪乱による土師器・須恵器の破片も多数みられる。

ST 136 (Fig.43、Ch.38) — H・I 50区検出。規模は不明確で、柱穴配置も確認できない。S T146とした遺構と床面が同じレベルであり、S D32 (旧) との重複によって西壁が検出されなかったため、複雑化している。出土遺物には青磁碗1、同皿1、溶解物付着土器1、羽口1、漆器の被膜などがある。

ST 137 (PL.37、Fig.44、Ch.39) — I 49区検出。長軸270cm、短軸240cm、深さ42cm。長軸方向はN-22°-Wであり、東側に攪乱部分がある他張り出しはみられない。柱穴配置も規則性が認められず、上屋構造は推定できない。規模が小形なことから土壇的なものであろうか。出土遺物には、播鉢1、鉄釘1、砥石1があり、S B18 (新) と重複関係がある。

ST 138 (PL.38、Fig.45、Ch.40) — L 51・52区検出。長軸580cm + α cm、短軸445cm、深さ53

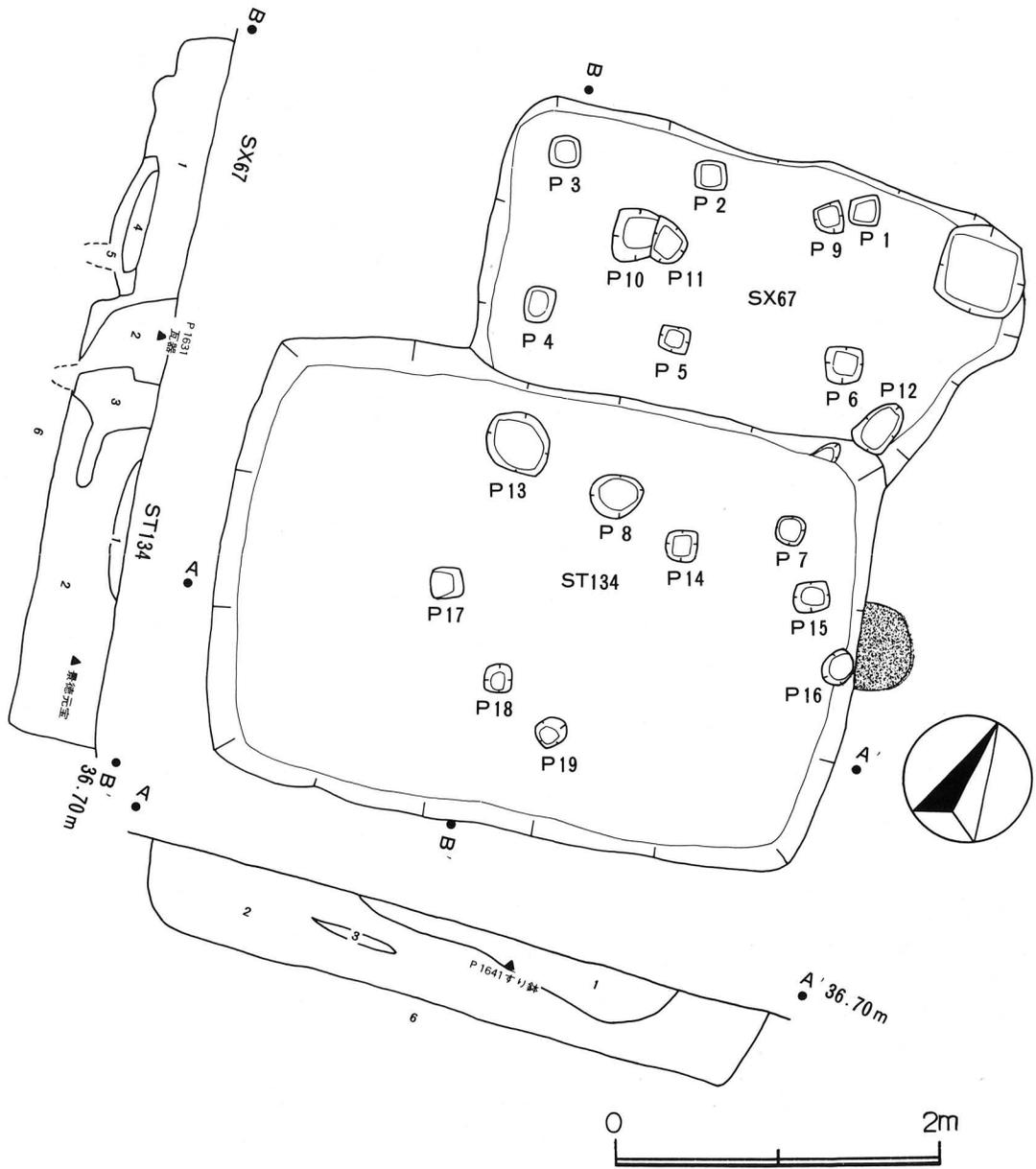
PL. 33 ST132(北側から)



PL. 34 ST133(北側から)



Fig. 41 ST134・SX67実測図



PL. 35 ST134(西側から)



PL. 36 ST135(北側から)



PL. 37 ST137(北側から)



PL. 38 ST138(北側から)

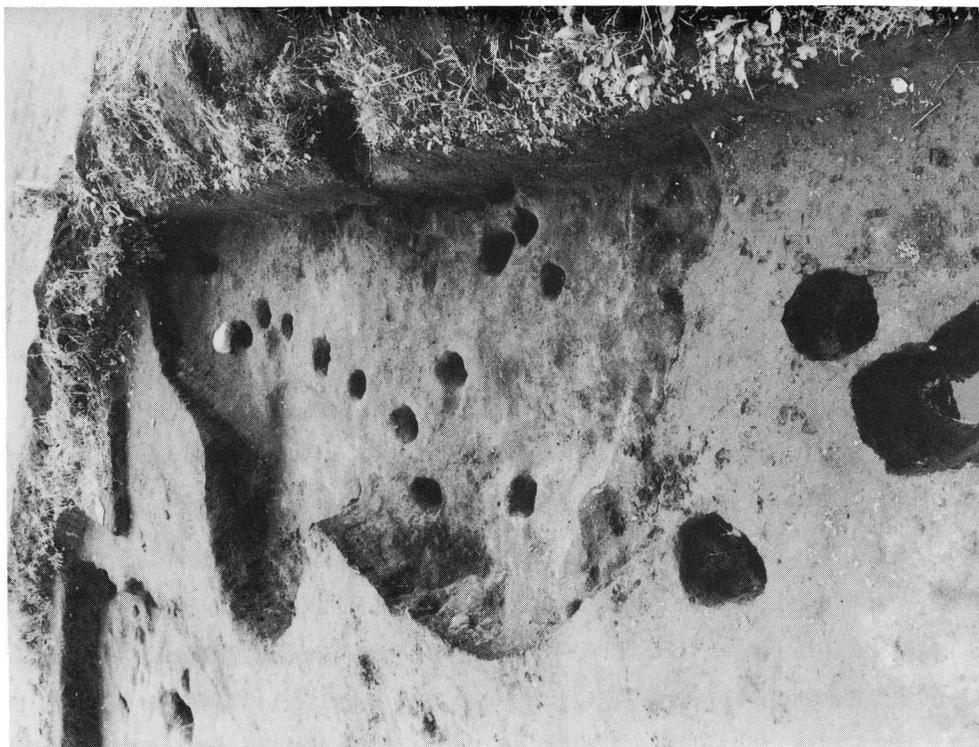
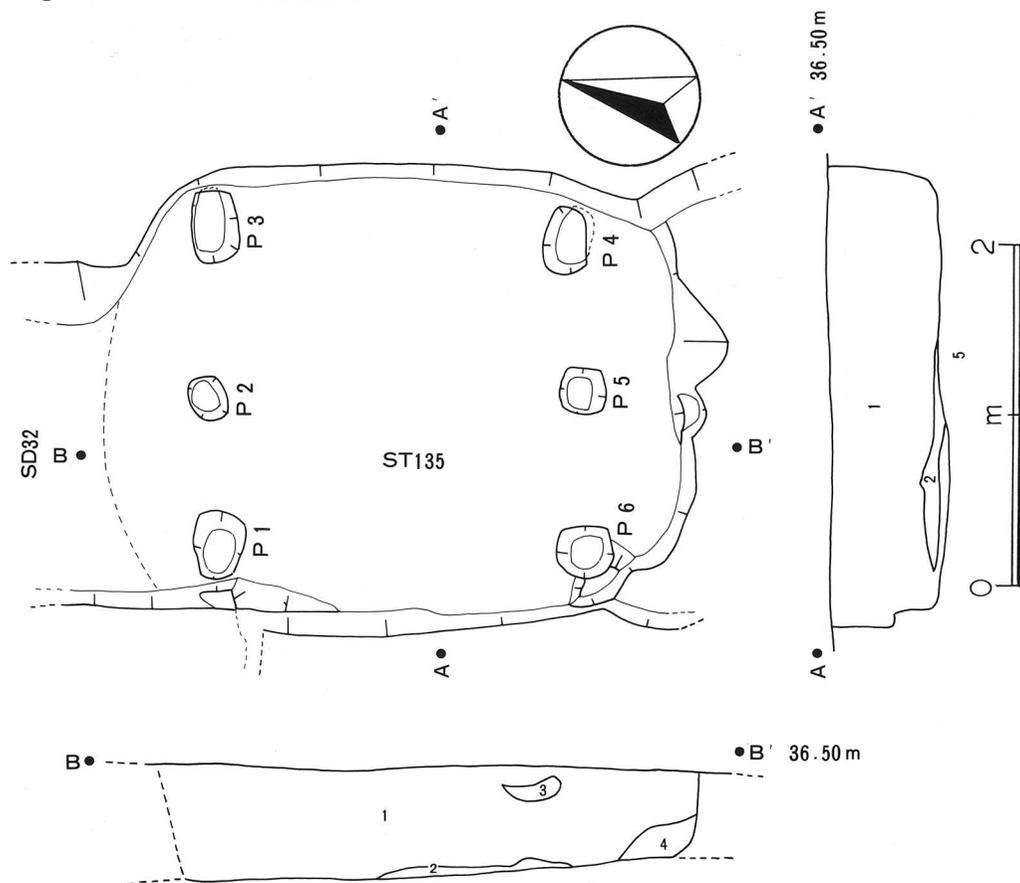


Fig. 42 ST132・SD32実測図



cmで長軸方向はN-7°-Wである。昭和57年度調査区と重複しているため、図面を合成したが、南側は未調査の部分が多い。柱穴配置も不明確で、西壁側に対峙する柱穴が検出できなかった。出土遺物には、青磁碗1、染付皿5、美濃灰釉皿1、天目碗1、播鉢1、鉄釘1、鉄鍋1、古銭6、ガラス状の玉1、砥石1（以上昭和56年度分）があった。

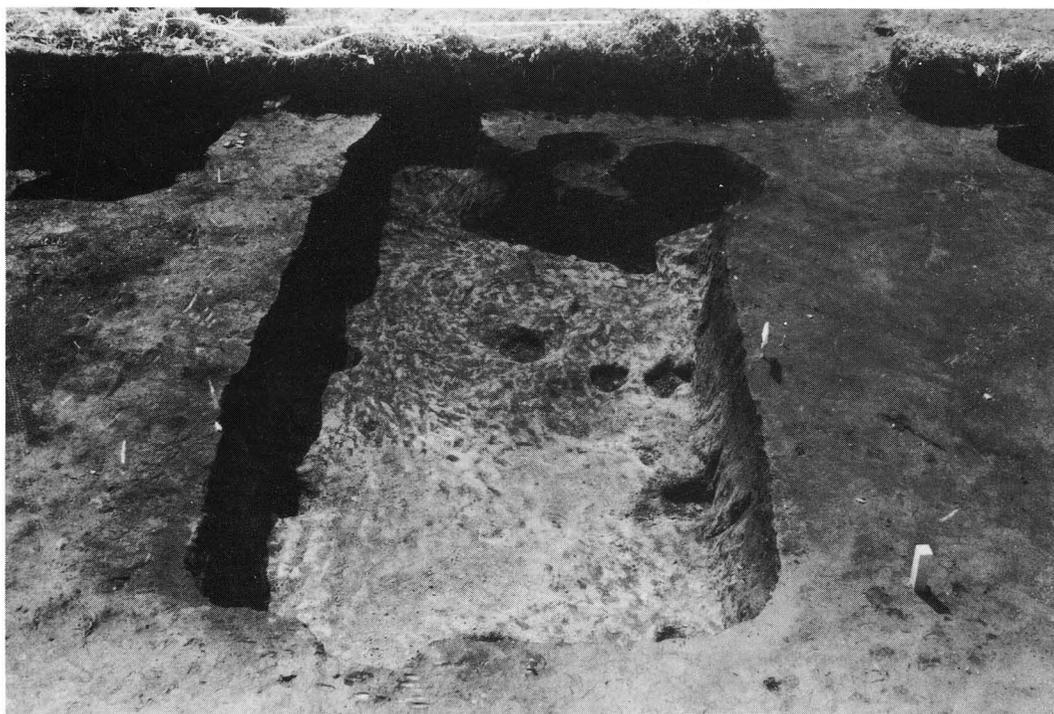
ST139 (PL.39, Fig.46, Ch.41) —H50区検出。長軸326cm、短軸285cm、深さ44cm、南側に張り出しを有し、壁溝が両側にみられる。その方向はS-22°-Eであり、ST146との切り合いによって壁面は削られている。柱穴配置は、南・北壁に添って3個ずつ並ぶもので、柱穴の深さも一定している。南西部の床面直上に灰の範囲が認められ内部から焼米の出土もあった。出土遺物には青磁碗1、同皿1、播鉢1、溶解物付着土器1、鉄釘1がある。

ST140 (PL.40, Fig.47, Ch.42) —H51区検出。長軸364cm、短軸232cm、深さ53cm。南側に一段テラスの部分が存在し張り出しと考えられるが、確証はない。長軸方向はN-20°-Wである。柱穴配置は、Pit1~Pit8までの8個、2間×2間である。ところが南側の柱穴Pit5

PL. 39 ST139(北側から)



PL. 40 ST140(北側から)



PL.41 ST141 (西側から)



PL.42 ST142・ST147 (北側から)



～Pit 7 は、南壁から離れた部分に位置し、床面空間に広がりがあるが認められる。出土遺物には、青磁皿、美濃灰釉皿、不明施釉陶器皿、瓦器が各 1、小柄 1、小札 2、鉄釘 1、苧引金 1、焼米などがあった。

S T 141 (PL.41, Fig.48, Ch.43) ——H51区検出。長軸290cm、短軸200cm、深さ50cmの楕円形を呈する遺構。長軸方向はE—14°—Nである。柱穴は、長軸方向中央に 2 個配置されるが、上屋構造に関連するものかは不明である。出土遺物には、青磁碗 1、赤絵 1、鉄釘 2、開元通宝 1 がある。南側には一段テラス状になった部分もあるが、本遺構に関連するものか確証はない。

S T 142 (PL.42, Fig.49, Ch.44) ——H48区検出。長軸450cm、短軸390cm、深さ34cm。形状は不整形であり、張り出しおよび付属する柱穴は存在しないようである。長軸方向はN—20°—Wである。出土遺物は、染付皿 2、美濃褐釉皿 1、挿鉢 1、溶解物付着土器 1、鉄釘 2、古銭 4、焼米などがある。S B 18 (旧)、S T 147 (新) の重複関係がある。

S T 143 (PL.43, Fig.50, Ch.45) ——H48・49区検出。長軸506cm、短軸335cm、深さ37cm。やや不整形の形状で、張り出しおよび付属する柱穴は存在しない。長軸方向はN—15°—Wであり床面に S B 18 の柱穴が 3 個みられる。出土遺物は、白磁皿 1、不明陶器 1、鉄鍋 1、寛永通宝 1 がある。S B 18 (旧)・S X 82 (旧) の重複関係がある。

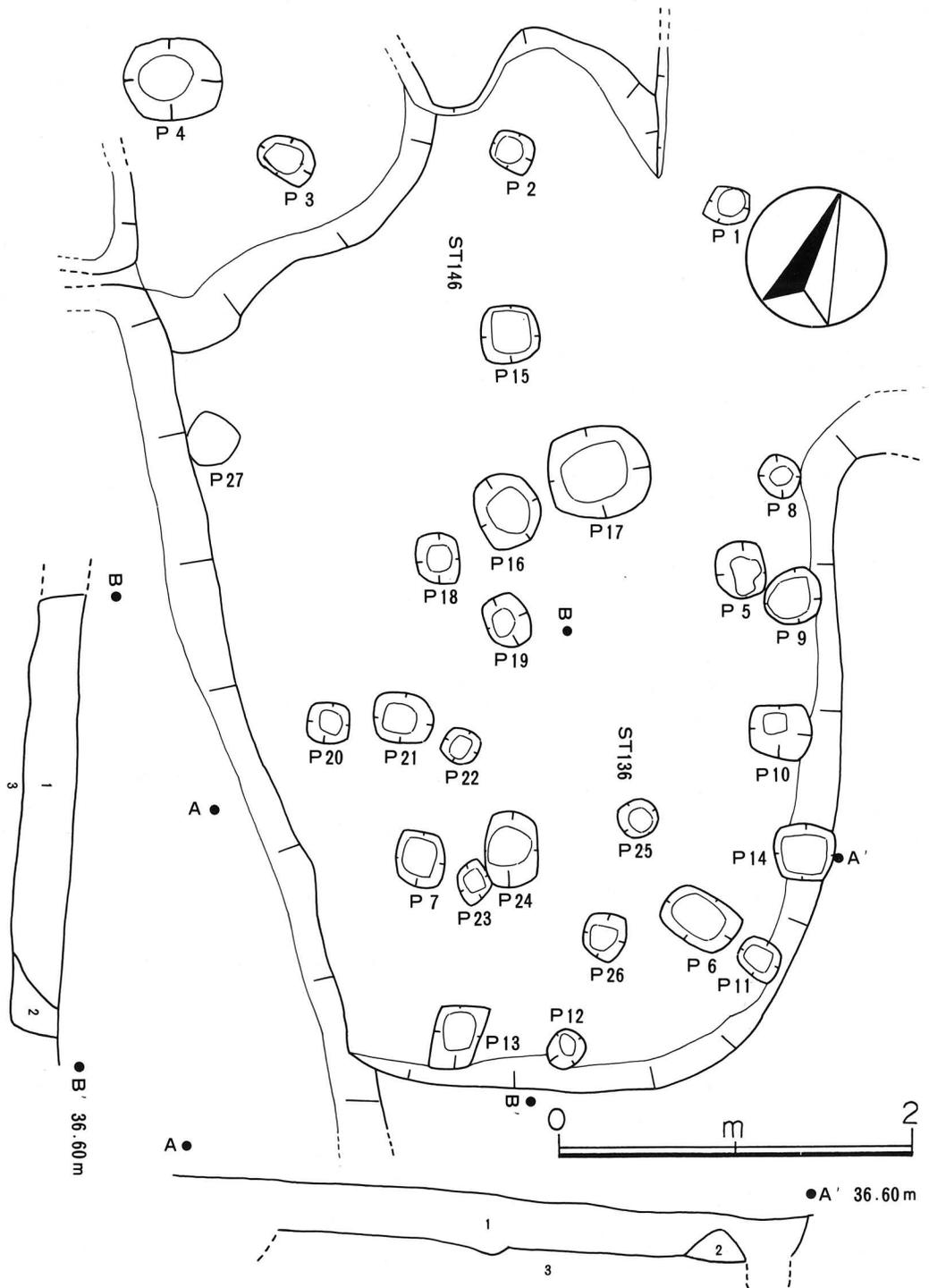
S T 144 (PL.44, Fig.51, Ch.46) ——G51区検出。長軸276cm、短軸240cm、深さ48cm。北側に若干の張り出しを有するが、柱穴の重複という可能性もあり速断できない。床面には、長軸方向中央に 2 個の柱穴 (Pit 1、Pit 2) が存在し、S T 141と同様の柱穴配置である。出土遺物には青磁香炉 1、白磁皿 2、染付皿 2、美濃灰釉皿 2、天目碗 2、唐津皿 1、打根 2 (267・268)、不明鉄製品 (277)、鉄釘 8 (314) など、石鉢 1、漆器の被膜などがある。鉄製品の出土に特徴のある遺構。

S T 145 (PL.45, PL.46, Fig.52, Ch.47) ——I 48区検出。長軸326cm、短軸328cm、深さ61cmで、正方形に近い形状を呈し、張り出し等の存在は不明確である。Pit 1～Pit 8 までが本遺構に伴う柱穴であり、Pit 2・Pit 7 は建て替え等に伴うものと考えられ、南・北壁に添って 3 個ずつ並ぶ形態である。床面直上には、厚い粘土の分布が全般にみられ、覆土堆積は掘り上げ土が互層になっている。出土遺物には、青磁碗 2、同皿 1、白磁皿 3、染付皿 8 (内床面 1)、美濃灰釉皿 1、美濃褐釉壺 (PL.46)、天目碗 1、志野皿 1、唐津皿 1、越前甕 2、溶解物付着土器 4、鉄釘 15 (内床面 1) 鉄鏝 2、小札 1、小柄 1、鉄鍋 1、無文銭 9 などがある。S B 18 (新旧不明)、S B 19 (旧)、S T 148 (旧)、S T 150 (旧)、S T 151 (新) の重複関係がある。

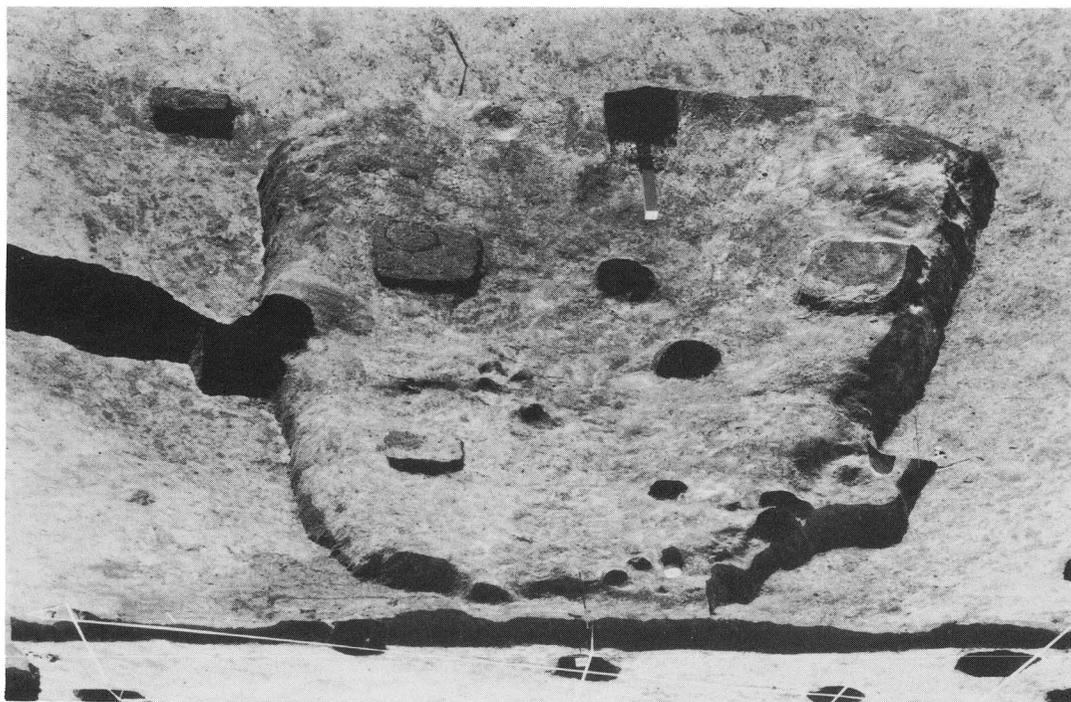
S T 146 (Fig.43, Ch.38) ——H・I 50区検出。規模は明確でないが、Pit 1、Pit 2、Pit 3、Pit 8 などが本遺構の柱穴であろうか。出土遺物には、天聖元宝、石臼、砥石が各 1 ずつある。

S T 147 (PL.42, Fig.49, Ch.44) ——H・I 48区検出。長軸 (350) cm、短軸297cm、深さ

Fig. 43 ST136・ST146実測図



PL.43 ST143 (北側から)



PL.44 ST144 (東側から)



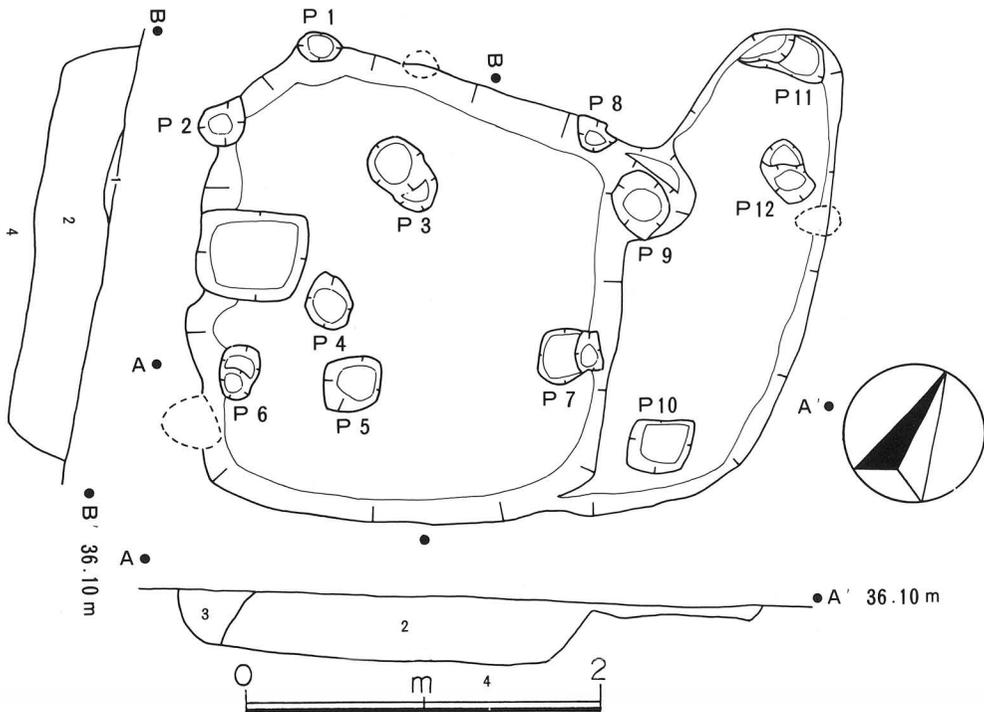
PL. 45 ST145・ST148・ST151(東側から)



PL. 46 ST145覆土出土美濃褐釉小壺



Fig. 44 ST137実測図



28cmで形状は不整形である。長軸方向はN-9°-Wであり、張り出しはみられない。また、遺構に直接付属する柱穴もみあたらないようで、新旧の柱穴が重複している。出土遺物には、美濃灰釉皿1、唐津皿1、溶解物付着土器1、および南東部に古銭15枚が集中した状態でみられた。SB18(旧)SB19(旧)の重複関係があった。

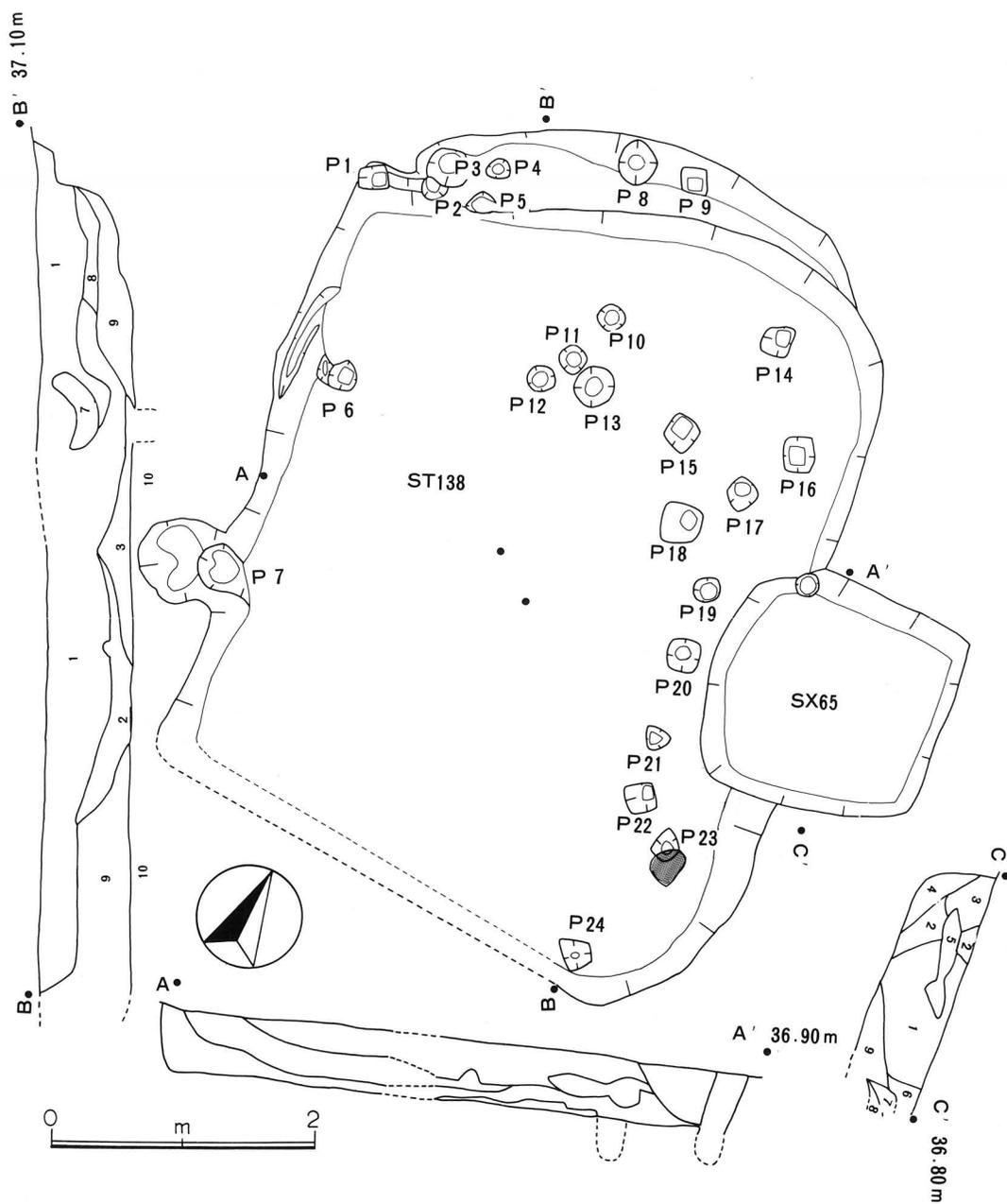
ST148 (PL.45、Fig.52、Ch.47) — I48区検出。長軸270cm、短軸(253)cm、深さ35cmを計り、北壁・東壁はST145に切られ消滅している。南側に壁溝を有するスロープの張り出しを有し、S-5°-Eの方向を向く。柱穴配置は、Pit9~Pit15まで、東壁中央が消滅しているものの、2間×2間の配置と考えられる。出土遺物としては、白磁皿1、溶解物付着土器1、鉄釘2があった。SB18(新)、SB19(新旧不明)、ST145(新)の重複関係がある。

ST149—M53区検出であるが、未調査。

ST150 (PL.45、Fig.52、Ch.47) — I48区検出。長軸(205)cm、短軸175cm、深さ45cm、南側に舌状スロープの張り出しを有し、その方向はS-7°-Eである。柱穴はみられない。出土遺物には青磁1、白磁1、美濃灰釉皿1、天目1、鉄釘2があり、ST145(新)、SB18(新旧不明)ST151(新旧不明)の重複がみられた。

ST151 (PL.45、Fig.52、Ch.47) — I48・49区検出。長軸385cm、短軸365cm、深さ15cm、長軸方向はE-3°-Nである。北側と西側に床面と同じレベルの張り出しが存在するが、出入

Fig. 45 ST138・SX65実測図



口であるか不明である。柱穴配置としては、Pit16～Pit22が推定され、南・北壁に3個ずつおよび長軸棟通りに2個存在する形態と考えられる。出土遺物には、青磁1、天目1、唐津1、溶解物付着土器1などがみられ、鉄・銅製品・石製品等はない。ST145（旧）、ST150（新旧不明）、SB18・SB19（新）の重複関係がある。

Fig. 46 ST139実測図

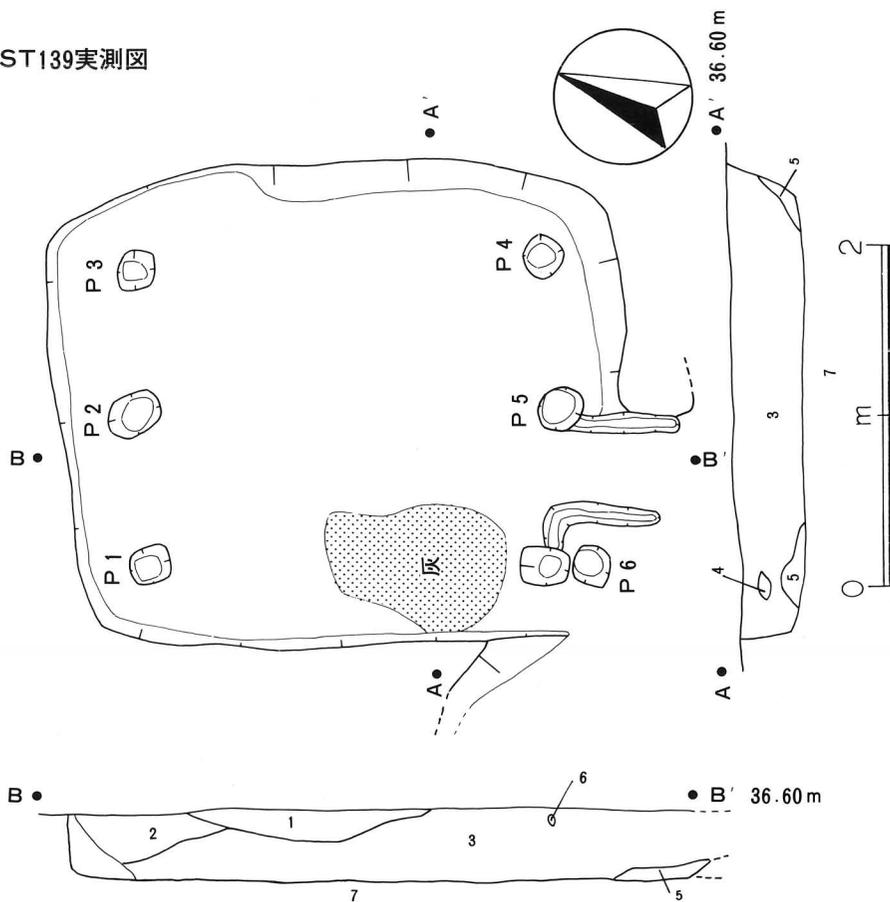


Fig. 47 ST140実測図

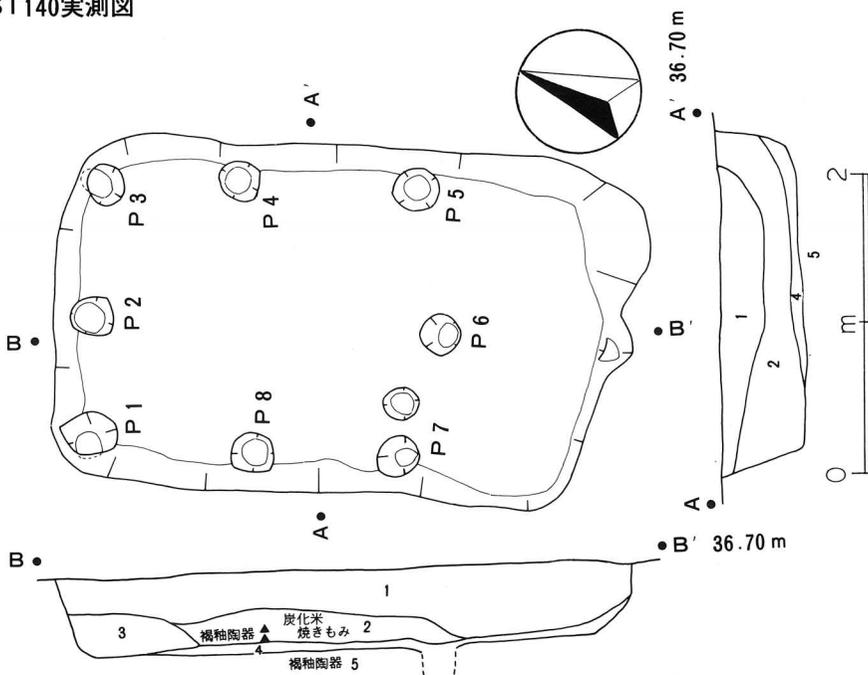


Fig. 48 ST141・SX86実測図

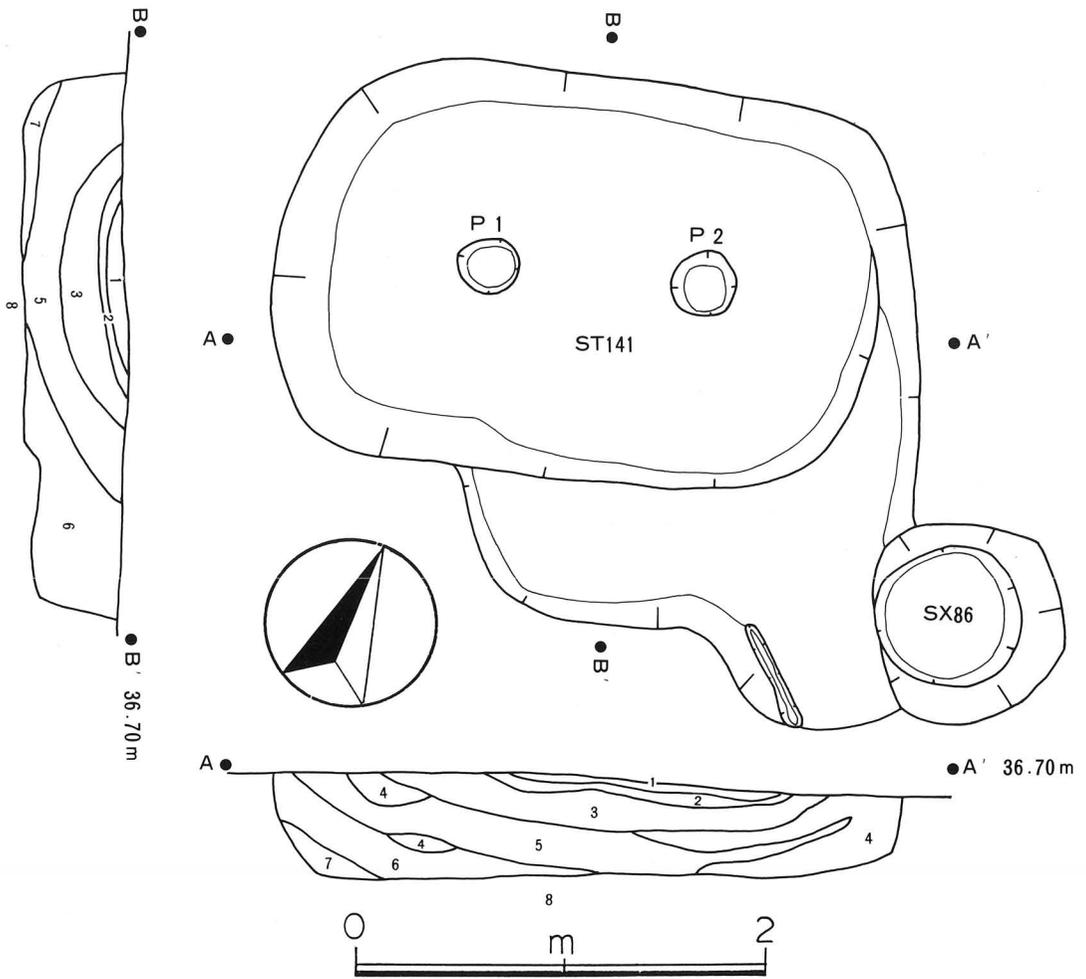


Fig. 49 ST142・ST147実測図

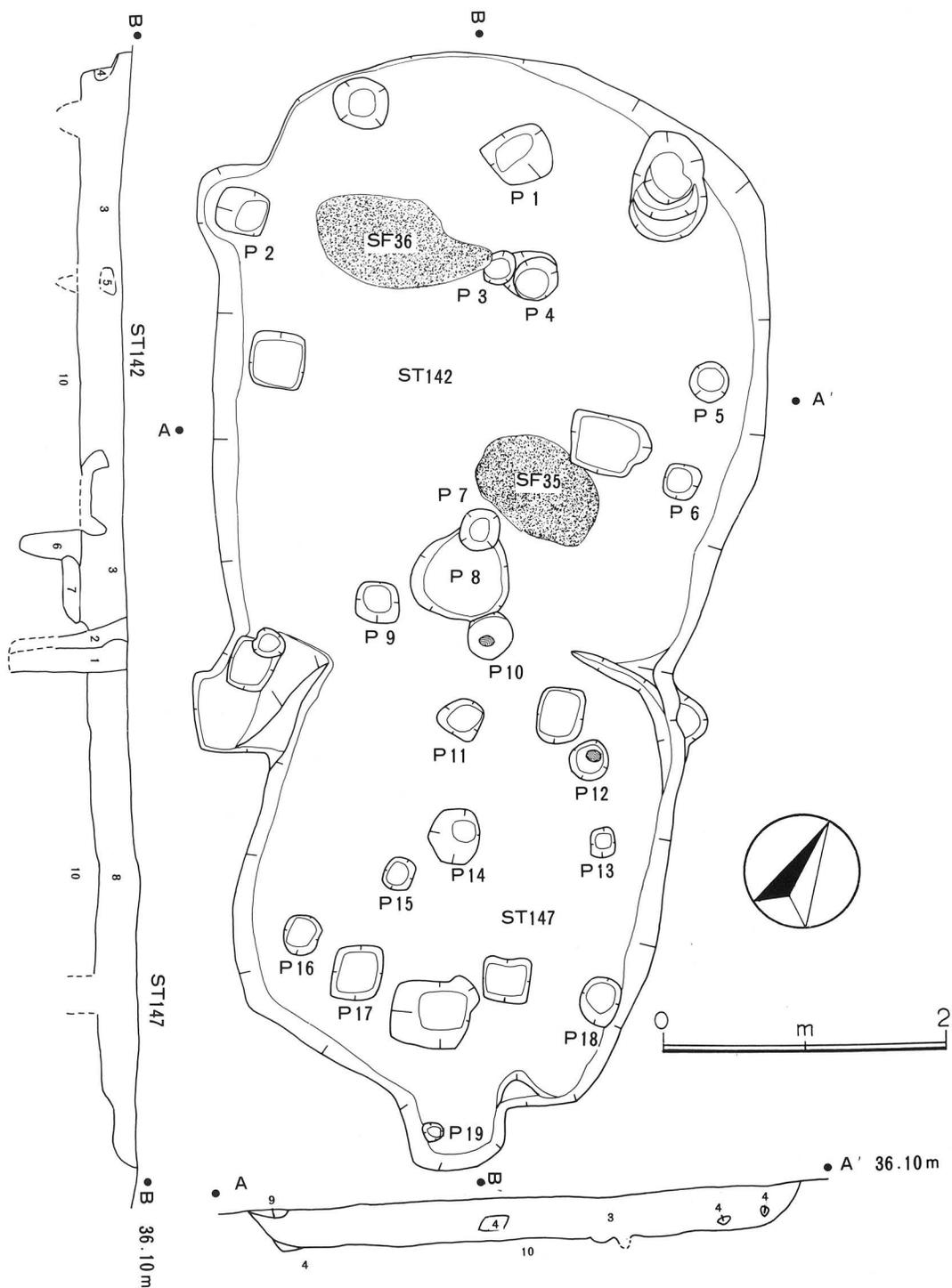


Fig. 50 ST143実測図

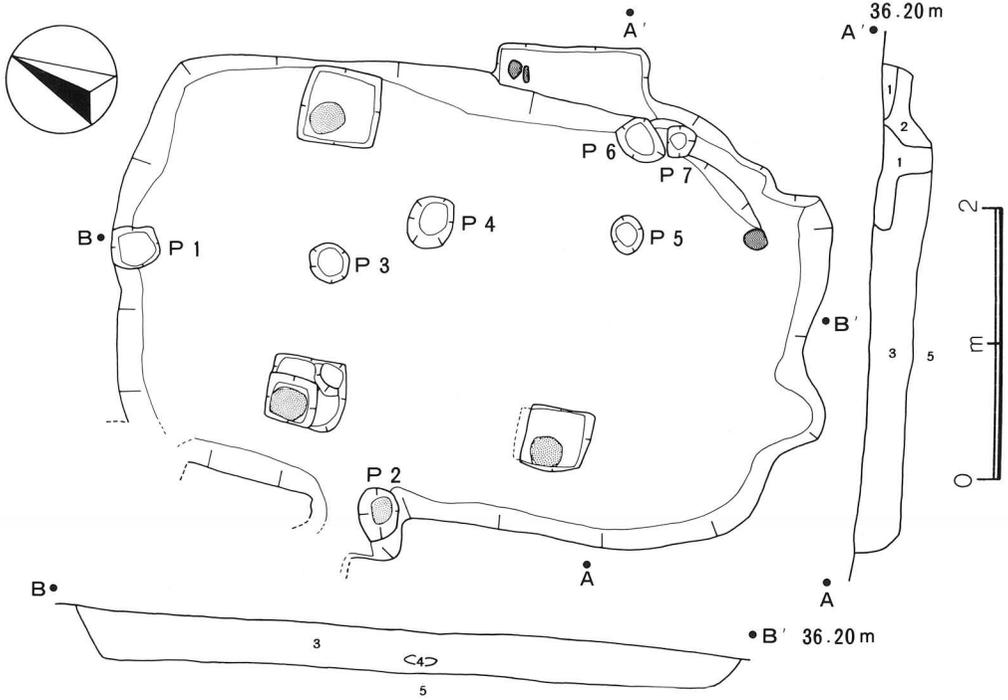


Fig. 51 ST144実測図

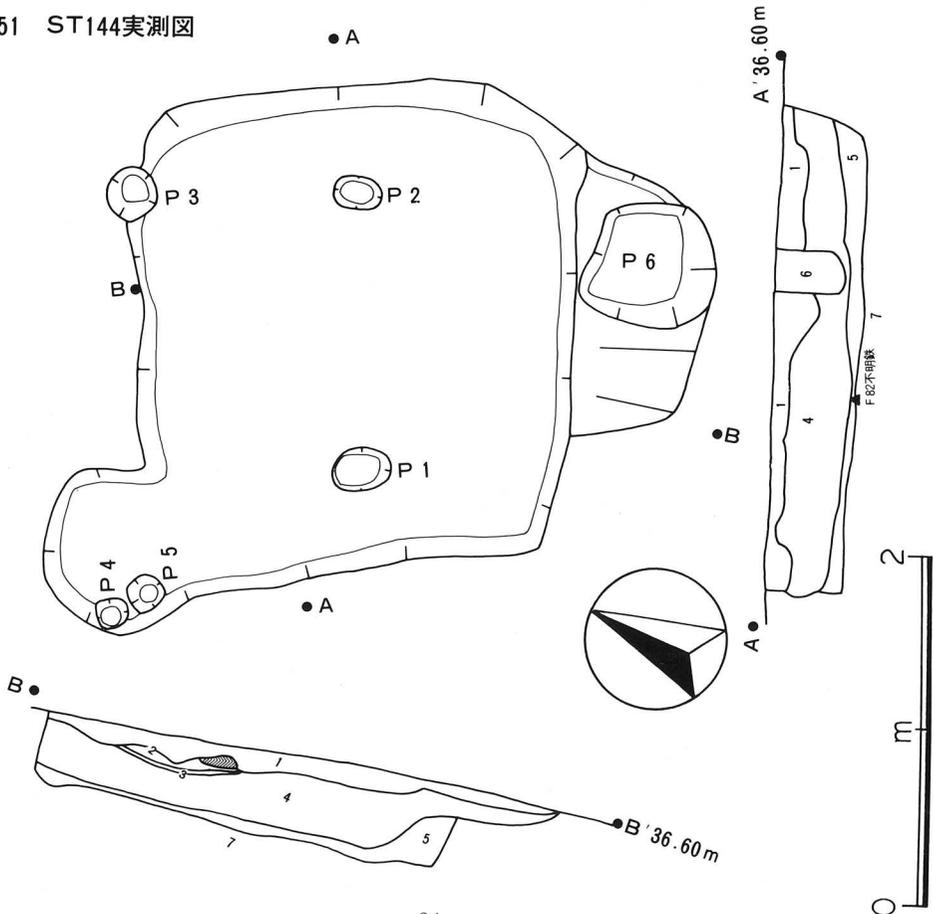
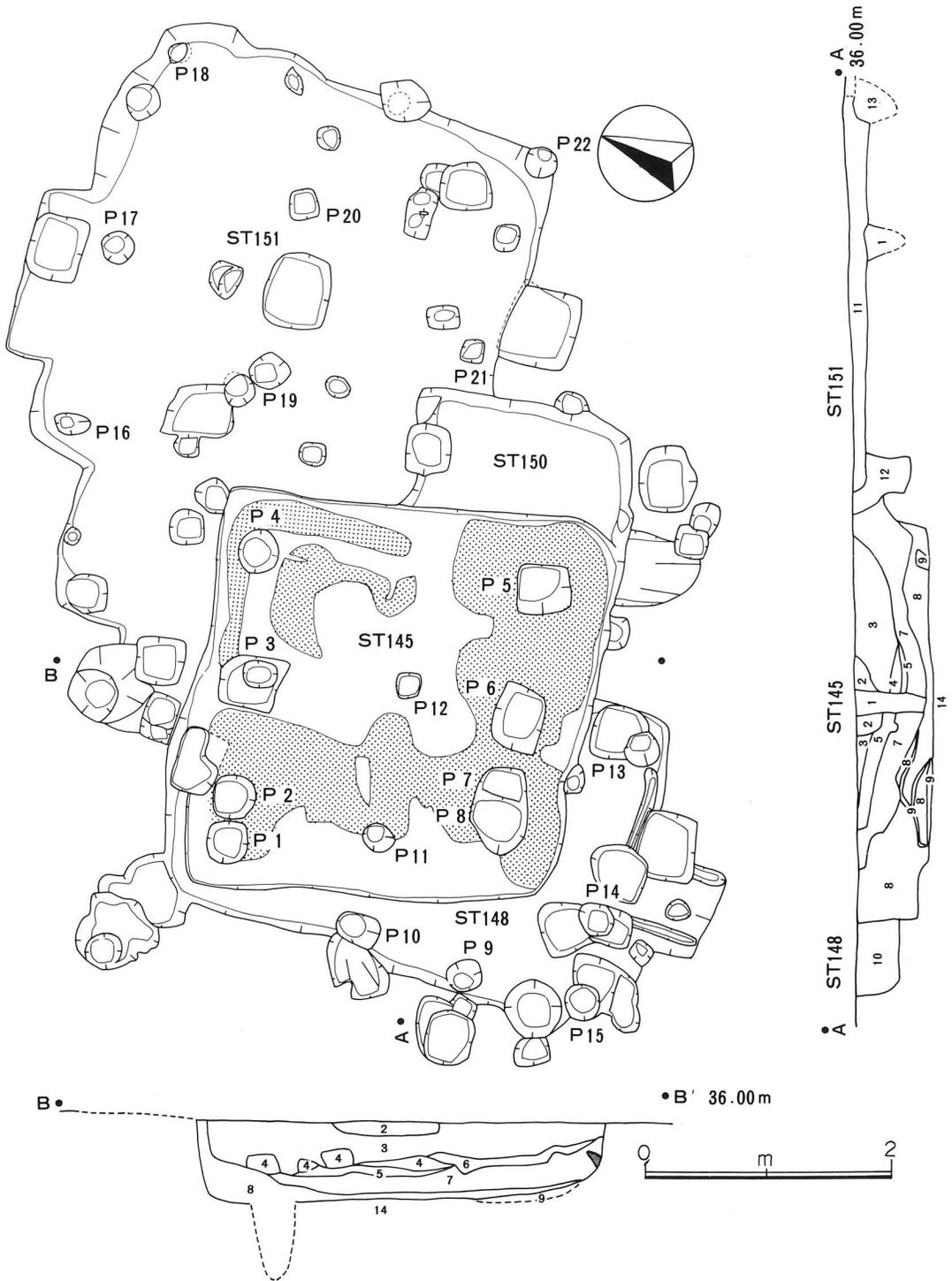


Fig. 52 ST145・ST148・ST150・ST151実測図



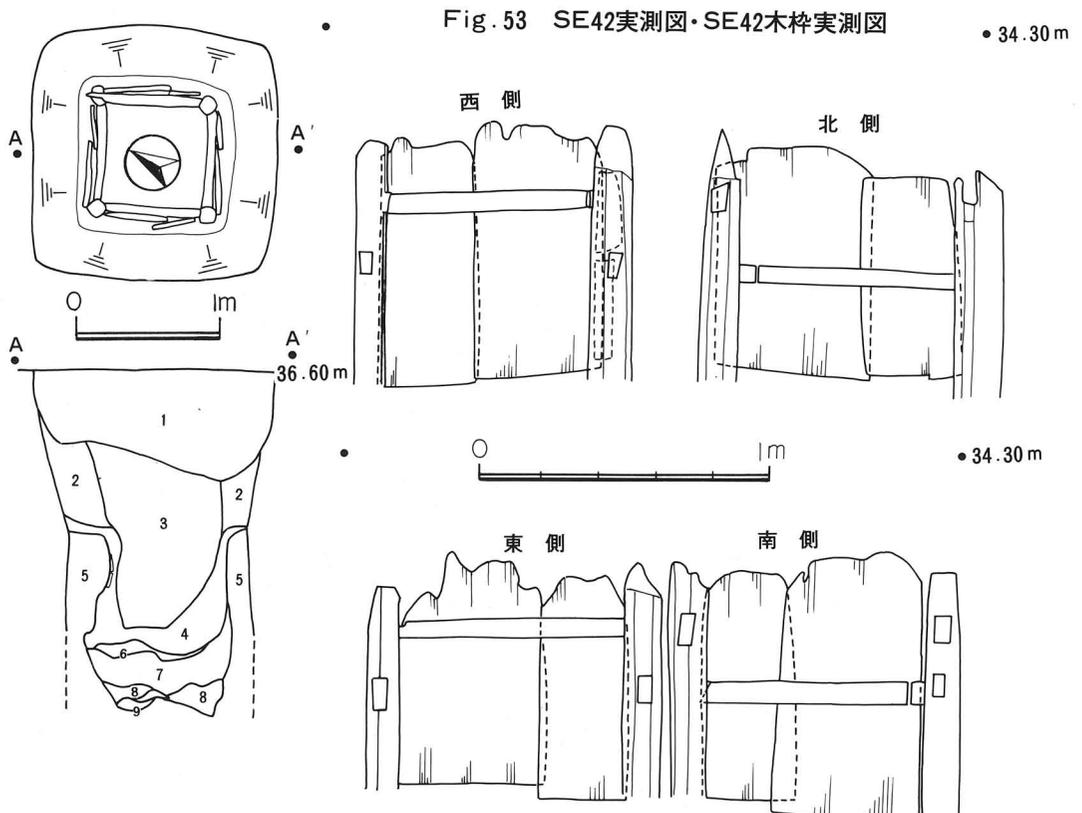
3. 井戸跡

井戸跡には、素掘りのものと木枠を有するものの二形態があり、今回の調査ではSE42とSE51の2基に木枠が認められた。しかし他の井戸跡でも、壁面の崩壊によって最下層まで掘り下げることが不可能であったことから木枠が検出できなかったのではないかと、という認識をもっており、井戸跡の調査がやっかいなものであったことを御理解いただきたい。

SE40 (Fig.55①、Ch.51) —— F52区検出。160cm×150cmの円形を呈し、深さ120cmまで掘り下げた。覆土は、自然堆積の状況を呈し、青磁皿2、同碗1、播鉢2、鉄釘1、古銭3の出土があった。

SE41 (Fig.55②) —— G・H53区を検出。305cm×283cmの円形を呈し、深さ約200cmまで掘り下げたが湧水のため断念した。覆土は、自然堆積および上層部でやや攪乱状況を呈し、黄褐色砂質土が薄く互層をなしていた。出土遺物は、青磁碗5、同皿1、白磁皿1、染付皿1、美濃灰釉皿2、瓦器火舎1、播鉢2、溶解物付着土器2、須恵器1、鉄釘6、火箸1、小刀1、古銭9があった。

SE42 (PL.47・PL.48・Fig.53・Ch.48) —— I50区検出。177cm×170cmの方形を呈し、深さは約350cmであった。底面から100cm以内の部分に木枠が残存しており、本来であれば上層まで木枠が存在していたであろうことが覆土層序から認識できる。木枠は、隅柱横棧型で、隅柱間の長さ80~90cm、各辺に2枚ずつ側板を土圧で固定している。前年度まで検出されている木枠



PL.47 SE42発掘状況



PL.48 SE42木枠出土状態

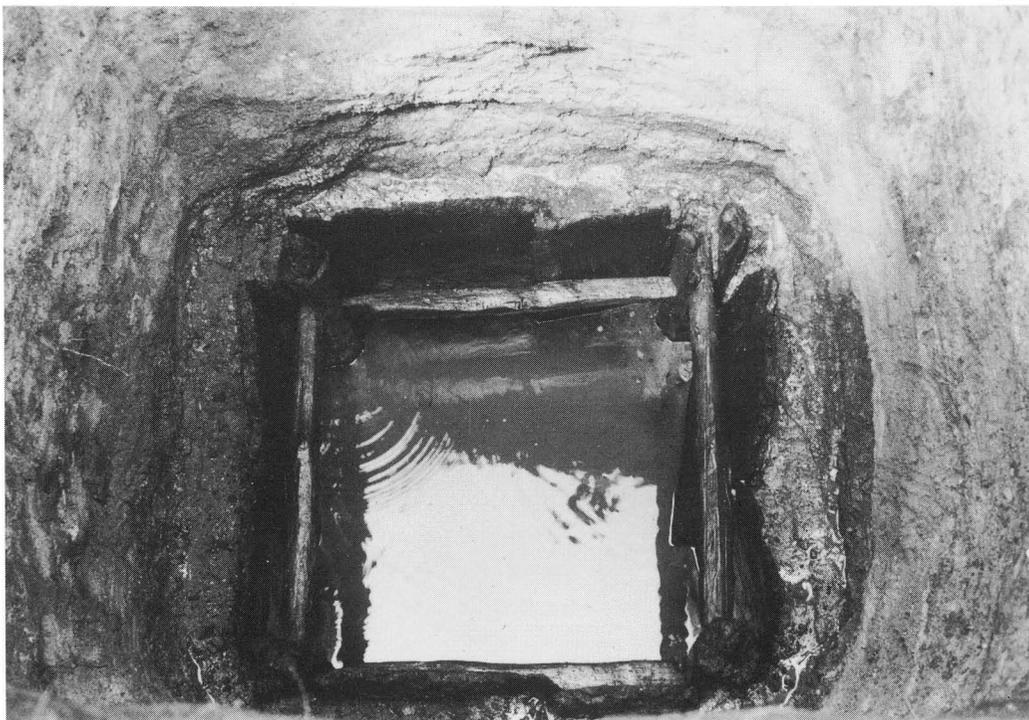


Fig. 54 SE43・SE46実測図

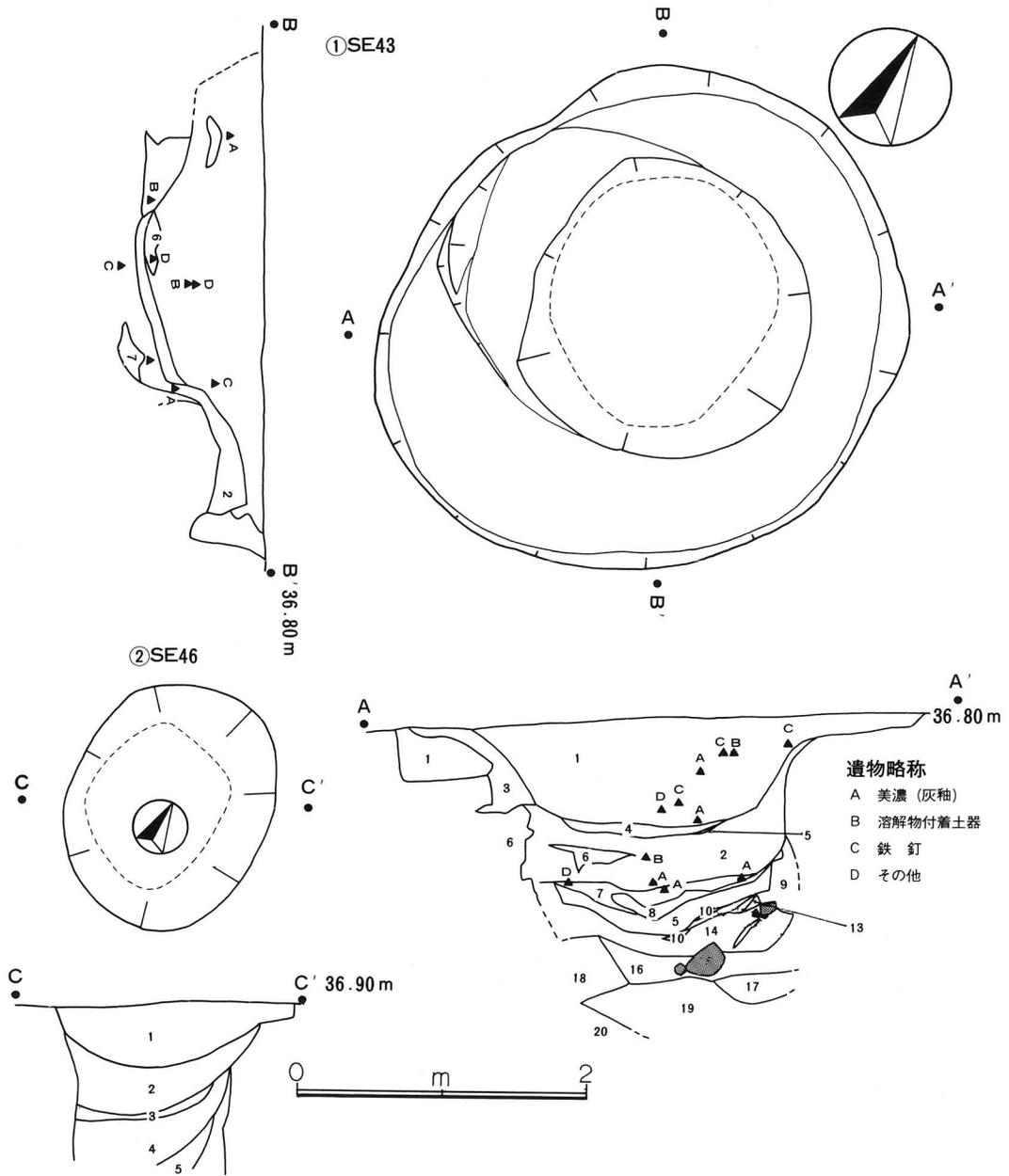


Fig. 55 SE40・SE41・SE44・SE45実測図

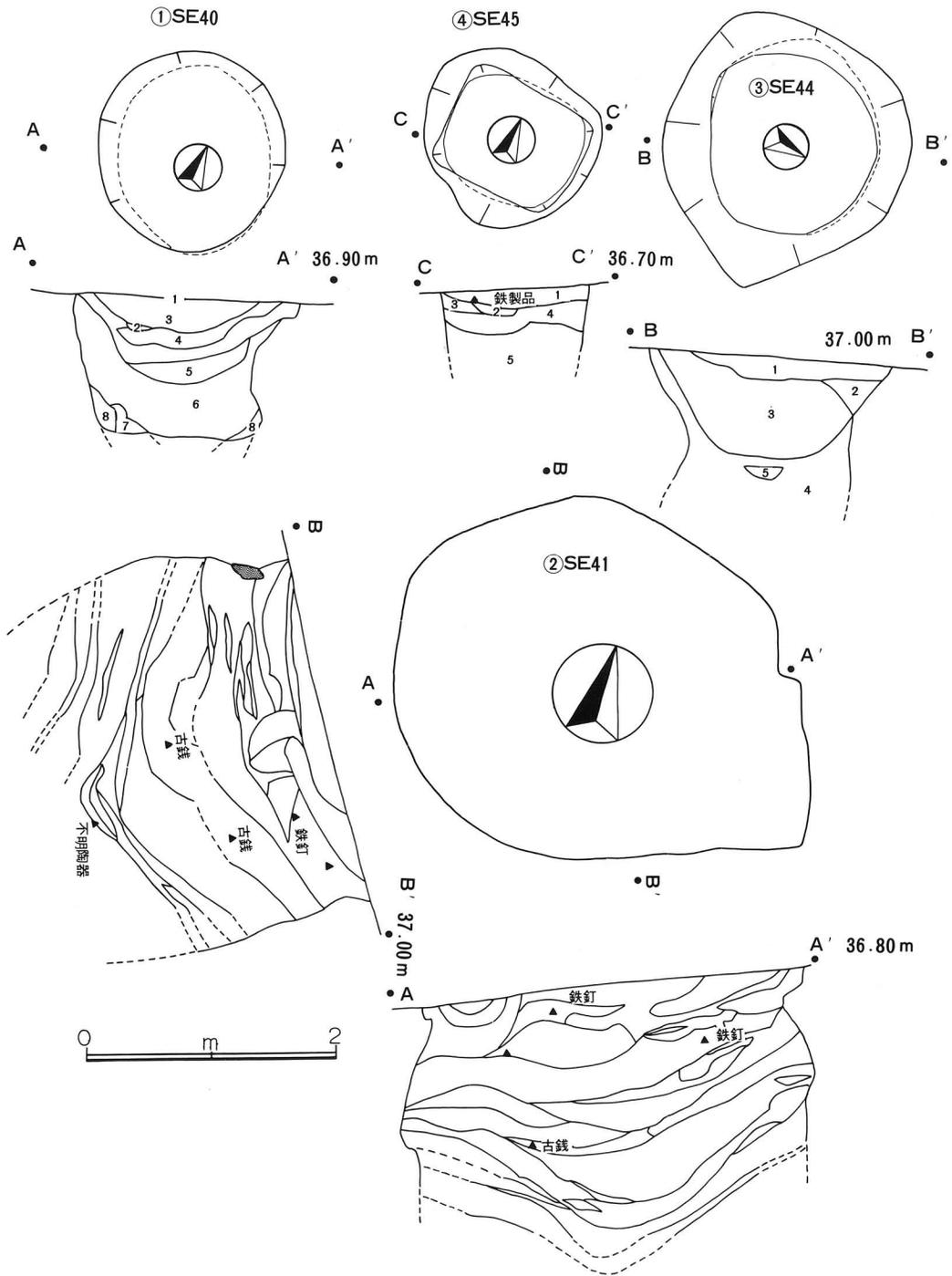
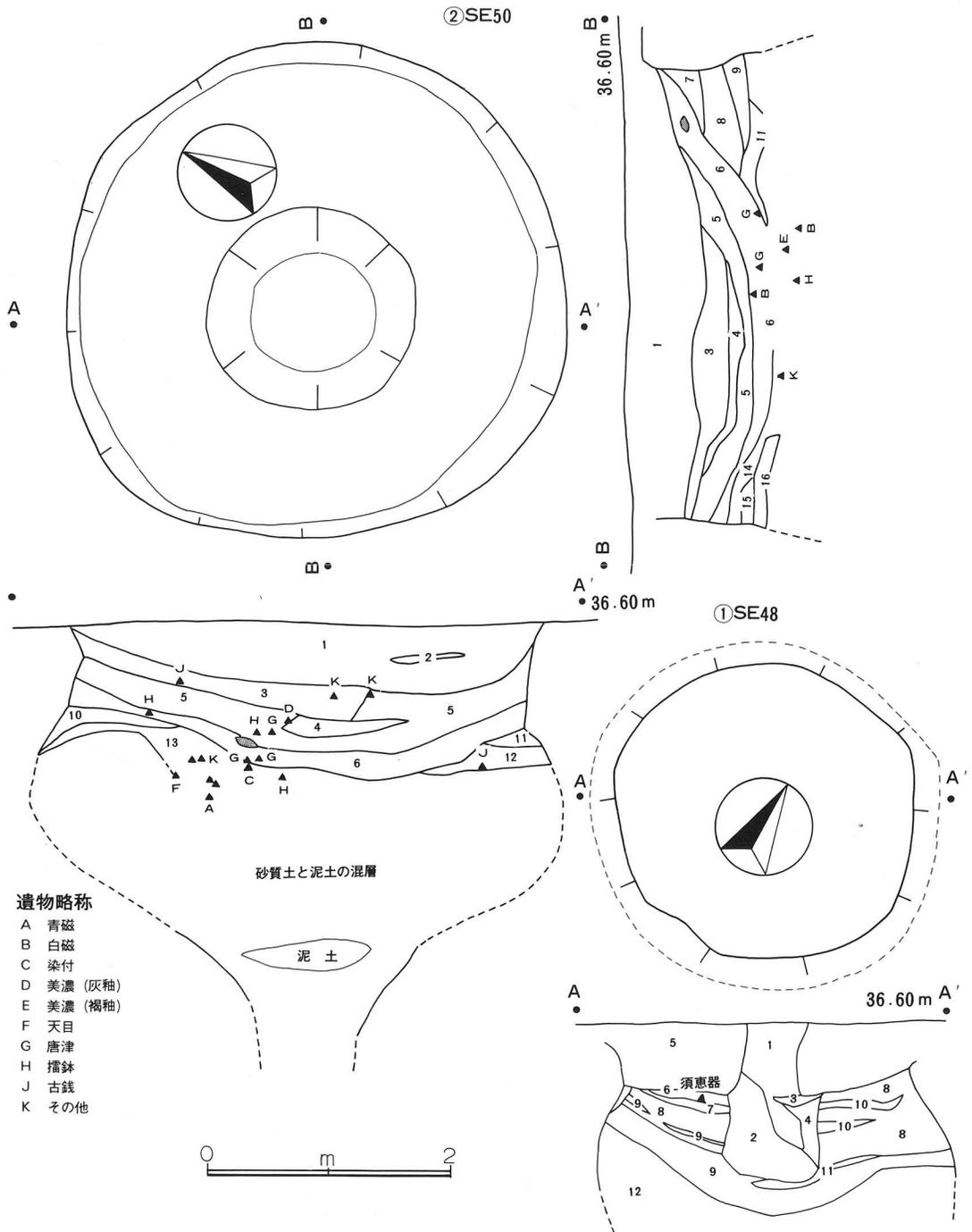


Fig. 56 SE48・SE50実測図



PL.49 SE43遺物出土状態



と同様の構築である。出土遺物には、染付皿2、美濃灰釉皿4、溶解物付着土器1、鉄釘2があり、出土数は少ない。

SE43 (PL.49・Fig.54①・Ch.49) —— I 52区検出。掘り方上端で365cm×356cm、落ち込み幅210cm×200cmの円形を呈し、深さは約200cmまで確認したが、壁面の崩壊が激しく掘り下げを断念した。覆土は自然堆積の状況を示し、深さ100cm以内で多数の出土遺物があった。青磁碗2、同皿2、白磁皿5、同小坏2、染付皿6、美濃灰釉皿37、同碗1、美濃褐釉皿1、播鉢16、溶解物付着土器11、瓦器1、鉄釘12、小刀1、小札1、火箸1、鉄鍋1、古銭7、石臼1、砥石1である。

SE (Fig.55③・Ch.52) —— J 53区検出。210cm×195cmの円形を呈し、深さ110cmまで掘り下げた。出土遺物は、青磁碗7、同皿4、同香炉1、美濃灰釉皿1、同褐釉皿1、瓦器火舎5、溶解物付着土器1、須恵器坏1、鉄釘3、小柄1、古銭4である。

SE45 (Fig.55④・Ch.53) —— H52区検出。SX73が変更。140cm×130cmのやや方形に近い掘り方をしており、深さは約60cmまで掘り下げた。出土遺物には、美濃灰釉皿1、播鉢3、溶解物付着土器2、羽口1がある。

SE46 (Fig.54②・Ch.50) —— J・K53区検出。170cm×125cmの楕円状を呈し、深さは約80cmまで掘り下げた。出土遺物には、播鉢1、溶解物1、元祐通宝1がある。



SE 47—H50区検出。水道管がみられ、現代のものであったため掘り下げなかった。

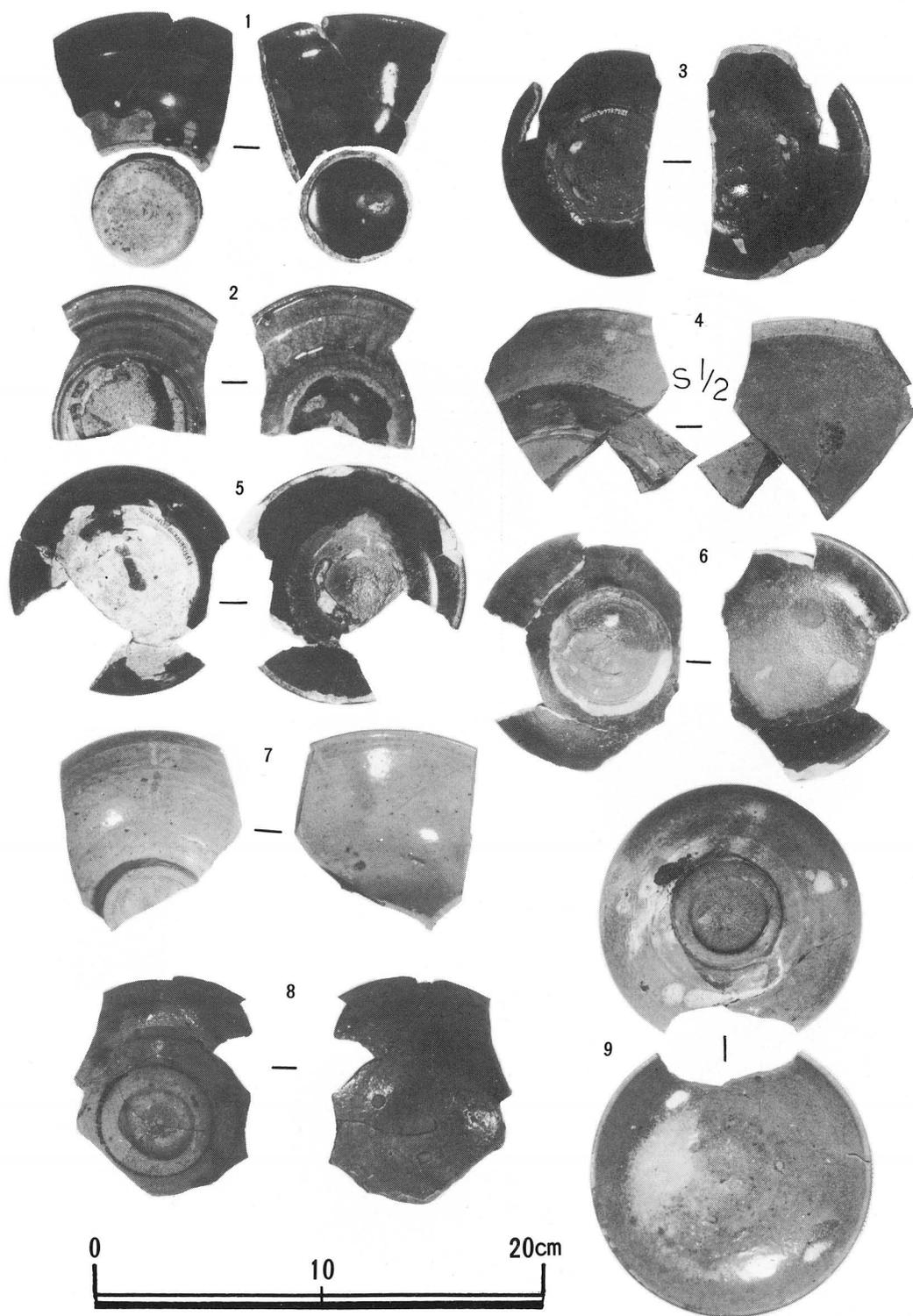
SE 48 (Fig. 56①、Ch. 54) —G51区検出。240×235cmの円形を呈し、深さは約180cmまで掘り下げた。覆土層は、中央に木柁残存痕と推定される土質も存在したが、湧水が激しく確認できる地点までゆかなかった。出土遺物には、青磁3、白磁皿1、染付皿1、美濃灰釉皿2、播鉢1、溶解物付着土器1、須恵器坏3、土師器片、鉄釘2、小柄1、古銭2がある。

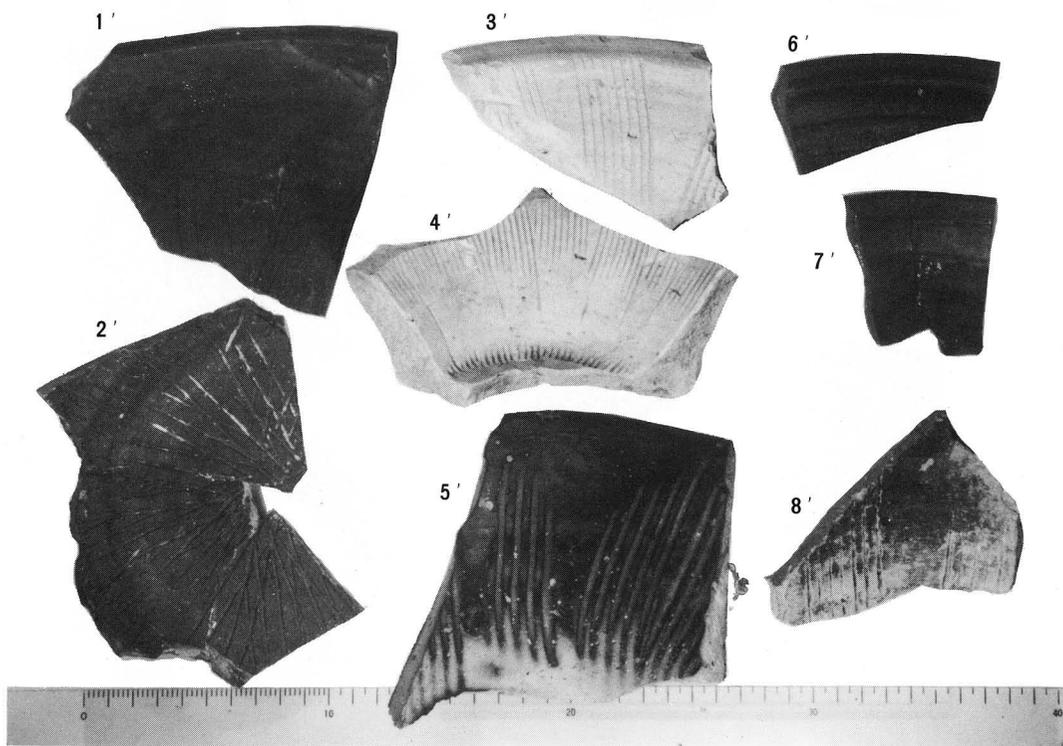
SE 49—J 48区検出。未調査の部分が多く、次年度で報告予定。

SE 50 (PL. 50・PL. 51・PL. 52・Fig. 56②・Ch. 55・Ch. 56・Ch. 57) —F・G51区検出。410cm×400cmの円形、深さは約350cmまゝ掘り下げたが底まで達することはできなかった。深さ200cm前後の地点で湧水が激しく、土砂が泥状になってしまったが、中央部分で径160cmの再落ち込みを確認した。覆土は、自然堆積を呈すると思われるが詳細は不明である。

本遺構から出土した陶磁を検討すると、その組み合わせに特徴が認められる。つまり、青磁・白磁・染付などの舶載陶磁はすべて破片で出土し、埋土に混入した可能性が高いが、美濃灰釉・同褐釉・黄瀬戸手・天目・唐津・備前系播鉢などの国産陶器が一括して出土したことは、使用陶磁の組み合わせと陶器から推定される城館の廃絶時期を考える時に、重要な資料として活用できる。以下、詳細を述べる。

(SE 50出土陶器) (PL. 51・PL. 52・他)

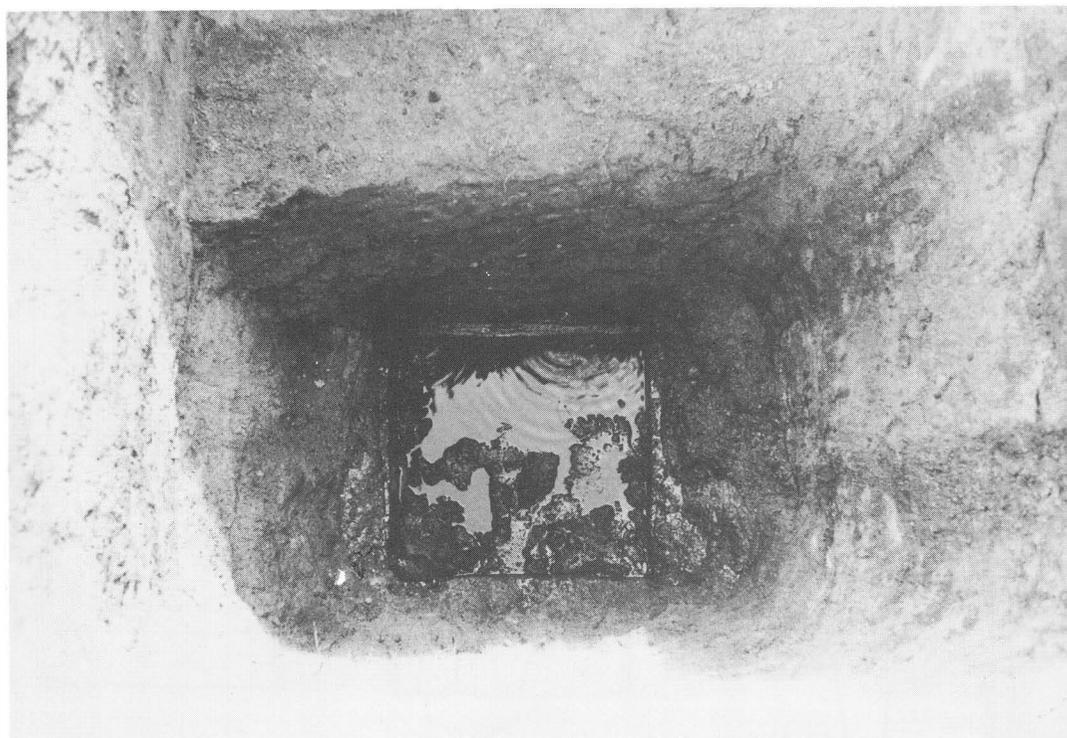




PL. 53 SE51発掘状況



PL. 54 SE51木柩出土状態



PL. 55 SE51 完掘状況

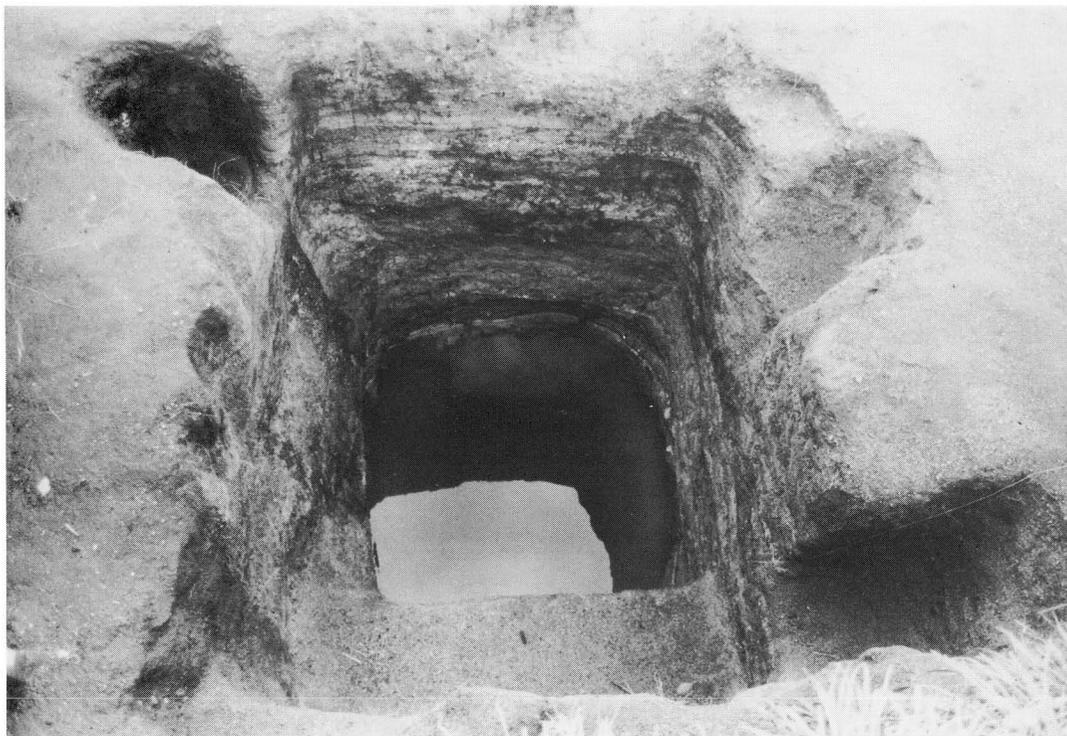
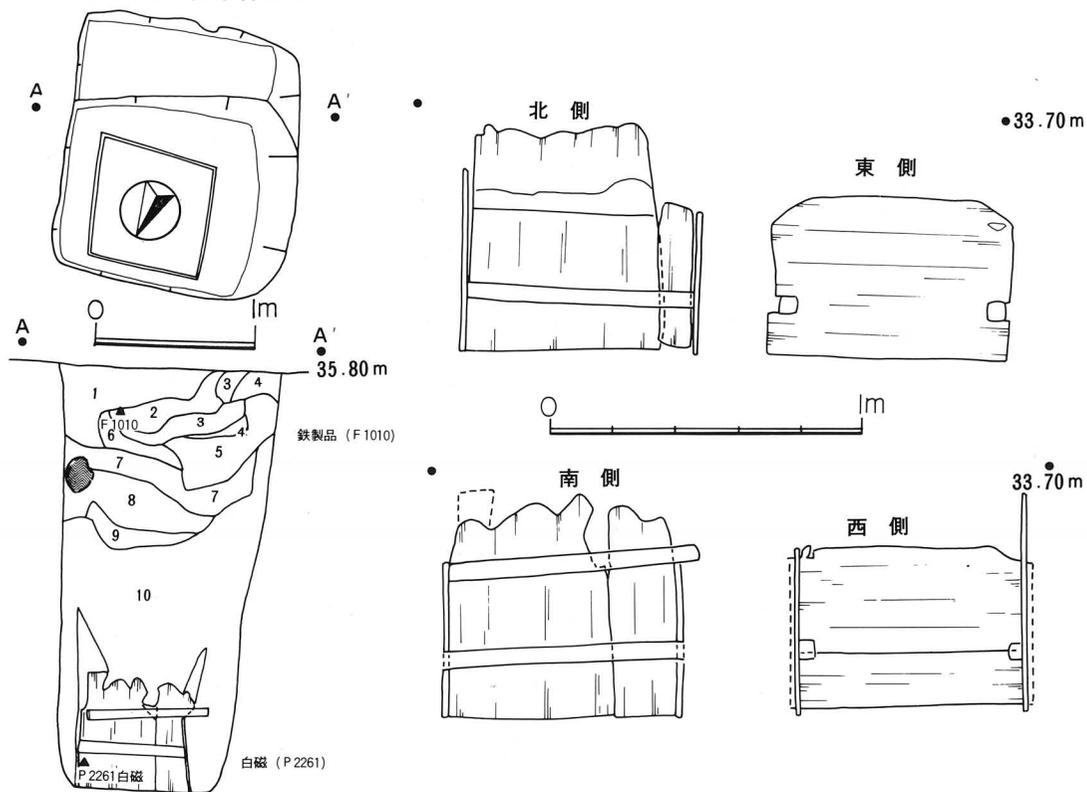


Fig. 57 SE51実測図・
SE51木柩実測図





美濃窯の製品として、天目碗 (PL.51No.1)、灰釉折縁ヒダ皿 (PL.51No.2)、褐釉皿 (PL.51No.3・5・6)、黄瀬戸手大皿 (PL.51No.4) が存在し、唐津窯としては灰釉碗 (PL.51No.7) と灰釉皿 (PL.51No.8・9) および絵唐津皿の破片2点 (PL.77No.114・115)、舶載品としては染付皿 (PL.70No.57・PL.71No.65) と青白磁小坏 (PL.73No.81) が存在し饗膳具の中でセット関係を有する。

一方出土播鉢は、おそらく唐津系のものと推定されるもの (PL.52No.1・2)、越前系 (PL.52No.3・4)、備前系 (PL.52No.6・7・8)、そして産地不詳系 (PL.52No.5・PL.86No.189) の4種が混在している。

以上のような陶磁器の組み合わせは、本年度まで調査した各種の遺構から出土した陶磁器の組み合わせとは異質な印象を受ける。つまり、舶載品が主体を占めていた浪岡城全盛期と違い、染付は口縁内湾形態の皿が若干存在し、美濃折縁ヒダ皿、黄瀬戸手大皿と共に唐津が碗・皿・播鉢という器形が増加する現象を認めることができる。

このことは、全国で行われつつある陶磁器編年で言えば、16世紀後半（おそらく天正年間）安土・桃山期に同定されるところで、浪岡城落城年代と密接な関連がある。仮に、本遺構が落城の時期に廃棄されたとすれば、このような陶磁器の組み合わせは、1578年（天正6年）かあるいは1590年（天正18年）には在地領主の饗膳に供されていたと考えてよいし、逆にこのような

陶磁器の組み合わせが17世紀以降のものとするれば、落城以後も浪岡城が使用されていたと考えられる根拠となりえる。

S E 51 (PL.53・PL.54・PL.55・Fig.57・Ch.58) —— I 48区検出。175cm×150cmの方形の掘り方を呈するが、南側にテラス部分が存在する。深さは275cmで、木枠が検出された。木枠は、隅柱を有せず、棧と側板を柄穴で組み立てる構築方法を取り、北・南側は縦位の側板を2枚ずつ配し、東・西側は横位の側板に棧を入れる柄穴を穿った状態で検出された。土圧による固定と考えられるが、廃棄行為のためか変形して出土した。出土遺物としては、青磁皿1、白磁皿1、唐津皿2、志野皿1、越前甕1、鉄鍋の鉸1などと共に、鍬の柄・下駄・板などの木製品がある。

S E 52 —— I 51・52区検出。全体を調査できなかったが、200cm×180cmの円形、深さ約80cmまで掘り下げた。出土遺物は、青磁皿1、染付皿1、美濃灰釉皿1があった。

S E 53 —— J 52区検出。175cm×170cmの円形で、掘り下げはおこなわなかった。

S E 54 —— K 52区検出。140cm×130cmの円形、深さ130cmまで掘り下げたが、出土遺物はなかった。

S E 55 (PL.56) —— F 53区検出。200cm×180cmの不整形円形で、深さ248cmであった。底面近くに木枠の残存痕が検出され、四角な落ち込み状況を呈した。溶解物付着土器が1片出土。

S E 56 —— F 53区検出。240cm×225cmの円形で、約40cmほど掘り下げたが青磁皿1片の出土があった。

S E 57 —— G 53区検出。200cm×195cmの円形、60cmの掘り下げをおこなった。出土遺物は青磁碗2、同皿1、染付皿1、天目碗1、須恵器甕1、土師器坏1、火箸1、不明鉄製品5、古銭3である。

S E 58 —— K 52区検出。185cm×180cmの不整形円形、深さ150cmである。出土遺物なし。

S E 59 —— K 52・53区検出。150cm×130cmの不整形円形、深さ120cmである。S E 58とともに出土遺物はみられず、深さも浅いことから水溜め機能をもった遺構と推定される。

4. 溝跡 (Fig. 4・5・6)

溝跡の中では、城館期のもつそれ以前のもつが存在し、後者は出土遺物がつ土師器・須恵器に限えられる状況がみられる。しかし、それらの遺構も、城館期の地業および近代・現代の攪乱によって明確な範囲を確認することは難しい。

S D31——G・H52・53区検出。幅約60cm、深さ25cmで南北方向720cm、東西方向400cmに「L」字状に走る。出土遺物は、青磁皿2、美濃灰釉皿1の他土師器・須恵器があった。

S D32 (PL.57・PL.58) ——H・I 50区検出。幅約200cm、深さ約70cmで南北方向に走る。覆土は自然堆積の状況を呈し(Fig. 7参照)、床面直上および覆土全般から、須恵器甕、土師器坏の出土が顕著であった。(PL.58) この溝は傾斜が南から北へ向っており、H50区の部分で段差を有している。出土遺物がつ土師器坏 (PL.90No.251・252・253・258) などを主体とするところから古代の構築と認定できる。

S D33——I・J・51・52区検出。大部分はS T102に切られて消滅しているが、残存部は最大幅140cm、深さ35cmを呈し南北方向に走る。またこの部分と連続して馬蹄状に伸びる部分がS E43の南側で確認されている。出土遺物には、土師器坏などがある。

S D34——欠番

S D35——欠番

S D36——H50・51・52・53検出。昭和55年度調査のS D22と連続するもので、幅80~100cm、深さ10~15cm前後である。東西方向に約30mの長さで走り、屋敷割り等に関連するものであるうか。出土遺物は、褐釉を施した陶器が1点あるが、構築時期を決定するまでには至らなかった。

S D37——K・L52・53区検出。幅80cm、深さ20cmで南北方向に走る。青磁皿1、白磁皿2の出土があった。

S D38——H52.53区検出。昭和55年度調査のS D21に連続する。東西方向、S D36と並行して走るが西側部分で不鮮明に消滅する。幅50cm、深さ約10cmであり出土遺物はない。

S D39——欠番

S D40——J・K52区検出。幅270~150cm、深さ約40cmで馬蹄状を呈すると推定される。時期的に新しい柱穴との重複が激しく、一部攪乱部分もあったため、青磁皿1、白磁皿1、須恵器甕2、鋳型2の出土遺物が混在していた。

S D41——K52区検出。幅50cm、深さ約20cm、全形は不明である。出土遺物には青磁碗1、天目碗1、播鉢1の出土があった。

S D42~44——欠番

S D45——F53区検出。幅35cm、深さ約25cm、南北方向に走るが、両端は不明である。出土遺物には青磁碗3、播鉢1、不明陶器2がある。

S D46——欠番

S D47——H・I 49区検出。幅約50cm、深さ約25cm、南北方向に走る。北側は西にカーブして伸びてゆくようであり、西側に存在するS B17等の遺構と関連するのであろうか。出土遺物には美濃灰釉皿1、不明磁器1があった。

S D48——H49区検出。幅70cm、深さ20cmで東西に走る。未調査の部分が多い。出土遺物はなかった。

S D49～51——欠番

S D52——F・G51区検出。幅40cm、深さ約50cmで南北方向に約6mの長さで走る。播鉢1、床面から鉄鎌が1点出土している。

以上の他に、昭和55年度調査区から連続するものとして、S D09(G53区)、S D16(K53区)、S D20(FG53区)が存在する。

PL.57 SD32(北側から)



PL.58 SD32土師器・須恵器出土状態



5. その他の遺構

本遺構群の略称はSXであるが、掘り始めの段階でSXの略称を使用しても後にSTやSEに変更したのも多く、欠番が多くなっているのはそのためである。

SX50・51——欠番

SX52 (PL.59・Fig.58①・Ch.59) ——M53区検出。410cm×410cmの方形を呈し、深さ35cm。北側に攪乱の痕跡がある。覆土は自然堆積の状況を呈し、その中から白磁皿1、青磁皿1、美濃灰釉皿1、溶解物付着土器1、播鉢(PL.81No.149)、鉄釘2、火箸1、銅滓1が出土している。

SX53 (Fig.58②・Ch.60) ——E53区検出。長さ370cm+ α cm、幅100cm、深さ37cmで、溝状を呈する。出土遺物には、染付皿2、播鉢1、溶解物付着土器1などがある。

SX54・SX55——D53区検出。精査が不徹底のため範囲は明確にできなかったが、鋸歯文を有する弥生土器片が数点出土した。

SX56 (Fig.59①・Ch.61) ——F52区検出。210cm×200cmの方形を呈し、深さ25cmである。美濃灰釉皿1、播鉢1、馬蹄1の出土があった。

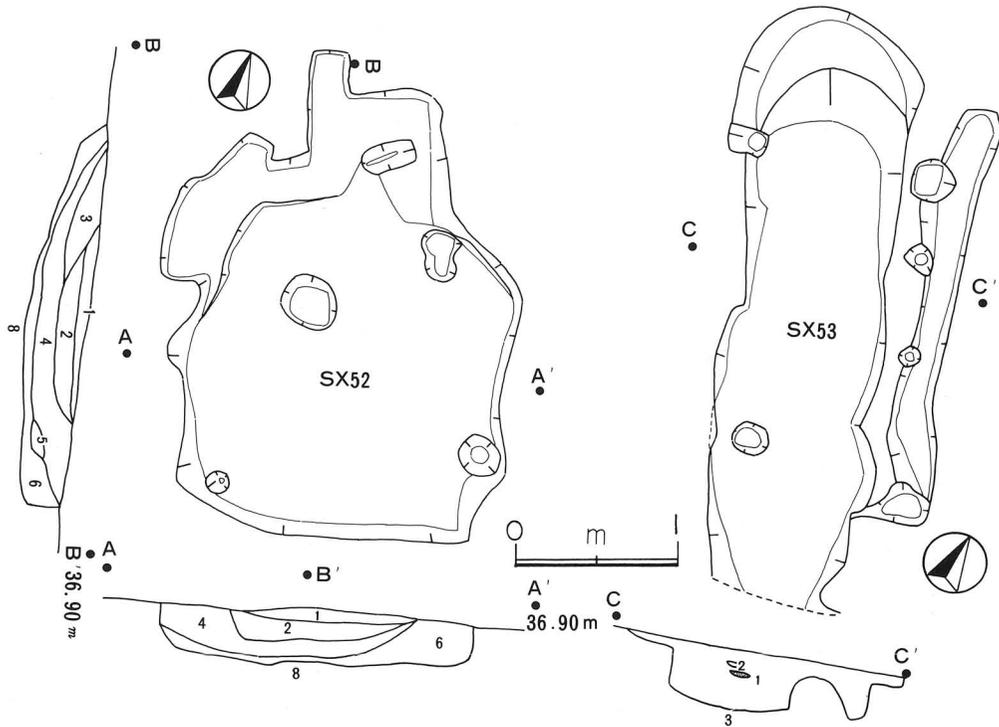
SX57——H53区検出。113cm×90cmの方形を呈し、深さ25cm。唐津皿1、染付小坏1の出土があった。

SX58——F52区検出。270cm×150cmの楕円形を呈し、深さ10cmである。播鉢1の出土。

PL.59 SX52(西側から)



Fig. 58 SX52・SX53実測図



S X 59——H53区検出。範囲は明瞭でないが、上部に粘土貼りの部分が存在する。摺鉢1の出土があった。

S X 60——F53区検出。180cm×145cmの方形を呈し、深さ約25cmである。覆土には灰が多量に含まれ、青磁皿1、瓦器手焙り1、鉄釘2の他に溶解物付着土器が多量に出土している。隣接するS T117と関連する可能性がある。

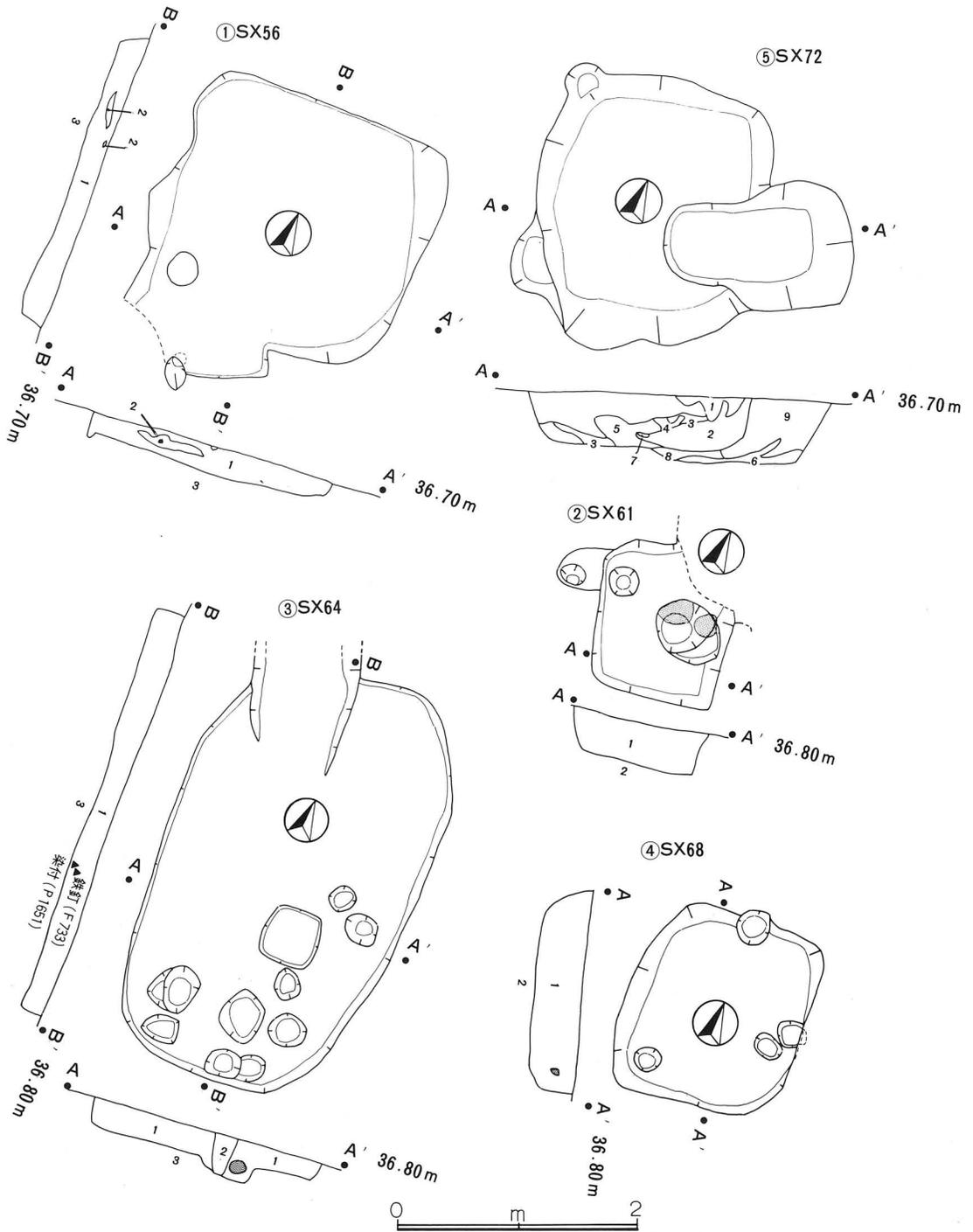
S X 61 (Fig. 59・Ch. 62) ——F・G53区検出。120cm×115cmの方形を呈し、深さ46cm。S T118と重複しており、出土遺物には、青磁皿1、染付皿2、美濃灰釉皿1がある。

S X 62——F53区検出。210cm×110cmの方形、深さ20cm。柱穴と重複していたため、出土遺物が攪乱された状態で出土し、青磁碗2、同皿1、染付皿1、摺鉢1、瓦器1、溶解物1、溶解物付着土器1があった。

S X 63——G52区検出。60cm×55cmの方形を呈し、深さ15cm。青磁碗1、白磁皿1、摺鉢1、須恵器壺1が出土している。

S X 64 (Fig. 59・Ch. 63) ——365cm×220cmの長円形を呈し、深さ24cm。北側でS D33 (旧)と重複している。出土遺物には、青磁碗1、染付皿2、美濃灰釉皿1、珠洲系壺1、鉄釘1、古銭3があった。

Fig. 59 SX56・SX61・SX64・SX68・SX72実測図



S X 65 (Fig. 45・Ch. 40) ——185cm×180cmの方形を呈し、深さ57cm。S T 138と重複。出土遺物として、青磁皿2、染付2、美濃褐釉皿1、同天目碗1、小刀1、小札1がある。

S X 66——S E 44に変更。

S X 67 (PL. 35・Fig. 41・Ch. 36) ——I 51区検出。長軸(270)cm、短軸(250)cm、深さ49cmの竪穴遺構であることを確認した。東側に張り出しらしい痕跡を有するが明確でない。柱穴配置は、Pit 1～Pit 8、あるいはPit 13が付属するものと考えられ、上屋の存在を推定できる。

S T 134(新)に切られているものの、美濃灰釉皿1、溶解物付着土器1、の出土があった。

S X 68 (Fig. 59・Ch. 64) ——I 51区検出。165cm×150cmの方形を呈し、深さ38cm。出土遺物には播鉢1、無釉鉢1、美濃灰釉皿1がある。

S X 69——G 52区検出。128cm×120cmの円形を呈する遺構。井戸あるいは水溜めの機能を有すると考えられるが、掘り下げなかったため出土遺物もない。

S X 70——S D 33に変更。

S X 71 (Fig. 37・Fig. 38・Ch. 33) ——K 52・53区検出。180cm×(185)cmの方形、深さ32cmである。S T 130・S T 131と重複していたため遺物も混在していた。白磁皿1、越前甕1、鉄釘2、火打石1が出土している。

S X 72 (Fig. 59・Ch. 65) ——H 52区検出。220cm×185cmの方形、深さ45cmであるが、東側に160cm×110cm、深さ55cmの長方形を呈する落ち込みが重複している。覆土は人為堆積を呈しその中から染付皿1、美濃灰釉皿1が出土している。

S X 73——S E 45に変更。

S X 74 (PL. 29・Fig. 32) ——H・I 52区検出。215cm×174cmの方形、深さ42cmを計る。南壁に接する状態で長径40cmの川原石が出土し、重複しているS T 121と同様の覆土堆積をしている。出土遺物には、染付皿1、美濃灰釉皿1、鉄釘3、鉄鍋1などがある。

S X 75——S E 51に変更。

S X 76——M 53区検出。200cm×(180)cmの方形を呈し、深さ15cmである。溶解物付着土器1が出土している。

S X 77——M 53区検出。未調査。

S X 78——K・L 53区検出。155cm×145cmの方形を呈し、深さ約50cm(上端がS D 16に切られているための推定)である。覆土内に焼土の部分(S F 24)が存在し出土遺物には青磁碗1、同皿1、白磁小坏1、美濃灰釉皿1、越前甕1、溶解物付着土器1、小札1、鉄鍋4、鉄鎌1などがある。

S X 79 (Fig. 60) ——K 52区検出。205cm×125cmの不整形を呈し、深さ約40cmである。白磁皿1、越前甕2、播鉢1が出土している。

S X 80 (PL. 60・Fig. 60・Ch. 66) ——K・L 52区検出。350cm×325cmの方形の掘り込みに、

PL.60 S X 80(北側から)



川原石が敷かれた状態で検出した。石は川原石を使用し、10cm以外の小さいものが292個存在した。床面に接するものが多いけれども、約50個は浮いた状態になっている。覆土は粘質土が多く、全体にしまりがあって、竪穴の柱穴はすべて敷石より古い構築のものであった。出土遺物としては、青磁碗2、同皿1、白磁皿1、染付皿1、美濃灰釉皿1、同褐釉皿1、播鉢1、小札2、鉄釘1、鉄鍋1、不明銅製品2がある。

S X 81 (PL.61) —— K52区検出。未調査の部分が多く、全形はわからないが土師器・須恵器を多量に出土した。

S X 82 —— H48区検出。完掘できなかつたため全形はわからない。越前甕が1片出土した。

S X 83 —— F53区検出。165cm×110cmの方形、深さ80cmを計った。青磁碗6、染付碗1、同皿1、美濃灰釉皿2、瓦器1、溶解物付着土器3、小札1、火箸2、鉄釘5、古銭8の出土遺物があった。

S X 84 —— I・J52区検出。(200)cm×100cmの長方形を呈し、深さ45cmである。遺物なし。

S X 85 —— G・H51区検出。当初竪穴遺構と考えて掘り込んだが、壁面および柱穴等を発見することができず、若干の土師器・須恵器の出土があっただけである。そして古代の遺構であることから掘り下げを中断した。

S X 86 (PL.61) —— H51区検出。100cm×90cmの円形、深さ130cmを計る。須恵器甕の破片が

多数出土したが、全体の1/5程度しか残存していなかった。

S X 87—— I 51区検出。径約130cmを呈し、深さ110cmを計る。出土遺物はない。

S X 88 (Fig. 61・Ch. 67) —S T 103の南壁から南側にスロープを呈する粘土貼り遺構である。粘土範囲は160cm×150cmの方形を呈するが、かまどなどの炊事遺構でないことは、下層に焼土痕がないことから明白である。隣接するS T 117との関連も考えなければならぬだろう。

PL. 61 土師器・須恵器を出土する遺構

S X 81



S X 86



Fig. 60 SX79・SX80実測図

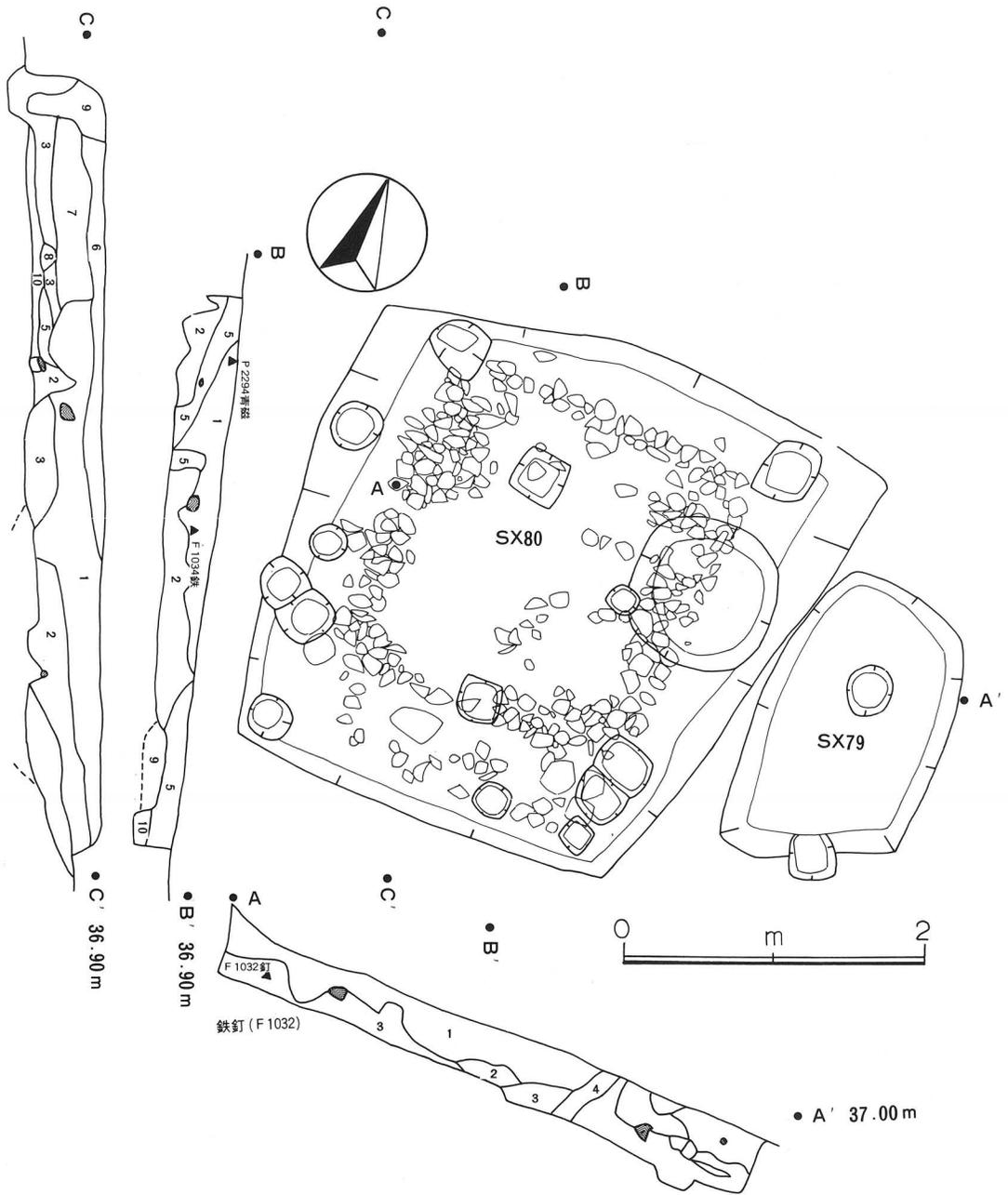
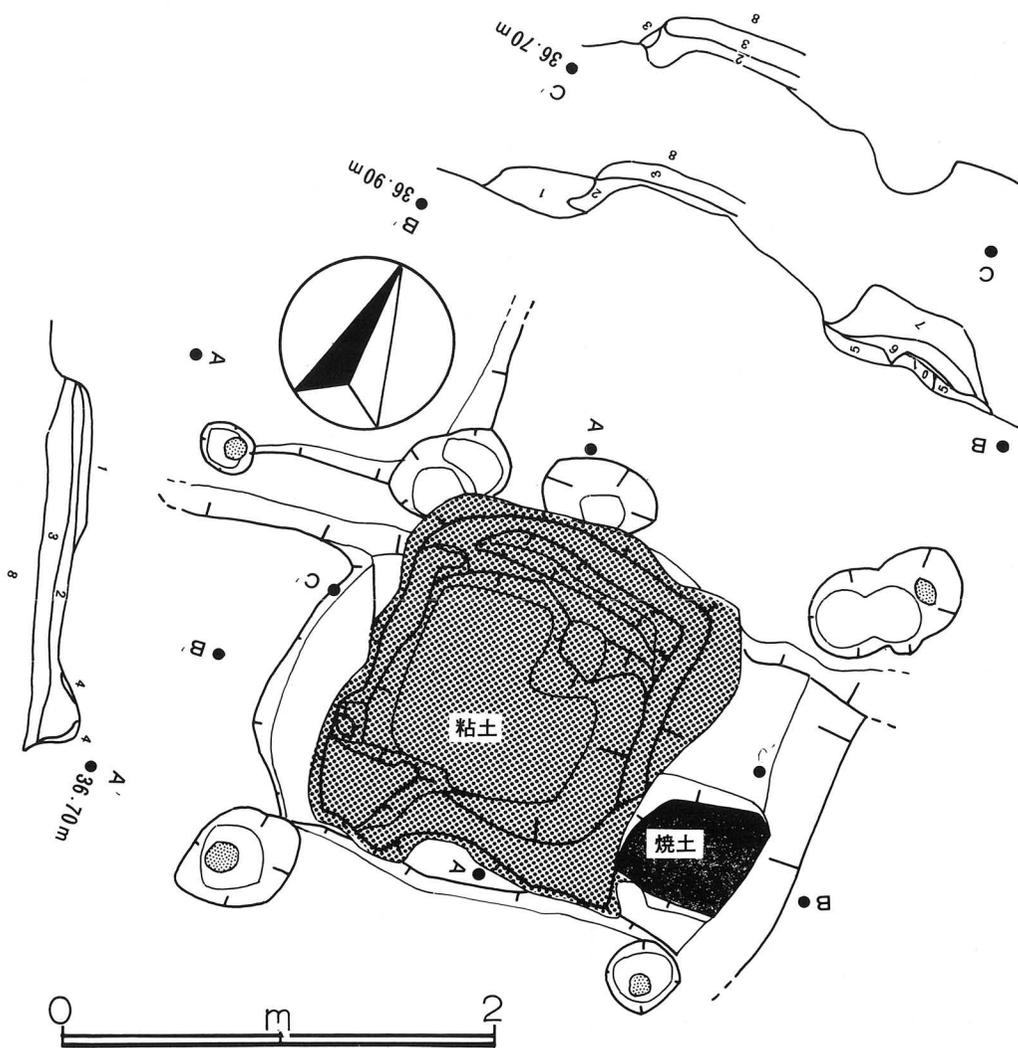


Fig. 61 SX88実測図



IV 出土遺物

本年度の出土遺物には、陶磁器・土器・鉄製品・銅製品・石製品・木製品・古銭・他があり総数は約5,000点にも及ぶところから、主要な遺物を概観して浪岡城跡出土品の特色を述べてみたい。

1. 陶磁器類（土器も含む）

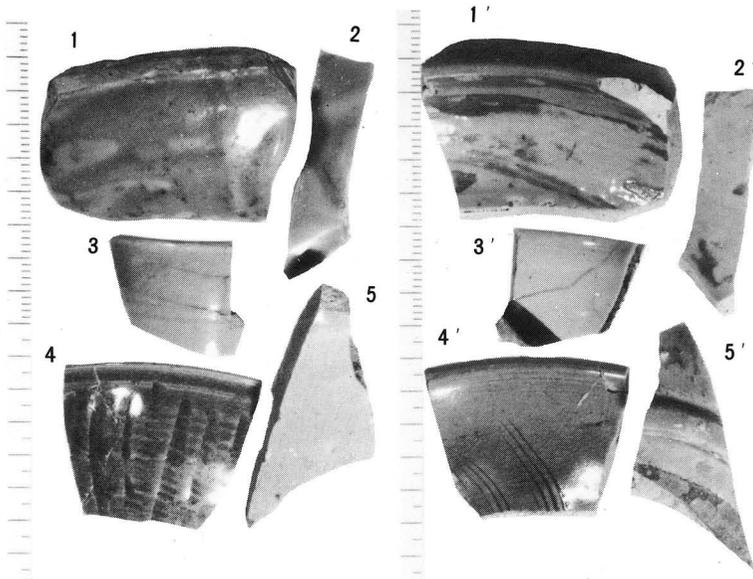
出土遺物の中で総数は最も多いが、約6割は土師器の小破片であり陶磁器としては1600点余りが確認されている。特に全陶磁器のうち舶載品が50%以上の出土率を占め、国産陶器を凌駕することは特筆される。以下、個別ごとに報告する。

A. 青磁（PL.62・63、Fig.62、Ch.68）

青磁の出土数は386片であり、碗類209、皿類145、その他32がみられる。製作年代は14～16世紀と考えられ、16世紀を主体とするものが圧倒的に多い。前回の報告書（「浪岡城跡IV」）ですでに器形・文様等の物徴を分類してあるので、今回は新たな出土品及び典型的出土品について述べることにする。なお出土区・主要な特徴は、後掲する付表を参考にしていきたい。

器形の上では碗が54%を占めるが、一般的には蓮弁文のくずれた文様(6)が最も多く、外面口縁下に一条の劃線を廻らすもの(7・8)もみられる。これらは口縁部が内湾気味に立ち上がるものであるが、一部には外反するもの(9)もある。また、暗い黄緑色の釉調で外面が片側を鑄ぐ整形を加へ内面に櫛目状の劃線を施す例(4)も出土している。前記のものより製作年

PL.62 青磁(1)



代が古いのであろう。

皿は、いわゆる稜花状を呈するもの(12)が一般的で、口径は10～13cmが多い。一部に大皿(5)と考えられるものもある。

浅鉢状のものには、見込に印花文を施す例(13)や墨が付着している例(11)が存在する。

その他の器形として、酒会壺の蓋(1・2)や香炉(3)が存在する。

B. 白磁（PL.64・65・66、Fig.63、Ch.69）

白磁の出土数は216片であり、碗類3、皿類167、小坏他が46である。皿が全体の77%を占め、

PL.63 青 磁(2)

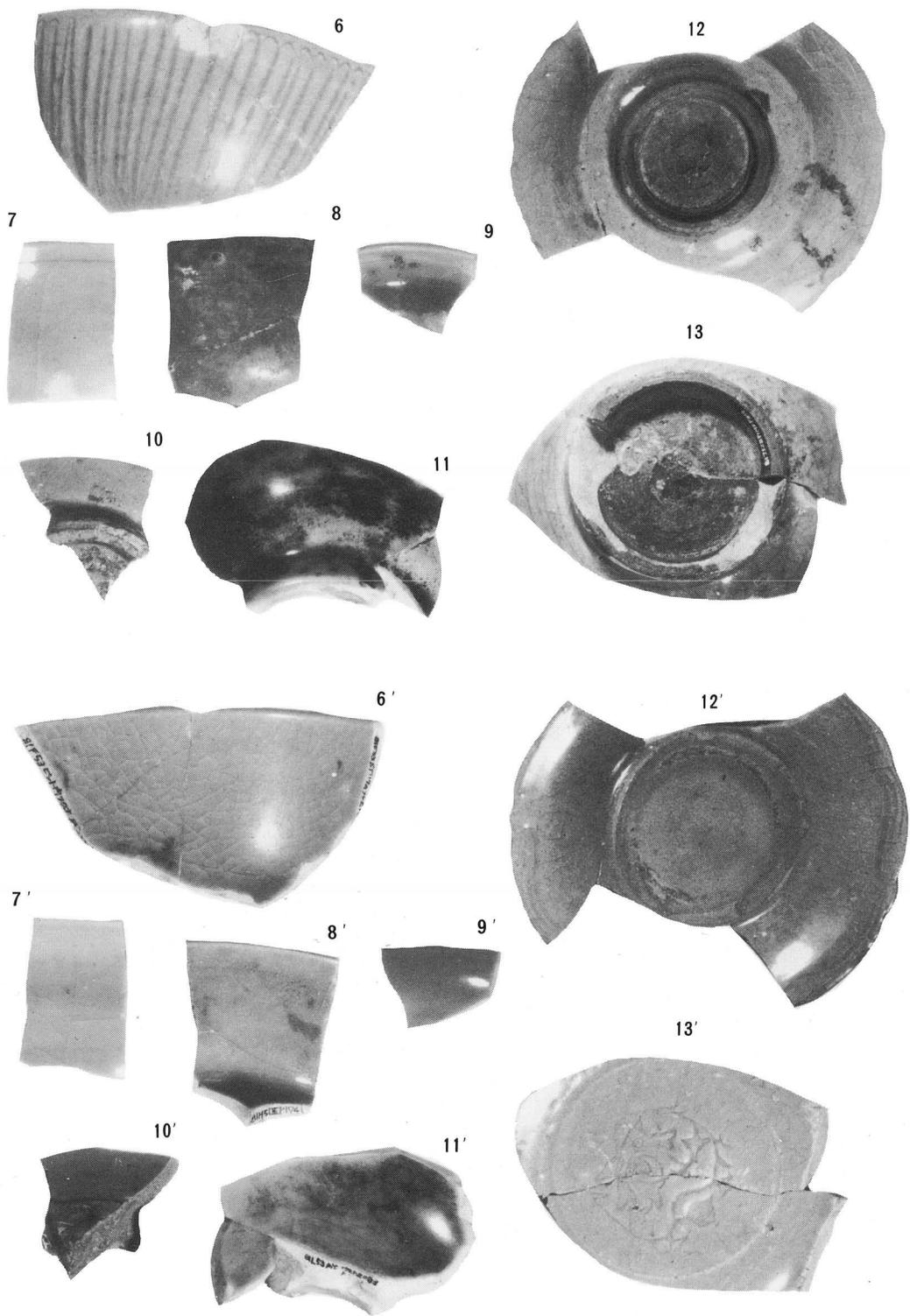
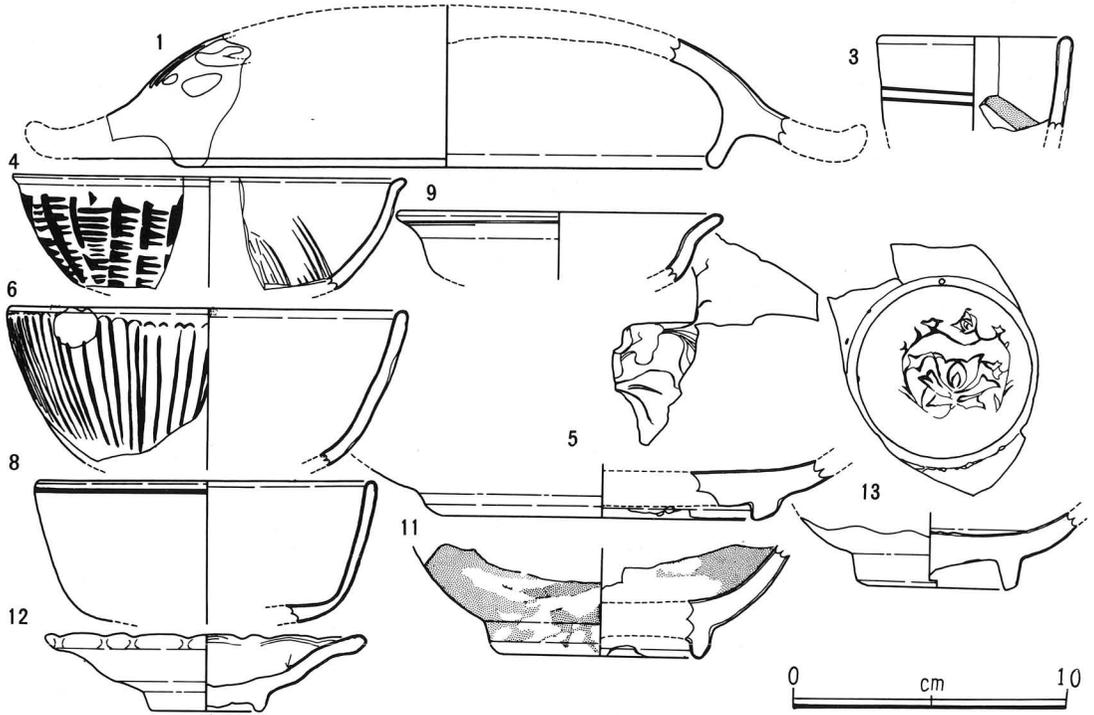
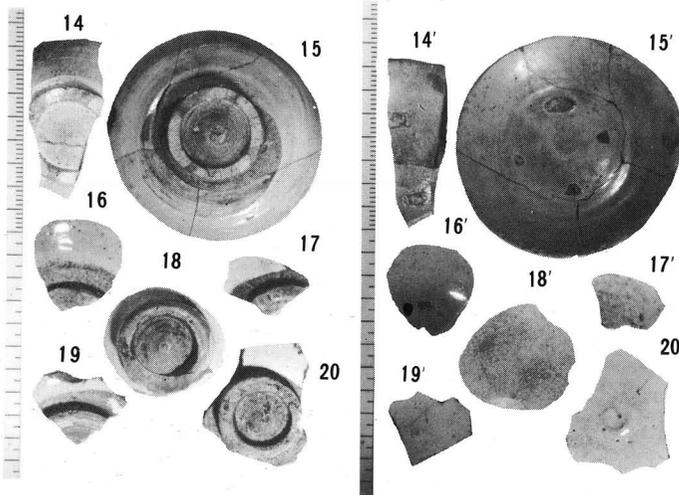


Fig. 62 青磁実測図



成形上の特徴から二つに大別できる。PL. 65で示した白磁は、胎土が軟質で口縁は内湾、高台部は施釉がゆきわたらず弧状に抉り込みを入れるものが多い一群である。これらの中では、完形品 (15) も1点みられ高台に弧状に4つの抉り込みを呈し、見込内にも4つのトチ痕が残っている。(14)は高台部まで全面に施釉がゆきとどくもので、二次加熱を受けているため表面に細かい凹凸がみられる。また、高台を抉り込むもの (14~17) に対して、抉り込まないもの (18~20) も出土しているが、焼成がやや甘く軟質な感じを受ける以外に特別大きな差異はない。

PL. 64 白磁(1)



一方、皿の中で金属質に硬く焼成され、口縁が端反りする一群があり、PL. 65 (21を除く) で示した。(22~26) がそれである。

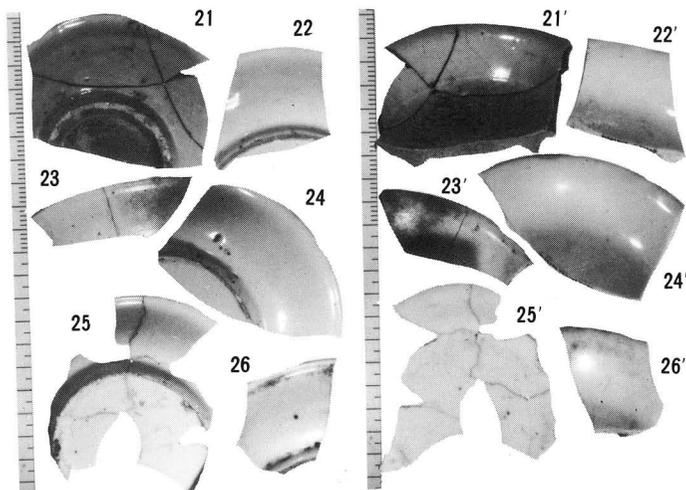
一方、皿の中で金属質に硬く焼成され、口縁が端反りする一群があり、PL. 65 (21を除く) で示した。(22~26) がそれである。

器体は薄手に成形され、高台底に砂等の付着が認められるもの(24・25)の色調にやや灰色気味のもの(23)が混じる。皿の出土率では最も高いものである。

この他白磁には小坏が数点みられる。口径6cm内外、器高3cm弱のものが多く、見込みは蛇の目状に釉のふき取りが見られる特徴を有する。(27~30)

また上記のものより古手と推定されるものに、不透明な白色釉を施し肉厚な器体で口縁が外反するもの(21)があり、漆による接合痕もみられる。さらに口縁部内面が施釉されない。いわゆる口禿碗(32)もある。

PL. 65 白磁(2)

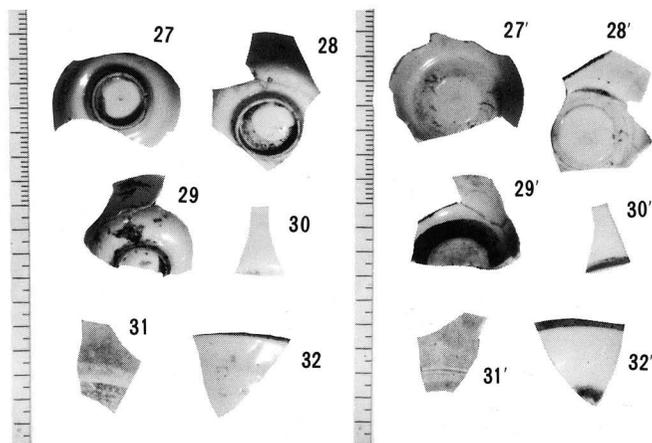


C. 染付 (PL. 67・68・69・70・71、Fig. 64・65・66、Ch. 70)

染付の出土数は749点、皿638、碗88、その他33であった。

碗は(PL. 67、Fig. 64)、形態上から底部がゆるくU字状を呈する一群と、饅頭心状に高まる一群に分類でき、その中間型も存在する。口縁は端反りするものが少なく、概して内湾気味に

PL. 66 白磁(3)



真直ぐ立ち上がるものが多い。特徴のある文様としては、山水画風の風景を描いたもの(33)梅月文を簡略化したようなタッチの文様(34・40)、蕉葉文(37)、人物画らしいもの(38)その他(35・36・39)がある。なお、形態と文様の関係については『浪岡城跡IV』で若干分類しているので参照ねがいたい。40のように高台立ち上がりから鋭角に口縁部まで達する形態は、前述した中間型に属するものと考えられ、浪岡城跡では最初の出土である。

皿に関しては、大別すると4群に分かれる。(1)口縁が外反する一群(PL. 68)(2)基筒底の一群(3)口縁が内湾気味に立ち上がる一群(PL. 70、PL. 71)(4)その他前記のものに舍まれない一群がそれである。以下、写真と図によってみてゆこう。

(1)口縁が外反する一群というのは、白磁の項でみた硬質端反り皿の器形に、染付を施こした

Fig. 63 白磁・他実測図

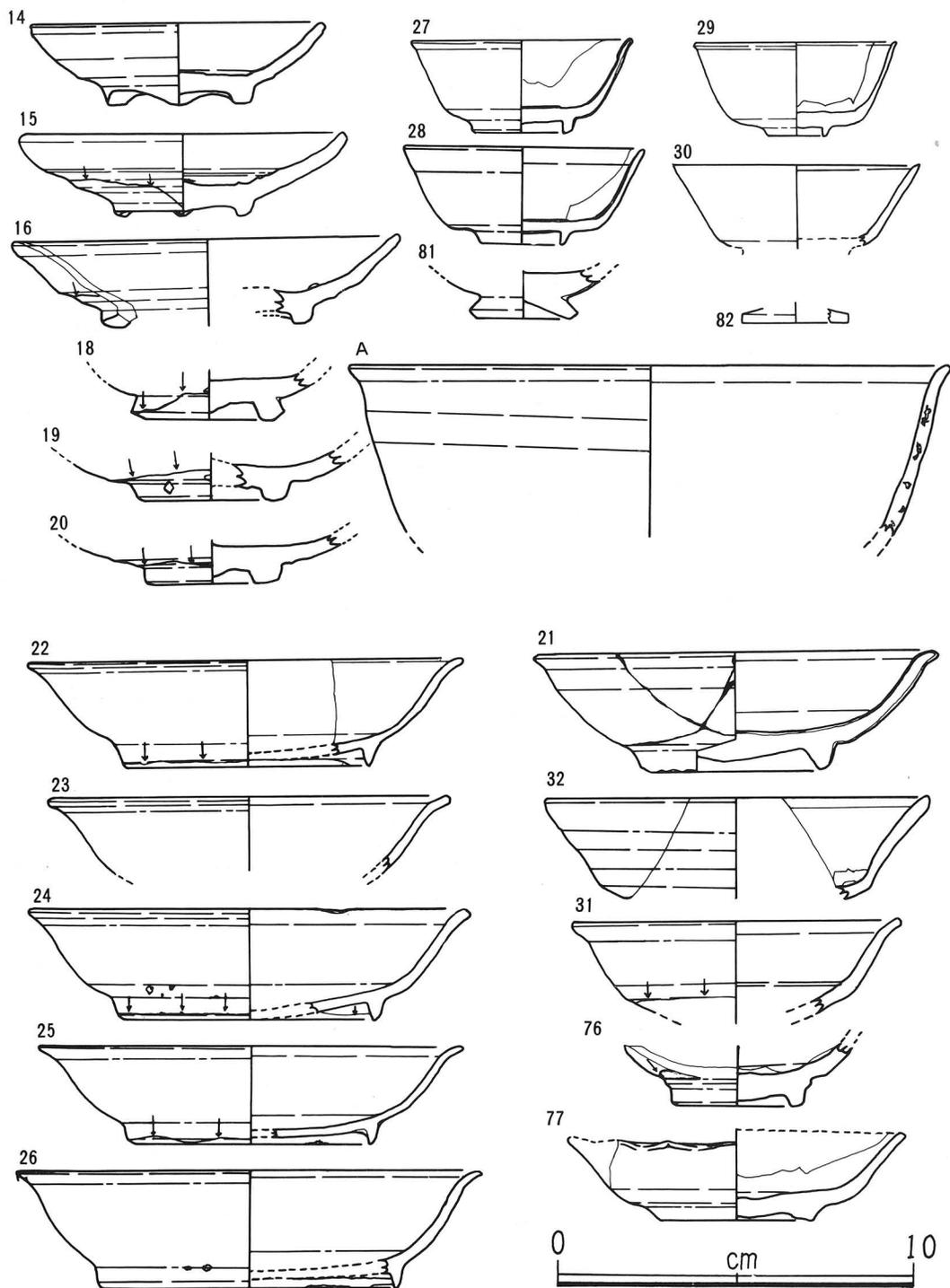
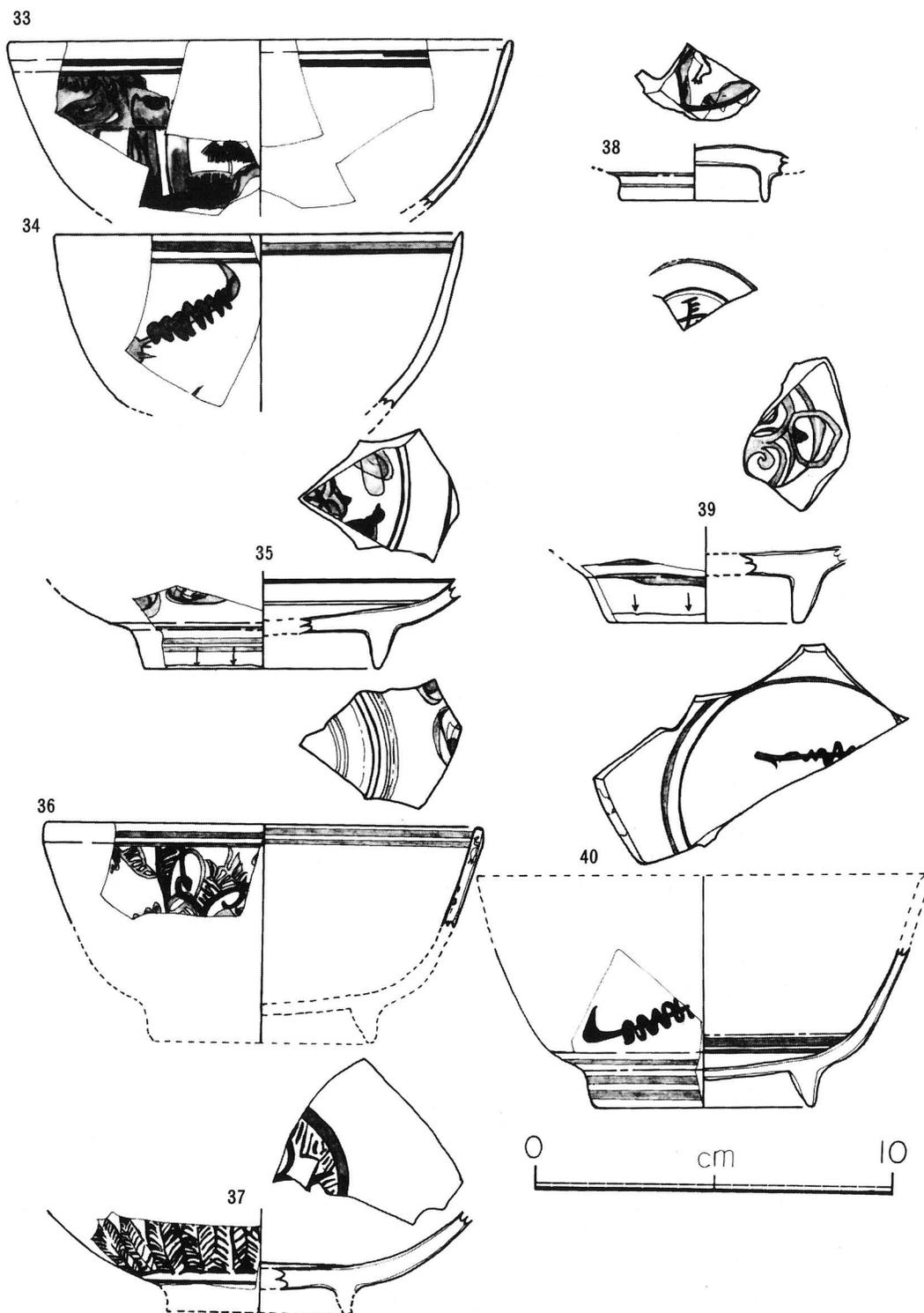


Fig. 64 染付実測図(1)

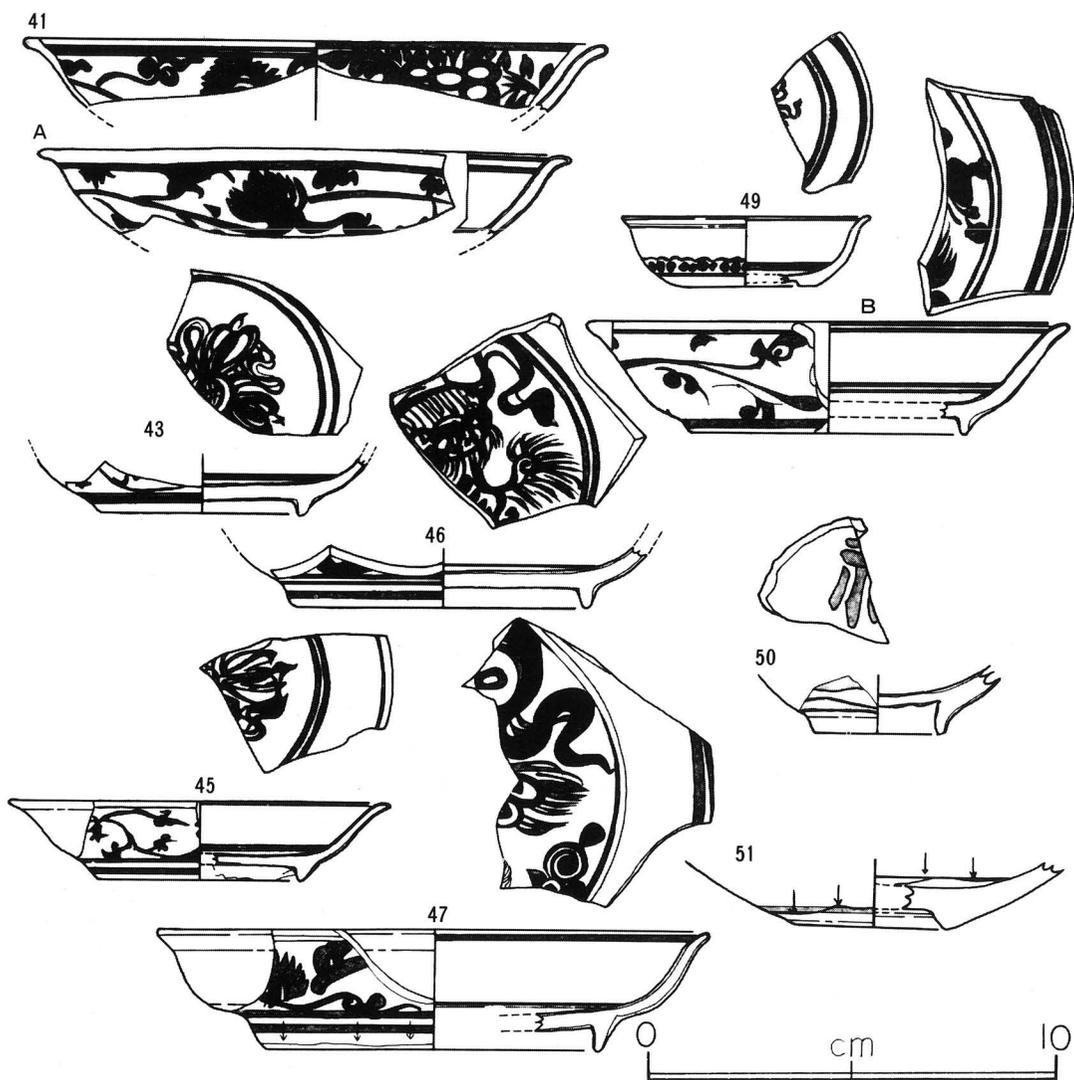


ものである。浪岡城跡出土の染付皿の中で最も量的に多い。主要な文様は、胴部外面に牡丹唐草文を施す例（41・42・43・44・45・46・47・A・B）が多く、見込には、羯磨文（43・45）玉取獅子文（46・47・B）がみられる。

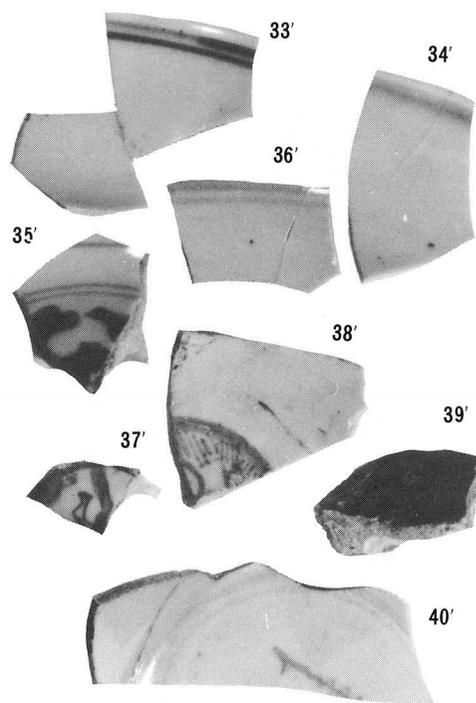
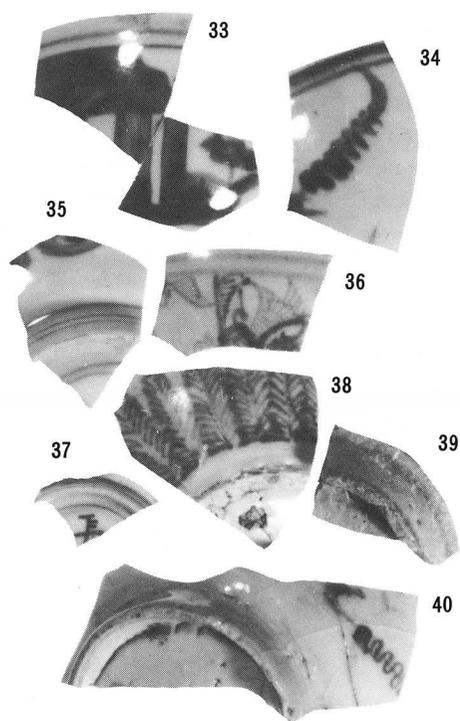
(2) 碁笥底の皿は、今回は出土数が少なかった。胴部外面には蕉葉文（52）の付くものが多い見込には花鳥文（52・53・54）などの文様がみられるものと、素地が露呈しているもの（51）がある。

(3) 口縁が内湾気味に立ち上がる一群は、一般的に前述の染付皿より製作年代が新しくなると考えられているもので、文様・呉須の発色に相違が認められる。色調は、前述のものが薄い藍

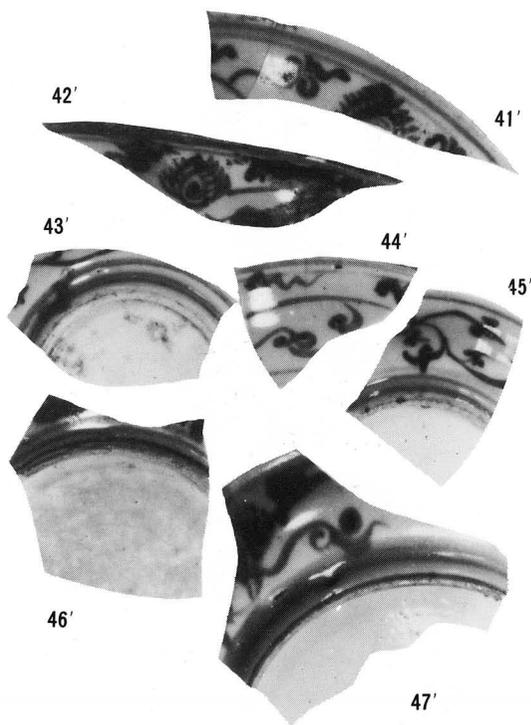
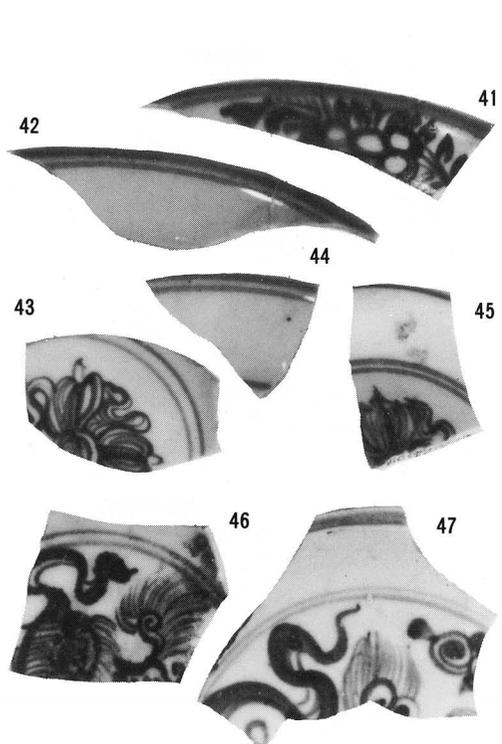
Fig. 65 染付実測図(2)



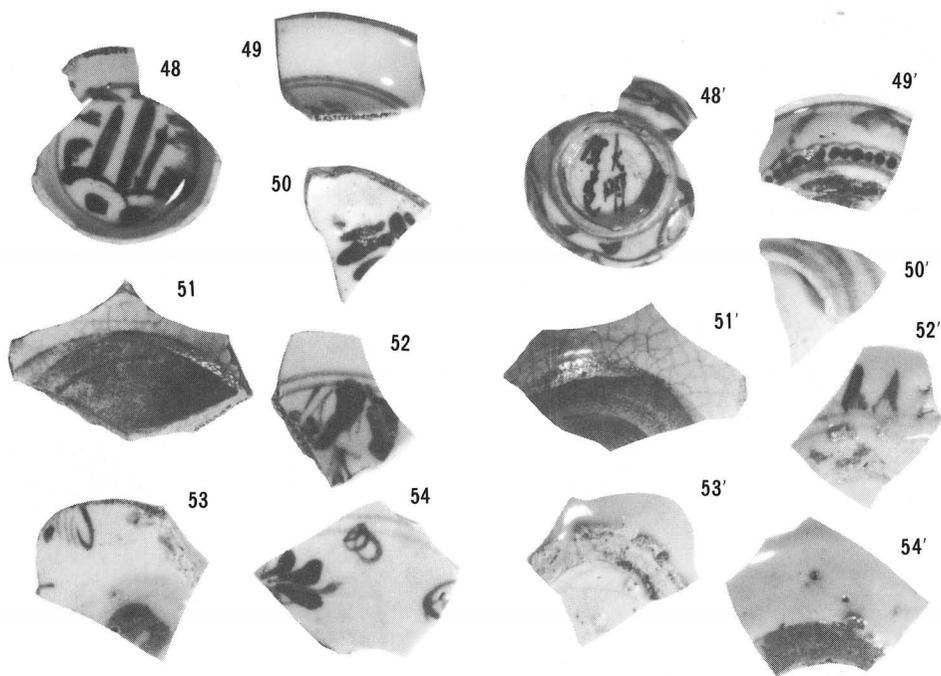
PL. 67 染付(1)



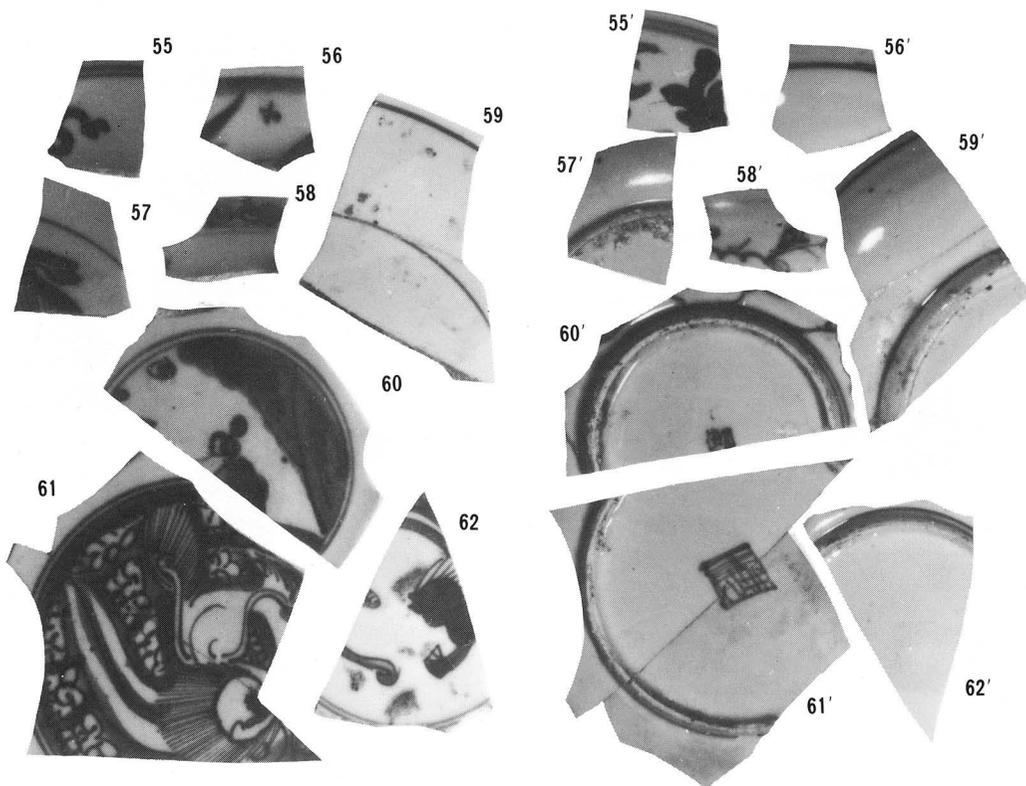
PL. 68 染 付(2)



PL. 69 染付(3)



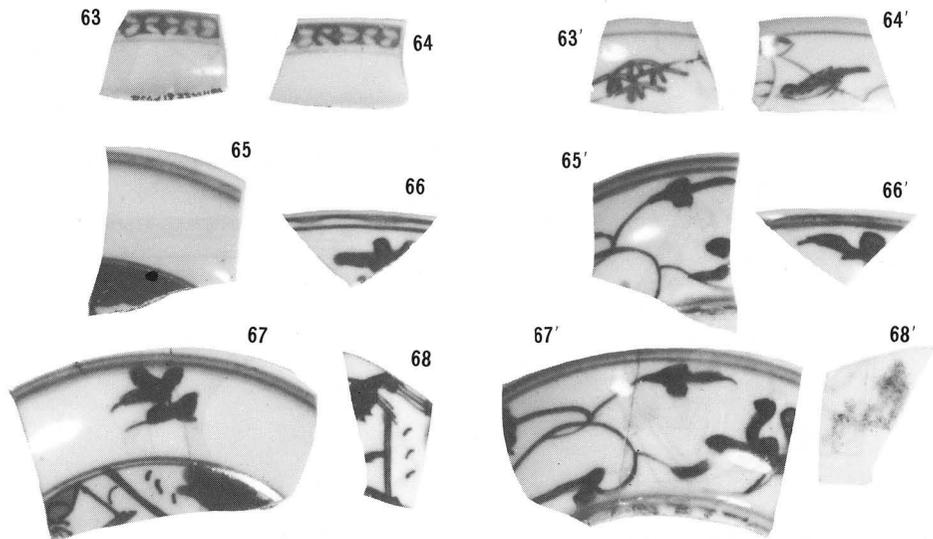
PL. 70 染 付(4)



色であるのに対し、濃い藍色で文様の表現がシャープになる印象を受ける。文様としては、胴部外面に花鳥折枝文（58・64）、竹文（63）、唐草文（55・65・66・67）、見込およびその周囲に山水人物文（60・C）、蚊龍文（57・62）、獅子文（61）、風景と鳥を合わせた文様（67）がみられる。底に「圖」（61）、「福」（60）、「長（命）（富）（貴）」（C）という銘のみられるものもある。

（4）その他の染付としては、軟質の胎土に乳白色の釉を施し、見込が蛇の目状、全体に貫入がみられるもの、（69・70・71）、口縁が外反し界線しかみられないもの（72）、見込にくずれた梅月文（73・74）のみられるものなどが存在する。

PL.71 染 付(5)



PL.72 染 付(6)

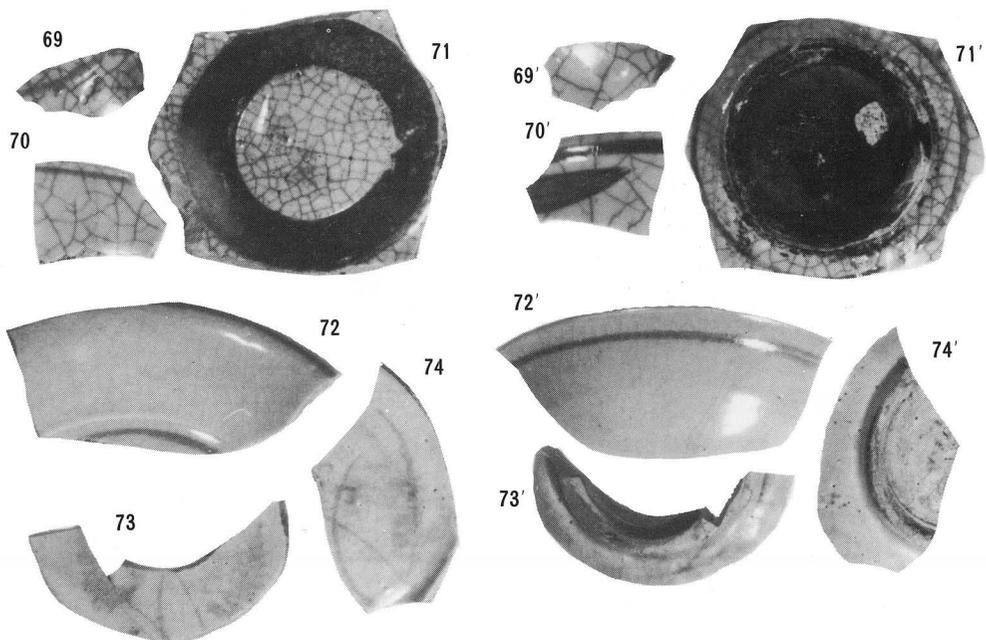
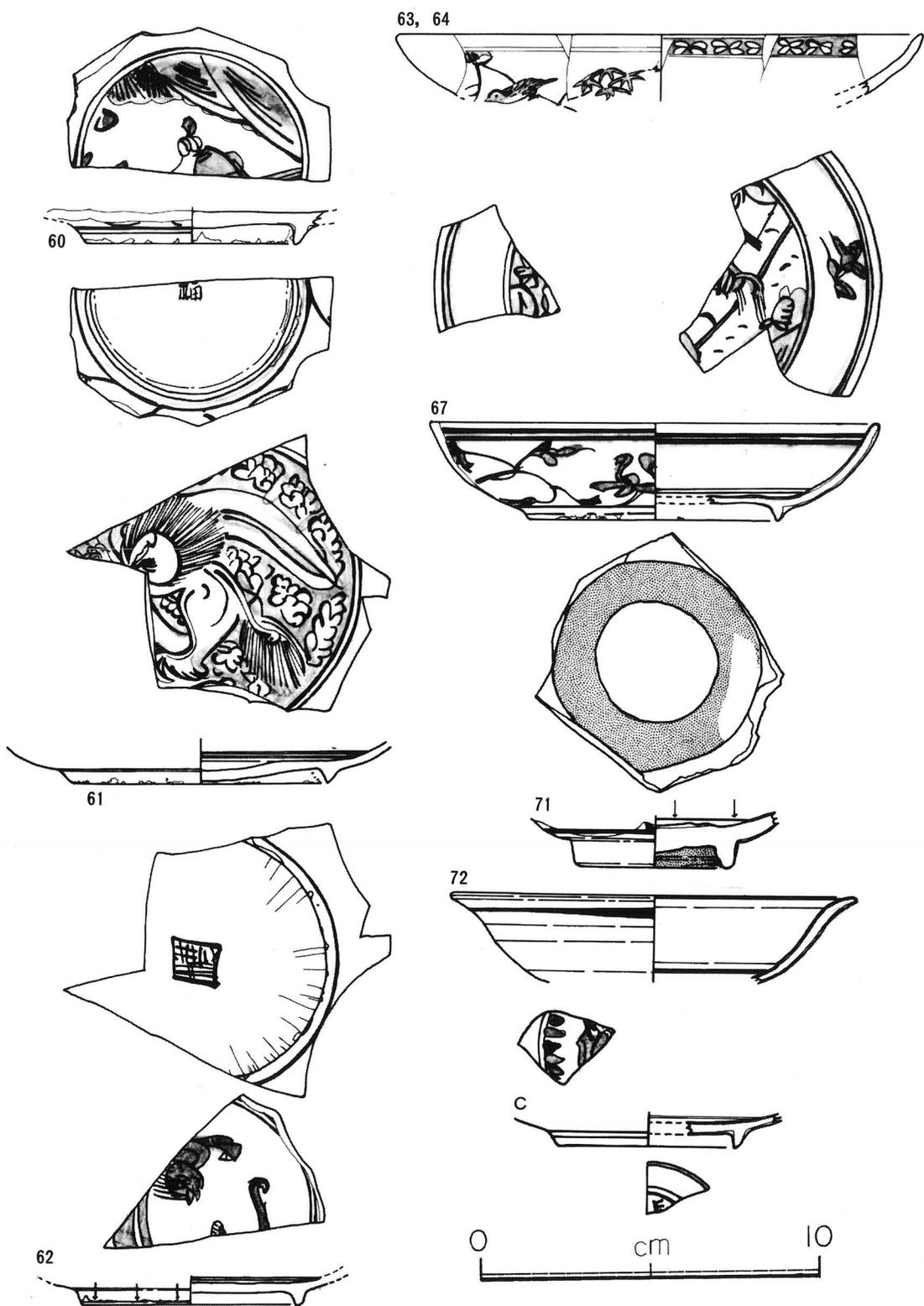


Fig. 66 染付実測図(3)



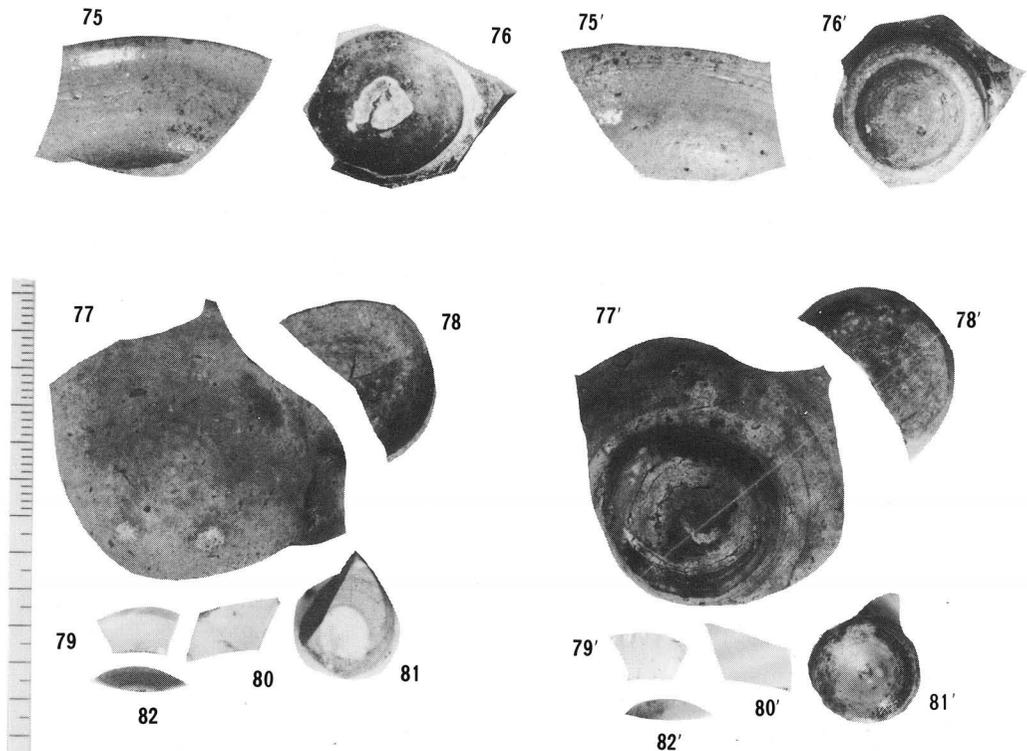
D. 赤絵 (PL.73、Ch.71)

赤絵は、6点の出土をみたがいずれも細片であり、碗の器形が多かった。小形の袋物と推定される破片が1点あり、外面の釉および顔料は禿げ気味で文様は明確でない。(78)

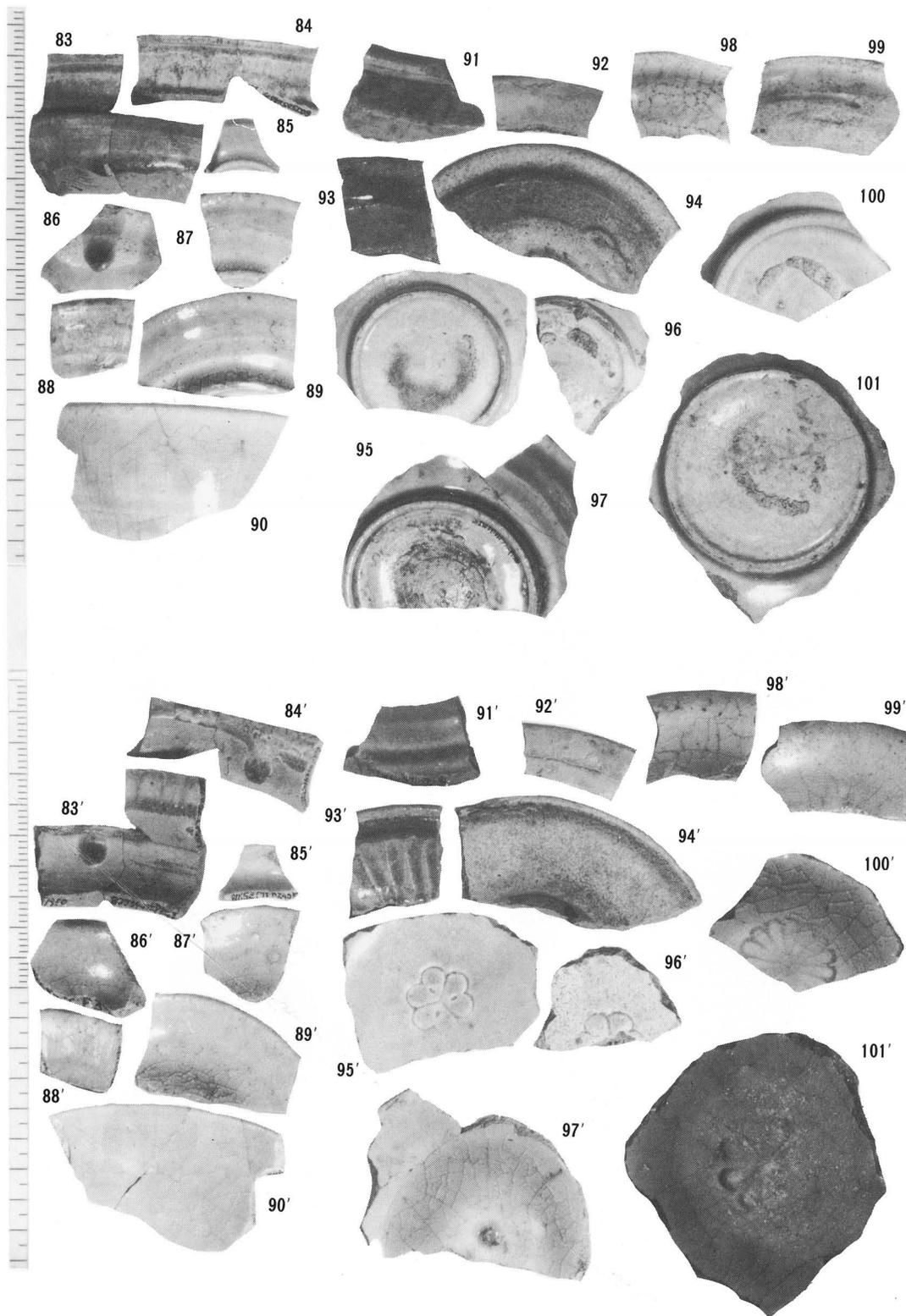
E. 朝鮮 (PL.73、Fig.63、Ch.71)

朝鮮の製品と推定されるものに、皿と碗・小坏がある。皿は口縁が稜花状を呈し、二次加熱を受けているため釉は禿げ落ち、器形は歪んだ状態になっている。高台部の成形は粗雑で、単純な削り痕が残っている。(77) 碗は、灰色の胎土にやや緑がかった灰釉を施しているもので胴部の立ち上がりやや鋭角的な状況を呈するものである。(75) 小坏と考えられるものは、白磁調の施釉が、見込蛇の目、外面は高台上部に釉止りがみられるもので、胎土は黄白色気味で軟質なものである。高台の成形は削り痕が明瞭で無調整である。(76)

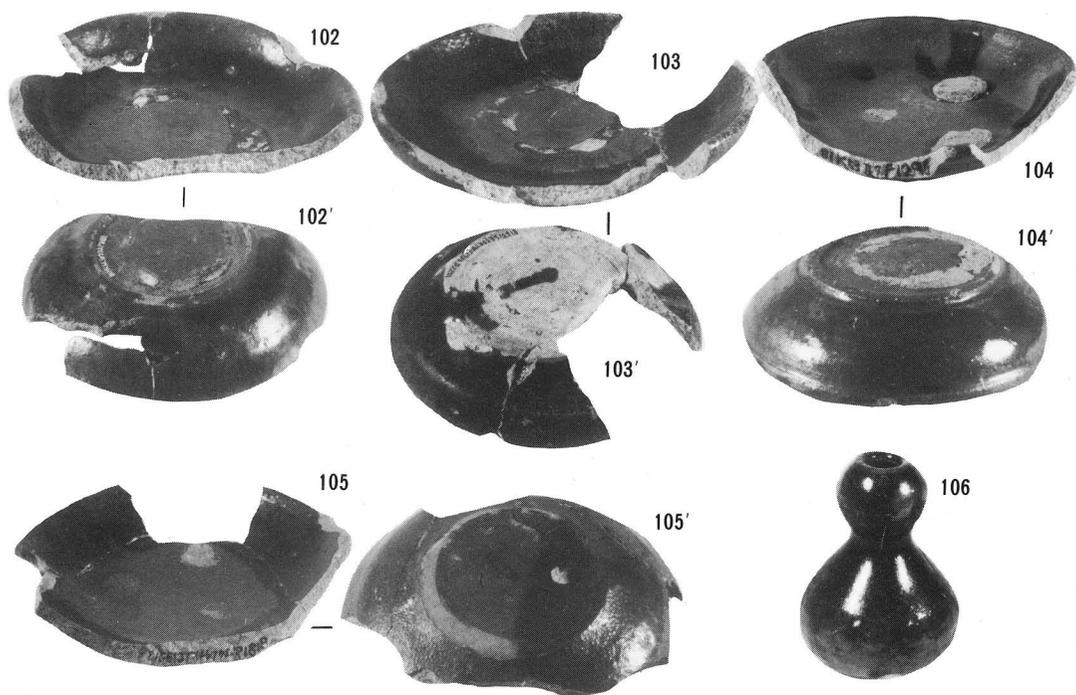
PL.73 朝鮮系・他



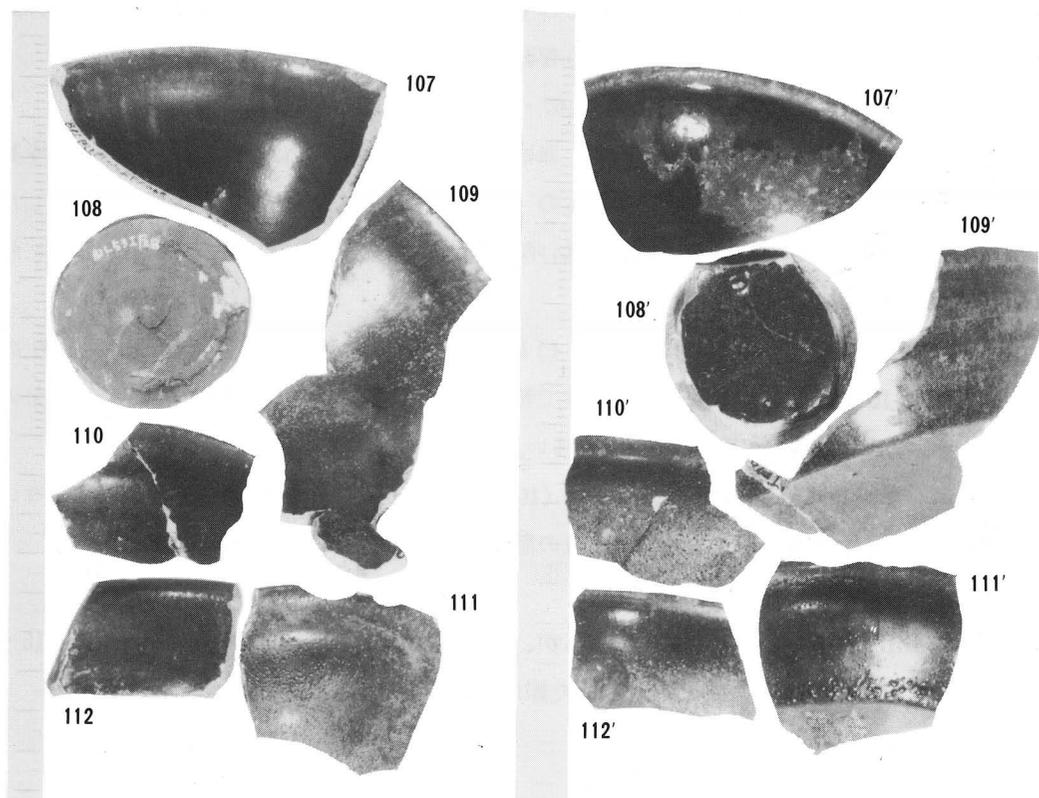
PL. 74 美濃灰釉陶器



PL. 75 美濃褐釉陶器



PL. 76 天目



F. 美濃

美濃の製品は大別すると、灰釉系と褐釉（鉄釉と言うべきかもしれぬが）系の二種になる。灰釉系のうち皿は276、その他23、褐釉系は天目碗39、皿32、その他4の出土点数があり、中には瀬戸窯の製品も含まれているかもしれないが、鑑定の機会を得てなかったので今回は一括して報告する。また、志野・黄瀬戸手も本来であれば本項目で説明しなければならないが、あえて別項を設けた。

(i) 灰釉系 (PL.74、Fig.67、Ch.72)

器形としては、皿、碗、鉢がみられる。皿は総数から言っても主体を占めるもので、口縁が外反するもの(87.97.98.99)、口縁が内湾気味に立ち上がるもの(88.89)、口縁が折リ縁を呈するもの(93.94.PL.51No.2)に分類できる。口縁の外反するものには、見込に印花文を施す例(95.96.100.101・A)が多い。折リ縁のものには、内面立ち上がりにヒダ状の削りを入れる例(93.PL.51No.2)があり、浪岡城跡最終末の遺構から出土することが多い。皿の中で、口径が4.5cmと紅皿にでも使用したのかと思われる小皿(85)、口径7cmで外面に施釉ムラのみられる小皿が出土している。

碗は1点だけの出土で、青磁碗に施される剣先状蓮弁文を模したような劃線を胴部外面にみられる例(90)がある。

鉢には、頸部が直立し胴体下半から丸味を有して底部に至るもの(83・84)があり、外面は胴部下半、内面は口縁直下までしか施釉されていない。この製品より、肉厚な器形に(91)があり、形状はよくわからないもの(92)も存在する。

(ii) 褐釉系 (PL.75、PL.76、Fig.67・Fig.68、Ch.73、Ch.74)

器形としては、皿・碗・壺などがある。皿は、口縁が内湾あるいはやや直行気味の形態を有し、底部が碁笥底状に削り込んだだけのもの(102)、糸切りによる切り離し後荒い調整をしただけで釉が施されていないもの(103)、低い削り高台を呈するもの(104)、糸切痕が明瞭に残るもの(105)などがある。

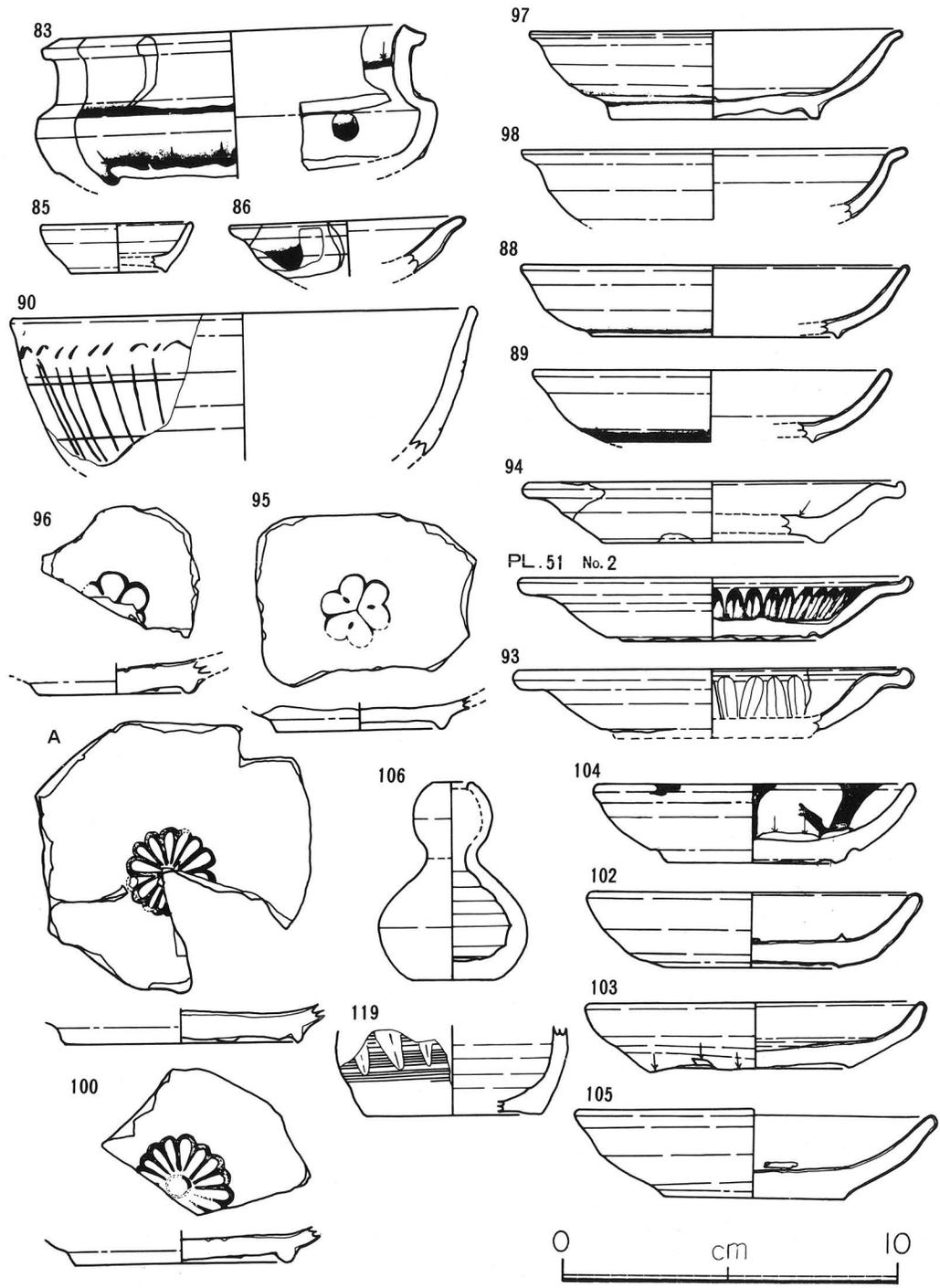
碗は、いわゆる天目茶碗であり、口縁のくびれが「く」の字状を呈するもの(107.109.110.111.112)が多く、胴部下半で釉が止まり(109.112.PL.51No.1)、底部は鉄分のためか暗い赤褐色を呈するもの(108)が多い。

壺には、水滴と推定される瓢箪形のもの(106)がある。また、(119)は美濃の製品ではないかもしれないが、外面に横位の沈線と縦位の削りを入れた褐釉の壺形底部片である。

G. 志野 (PL.77、Fig.68、Ch.75)

皿が4点出土している。口縁は内湾するが、底部は残存していないため不明である。(116・117)また、志野に似た乳白色の釉を施した卸皿(108)が存在し、注目される。

Fig. 67 美濃 (灰釉・褐釉) 実測図

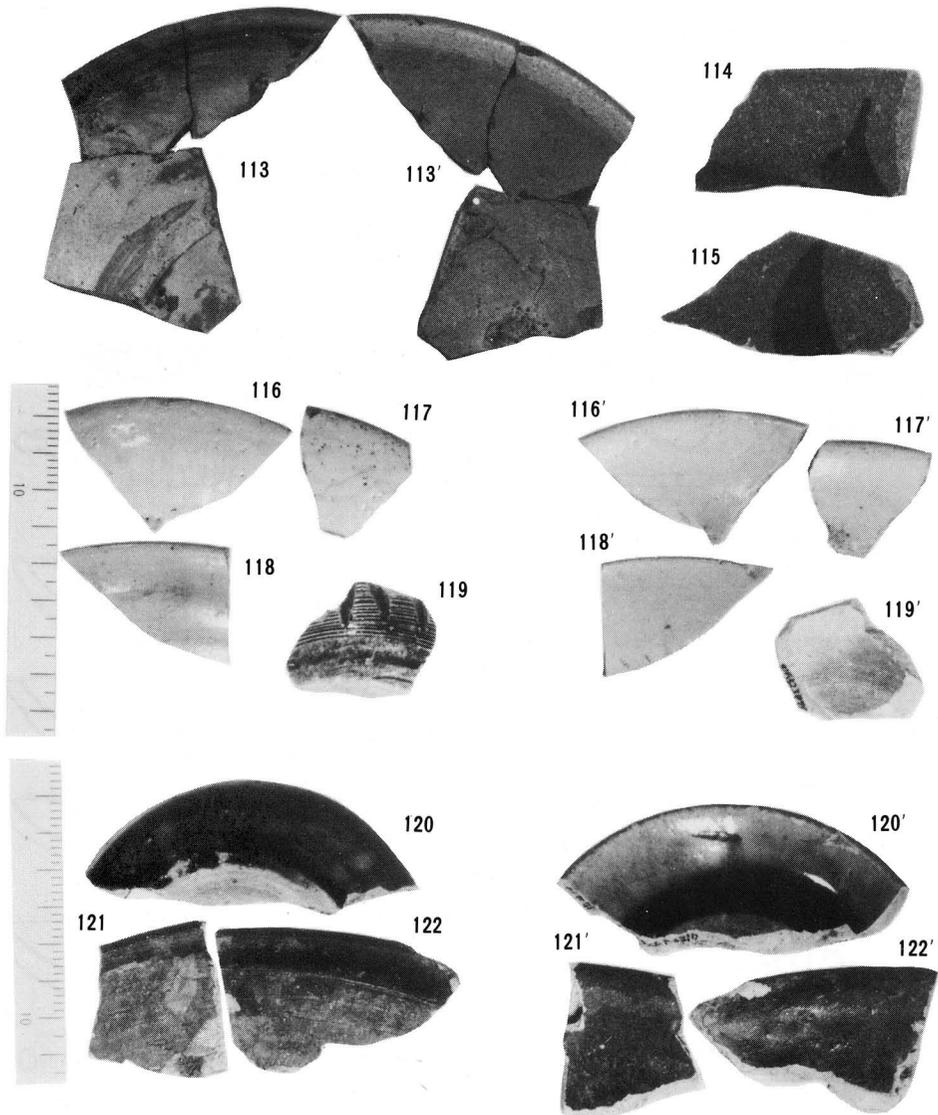


H. 黄瀬戸手 (PL.77、Fig.68、Ch.75)

Fig.68に図示したPL.51No.4とNo.113の2点が出土している。ともに口径27cm以上であり、口縁は若干外反し、底部は削りを入れただけの簡易な成形である。色調は、やや渋味のある黄白色で底部上半は施釉がゆきとどかず素地に鉄分が吸着したためか赤味がかかった色調を呈する。

PL.51No.4は見込に文様らしい刻線を配しているが、全形を知ることはできない。

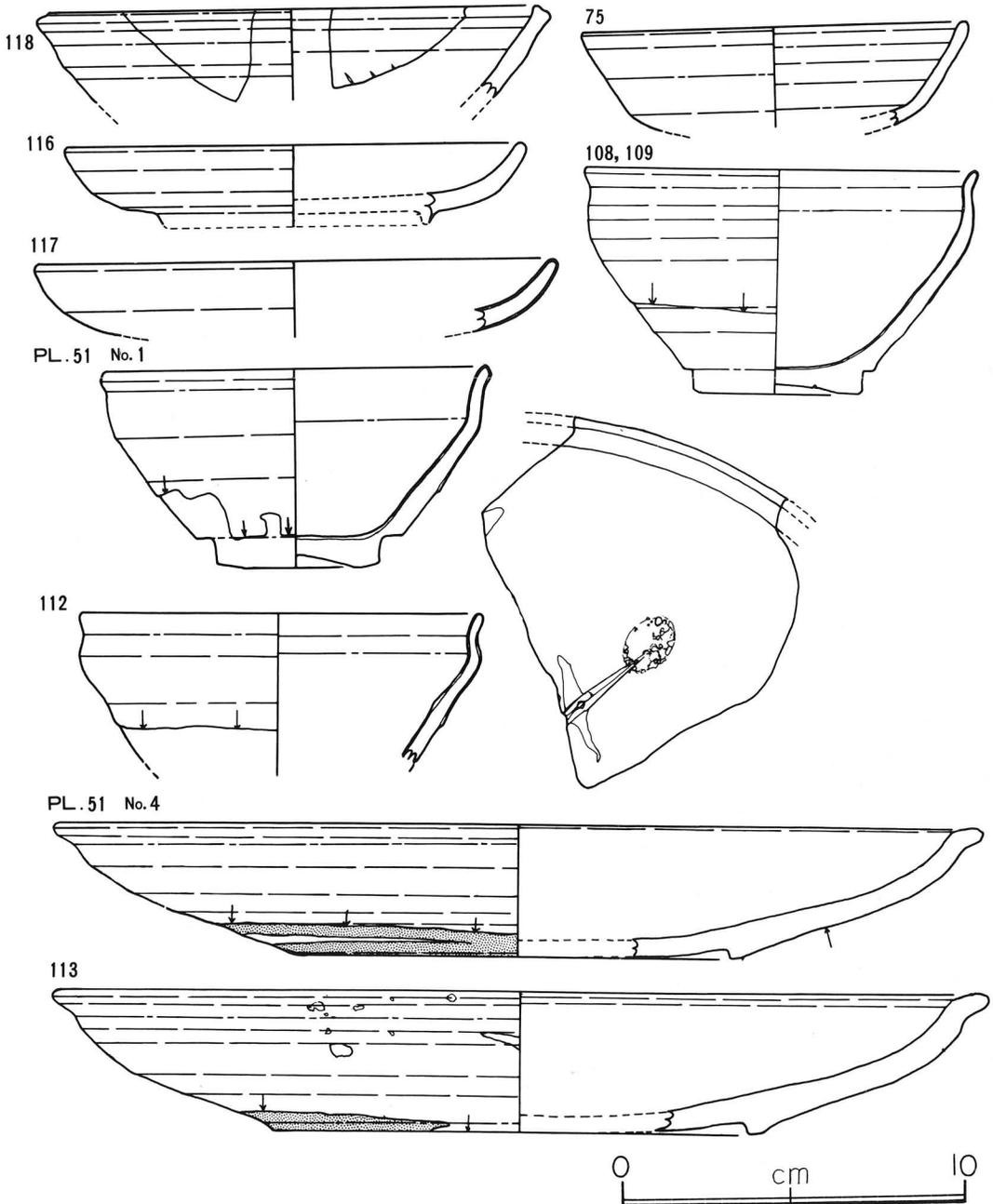
PL.77 黄瀬戸手・唐津・志野・他



1. 唐津 (PL.51、・PL77、Fig.69、Ch.75)

皿が71、他が4の出土数である。皿は、口縁が内湾し底部は荒い削り痕を有し、施釉が外面底部直上で止まるものが一般的である。(Fig.69A・B・C、PL.51No.8・9) 碗は1点だけの出土で、皿よりも薄手の成形で高台もきれいに整形されている。素地は、皿が赤褐色を呈するのに対し、赤灰色で硬質感のあるものとなっている。施釉は外面胴部下半で止まる。

Fig. 68 天目・黄瀬戸等実測図



(PL.51No.7) この他絵唐津皿が2点(PL.77No.114・115) みられ、暗灰色の色調に黒褐色の絵付が認められる。

10. その他の施釉陶器 (PL.77、Fig69、Ch.75)

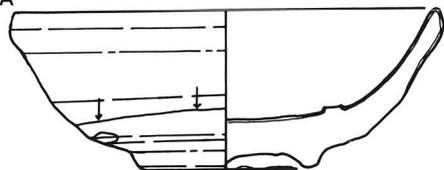
黄白色の素地に、純い光沢のある黒褐色気味の釉を施したもの(121・122)がある。産地不詳。

Fig. 69 唐津・他実測図

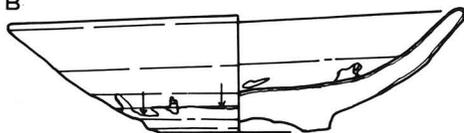
PL.51 No.7



A



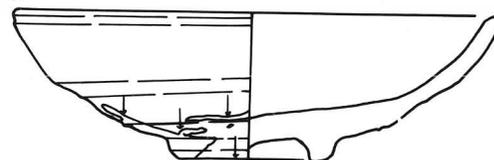
B



PL.51 No.8



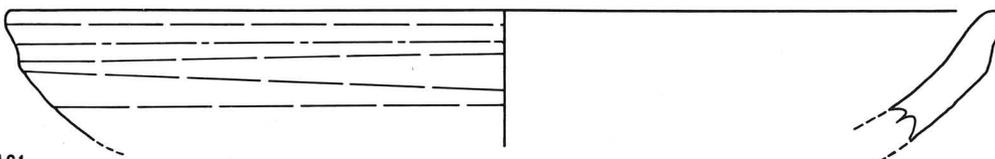
C



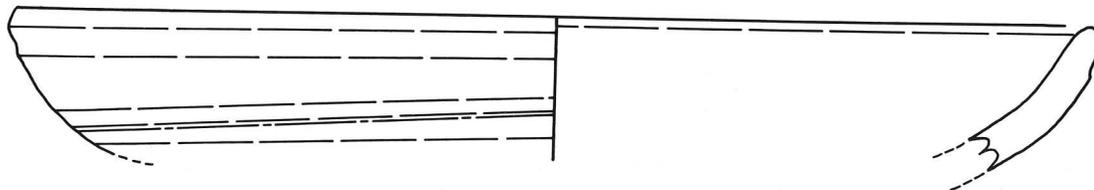
PL.51 No.9



122



121

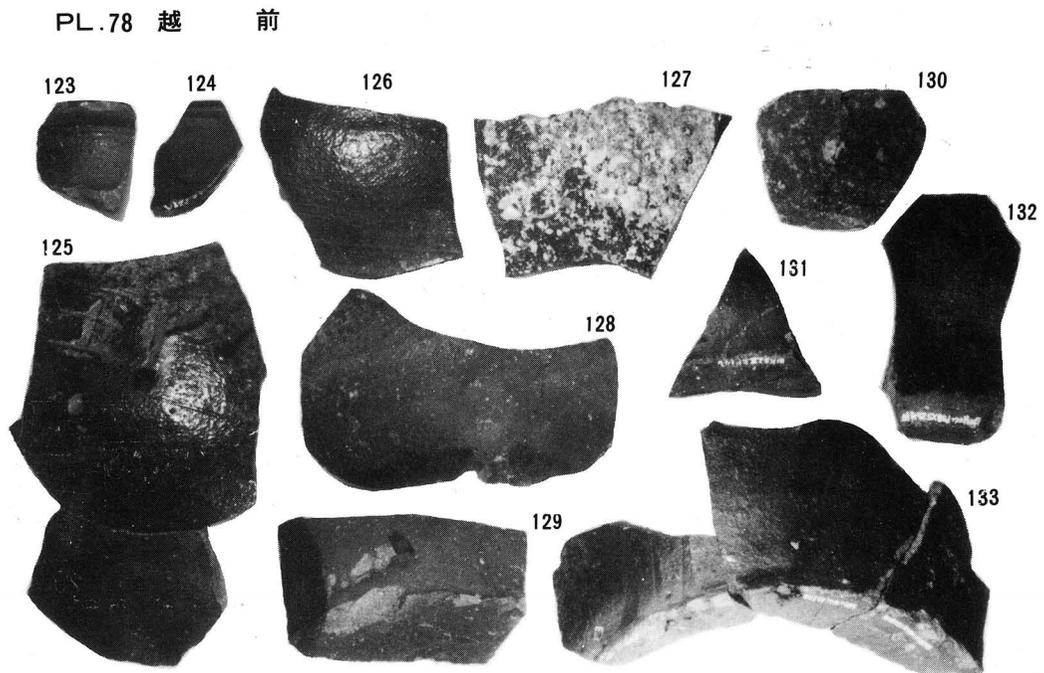


J. 越前 (PL.78、Fig.70、Ch.76)

越前の製品には、甕と挿鉢の器形がみられ、挿鉢については後述するので甕について報告したい。越前甕の破片は37片出土しているが、口縁部および底部の出土率からみると大きても7～8個体分しかない。その中で、K・L52区S T131を中心に出土した破片から図上復元したのがFig.70No.123他である。高さ33cm、幅31cm、口径17cm、底径17.5cmを計るもので、輪積み痕が内面にみられ、篋カデによる調整痕が内外面にある。口縁直下外面に一条の凹を有し、肩部には灰釉の流れとともに「王」という篋書記号がある。PL.78の中で口縁部(123・124) 肩部から胴部(125～128・130)、底部(129・131～133)の破片はいずれも暗灰色の胎土に若干の白砂を含有し、部分的に暗斑を有するものもあるが、よく焼き締められた製品である。

K. 信楽 (PL.79・Ch.77)

本年度は3片の出土があった。また、昭和53年度調査の中にも9片の出土があったことを確認した。134は、口縁が丸味を有しながら外反する口縁部片で、内外面とも篋ナデの調整痕を有する。135・136は胴部片で内面に輪積み痕、外面に光沢を失った灰釉がみられる。胎土はいずれも3～4mm前後の石英が多量に含まれており、表面に突出しているものも多い。昭和53年調査区出土のものと考え合わせても、3～4個体分と考えられ、北館中央部より西側から出土する傾向が高い。



PL.79 信 楽

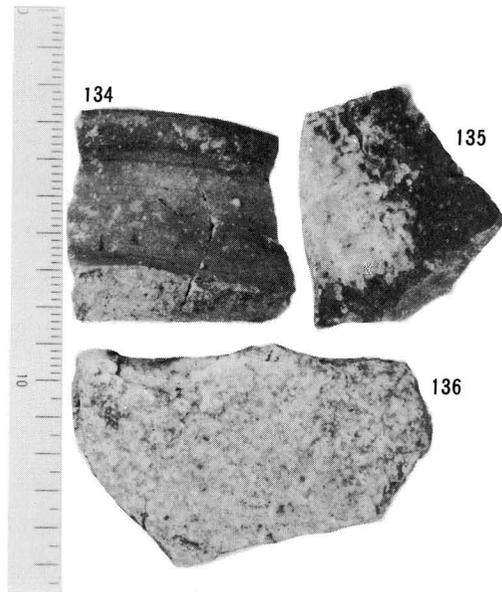
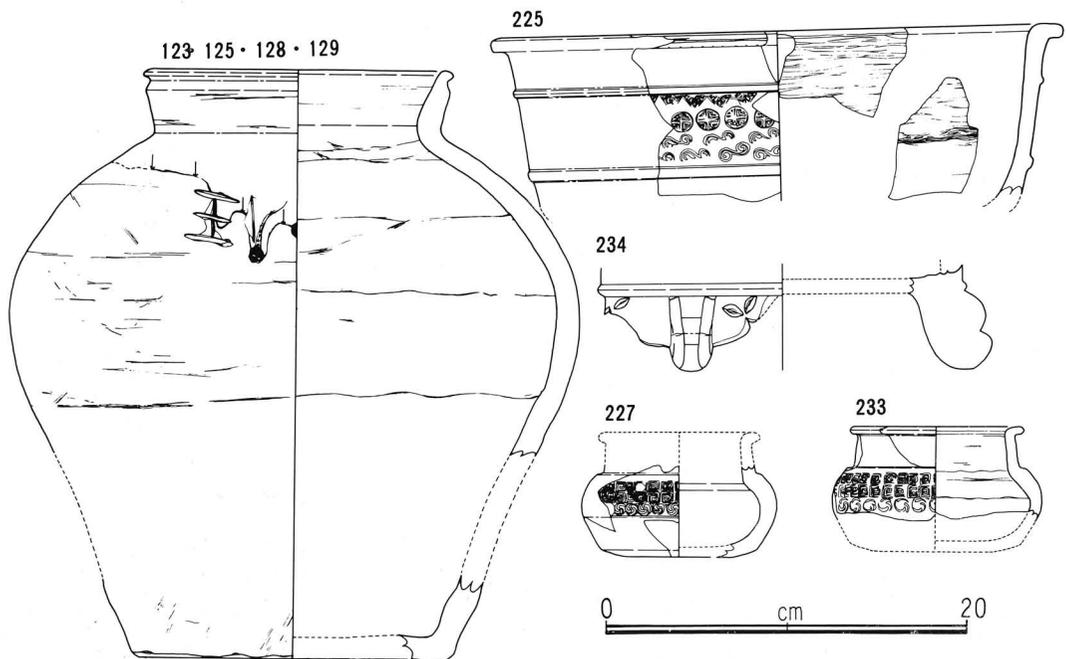


Fig.70 瓦器・越前甕実測図



L. 播鉢 (PL.80~86、Fig.71、Ch.78)

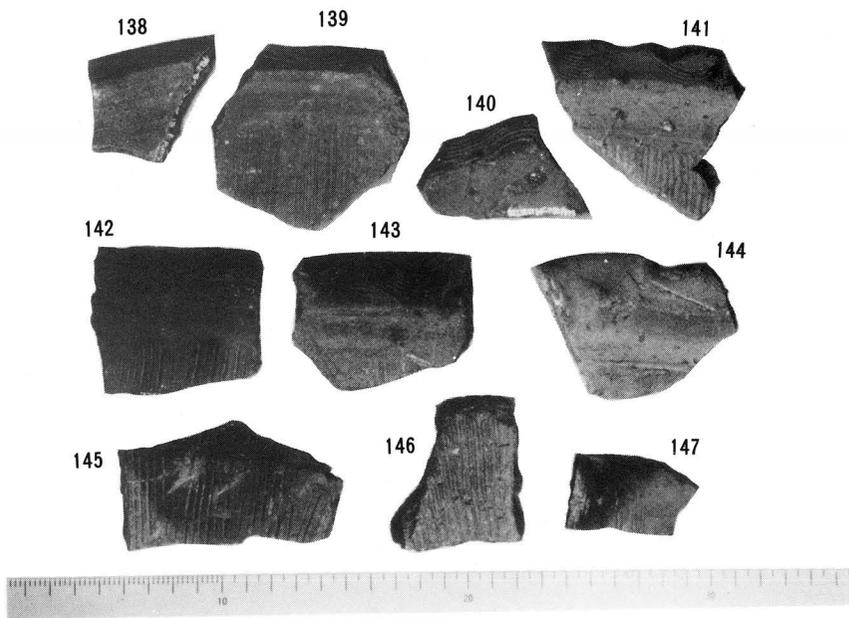
播鉢は149片の出土があった。完形品は1点もなく、図上復元のもの3~4点あった。

これらの出土品

PL.80 播鉢(1)

の中で産地比定が可能なものはほとんどなく、その製作技法上からおそらくこの系統であろうと推定するもの以外にない。

前回までの報告では、越前系統・珠洲系統・備前系統・系統不明のもの4分類がなされているが、今回

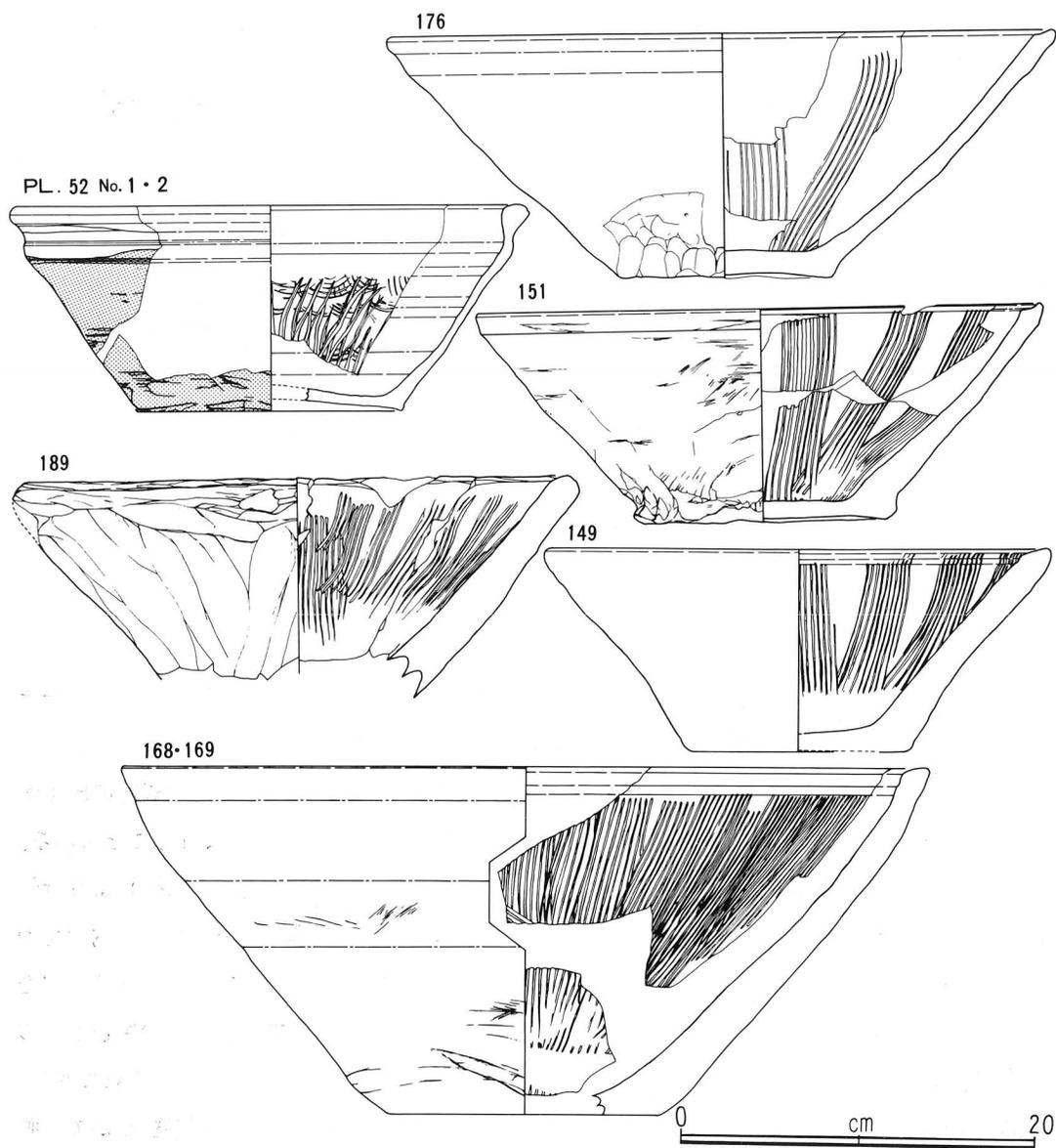


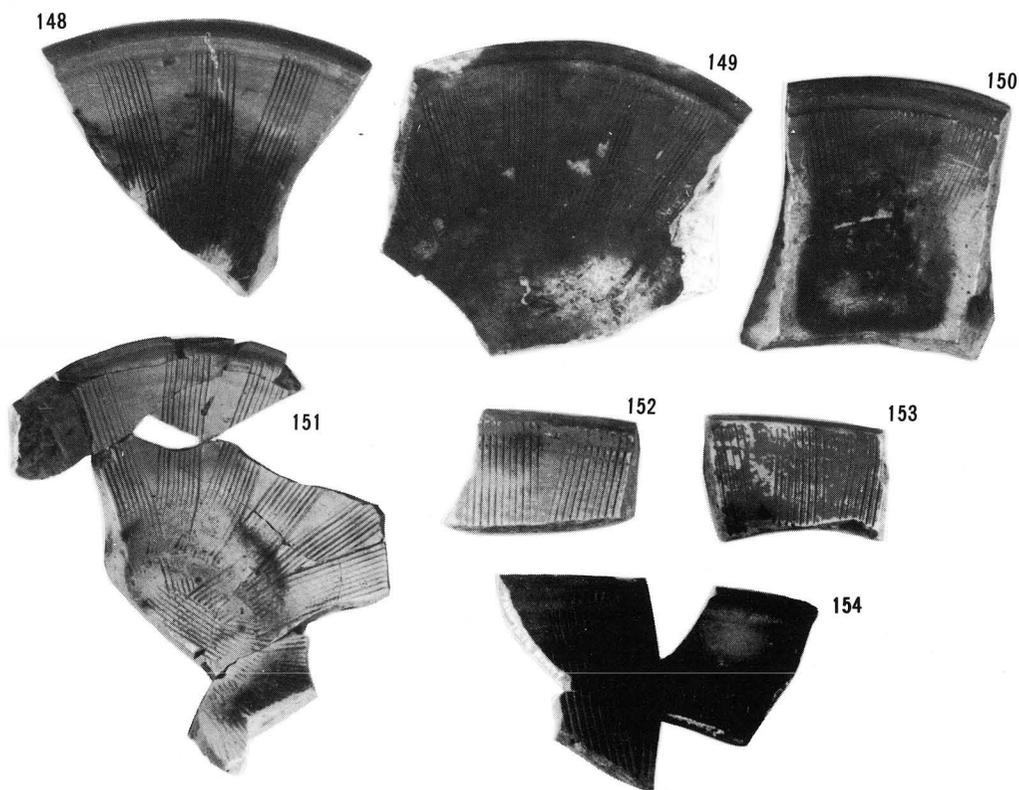
は、新規に出土した唐津系統を加えて、詳細にみてみたい。なお、特色を強調するため、昨年度までに報告済のものも再度写真に載せて報告する。

i) 珠洲系 (PL.80) ——破片数はこれまで10片前後の出土であり、主として口縁部の出土が多い。全体の色調は暗灰色で、胎土に白色砂・石英を多く含みまた小石が含まれることもある。須恵器質に硬質の焼成状態を呈するが、本来の須恵器 (前田野目窯の須恵器・古代) よりは軟質で、焼き締めは充分でないと思われる。口縁部は、個体によって相違はみられるが内面をやや突き出した状態で平らに成形し、その部分に波状の櫛目文を施す。141・143・144は片口を有する同一個体と推定され、部分的に自然釉があって黒灰色に光沢を有し、内面の卸目が先の丸い幅広の櫛目を呈するのに対し、口縁の櫛目は鋭角なものを使用する例である。それに対し、139・145・146は内面の卸目がV字状のものである。さらに、142は口縁の外反が緩やかで、独特の波状櫛目を施す例である。これらの卸目は、いずれも左回りに施されているが7~9条と個体によって数に相違がみられる。

ii) 越前系 (PL.81) ——越前系統の播鉢とみられるものの標式は、Fig.71NO.149・NO.151で示した形態である。口縁は外反度が少なく、底部立ち上りが無調整のため凹凸した状態になっている。口縁直下内面には、一条の凹を有するものが多く (148・149・150・152・154)、直線的になっているもの (153) や、口縁上端でへこんでいるもの (151) は少ない。また、焼成状態の相違から、軟質と硬質 (154だけ) に分けることもでき、概して軟質なものが多い。色調は

Fig. 71 播鉢実測図

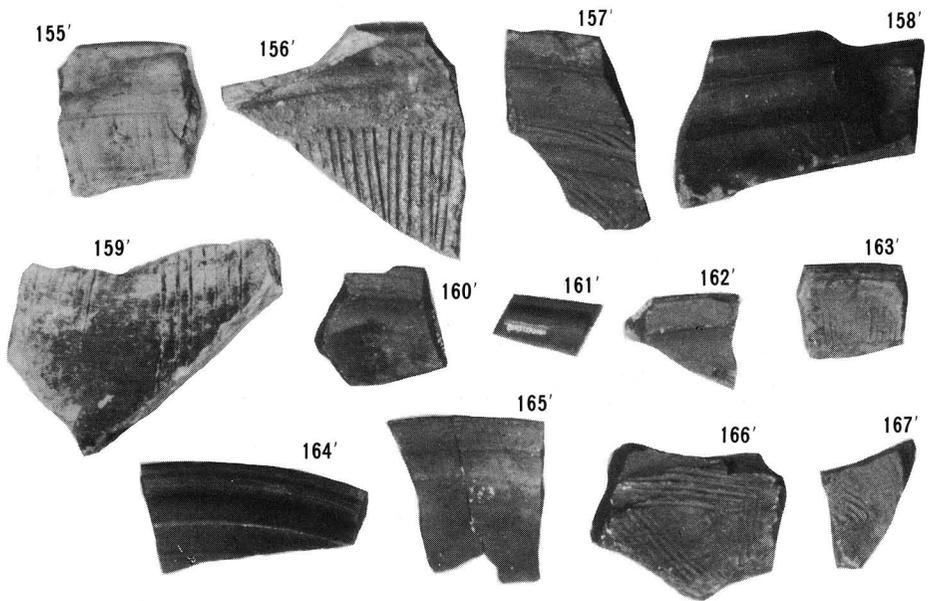
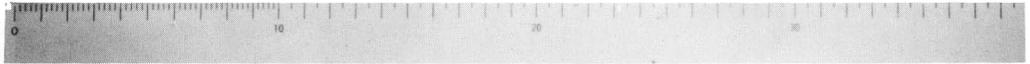
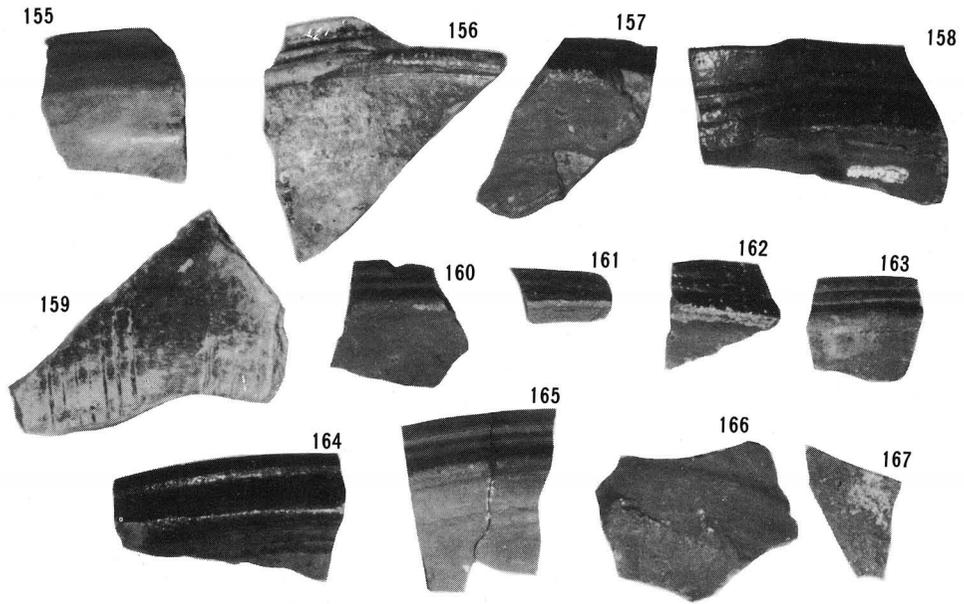




赤褐色から黒褐色と大きな幅がみられ、胎土は灰白色の精選された土を使用する例が多い。卸目は、幅3cm内外で、左回り9条で施されるという同一の特徴を有する。器体表面の観察で、越前甕にもなされていた篋ナデの痕跡が明瞭にみられる。

iii) 備前系 (PL.82) ——本年度までに13片ほどの出土をみたが、全形を推定できるものはなく、すべて部分的破片である。主要な特徴は、口縁の立ち上りが肉厚で外面に3つの段を有するものが多いことである。色調は小豆色あずきを呈するものが多く、暗灰色の胎土に白色砂・石英を含み、備前特有の良好な焼き締めがみられる。しかし、155・159だけは焼成不良で、赤橙色の色調に小石を多量に含む胎土で、口縁外面の段がない異質な一群である。卸目の状態は良好に理解できるものが少なく、5～7条のものが多いようで、カーブを描いて落ち込むもの(157)もあり、個体によるバラつきがある。155～165までは口縁部片、166・167が底部片である。また、156は薄手の造りであることから近世以降の製品の可能性もあり、付記しておく。

iv) 唐津系 (PL.52, Fig.71No. 1・2) ——S E50出土のもので、本例1点だけである。口縁は肉厚で丸味を有し、直下でややくびれながら底部に向う。底部はやや上底ぎみで調整が施されず荒っぽい造りである。また、灰色の胎土に白砂と黒砂が混入しており、硬質感のある

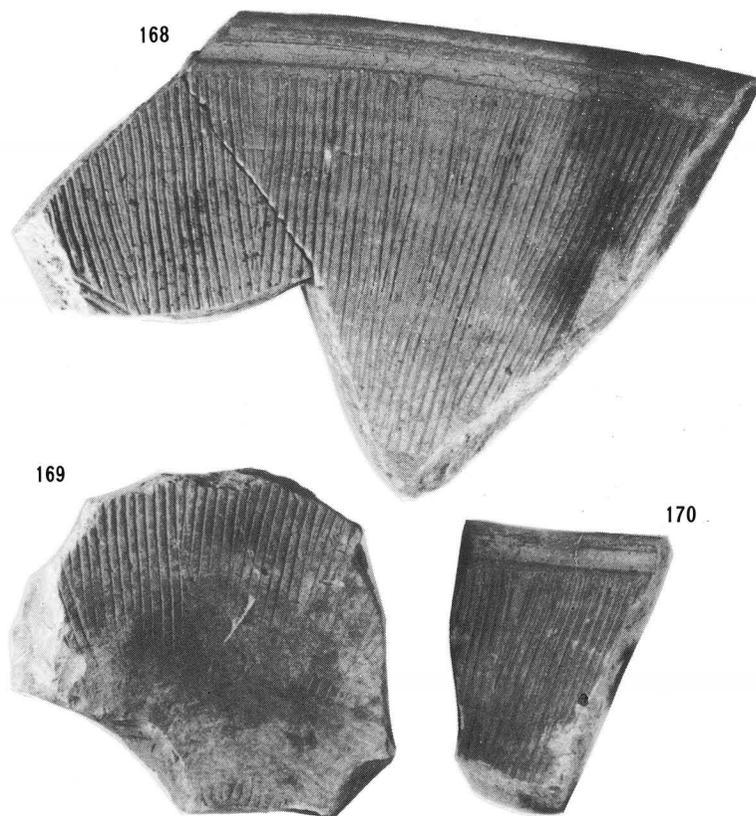


良好な焼き締めである。色調は内面が暗い黄茶色、外面はくびれ下半に鉄釉を施しているとみえ暗茶色を呈する。さらに底部には灰が存在したらしく、自然状態の灰釉がまだらに存在する。内面には、胴部全般にリング状の叩き目がみられ、それをつぶすような状態で卸目が左回り5条で無作為に施されている。

v) 系統不明のもの——浪岡城跡出土の中では出土数が最も多く、約6割以上の出土率である。ただし、焼成や成形の技法は越前系および珠洲系の特色を示すものもみられるところから、前述のものとはまったく異質なものであるという認識はなく、意外に同一の生産地である可能性も考えられる。

イ) (PL.83、Fig.71No. 168) 現在まで出土した播鉢の中では最大のもので、推定口径45cm、高さ20cmを計る。胎土は、赤褐色を呈する部分と黄灰色を呈する部分があり白い小石を多量に含んでいる。色調も全体に赤褐色を呈するが灰状のものが付着して白っぽくなっており、焼成も比較的良好である。口縁は越前系に類似して内面に一条の凹部を有し、底部の整形は凹凸がない。卸目は、左回り9条で施しているが、前述した越前系のように間隔をあけず、一回りした後に関をうめてゆくような状態で密集して施している。

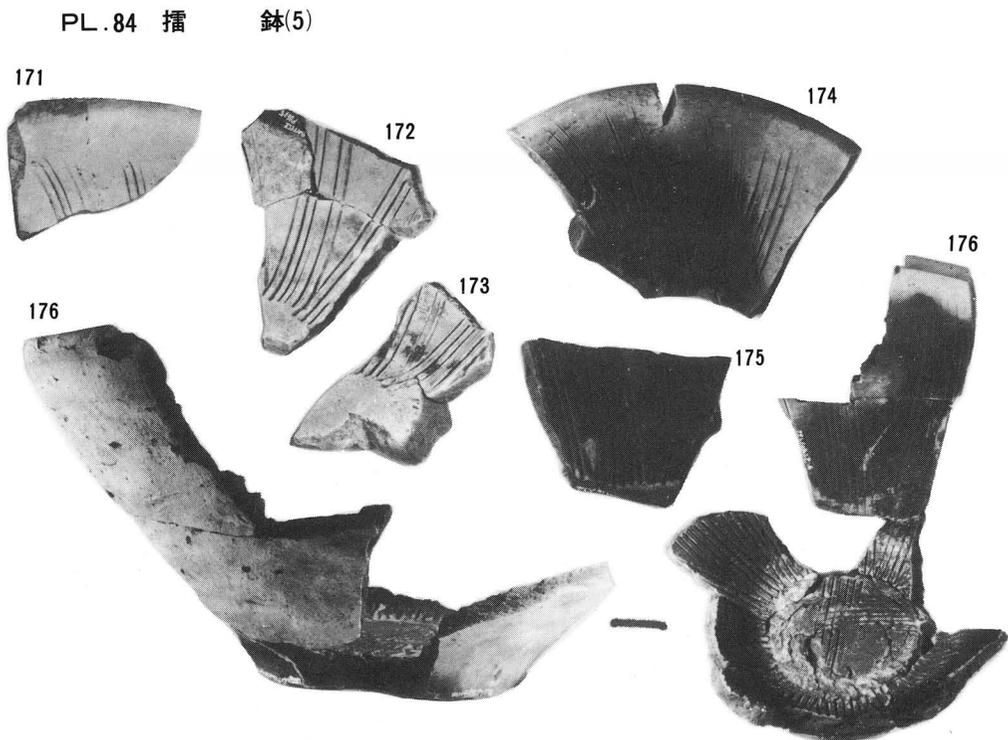
PL.83 播 鉢(4)



ロ) (PL.84、Fig.71No176)色調は、個体および部分によってかなりの違いがあり、赤褐色・黄白色・黒色などがある。胎土は小石などを含まず、精選された土を使用しているようで、焼成の段階で温度が上らなかつたためか、内側黒色外面黄白色のサンドイッチ状を呈するものが多い。口縁は、やや外反気味にゆるいカーブを呈するものと(171)、角ばつたような削りを入れるもの(176)、およびその中間形(174)がある。この播鉢の特徴は、卸目の入れ方が左から右へゆるくカーブを描いて入れる独特のもので、5条と6条があり左回りである。

ハ) (PL.85)色調は全体に灰色ないしはやや赤味のある灰色で、胎土には白砂と石英が多量に含まれている。焼成は良好で、系統不明として扱つたものの中では最も硬質感がある。口縁部は内湾気味の立ち上りを呈し、内面に一条の凹を有するのは越前系と類似するが、その位置が越前系よりやや下方に存在する。(177~181)底部は、立ち上り部分をきれいに整形するものと、粗雑な無調整のものとなつてあり、個体による相違がみられる。卸目は、10~13条左回りに施し、一部には縦の卸目の上に弧状を描いて横位に施す特徴もみられる。(181・185)

ニ) (PL.86、Fig.71No189)No189を標式とするもので、色調は黒色から青灰色、胎土は小石等の含有物が少ない精選された青灰色土、焼成は軟質で底部内面は播り減つた状態を呈する。



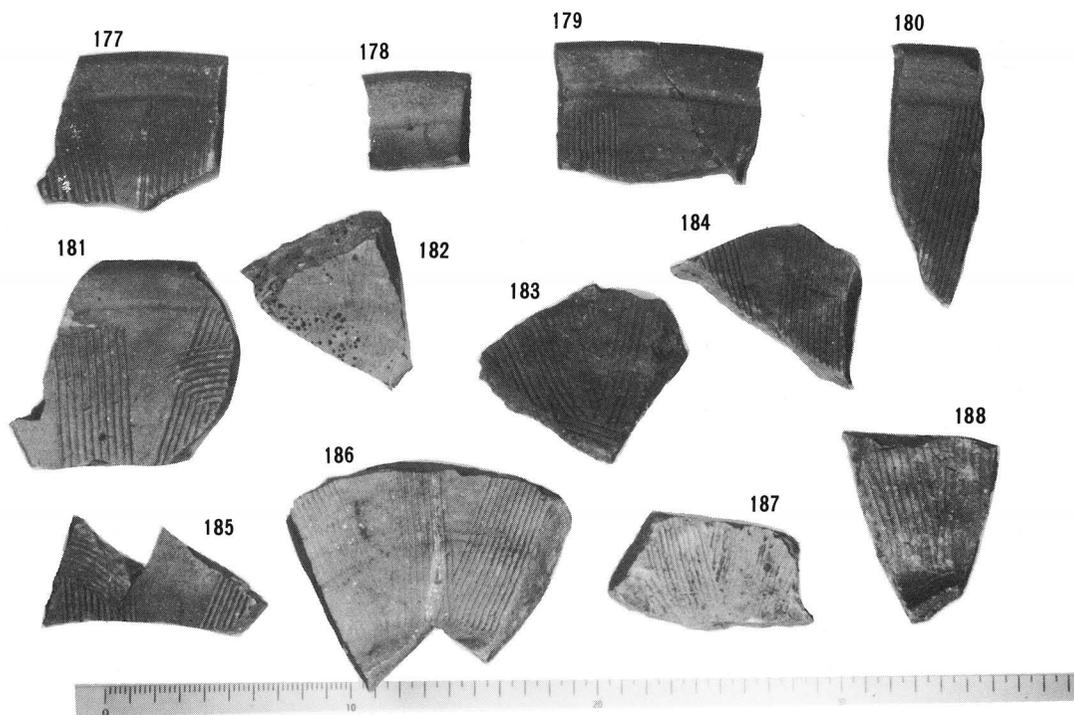
成形は輪積み手づくねであり歪みが激しく、器体が肉厚で残存部最大2.5cmを計り、外面は篋ナデによる整形痕が明瞭である。卸目は、おそらく8条のものゝ4条の櫛目2個を使用しており、8条のものを回した後その間に4条のものを施しているようである。4条のものは規則性がなく無作為な状態である。現在までにSE50から2個体分出土している。

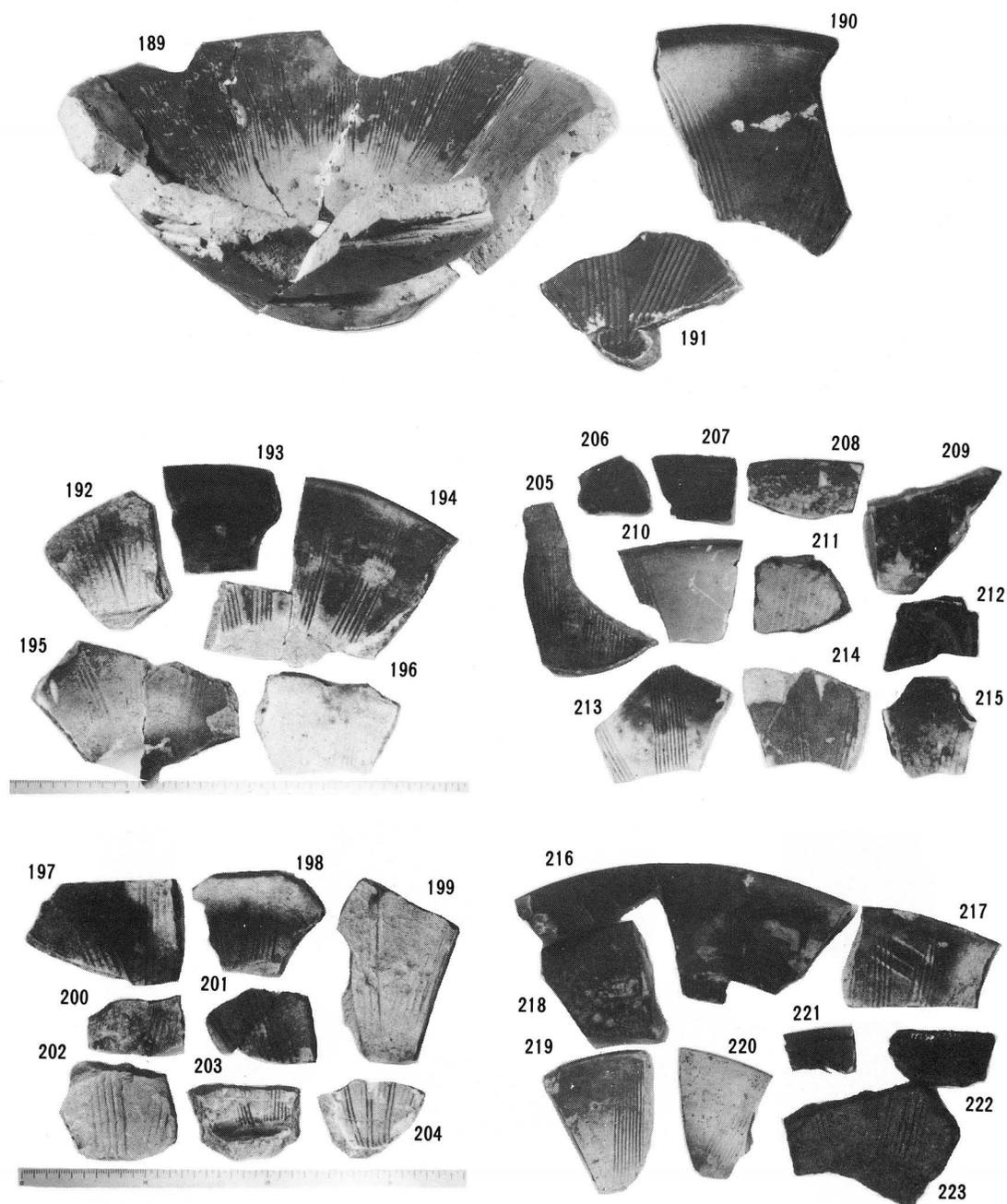
ホ) (PL.86—190・191) 色調は全般に黒色ないしは黒灰色のものが多く、一部に酸化状態の赤褐色を呈するものもある。胎土は白砂・石英を多量に含み、全属音を発する硬質なものが多い。口縁は、緩やかに外反し(190)、底部は立ち上り部分をきれいに整形している。御目は、幅広で先の丸い櫛目を使用する特徴がみられ、7ないし8条の櫛目が左回りで施される。

以上が、系統不明の一群についてみた、特徴別分類どあるが、他にも多数の挿鉢がある。(PL.86No.192~223) この中には、前述した分類項目のうち色調・胎土・焼成・成形および整形技法・形態・卸目技法のある程度までは一致するが、十分に意を尽した分類ができないものである。たとえば、192~204の一群は胎土・焼成については越前系と類似し、形態は系統不明(二)、卸目技法は系統不明の各類が混在しているのである。(系統不明の別類の可能性もある。)また、212・222は、卸目を屈曲させる特殊な例であるが、胎土・焼成・色調は系統不明(ホ)に類似して、卸目技法だけが相違するのことも考えられる。

いずれにしても、全体の器形を知る資料が少ないため、詳細な整理をすることは困難であり、今後の調査による新資料発見に期待したいと考えている。

PL.85 挿 鉢(6)





M. 瓦器 (PL.87、Fig.70、Ch.79)

本報告書で使用している瓦器という名称は、「中世の瓦質土器で主な器形が手焙り・行火・壺である」ものを言い、特別な意味を有しない。

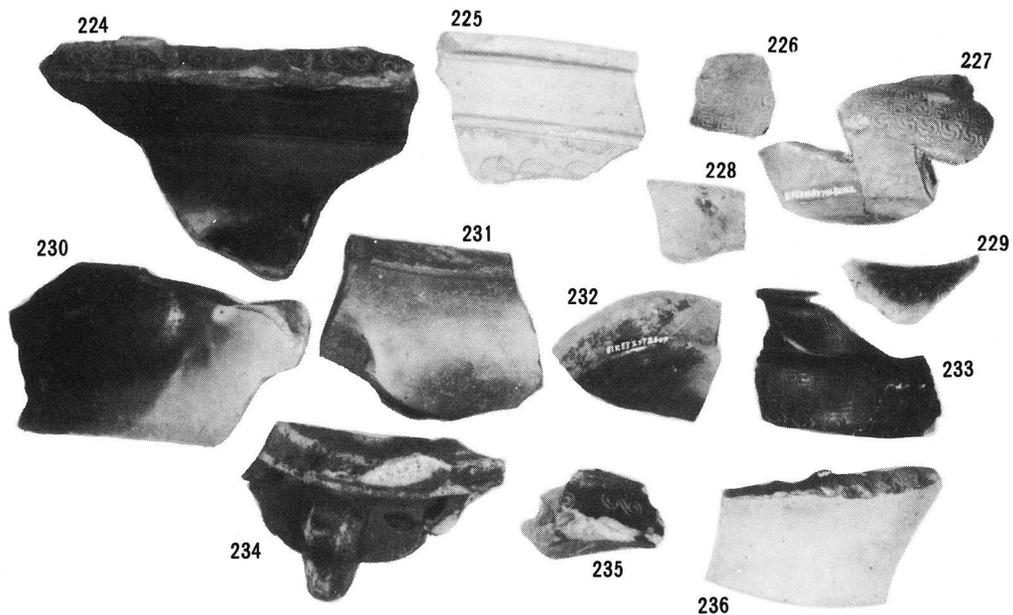
本年度の出土数は57片であり、器形としては手焙り(火鉢)、壺があった。もともと破片のため全体の器形を理解できるものはFig.70No.227・233の壺形2点だけである。

火鉢には、基本形が円形と角形が存在するが本年度は円形のものしか出土していない。そして、外面を黒色研磨処理するものの中では、「浪岡城跡IV」PL.145・146で図示したNo.176に接合する口縁部破片(224)が1点、やや丸味を有する胴部片(230・231)の2点を示すことができる。また、張り出し状の胴部片(235)、脚の部分(234)もみられる。黒色処理をしていないものには、隆帯に区画された胴部に松葉・丸に十字・逆S字などのスタンプ文を施した例(225)が存在する。また、高台状になった脚と推定される部分(236)もある。

壺には、胴部上半に雷文・巴文をスタンプにしたもの(226~229・223)が多く、黒色処理(233)と未処理(227)がある。これらの器形はFig.70で図示したように広口壺(あるいは小鉢と言えるかもしれない)であり、大型のものはない。

瓦器は、一般に破損度が高いためと、器形に関するバリエーションが多種に及ぶところから実測図の作製が十分に意を尽せない状況にある。

PL. 87 瓦 器



N. かわらけ (PL.88、Fig.72、Ch.80)

かわらけと認定できるものは、3点だけ出土している。口径8.5~10cm、高さ1.6~1.8cmという小皿状の器形で、ロクロ成形、糸切りによる回転切り離しの技法を有する。焼成は、後述する古代の土師器より不良な状態で磨耗の激しい部分もみられる。特に239は、糸切底の痕跡も磨耗気味である。かわらけの機能としては一般的に灯明皿を推定できるが、238は口縁部にススの付着があるため灯明皿と考えてよいと思う。

出土状態をみると、竪穴遺構覆土や遺構確認面からのいわゆる中世の面から出土しており土師器・須恵器より時代が下る製品とみて大きな誤りはないだろう。

O. 溶解物附着土器 (PL.89、Fig.72、Ch.81)

溶解物附着土器は、銅製品の鑄造に使用した坩堝であり、胎土に粃殻が多量に含まれ、手づくね成形による製品である。出土数は約200個体以上と多く、未使用のもの(247)も若干存在するが、大部分は内面および口縁付近に銅の溶解物が付着したものが多い。器形の大きさは、最大のもので幅11cm、高さ4.2cm(243)であり、幅7cmで高さ3cmのものが一般的である。

出土状態は、S T117など竪穴遺構から集中して出土する以外、全地域から平均的に出土する。鑄型や羽口と共伴することも多い。

P. 鑄型

今回の調査では細片のため図示できなかったが、S T117出土のものに(PL.25No.12・13・14)鑄型のものらしい鑄型があった。約10片の出土をみた。

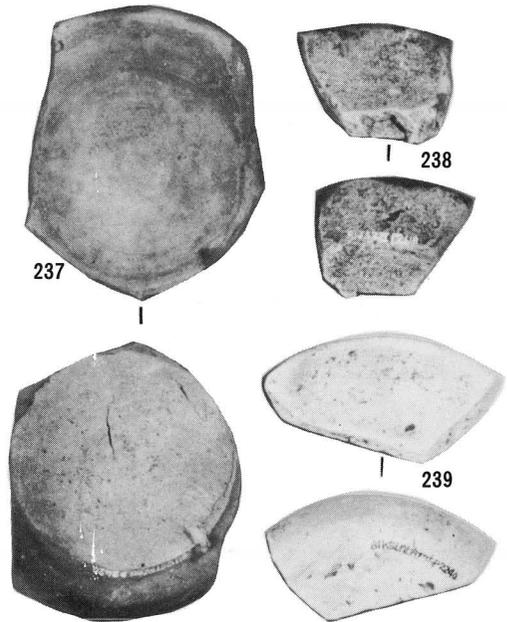
Q. 羽口

S T117出土のもの(PL.25No.10)、S T130出土のものなどがあり、全体で15片ほどの出土があった。

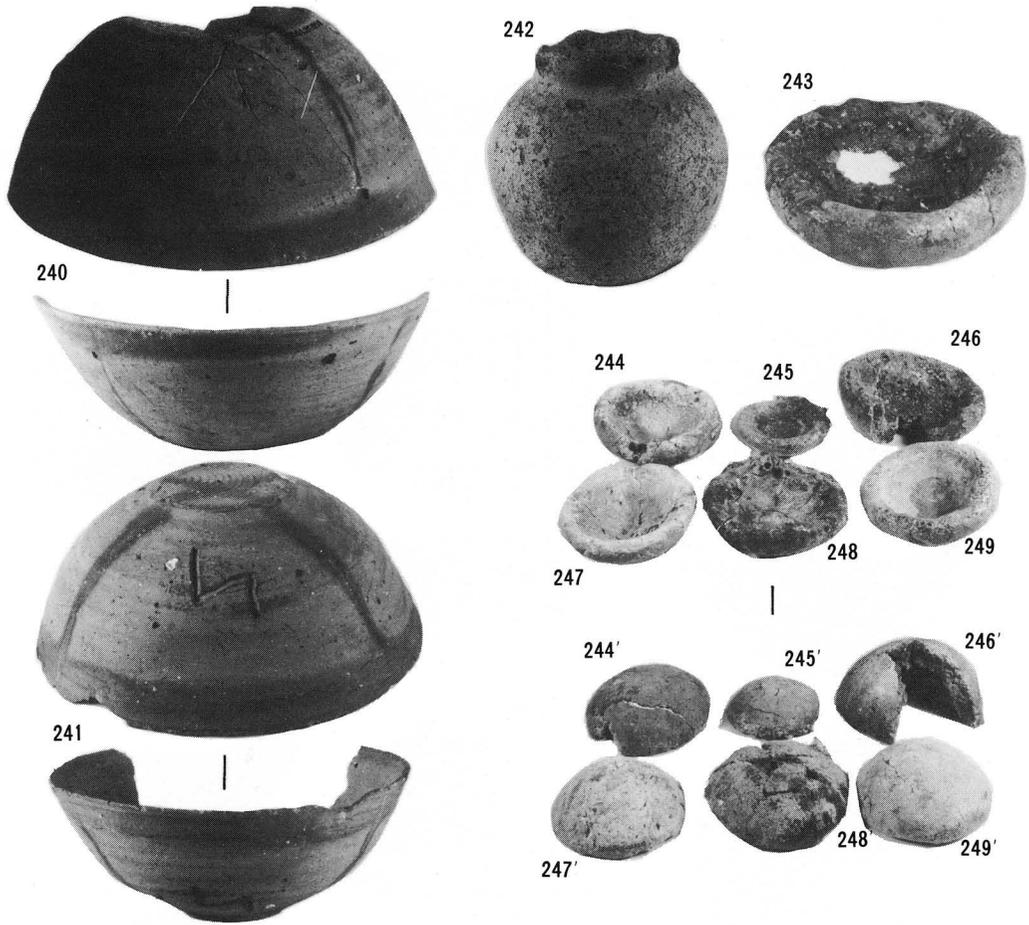
R. 土師器・須恵器 (PL.89、PL.90、Fig72、Ch.82)

ここで言う土師器・須恵器は、浪岡城跡の形成期とは直接関係のない古代(10~12世紀と推定される)に製作されたもので、出土する遺構も溝など一部のものに限られ、攪乱による時期不明確なものは除いてある。

PL. 88 かわらけ



PL.89 溶解物付着土器(埴埜)
・須恵器・他



土師器は甕と坏の器形があり、甕は全形を知り得るものはPL.90No.257に示した高さ8.2cmの小形のものしかなく、あとはいずれも細片で散乱出土している。坏についてみると、内面内黒のもの(253・252)、ロクロ成形によらず外面をヘラ削りで調整するもの(250)、外面にヘラ調整の痕跡があるもの(255)、底に高台を付けるもの、底部から胴部にかけてススが付着するもの(251)などがある。また、色調は赤褐色であるが叩くと全属的な音を発する、土師器と須恵器の中間と考えられるものもある。(254・258)

須恵器は甕・壺・坏の器形がある。甕・壺については未処理の状態であるため、坏についてのみ報告する。坏には、口縁が外反するもの(256)、墨書のみられるもの(259)、ヒダスキ痕と篋書記号のみられるもの(240・241)などがある。一般的に暗灰色の色調を呈するものは少なく、赤味を帯びた酸化状態のものが多い。篋書記号としては、「W」「V」が知られる。

以上、土師器・須恵器について述べたが、時間的制約もあり次回の報告で詳細に報告する予定である。

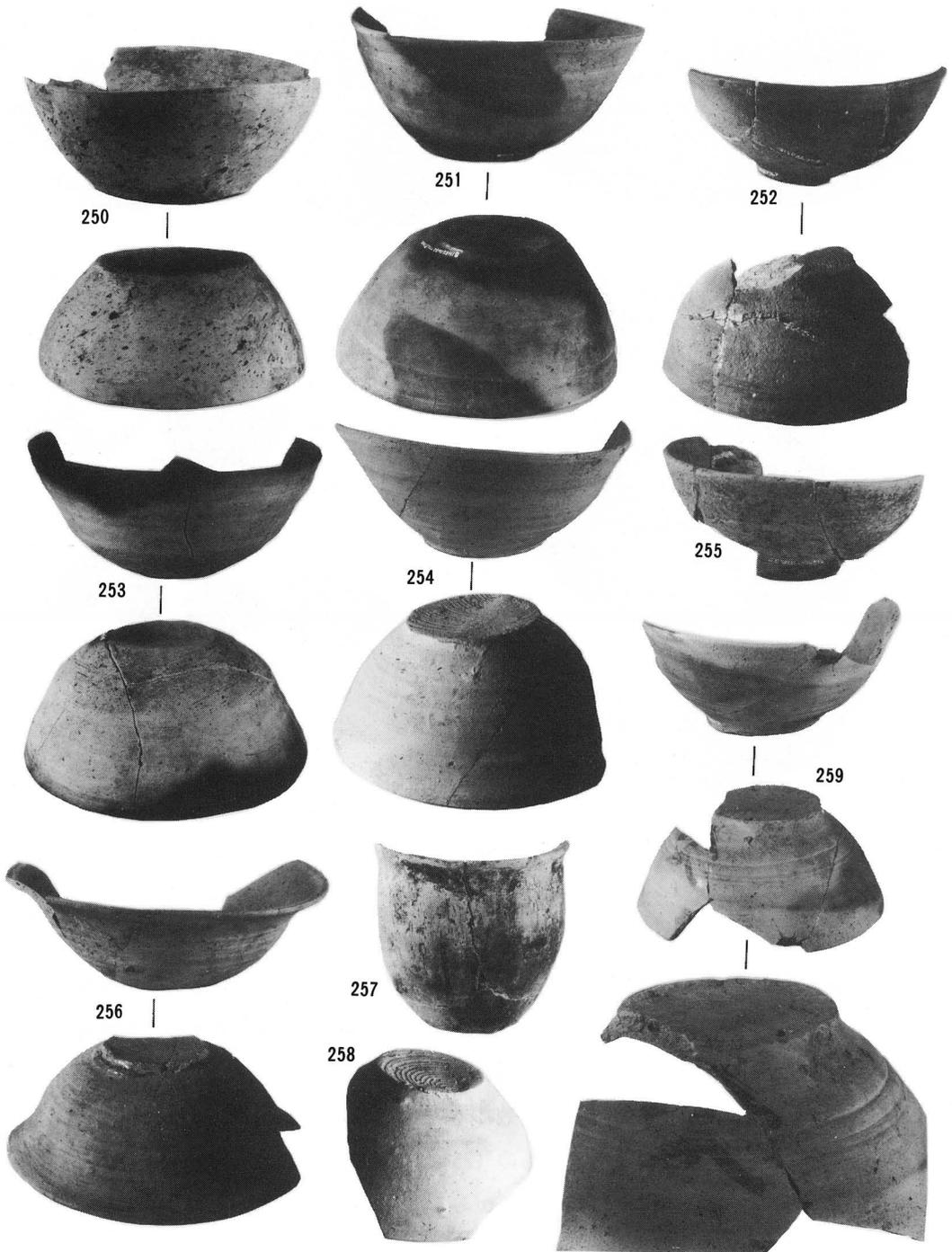
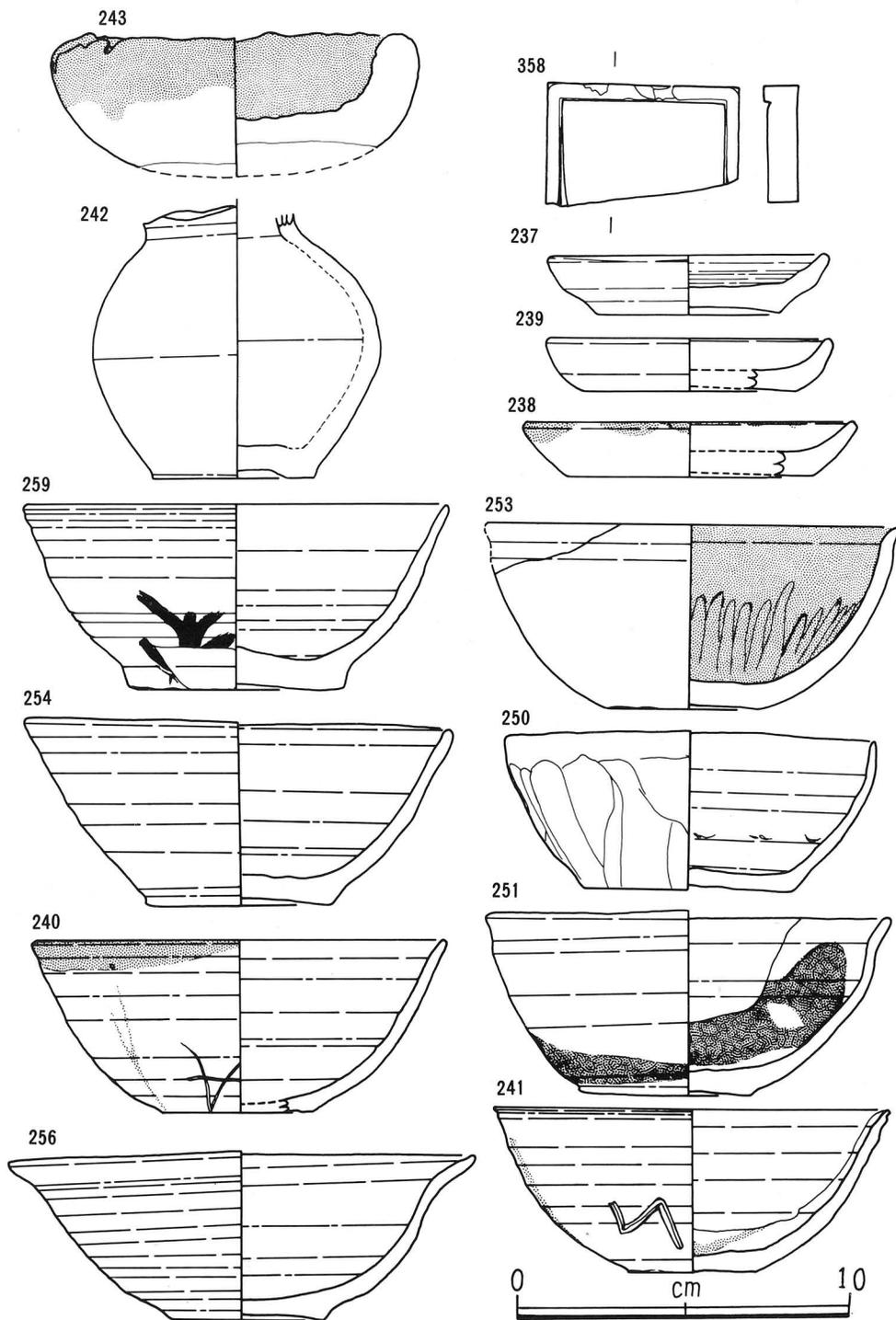


Fig. 72 溶解物附着土器・かわらけ・土師器他実測図



〔陶磁器類のまとめ〕

浪岡城跡の出土遺物の中で陶磁器の占める重要性は特筆すべきものがある。それは単に量的に多いと言うだけでなく、構成と時間幅が県内でも屈指のものであるという点である。下表は、発掘年度別破片数を表わしたものであるが、概括的に以下のことが言えると思う。

- ①搬入陶磁器の半数以上は、中国製品を主体とする舶載品である。
- ②饗膳具の主体となる碗・皿類における舶載品の比率は約75%にも及び、舶載品を搬入し得る経済基盤・交易の充実が理解できる。
- ③播鉢（調理具）・瓦器（暖房具）・越前信楽甕（貯蔵具）の比率は約18%強であり、陶磁器の主体が饗膳具であったことがわかる。
- ④舶載品の中で、青磁45.47%、白磁17.98%、染付36.02%、赤絵・朝鮮0.5%の比率を占め、碗の主体は青磁、皿の主体は染付という器種・器形における機能分化を知ることができる。
- ⑤国産品の饗膳具の中では美濃灰釉皿が61.53%と圧倒的に多く、天目碗も常時全体の3%の出土率を示すことは注目される。また、唐津の製品は発掘地域によって若干の増減が認められる。

浪岡城跡陶磁器類出土率表

発掘年度	器種 器形 調査区	青磁			白磁			染付			赤絵	朝鮮	美濃(灰釉)		美濃(褐釉)			志野	唐津			播鉢	瓦器	越前	信楽	かわらけ	小計
		碗	皿	他	皿	小皿	他	皿	碗	他			皿	他	天目	皿	他		皿	皿	他						
52	東館	2			3								4				1		2								12
		16.66			25.0									33.3				8.33		16.66							
53	東館 北館	44	23	5	15	1	1	61	17	1			53	6	8		6	3	1		52	1	5	9	1		313
		14.05	7.34	1.59	4.79	0.31	0.31	19.48	5.43	0.31			16.93	1.91	2.55		1.91	0.95	0.31		16.61	0.31	1.59	2.87	0.31		%
		22.98			5.41			25.22					18.84														
54	北館	102	74	14	9		2	144	6	2		2	104	7	35		3	29		60	58						651
		15.66	11.36	2.15	1.38		0.30	22.11	0.92	0.30		0.30	15.97	1.07	5.37		0.46	4.45		9.21	8.90						%
		29.17			1.68			23.33					16.04														
55	北館	173	109	13	123	3	1	149	39	4	2		161	15	32	24	1	27		111	163					3	1,153
		15.0	9.45	1.12	10.66	0.26	0.08	12.92	3.38	0.34	0.17		13.96	1.30	2.77	2.08	0.08	2.34		9.62	14.13				0.26	%	
		25.57			11.0			16.64					15.26														
56	北館	209	145	32	167	10	39	274	26	26	6	1	276	23	39	32	4	4	71	4	149	57	37	3	3	1,637	
		12.76	8.85	1.95	10.20	0.61	2.38	16.73	1.58	1.58	0.36	0.06	16.86	1.40	2.38	1.95	0.24	0.24	4.33	0.24	9.10	3.48	2.26	0.18	0.18	%	
		23.56			13.19			19.89					18.26														
計		530	351	64	317	14	43	628	88	33	8	3	598	51	114	56	10	11	129	4	374	279	42	11	7	3,766	
		14.07	9.32	1.69	8.41	0.37	1.14	16.67	2.33	0.87	0.21	0.07	15.87	1.35	3.02	1.48	0.26	0.29	3.42	0.10	9.93	7.40	1.11	0.29	0.18	=100%	
		25.08			9.92			19.87					17.22														
		55.15									25.79									18.91					%		

注意 ①統計上の数値は陶磁器の製作年代を考慮に入れていない。

② “ ” は破片数であり個体数でない。

③パーセントは小数点第3位以下を切り捨てている。

2. 鉄・銅製品 (PL.91~94、Fig.74・73、Ch.83・84)

鉄・銅製品を機能分類すると、A 武具、B 生活具、C 建築具、D 宗教具、E 農具などに分けることができ、以下分類別に報告する。なお、詳しい出土点数は未整理のものがあるため記述を割愛する。

A. 武具

イ. 轡^{くつわ} (260) ——馬具も戦時に多く使用するもので武具の中で記述する。260はS T103の床面から出土したもので、一部欠損するものの形態が良くわかる資料である。鏡の部分は丸に十字のいわゆる「十文字轡」の特徴を残し、嚙^はみの部分は肉厚な鍛えをしている。立聞の輪は楕円状を呈し、鏡の部分に接合するところまでは角の断面形を呈するが、鏡の部分で丸の断面形になる。搦みの輪は1個しか残存しておらず、それと付属する水付は欠損している。鏡の部分の直径は11cm~13cmの大きさである。

ロ. 刀 ——261はS T102床面出土の刀である。全長59.45cmで、錆化が進んでいるため茎の部分は明確でない。反りは約1cm、棟幅0.6cm、刃幅が2.6cmと長さに対して細味の印象を受ける。重さは390gあり、ずっしりとした重量感がある。263~266および292・293は小刀であり、茎の部分に木部が残存しているもの(265)もみられる。長さは20cm以内のものが多い。

ハ. 鉄鎌 ——鉄鎌の形態も各種存在する。円錐形の形状で、中に木を装着するような空洞もたせた打根と呼ばれるもの(267・268・275)、先端が鑿状を呈し篋被の部分^{せき}が明確なもの(270)と不明なもの(274)、根と茎の相方が先細そになっているもの(271・272)、最も鎌らしい平根のもの(273)などである。

ニ. 小札^{こざね}(A) ——二目札と三目札がある。二目札は上辺が傾斜をもつもの(278・279)と、中央がくびれた二山状を呈するもの(280・281・283~285)があり、大きさが同一のものは少ない。最大のもの(280)で8.6×3.3cm、最小(284)6.0×2.0cmである。なお、黒漆が付着しているもの(279)も若干みられる。三目札(282)は1点だけの出土であった。

ホ. 鐺^{つば} (324) ——いわゆる木瓜形の鐺である。耳の部分は若干高くなっており、四ヶ所に猪目の彫り込みもみられる。全体に二次焼成痕があるため凹凸した感じになっているが、肉眼観察では七七五状を呈する部分もみられる。暗緑色の色調である。

ヘ. 切羽^{せつば} ——外縁を菊花状に成形したもの(323)と木瓜形を呈するもの(337)がある。

ト. 鐙^{こじり} (338) ——外側面に七七五をまき、花と蔓状の文様を削り込んだものであり、二次焼成のため地が剝落している部分もみられる。

チ. 小柄^{こづか} ——一般には文様等を施さないもの(325・326・328)が多いが、327は、片側面に線刻による文様が存在する例である。文様は不明)

リ. 筭^{こうがい} ——耳搔^{みみかき}は333を除いてすべてにみられ、長さも20cm内外のものが多い。蕨手のあるものはなく、眉形の切込が1ヶ所のもの(330・332)と3ヶ所のもの(329)がある。胴の文様

PL.91 鉄製品(1)

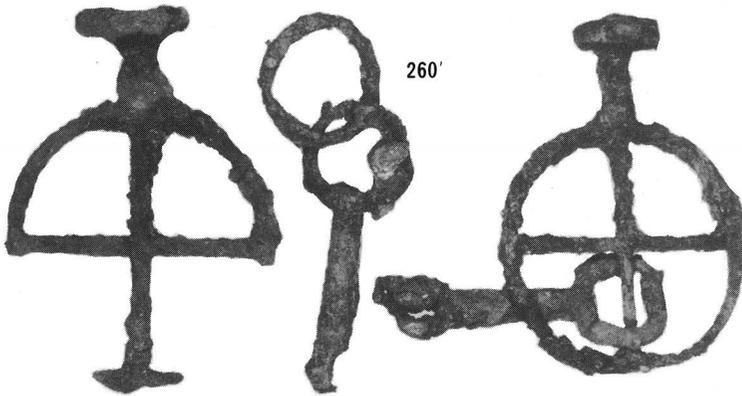
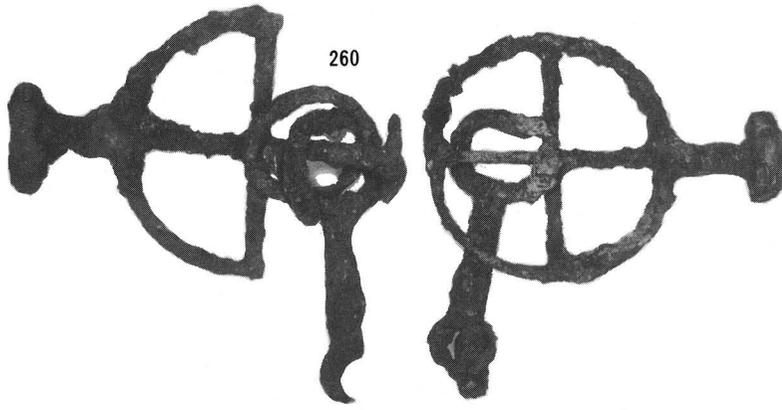
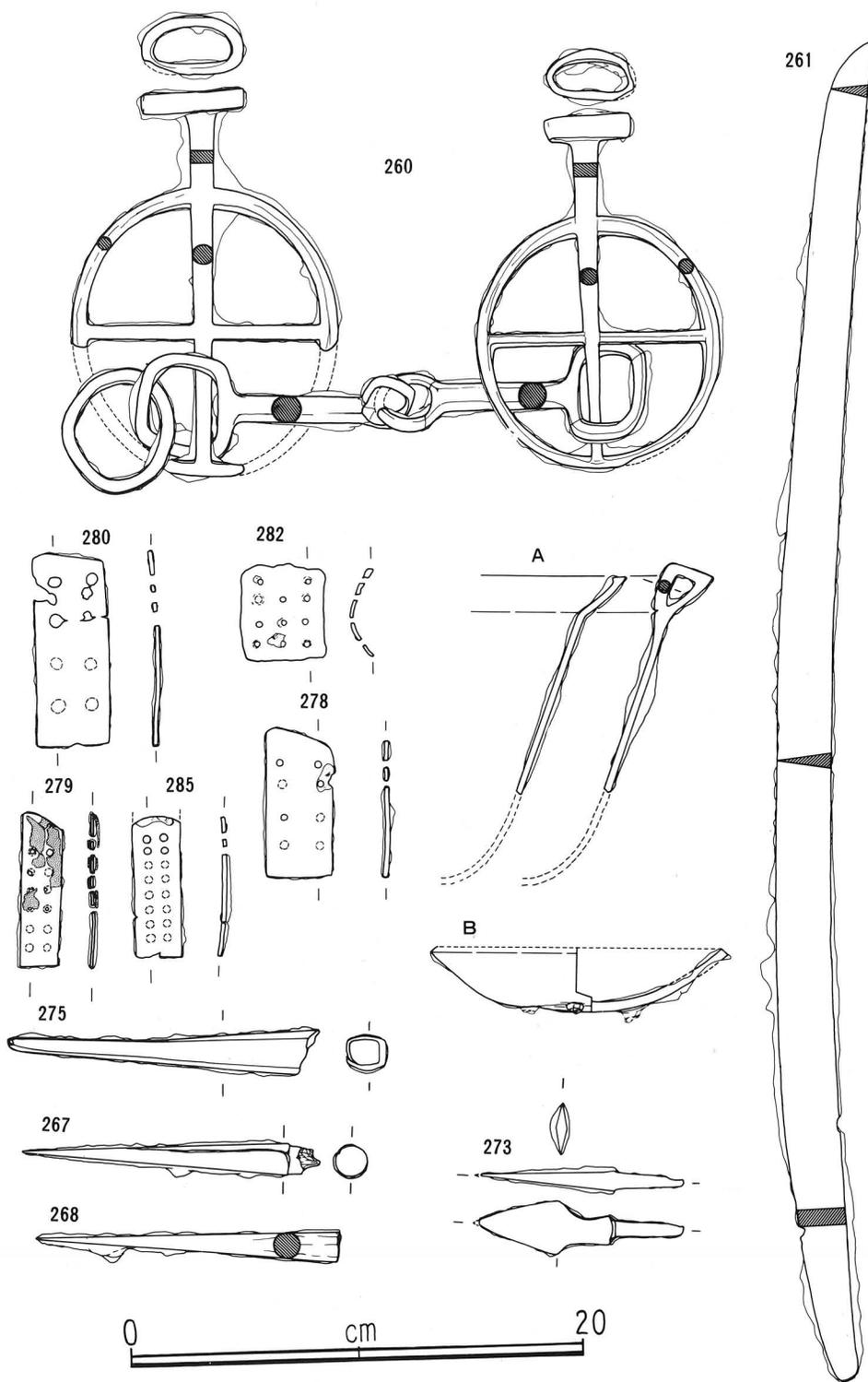


Fig. 73 鉄製品実測図



はすべて相違し、七七五をまいた後に一本の紋を有するもの(329)、丸い紋を三つ配置したものの(330)、七七五をまいた後に花状の紋を1ヶ所打ち込んでいるもの(331)、全体にレリーフ状の削り込みを入れたもの(332)などがある。

ヌ. 火繩鋏(334)——火繩銃の火繩を装着するもの。装着部がU字状を呈し、支点となる丸い穿孔の上は4段に渡って削りがみられ、後部はL字状に折れ曲っている。

ル. 鉄砲玉(335・336)——直径1.2~1.3cmの鉛玉で、半球のものを二つ接合した状態になっている。重さは約10gである。

B. 生活具

イ. 鍋——鉄鍋と思われるものの出土量が多いが、いずれも破片のため図化できない状況にある。口縁の形態には内耳のもの(Fig.73A)と口縁上に鉉を装着するための突起と穴を有するものがあり、内耳のものが少ない傾向にある。また、底には、三足を常とする足が存在するものが多く、Fig73Bで示した皿状の鉄製品も、鍋の底と考えることができる。

ロ. 苧引金(276)——麻の繊維をとるための用具で、木部が残存しているものもある。

ハ. 火箸(262)——長さ38cm、先の部分は角の断面を呈するが手で握る部分はねじりを加えており、本例は2個一対で出土した珍しい例である。

ニ. 毛抜鋏(343)——銅製のもので、先の部分がやや幅広になったものである。

ホ. キセル(Fig.74B)——雁首の部分で吸い口の方向に木部が若干残っている。

C. 建築具

イ. かすがい——打ち込む方向が長いもの(286)と短いもの(294)があり、いずれも上端部分の幅が厚さよりも広い。

ロ. 釘——長さは1寸のものから5寸のものまで各種みられ、断面形はすべて角である。288~290の3本は打ち込んだ部分の木部が付着したまま残存している例であり、311は木部によって本体が隠れている。他298~316まで鉄釘である。鉄製品の中で最大の出土量がある。

D. 宗教具

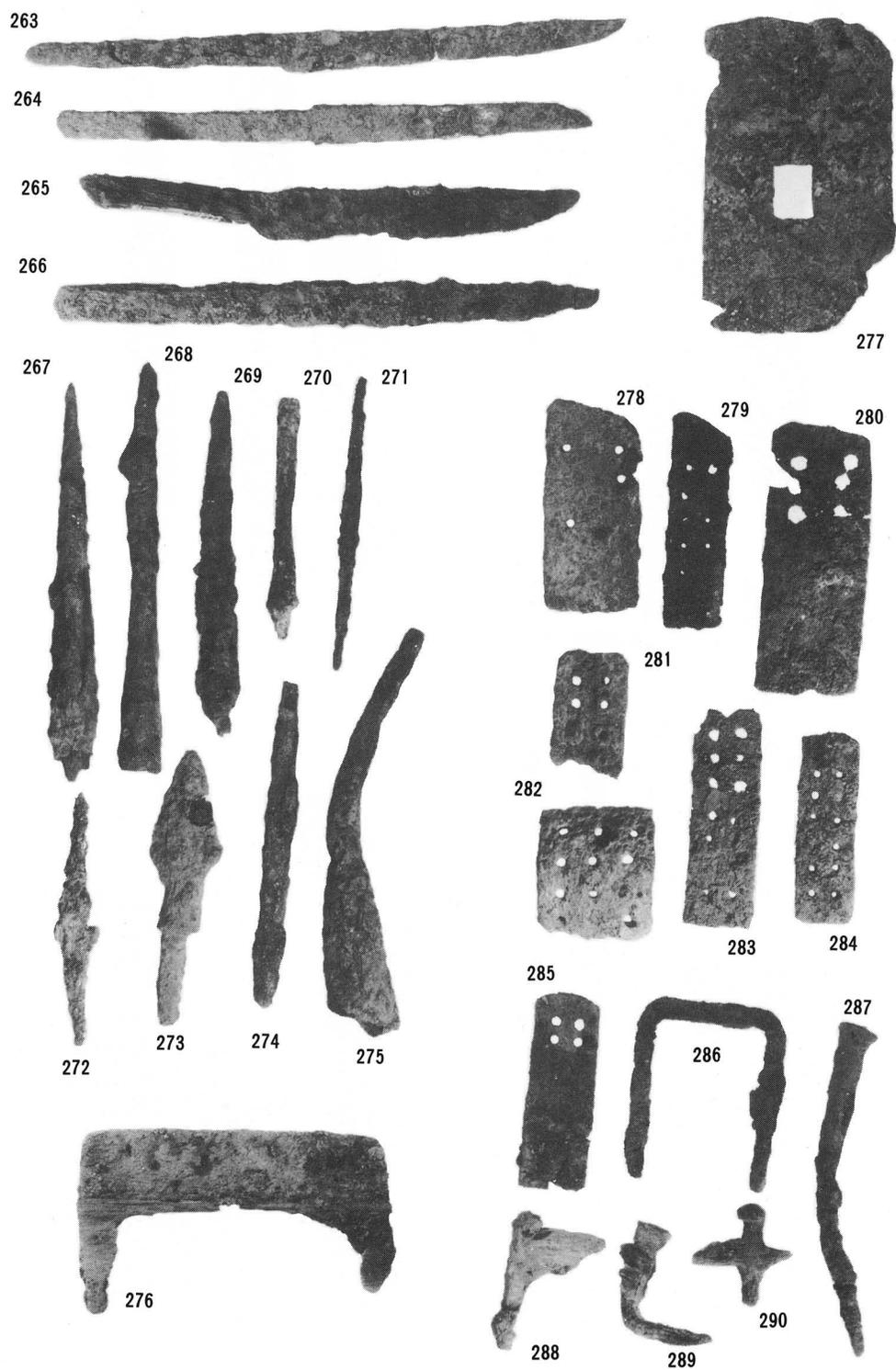
イ. 蓮弁状銅製品(342)——部分的出土であるため不明確であるが、法具の台、盤として使用するものではないかと考えられる。破損部の一箇所にひょうたん形の穿があり、それと対になる部分にはみられないことから、三足の痕跡ではないだろうか。

ロ. 鏡(Fig.74A)——鏡の縁だけの出土である。推定口径は約14cmである。

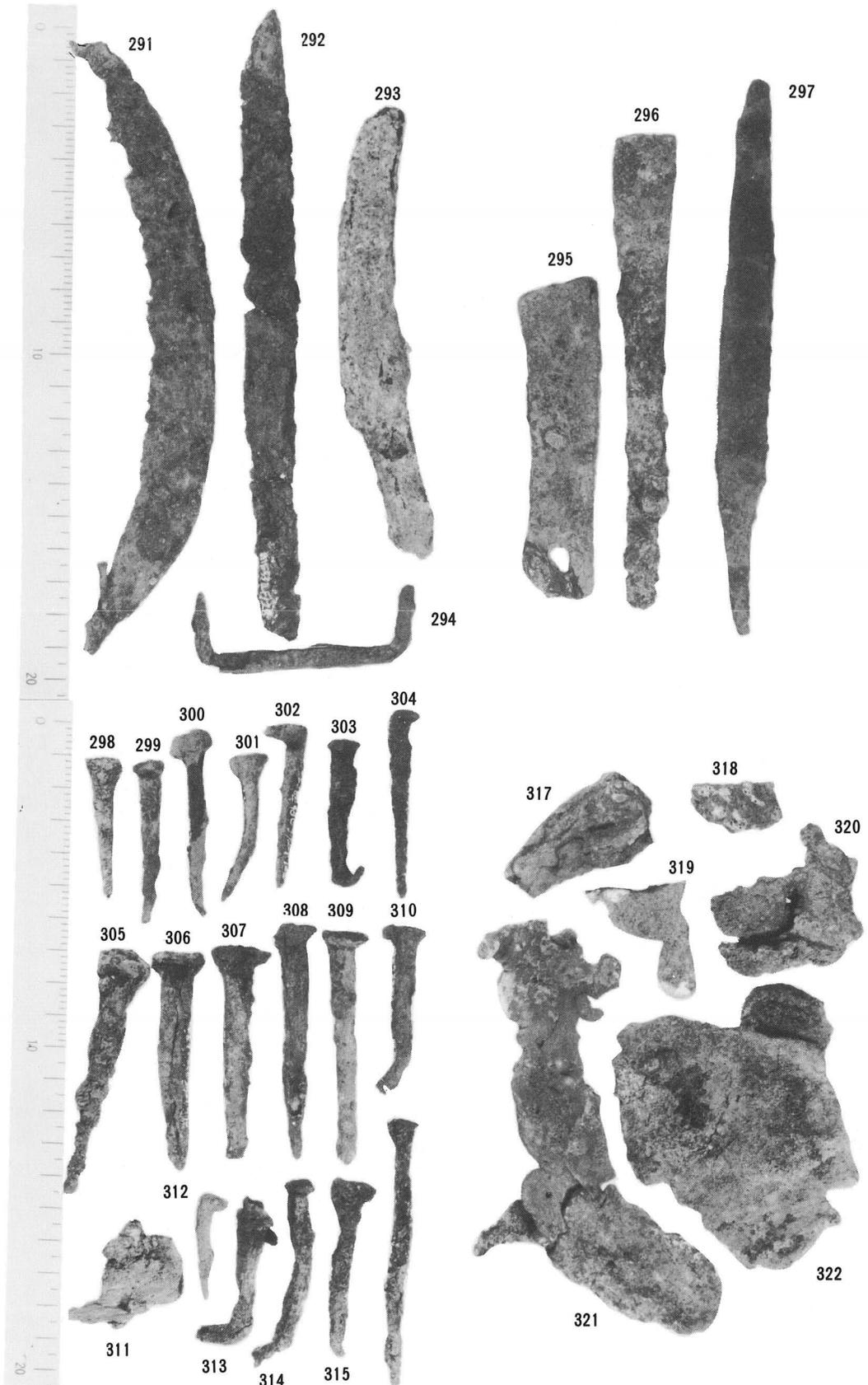
ハ. 銅管(345)——用途は不明であるが、表面は全体に光沢があって日常的に使用された痕跡があること、さらに直線的製作ではなく緩い弧状に整形されていることから、仏具関係のものと推定される。

ニ. 皿状銅製品——厚さは0.06cmの薄い皿状の器形で、立ち上り部分の3箇所に穿孔がみられる。普通は計量をする場合の受皿的機態を推定できるが、径4cmと小形であるため仏具関係

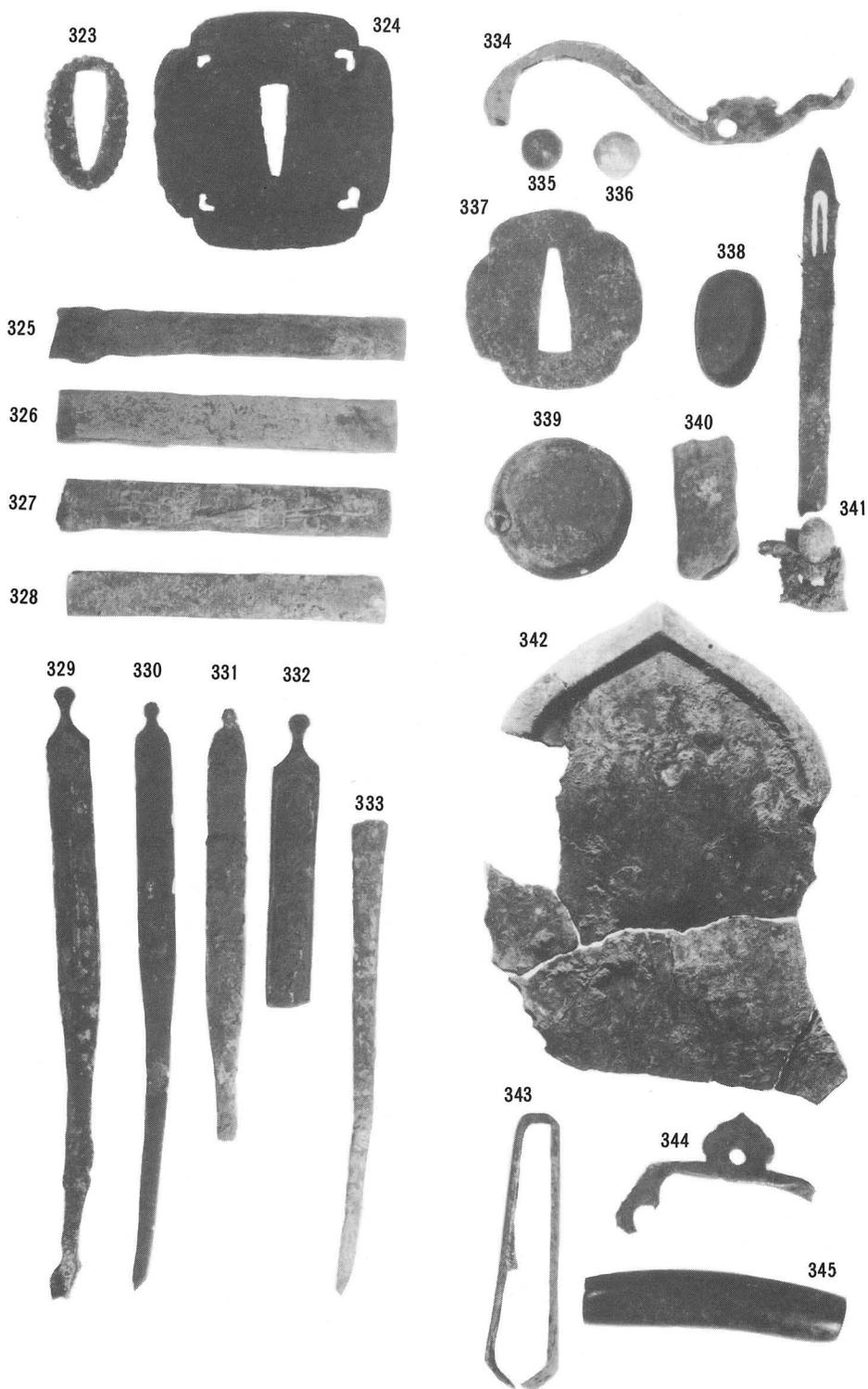
PL.92 鉄製品(2)



PL. 93 鉄製品(3)他



PL. 94 銅製品



の用具とも考えられる。昭和55年の調査では銅錘も出土しており関連があるのだろうか。

E. 農具

浪岡城跡は城館という性格のためか農具の出土は少ない。本年度も、鎌鋸(291)が1点と、鎌が数点出土しているだけである。

F. その他の鉄・銅製品

ここでは用途不明のものとして取り扱う。

277 長方形に成形された2つの角を斜めに欠き、中央に1.8×1.3cm角の穴をあけた平板状のもの。

295 長さ9.9cmで片側に一穿があり、肉厚な製品。

296 長さ14.4cmの板状の製品。

297 最大幅1.5cm角の槍状の製品であるが、刃部はなく建築具としての使用であろうか。

317~322 銅滓。

340 銅板を二つに折り重ねた状態のものである。

341 一見すると網を製作する時の杼^ひのようであるが、出土した時に基部に銅製鋌と共に鉄製品が付着していた。杼のような部分と鋌とは穿孔によって接合していたことが確実であることから、杼以外の用途を考えなければならないだろう。

344 家具などの取手に見えるが、蓮弁状の中央部とそれに対峙する両側は対照な整形でなく、本資料で単独の製品と考えた方が良いと思う。武具・仏具の可能性もある。

鉄・銅製品の大部分はいわゆる武具・建築具の類であり、浪岡城落城に関する歴史的経緯を物語ると考えられる。特に注目すべき事実として、轡や刀を出土させた遺構が大型の竪穴遺構ということである。昭和55年調査区においてもST81という大型の竪穴遺構から銅鏡二面が出土するなど、竪穴遺構の性格を考える場合にも特色ある出土状態を示す。また、ST121出土の銅製品(鐔・筭など)は明らかに火災にあった痕跡を残しており、落城時における人々の動揺する姿を推定することができる。

3. 石製品 (PL.95・96、Fig.72、Ch.85)

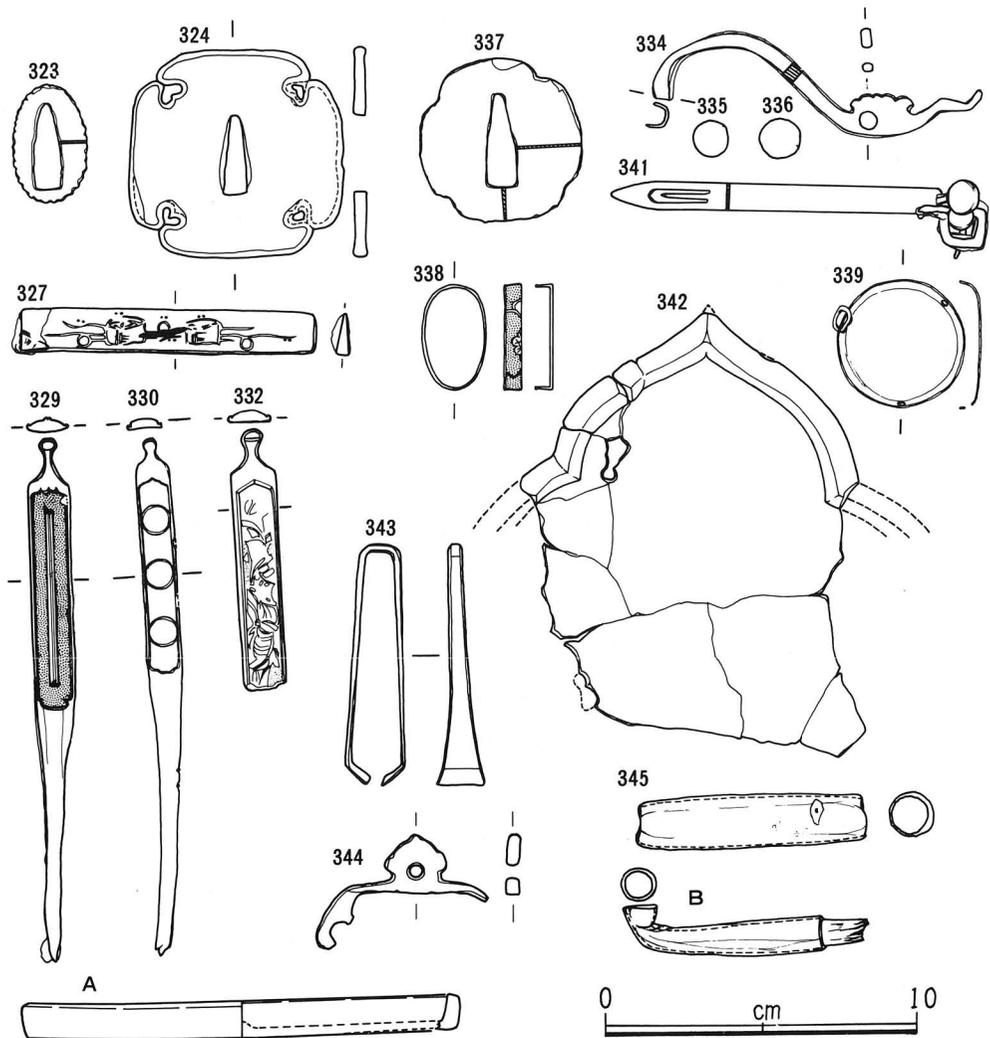
石製品として出土したものには、臼・鉢・硯・砥石・火打石と縄文時代の石斧などがある。

A. 臼 (PL.95)

出土した臼はすべて破片のため全体の形状・大きさを理解できるものはないが、大別すると受皿状のものを有する例とない例がある。石質はすべて安山岩系の素材であるが風化の激しいものと、比較的良好に残存するものがある。

上臼の場合、横に取手を入れる穴を有するもの(346・349)と、供給口がみられるもの(348)

Fig. 74 銅製品実測図



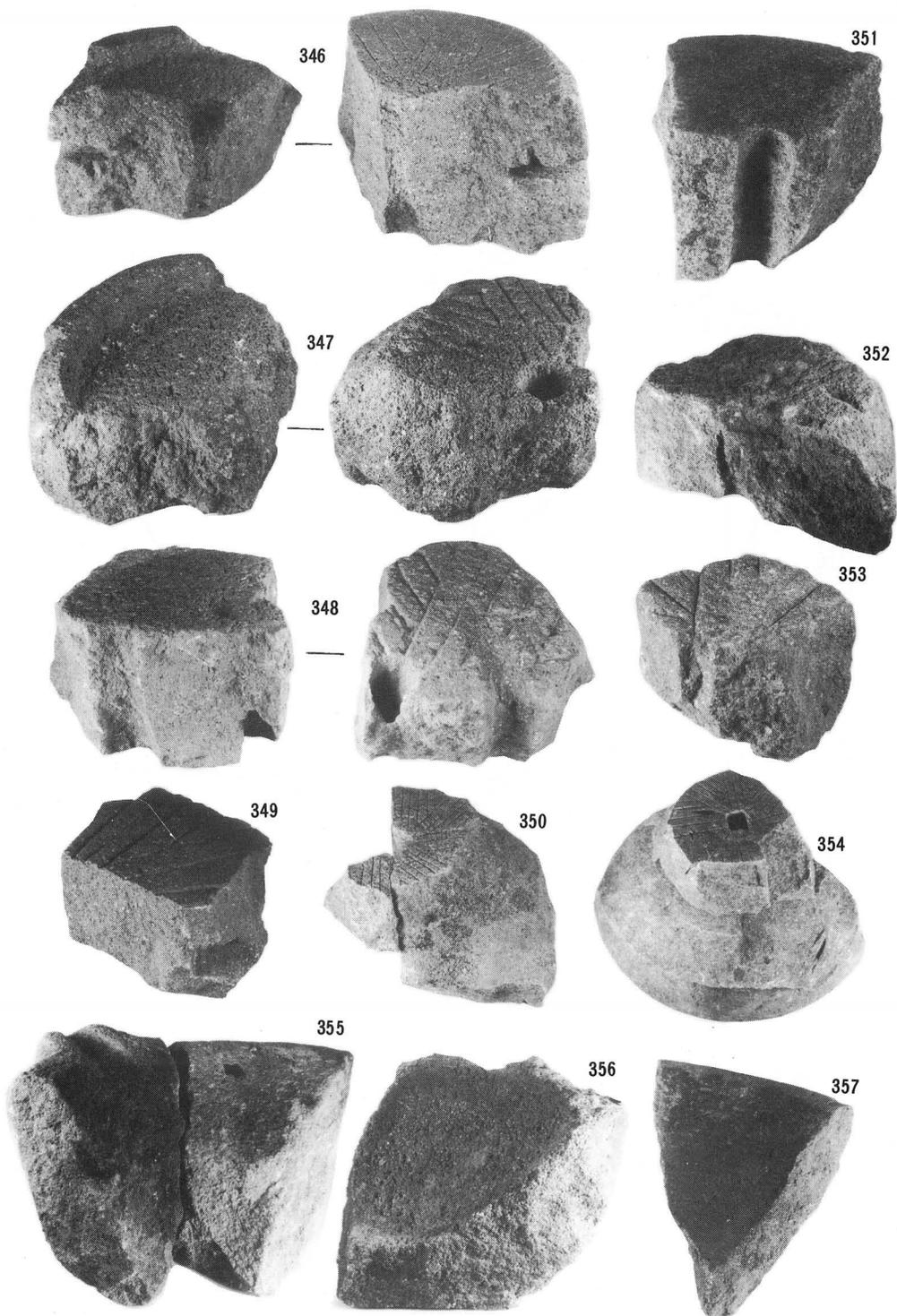
があり、上縁でくぼみのみられる例 (346・347) が多い。臼の目は8分割主溝が一般的であるが概して粗雑である。351は目が磨り減った状態になり、352は目の部分が剥落している。

下臼の場合、芯棒孔が四角を呈し、目の磨耗および表面の風化の少ないもの (350・354) がある。354は受皿を有する茶臼の形態と考えられる。

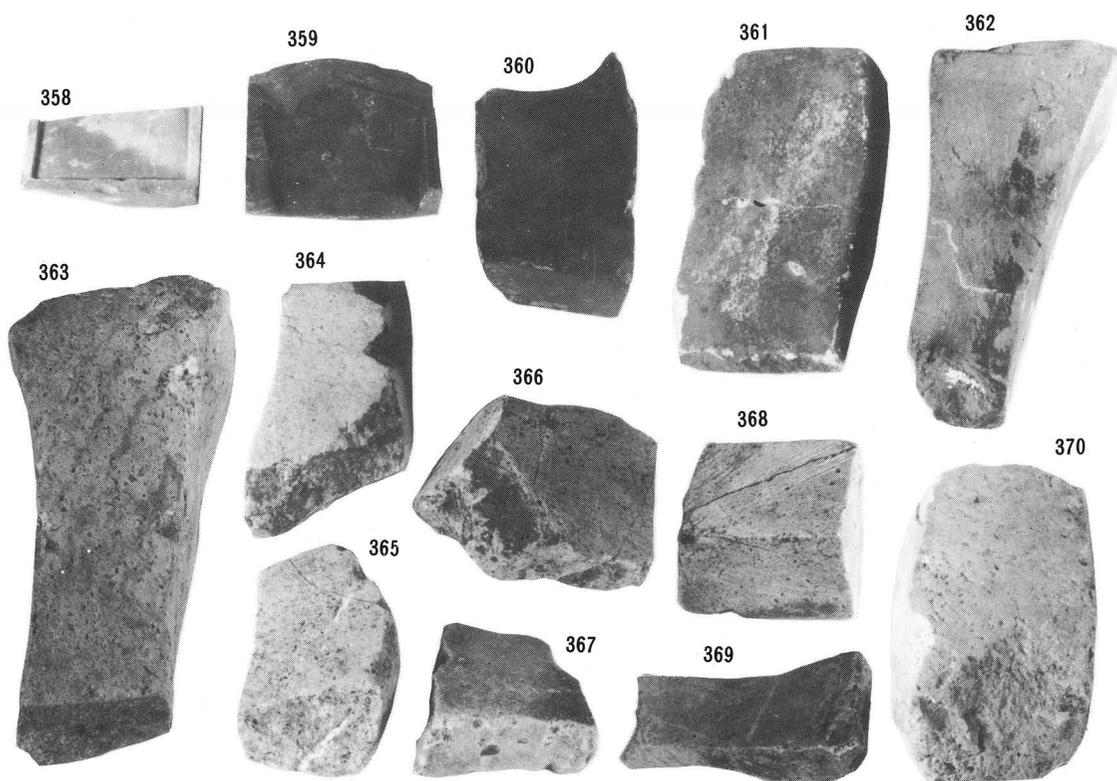
B. 鉢 (PL.95)

いずれも内部をくりぬいた状態で成形し、片口を有するもの (355)、内面に炭化物が付着しているもの (357) などがある。底部は平底 (356) である。手水鉢として使用していたのだろうか。

PL.95 石製品(1)



PL.96 石製品(2)



C. 硯 (PL.96、Fig.72)

形状は角形のものだけで、いずれも破片で出土した。358は緑灰色を呈する小形のもの、359は若干海の部分が残存するもの、360は海の部分が楕円状を呈する大形のものである。

D. 砥石 (PL.96)

石質はほとんどが砂岩系であり、砥ぐ物によって使い分けていたと思われるぐらい多量に出土した。その中でも、長期の使用によって中央部がU字状にえぐられた状態になっているもの(361~366、369・370)が多く、2~4面に渡っているものも少なくない。367・368は面が比較的平らであり、368はスジ状に砥面が荒れている。前述したように鉄・銅製品が多く出土することからも砥石の使用度が高かったと推定される。

E. 縄文時代の石斧——図示できなかったが、凝灰岩製磨製石斧が2点出土している。

4. 古銭

本年度出土した古銭の総数は385枚（実際は約400枚ほど出土したが、小破片となって計測不可能なものや、運搬時等に粉失したものは統計上数に入れていない。）である。

初鑄年の最も古いものは、開元通宝（唐・武徳4年・DC621）であり、北宋銭・明銭などの舶載銭が大部分を占める。しかし、洪武通宝の中には裏に「一銭」と書かれた、いわゆる鏹銭と呼ばれる小型の銭も含まれており、すべてが舶載品ではないらしい。また、寛永通宝が7枚も出土していることから、江戸およびそれ以後も恒常的に当城館が、広義の生活の場であった可能性が高く現状に至るまで使用されていたと考えることができる。

古銭の出土状態をみると、中世の遺構確認面上層および遺構の覆土からの出土率が高く、意図的埋蔵はほとんど考えられない。他の遺物も同様であるが、遺構覆土からの出土についてはその意味がよく理解できず、落城期の所産とみるべきか、遺構廃棄について精神的意図があったとみるべきか判然としない。特に、井戸跡・堅穴遺構の覆土からは散乱した状態で出土することが多く、ST113・ST117・ST121・ST147・SE50などは10枚以上の出土を示す。

以下名称別出土表を掲げておく。

古銭名称別出土表

	名 称	個体数	出土率(%)		名 称	個体数	出土率(%)
1	開元通宝	14	3.63	23	元祐元宝	1	0.25
2	大平通宝	1	0.25	24	紹聖元宝	7	1.81
3	淳化元宝	1	0.25	25	元符通宝	2	0.51
4	至道元宝	3	0.77	26	聖宋元宝	5	1.29
5	咸平元宝	7	1.81	27	大觀通宝	1	0.25
6	景德元宝	6	1.55	28	政和通宝	7	1.81
7	祥符通宝	1	0.25	29	至大通宝	3	0.77
8	祥符元宝	3	0.77	30	大中通宝	1	0.25
9	天禧通宝	6	1.55	31	洪武通宝	37	9.61
10	天聖通宝	1	0.25	32	永樂通宝	14	3.63
11	天聖元宝	4	1.03	33	朝鮮通宝	2	0.51
12	景祐元宝	1	0.25	34	嘉定通宝	1	0.25
13	皇宋通宝	12	3.11	35	寛永通宝	7	1.81
14	皇宋元宝	2	0.51	36	無文銭	71	18.44
15	至和元宝	3	0.77	37	判読不能	124	32.20
16	嘉祐通宝	1	0.25	38	半銭	1	0.25
17	嘉祐元宝	1	0.25	39	一銭	2	0.51
18	治平元宝	2	0.51	40	二銭	1	0.25
19	熙寧通宝	1	0.25	41	五銭	1	0.25
20	熙寧元宝	11	2.85	42	十銭	1	0.25
21	元豊通宝	8	2.07	43	鉄銭	1	0.25
22	元祐通宝	6	1.55		総計	385	100.00

5. その他の遺物

浪岡城跡は、河岸段丘上に位置するため、縄文時代から人々の生活の場になっていた。そのため、縄文時代、弥生時代、平安時代、室町・戦国時代、近・現代の遺物が相当量出土している。その中で、当城跡形成期の遺物が主体であることは当然であるが、城館期の地業が大規模におこなわれたとみえ、他の時代の遺物は遺構に伴うことなく散発的に出土する傾向がある。PL.89・Fig.72—NO.242で示した壺形土器は、文様もみられず時代決定は不明確であるが胎土焼成の状態から推測するに、縄文時代後期頃の製品と考えられる。また、D53区の攪乱土からは弥生時代後期にみられる鋸歯文の施された土器片が7～8点出土しており、昭和55年度調査で出土した片刃磨製石斧（「浪岡城跡Ⅳ」P190NO.454）との関連もみられる。

城館期の遺物としては、前述したもの以外に木製品が主要な位置を占めるが、今回は堀跡の調査を実施しなかったため出土量は稀少で、井戸跡等で出土しているにすぎない。整理作業の都合で記述は割愛させていただく。なお、平場においては漆器の被膜が相当量出土しているが、いずれも破片のため原形をとどめない状況にある。出土状態をみると、竪穴遺構や井戸跡の覆土から出土する傾向が高い。

近・現代の遺物は、耕作時の攪乱によって城館期の遺構面まで下がる場合が多く、陶磁器・鉄製品として報告したものの中でも混在している可能性もあり、その点は御容赦願いたい。

V まとめ

浪岡城跡の発掘調査も5年目を終了し、その間に新しく知られるようになった事実は歴大な量に及び、今回の報告書でもわかるように十分に整理が追いつかない状況にある。今回、検出された遺構、出土遺物の個々について問題点を抽出し、今後の調査に期する意味で項目別のまとめを試みたい。

1. 掘立柱建物跡——掘立柱建物跡には2間×3間クラスの一群と、5間×6間クラスの一群に分けることができ、現在まで検出されたものをみると、SB04・SB06・SB07・SG09・SB13・SB15が前者であり、SB02・SB03・SB05・SB10・SB12・SB14・SB18・SB19が後者である。前者の分布配置および長軸方向をみると、不規則であるのに対し後者は長軸方向が南北線あるいは東西線を向く状態で、一定間隔を置いて配置している。それとともに同一規模の建物が二棟重なる状態で検出されていることは、同一地点に二期に渡って建物跡が建て替えられたことと認識してよいと思う。このような状況は北館の中の建物がその機能を別にした形で、生活がおこなわれていた結果と考えられる。

2. 竪穴遺構——竪穴遺構については、大型のものから轡や刀などの鉄製品が特徴ある出土を示し、舌状スロープの張り出し（出入口）を有する典型的タイプは、張り出し方向に特色あ

る傾向を示してきた。すなわち、北館の扇状の形態に対してその要の方向を向くことである。これらのことは、竪穴遺構にもその形態によって使用に対する機能分化がおこなわれていたということを推定できるようになったと言える。

3. 遺構間の相互配置については、掘立柱建物跡・竪穴遺構・井戸跡の検出状態から、建物跡の相互機能の問題も含め、一定のテリトリー分化がなされていたと考えられる。特に、その事は、散在した出土状態を示す各種の遺物についても、詳細に検討する段階で、器種・器形による出土分布傾向が表わされるようになったことである。現在は10m×10mのグリッド単位で把握しているにすぎないが、今後はその枠を狭めた形で検討したいと考えている。

4. 出土した各種の遺物について、最も重要かつ困難な作業に編年がある。陶磁器についてみると、すべてと言っていいほど他地方からの搬入品であり、交易の中での時間差を考慮に入れなければならないが、浪岡城の場合はその存続年代が100年、伝世品も含めると200年～300年の幅で時代設定ができるため、青森県における陶磁器編年にある程度の糸口を与えることができると考えられる。その場合、層的方法論は浪岡城の現状には合わず、形態と器種・器形のセット関係把握によって可能と考えられる。本年度調査のS E 50出土陶磁器はその好例である。

5. 出土遺物の編年作業とともに、浪岡城跡から出土する溶解物付着土器（埴埴）・鋳型・羽口などから、当時の工業状態を重要な問題として取り上げることができる。何故、浪岡城跡から大量の陶磁器が出土するののかということを考える時、交易の活発化は当然のこととしても陶磁器のみかえりとして何があったのであろうか。筆者のみならず、県内の研究者の中では、その問題を重要視する意見が近年多くなりつつあるが、浪岡城跡の出土遺物を見るとそれは鉄・銅のような工業製品ではなかったかという考え方が芽ばえてくる。安東氏の日本海交易以来の伝統に裏付けられた状態で、県内の陶磁器搬入は14世紀を境に飛躍的に増大するが、その交易形態は従来から不明な点が多い。もし、浪岡城も安東氏以来の系譜につながる交易形態のもとに陶磁器搬入がおこなわれていたとすれば、鉄・銅製品のみかえりとする考え方は津軽地域の特性とも推測できるのである。

6. 以上、調査成果を概括的にまとめたが、本報告書はあくまで事実記載を中心とした概報的性格であることをおことわりしておく。現場作業および整理事業の段階で、御指導・御協力いただいた各位に末筆をおかりしてお礼を申し上げる次第である。

PL. 97 青 磁







PL. 100 染付・赤絵・朝鮮







付 表 (Ch.)

Ch. 1 H48~H52区層注記表

1	表土 (暗褐色土)
2	やや粘質のある暗褐色土。
3	黒色土。
4	黄褐色砂質土 (地山)。
5	暗褐色土に黄白色粘質土を含む。
6	黄褐色砂質土と黒色土の混層。
7	暗褐色土に褐色粘質土を含む。しまりあり。
8	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層。
9	黒色土に黄白色砂質土を若干含む。
10	暗褐色土と黒色土のむらのある混層。しまりあり。
11	暗褐色土に黄褐色土が粒子状に含まれる。
12	暗褐色土に黒色土・黄白色粘質土・焼土が部分的に含まれる。
13	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層で炭化物が若干含まれる。

付 SD32覆土

①	暗褐色土。粉状の黄褐色砂質土が全体に少量含まれる。
②	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層。黒色土が若干含まれる。
③	黄褐色砂質土と少量の暗褐色土の混層。黄白色砂質土塊がある。
④	暗褐色土と少量の黄褐色砂質土の混層。炭化物が若干含まれる。
⑤	黒色土。暗褐色土を粉状に少量含む。

Ch. 2 SB05 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	(55)×52	42	
2	円	51×(50)	(35)	
3	方	42×(40)	(41)	
4	方	52×52	(59)	
5	方	45×42	(41)	
6	方	49×39	(51)	
7	方	40×37	(42)	
8	方	47×40	(45)	
9	方	28×28	33	
10	方	40×36	49	
11	方	30×29	(48)	
12	方	51×(47)	31	
13	方	41×(40)	65	
14	方	40×37	(67)	
15	方	45×35	35	
16	方	43×42	60	
17	方	(34)×28	45	
18	方	(50)×45	40	
19	方	41×38	31	
20	方	51×48	52	
21	方	46×46	57	
22	方	60×48	51	
23	方	49×48	57	
24	方	50×47	64	
25	方	41×39	32	
26	円	55×51	69	
27	方	46×45	47	
28	方	42×39	50	

29	方	47×43	38	
30	方	(41)×39	27	
31	方	47×44	54	

Ch. 3 SB10 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	50×44	(61)	
2	方	55×42	(52)	
3	方	51×49	(63)	
4	方	62×61	57	
5	方	56×52	64	
6	方	52×52	(62)	
7	方	41×39	(55)	
8	方	71×62	(62)	
9	方	77×(72)	46	
10	方	65×49	57	
11	方	62×(60)	59	
12	方	65×(62)	60	
13	方	42×39	(49)	
14	方	52×50	44	
15	方	(59)×56	49	
16	方	57×55	58	
17	方	80×60	57	
18	方	66×59	60	
19	方	65×65	53	
20	方	74×57	55	
21	方	40×38	45	
22	方	52×50	39	
23	方	58×45	46	
24	方	51×(48)	56	
25	方	56×55	44	
26	方	62×59	29	
27	方	45×39	(41)	
28	方	65×51	50	
29	方	63×56	(65)	
30	方	45×41	64	
31	方	41×36	(61)	
32	方	76×(66)	(45)	
33	方	53×(50)	(43)	
34	方	60×54	35.0	
35	方	75×61	(55)	
36	方	75×(62)	(43)	

Ch. 4 SB12 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	54 × 38	49	
2	方	37 × 34	51	
3	方	34 × 31	69	
4	方	47 × 31	(63)	
5	方	46 × 40	58	
6	方	46 × 36	72	
7	方	48 × 46	53	
8	方	36 × 30	51	
9	方	48 × 30	46	
10	不	44 × 32	44	
11	方	47 × 41	46	
12	方	37 × 36	62	
13	方	62 × 47	44	
14	方	52 × 46	34	
15	方	46 × 42	65	
16	方	55 × 49	45	
17	方	(52) × 50	40	
18	方	55 × 46	50	
19	方	48 × 46	50	
20	方	56 × 56	80	
21	方	55 × 53	64	
22	方	44 × 43	55	
23	方	40 × 39	74	
24	方	45 × 35	53	
25	方	(41×35)	49	
26	方	40 × 35	49	
27	方	31 × 31	62	
28	方	37 × 32	(72)	
29	方	36 × 27	(72)	
30	方	43 × 41	61	
31	方	39 × 38	80	
32	方	53 × 42	71	

Ch. 5 SB13 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	55 × 54	82	
2	円	45 × 43	53	
3	方	33 × 32	48	
4	円	43 × 38	60	
5	方	57 × 38	63	
6	方	60 × 50	49	
7	方	60 × 45	58	
8	方	58 × 53	51	
9	方	54 × 50	34	
10	方	50 × 42	53	
11	方	50 × 47	36	

Ch. 6 SB14 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	52 × 46	(60)	
2	方	56 × 55	55	
3	方	39 × 35	27	
4	方	(57) × 50	49	
5	方	56 × 51	53	
6	方	55 × 47	45	
7	方	51 × 47	60	
8	方	50 × 41	47	
9	方	51 × 50	44	
10	方	62 × 51	45	
11	方	62 × 55	41	
12	方	60 × 51	60	
13	方	47 × 34	38	
14	不	54 × 53	54	
15	方	40 × 37	41	
16	方	52 × 43	62	
17	方	54 × 45	29	
18	方	59 × 57	46	
19	方	45 × 45	62	
20	方	56 × 49	60	
21	方	57 × 54	55	
22	方	50 × 45	57	
23	方	60 × 54	68	
24	方	49 × 34	50	
25	方	49 × 46	58	
26	方	44 × 36	50	
27	方	42 × 39	48	

Ch. 7 SB15 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	36 × 30	54	
2	方	46 × (43)	39	
3	方	60 × 60	48	
4	方	45 × 43	44	
5	方	36 × 30	54	
6	方	27 × 27	67	
7	方	50 × 33	(54)	
8	方	46 × 40	64	
9	方	55 × 55	76	
10	方	45 × 40	(60)	
11	方	43 × 35	53	
12	方	55 × 50	64	
13	方	46 × 46	43	

Ch. 8 SB17 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	45 × 35	21	
2	方	33 × 32	20	
3	方	36 × 27	—	
4	方	21 × 20	36	
5	方	37 × 31	21	
6	方	35 × 30	21	
7	方	45 × 40	16	
8	方	31 × 30	13	
9	方	28 × 25	13	
10	方	36 × 35	—	
11	方	37 × 35	12	
12	方	35 × 35	14	
13	方	40 × 35	17	
14	方	36 × 35	13	
15	方	38 × 35	19	
16	方	49 × 33	24	
17	不	30 × 21	20	
18	方	30 × 23	10	

Ch. 9 SB18 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	38 × 38	(75)	
2	方	41 × 39	(60)	
3	方	39 × 32	(43)	
4	不	(54)×49	(61)	
5	方	59 × 44	(56)	
6	方	42 × 34	(44)	
7	方	35 × 31	(38)	
8	不	64 × 64	35	
9	不	62 × 40	31	
10	方	(45)×39	44	
11	方	51 × 46	59	
12	方	49 × 45	60	
13	方	40 × 40	52	
14	方	(47)×45	52	
15	方	37 × 35	(62)	
16	方	47 × 46	(68)	
17	方	41 × 39	57	
18	方	58 × 57	50	
19	方	58 × 45	(45)	
20	方	45 × 36	(54)	
21	方	55 × 49	58	
22	方	57 × 55	(65)	
23	方	43 × 40	(50)	
24	方	72 × 56	37	
25	方	52 × 50	64	
26	方	65 × 55	64	
27	方	56 × 44	58	
28	方	75 × 69	54	
29	方	64 × 58	61	
30	方	60 × 51	54	
31	方	50 × 46	56	
32	方	44 × 44	51	
33	方	(49)×43	37	
34	方	42 × 38	46	
35	方	48 × 47	40	
36	方	45 × 36	37	

Ch.10 SB19 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	60 × 51	60	
2	方	62 × 52	53	
3	方	50 × 46	49	
4	方	62 × 30	63	
5	方	65 × 49	66	
6	方	63 × 60	47	
7	方	55 × 49	53	
8	方	55 × 55	63	
9	方	59 × 59	68	
10	方	55 × 50	73	
11	方	57 × 50	66	
12	方	65 × 59	(75)	
13	方	52 × 38	90.0	
14	方	(66)×63	81	
15	方	64 × 52	(90)	
16	方	45 × 30	100	
17	方	50 × 41	82	
18	方	56 × 48	(89)	
19	方	66 × 60	78	
20	方	55 × 54	85	
21	方	68 × 65	76	
22	方	54 × 40	67	
23	方	38 × 37	58	
24	方	45 × 40	65	
25	方	60 × 60	66	

Ch.11 ST100 注記表

a 覆土層序

1	焼土。
2	暗褐色土に黄褐色砂質土と炭化物を少量含む。しまりあり。
3	2より黄褐色砂質土が少ない。
4	暗褐色土しまりなし。
5	暗褐色土に黄褐色砂質土、炭化物、多量の灰を含む。
6	暗褐色土に黄褐色砂質土を小ブロック状に黒色土を部分的に含む。(7より暗い色調である。
7	暗褐色土に、黄褐色砂質土を大ブロック状に含む、炭化物あり。
8	黄褐色砂質土。
9	黒色土。
10	暗褐色土に黄褐色砂質土、黒色土を若干含む。しまりなし。
11	黄褐色砂質土(地山)
12	暗褐色土に黄褐色砂質土、白色粘土、灰、焼土を含む。
13	暗褐色土に黄褐色砂質土が(7)より少ない。炭化物あり。

b 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	24 × 21	40	
2	方	25 × 24	42	
3	方	35 × 30	43	
4	方	25 × 24	38	
5	方	40 × 30	38	
6	方	21 × 21	36	

Ch.12 ST101 注記表

a 覆土層序

1	暗褐色土に微量の黄褐色砂質土混入。
2	暗褐色土に黄褐色砂質土を多量に含む。若干炭化物あり。
3	暗褐色土に少量の黄褐色砂質土と粘土を含む。
4	暗褐色土と黒色土の混層に黄褐色砂質土を少々含む。
5	暗褐色土に黄褐色砂質土と炭化物混入。
6	灰色粘土層。
7	暗褐色土と黒色土の混層に黄褐色砂質土混入。
8	暗褐色土に炭化物と若干の黄褐色砂質土が混入。
9	暗褐色土に黄褐色砂質土を多量に含む。

b 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	26 × 18	47.5	
2	方	30 × 32	61.4	
3	方	40 × 38	28.6	
4	円	40 × 40	18.8	
5	方	50 × 40	20.2	
6	方	40 × 38	21.8	
7	楕	36 × 28	16.8	
8	方	70 × 34	24.5	
9	方	40 × 36	23.9	
10	円	35 × 33	76.4	
11	方	28 × 20	62.9	
12	方	28 × 28	55.3	

Ch.13 ST102 注記表

a 覆土層序

1	暗褐色土に若干の黄褐色砂質土と黒色土を含む。
2	暗褐色土に小ブロック状に黄褐色砂質土が含まれる。若干黒色土もある。
3	暗褐色土に少量の灰と若干の黄褐色砂質土が含まれる。
4	暗褐色土に若干の炭化物と黄褐色砂質土が含まれる。
5	暗褐色土と黒色土、黄褐色砂質土の混層。
6	黄褐色砂質土に少量の黒色土と暗褐色土が含まれる。
7	黒色土にブロック状の黄褐色砂質土を含む。
8	暗褐色土に若干の黒色土と少量の黄褐色砂質土が含まれる。
9	黄白色砂質土。
10	白灰層。
11	暗褐色土に黄褐色砂質土を大ブロックに含み、黒色土も含まれる。
12	暗褐色土に若干の黒色土と黄褐色砂質土が含まれる。
13	暗褐色土にブロック状の黄褐色砂質土が含まれる。
14	暗褐色土に大ブロックの黄白色砂質土と小ブロックの黄褐色砂質土が含まれ、黒色土と灰が若干含まれる。
15	暗褐色土に黒色土、黄白色砂質土、黄褐色砂質土が少量含まれる。

16	暗褐色土に若干の黄褐色砂質土、炭化物、灰が含まれる。
17	暗褐色土に若干の黄褐色砂質土を含む。
18	暗褐色土に若干の黄褐色砂質土を含む。(砂質が17より多い)
19	黄褐色砂質土に、少量の暗褐色土が含まれる。
20	暗褐色土に若干の黄褐色砂質土を含む。しまりなし。
21	暗褐色土に若干の黄白色砂質土を含む。
22	黄褐色砂質土 (地山)
23	焼土。

b 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	33 × 33	—	
2	方	26 × 25	—	
3	不	43 × 43	—	
4	方	29 × 21	—	
5	方	43 × 36	—	
6	方	43 × 35	—	
7	不	33 × 29	—	
8	方	27 × 25	—	
9	方	37 × 28	—	
10	方	33 × 22	33.5	
11	方	33 × 33	37.0	
12	円	27 × 26	—	
13	方	36 × 35	46.5	
14	方	23 × 21	26.0	
15	方	45 × 45	—	
16	方	24 × 24	—	
17	方	30 × 27	—	
18	方	37 × 27	—	
19	方	29 × 27	13.0	
20	方	22 × 21	—	
21	不	60 × 38	—	
22	円	31 × 28	—	

Ch.14 ST103・111・112 注記表

a 覆土層序

1	暗褐色土に黄褐色砂質土と炭化物、灰が若干含まれ、黄褐色砂質土はブロック状に含まれる所もある。
2	暗褐色土に黄褐色砂質土が若干含まれ、少量の炭化物も見られる。
3	暗褐色土に若干灰を含む。
4	灰に少量の炭化物を含む。
5	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層、しまりが強。
6	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層、若干の炭化物を含む。
7	黄褐色砂質土。しまりあり。
8	黄白色砂質土。しまりなし。
9	暗褐色土に黄褐色砂質土が極めて少なく存在する。
10	暗褐色土に黄褐色砂質土と炭化物が少量含まれる。
11	暗褐色粘土層。
12	黄褐色砂質土に、若干の暗褐色土と小石が含まれる。
13	暗褐色土に極めて少なく黄褐色砂質土が存在する。(9)よりしまりなし。
14	灰(白色)
15	暗褐色土に黄褐色砂質土の混層で部分的に小ブロック状の砂質土もみられ、黒色土も少量含まれる。
16	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層に黒色土と小石を若干含む。(15)よりしまりなし。
17	暗褐色土に黄褐色砂質土が少量含まれる。
18	暗褐色土に黄褐色砂質土がブロック状に含まれる。
19	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層、しまりあり。
20	暗褐色土に黄褐色砂質土が少量含まれ、黒色土も若干含まれる。
21	暗褐色土に黄褐色砂質土と炭化物を少量含む。(ST-112覆土)
22	暗褐色土に黄褐色砂質土を多量に含み、炭化物も含む。(ST-112覆土)
23	黄褐色砂質土(地山)

b 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	43 × 39	72.3	SF-103
2	方	33 × 31	10.0	〃
3	方	33 × 30	40.5	〃
4	方	40 × 40	77.0	〃
5	方	38 × 30	17.0	〃
6	方	38 × 37	41.7	〃
7	方	41 × 41	82.1	〃
8	方	37 × 33	44.0	〃
9	円	40 × 37	45.7	〃
10	方	35 × 33	60.5	〃
11	不	55 × 39	32.5	〃
12	円	45 × 40	51.6	〃
13	円	52 × 42	55.0	〃
14	方	48 × 47	46.4	〃
15	方	43 × 33	72.1	〃
17	方	34 × 29	10.2	〃
17	方	32 × 29	29.0	〃
18	方	30 × 30	7.3	〃
19	方	37 × 35	14.5	〃

20	方	29 × 28	55.6	〃
21	方	41 × 38	80.9	〃
22	方	36 × 34	32.2	〃
23	方	56 × 43	45.3	〃
24	方	35 × 32	59.5	ST-111
25	方	28 × 27	45.9	〃
26	方	30 × 29	53.3	〃
27	方	39 × 38	62.3	〃
28	方	35 × 31	64.7	〃
29	方	40 × 35	64.4	〃
30	方	40 × 40	61.9	〃
31	方	40 × 35	45.1	〃
32	方	30 × 28	44.6	〃
33	方	32 × 29	71.1	〃
34	方	26 × 25	51.2	〃
35	方	29 × 29	54.5	〃
36	不	65 × 53	33.0	〃
37	円	20 × 20	40.1	〃
38	不	22 × 21	25.5	ST-112
39	不	22 × 20	13.2	〃
40	不	20 × 17	8.3	〃

Ch.15 ST104 注記表

a 覆土層序

1	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層。
2	暗褐色土。しまりあり。
3	暗褐色土、若干炭化物あり(2)よりしまりなし。
3	暗白色粘土。
5	黒色土。
6	暗褐色土に黄褐色砂質土が少量、炭化物が若干含まれる。
7	暗褐色土に黄褐色砂質土が多量に含まれる。
8	暗褐色土。
9	黄白色砂質土(地山)

b 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	32 × 28	70.5	
2	方	31 × 30	74.0	
3	方	32 × 31	68.6	
4	不	55 × 35	67.0	
5	方	36 × 35	60.8	
6	方	33 × 31	63.7	
7	方	38 × 33	54.5	

Ch.16 ST105 注記表

a 覆土層序

1	暗褐色土に黄褐色砂質土が若干含まれる。しまりなし。
2	暗褐色土に炭化物と黄褐色砂質土を含む。しまりなし。
3	暗褐色土に多量の黄褐色砂質土と若干の炭化物が含まれる。しまりなし。
4	暗褐色土に黄褐色砂質土を含み、若干の灰と炭化物も含まれる。
5	暗褐色土に多量の炭化物と若干の焼土が含まれる。
6	暗褐色土に若干の黄褐色砂質土と少量の炭化物が含まれる。
7	暗褐色土に黄褐色砂質土が少量含まれる。しまりなし。
8	暗褐色土に黄褐色砂質土を多量に含む。
9	暗褐色土に黄褐色砂質土が若干含まれる。しまりあり。
10	灰。
11	黄白色砂質土 (地山)

b 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	不	38 × 34	58.0	
2	不	38 × 31	36.3	
3	不	54 × 40	56.3	
4	方	41 × 33	50.0	
5	円	30 × 29	66.0	
6	円	33 × 30	49.1	
7	円	31 × 29	48.9	
8	円	30 × 28	—	
9	円	33 × 27	71.4	
10	不	26 × 21	14.3	

Ch.17 ST106 注記表

a 覆土層序

1	暗褐色土に黄褐色砂質土が小ブロック状に含まれる。西側に特に多く含む。
2	暗褐色土に黄褐色砂質土が多量に含まれる。
3	黄褐色砂質土 (地山)

b 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	円	36 × 25	56.3	
2	円	34 × 21	34.0	
3	円	37 × 27	43.9	
4	円	28 × 22	49.1	
5	不	25 × 21	33.1	
6	円	21 × 19	—	
7	円	17 × 15	41.4	
8	不	28 × 18	8.1	
9	方	34 × 33	49.4	
10	円	20 × 20	55.5	
11	方	35 × 34	23.4	
12	円	38 × 30	68.0	
13	円	30 × 26	13.1	
14	円	28 × 26	19.8	

Ch.18 ST107 注記表

a 覆土層序

1	埋土
2	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層、炭化物も含まれる。しまりが強い。
3	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層、炭化物も含まれる。
4	暗褐色土に黄褐色砂質土が小ブロック状に混入、炭化物も含まれる。
5	(3)よりも炭化物が多い。
6	(3)よりも黄褐色砂質土が多い。
7	黄褐色砂質土 (ピット覆土)
8	黄褐色砂質土 (地山)

b 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	不	32 × 23	49.3	
2	円	33 × 32	18.8	
3	方	30 × 25	48.8	
4	不	38 × 28	53.7	
5	不	26 × 15	30.9	
6	方	35 × 29	49.6	
7	方	48 × 33	58.2	
8	方	31 × 28	15.3	
9	方	31 × 29	45.2	

Ch.19 ST108・109・110 注記表

a 覆土層序

1	茶褐色土に黄褐色砂質土を多量に含み、若干の灰と少量の黒色土も含まれる。
2	黄褐色砂質土。
3	暗褐色土に黄褐色砂質土を粒子状に含む。
4	暗褐色土に黄褐色砂質土を少量含む。炭化物も含まれる。
5	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層、炭化物を含む。しまりあり。
6	暗褐色土に黄褐色砂質土と炭化物を若干含む。しまりなし。
7	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層。しまりあり。
8	暗褐色土に炭化物を多量に含む。しまりなし。
9	黄白色砂質土。しまりなし。
10	暗褐色土。
11	暗褐色土に黄褐色砂質土を少量含む。
12	暗褐色土に黄褐色砂質土を少量含む。炭化物を若干含む。
13	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層。
14	黄褐色砂質土 (地山)

b 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	不	18 × 14	21.3	ST-108
2	方	21 × 19	—	〃
3	円	25 × 21	11.3	〃
4	楕	37 × 18	32.0	〃
5	円	25 × 22	31.6	〃
6	円	24 × 22	12.8	ST-110
7	方	30 × 21	33.2	〃
8	方	29 × 23	20.0	〃
9	不	21 × 22	55.4	〃
10	不	30 × 26	39.2	〃
11	方	25 × 19	31.7	〃
12	方	25 × 20	31.7	〃
13	不	41 × 30	32.2	〃

Ch.20 ST113 注記表

a 覆土層序

1	暗褐色土。
2	黄褐色砂質土に暗褐色土が少量含まれる。
3	暗褐色土に黄褐色砂質土が含まれ、炭化物も若干含む。
4	暗褐色土に黄褐色砂質土が大ブロック状に存在する。
5	黒色土に黄褐色砂質土が部分的に含まれる。
6	暗褐色土に若干黄褐色砂質土と炭化物が含まれる。
7	黄褐色砂質土 (地山)

Ch.21 ST115 注記表

a 覆土層序

1	焼土。
2	暗褐色土と炭化物を若干含む。
3	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層、炭化物を少量含む。
4	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層、炭化物を多量に含む。
5	黄褐色砂質土 (地山)

b 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	26 × 24	26.2	
2	方	16 × 16	—	
3	方	21 × 18	13.8	
4	方	26 × 25	23.8	
5	方	21 × 19	—	
6	円	28 × 24	41.9	
7	円	22 × 18	—	

Ch.22 ST117 注記表

a 覆土層序

1	暗褐色土と黒色土、黄褐色砂質土、灰、カーボンの混層。
2	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層、部分的に黄褐色砂質土が大ブロックである。

Ch.23 ST117 出土物注記表→PL.25対応

No	遺物No	PL.	Fig.	出土区	器種	特徴	備考
1	P 827	25	—	F53ST117dフク土	染付皿		
2	P 1023	〃	—	〃 f 〃	〃	〃	
3	P 877	〃	—	〃 d 〃	〃	〃	
4	P 856	〃	—	〃 c 〃	〃	〃	
5	P 1082	〃	—	〃 d 〃	〃	碗	
6	P 1125	〃	—	〃 e 〃	〃	皿	
7	P 1085	〃	—	〃 f 〃	白磁	〃	
8	P 825	〃	—	〃 c 〃	青磁	碗	
9	P 754	〃	—	〃 〃	〃	〃	
10	P 1122	〃	—	〃 d 〃	羽口		11と同一個体
11	P 853	〃	—	〃 f 〃	〃		10と同一個体
12	P 879	〃	—	〃 d 〃	鑄型		
13	P 880	〃	—	〃 d 〃	〃		
14	P 1022	〃	—	〃 e 〃	〃		
15	P 1019	〃	—	〃 e 〃	溶解物付着土器	坩堝。銅付着。	
16	P 1088	〃	—	〃 〃	〃	〃。	
17	P 883	〃	—	〃 e 〃	〃	〃。銅付着。	
18	P 878	〃	—	〃 d 〃	〃	〃。〃。	
19	P 795	〃	—	〃 e 〃	〃	〃。	
20	P 822	〃	—	〃 f 〃	瓦器		
21	P 824	〃	—	〃 a 〃	播鉢	6条の釦目が左回りに施される。	

3	暗褐色土に多量の灰が含まれている。
4	暗褐色土に多量のカーボンと灰が含まれているため黒色を呈する。
5	暗褐色土に多量の黄褐色砂質土が含まれ、部分的にカーボンが点在し、下層になるにしたがってカーボンが多くなる。
6	暗褐色土に多量の灰が含まれる。湿性が強い。
7	青灰色の灰。
8	暗褐色土に若干の灰を含む。
9	暗褐色土に微量の炭化物を呈し、黄褐色砂質土を若干含む。
10	黄褐色砂質土に若干のカーボンを含む。
11	灰と黄褐色砂質土の混層。
12	茶褐色砂質土。
13	暗褐色土、黒色土、黄褐色砂質土の混層に若干の炭化物あり、湿性あり。
14	暗褐色土に黄褐色砂質土を若干含む。
15	暗褐色土に黄褐色砂質土を多量に含む。炭化物若干あり。
16	焼土。
17	黄褐色砂質土 (地山)

b 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	30 × 30	41.1	
2	方	32 × 32	50.0	
3	方	34 × 34	42.1	
4	方	47 × 46	47.2	
5	方	40 × 34	48.0	
6	方	47 × 49	—	
7	円	35 × 32	53.3	
8	円	30 × 28	47.6	
9	円	25 × 24	49.7	
10	方	29 × 20	35.8	
11	方	28 × 23	19.0	
12	方	30 × 15	36.9	
13	方	28 × 25	22.7	
14	方	24 × 20	14.8	

Ch.24 ST118 注記表

a 覆土層序

1	暗褐色土に焼土多量、炭化物若干含む。
2	暗褐色土に黄褐色砂質土、炭化物、灰を若干含む。
3	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層。
4	黒色灰。
5	暗褐色土に黄褐色砂質土若干、灰を多量に含む。
6	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層に黒色土、灰、炭化物を若干含む。
7	暗褐色土に黄褐色砂質土若干と炭化物少量を含む。灰、若干あり。
8	黄褐色砂質土 (地山)

b 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	25 × 24	49.5	
2	円	29 × 27	66.3	
3	方	25 × 23	32.0	
4	方	26 × 26	33.2	
5	方	39 × 28	59.3	
6	方	31 × 31	49.3	
7	円	25 × 22	19.5	
8	円	23 × 22	10.4	

Ch.25 ST119 注記表

a 覆土層序

1	暗褐色土と灰の混層。
2	暗褐色土に黄褐色砂質土が少量混りあっている。炭化物少量含む。
3	黒色土に若干の黄褐色砂質土が含まれている。
4	黄褐色土に黄褐色砂質土を多量に含む。
5	黄褐色砂質土。
6	暗褐色土に灰、炭化物を多量に含む。
7	焼土と暗褐色土の混層。
8	黄褐色砂質土 (地山)

b 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	32 × 28	57.3	
2	方	25 × 23	51.2	
3	円	32 × 31	64.9	
4	方	22 × 18	41.7	
5	方	29 × 27	22.9	
6	方	38 × 29	45.5	
7	方	32 × 28	44.5	
8	方	40 × 39	63.4	

Ch.26 ST120 注記表

a 覆土層序

1	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層。炭化物を若干含む。黄褐色砂質土が大ブロックで存在する。
2	炭化物。
3	黄褐色砂質土 (地山)

b 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	28 × 25	39.4	
2	方	33 × 32	39.9	
3	不	42 × 29	49.6	
4	円	29 × 23	12.9	
5	円	35 × 30	38.7	
6	円	39 × 33	41.1	
7	円	30 × 27	46.0	

Ch.27 ST121 注記表

a 覆土層序

1	暗褐色土。
2	粘土 (明褐色)
3	黒色灰に炭火物を若干含む。
4	暗褐色土に黄褐色砂質土を少量含む。
5	黄褐色土の大ブロック。
6	灰色灰に炭化物を若干含む。
7	暗褐色土に灰を若干含むため(4)よりしまりなし。
8	黄褐色砂質土 (地山)

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	35 × 31	—	ST-121
2	方	29 × 25	—	〃
3	方	35 × 32	—	〃
4	方	35 × 25	—	〃
5	方	36 × 27	—	〃
6	方	33 × 29	—	〃
7	方	40 × 39	—	〃
8	方	29 × 26	—	〃
9	円	25 × 26	21.5	ST-122

Ch.28 ST124 注記表

a 覆土層序

1	暗褐色土にローム粒子混入。
2	(1)よりローム粒子を多く含む。
3	暗褐色土にロームブロックと炭化物を含む。(2)より若干明るい。
4	暗褐色土にロームブロックと炭化物を含む。
5	暗褐色土にローム粒子と若干のロームブロックを含む。
6	白色灰。
7	黄褐色砂質土 (地山)

b 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	30 × 23	68.8	
2	方	28 × 26	77.4	
3	方	24 × 23	48.2	
4	方	24 × 17	34.4	
5	方	23 × 23	15.0	
6	方	48 × 37	6.1	
7	方	32 × 24	75.0	

Ch.29 ST125 注記表

a 覆土層序

1	暗褐色土、灰、炭、焼土の混層。
2	暗褐色土に黄褐色砂質土混入。
3	青灰層。
4	暗褐色土に黒色土混入。
5	黄褐色砂質土 (地山)

b 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	25 × 25	—	
2	円	21 × 16	—	
3	方	27 × 24	—	
4	方	22 × 21	—	
5	不	51 × 40	—	
6	方	27 × 23	—	

Ch.30 ST127 注記表

a 覆土層序

1	暗褐色土に若干の炭化物が含まれる。
2	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層。
3	暗褐色土に黄褐色砂質土を小ブロック状に含む。
4	暗褐色土に若干灰を含む。やや粘土質である。
5	暗褐色土に若干黄褐色砂質土を含む。粘土質である。
6	黄褐色砂質土に少量の黒色土を含む。
7	黄褐色砂質土 (地山)

b 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	円	40 × 32	20.9	
2	方	20 × 18	16.5	
3	方	24 × 16	35.7	
4	円	27 × 20	28.2	
5	方	37 × 34	38.5	
6	方	31 × 26	31.0	
7	方	31 × 15	3.4	
8	方	20 × 11	7.2	
9	方	25 × 21	7.5	

Ch.31 ST128・129 注記表

a 覆土層序

1	暗褐色土に黄褐色砂質土と炭化物、灰(黒色)を若干含む。しまりあり。
2	粘土。しまり強い。
3	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層。小石少量、炭化物、灰(黒色)を若干含む。
4	暗褐色土に炭化物と灰を若干含む。
5	暗褐色土に灰(灰色)少量含む。
6	黄褐色砂質土に黒色土を若干含む。しまりなし。
7	黄褐色砂質土 (地山)

b 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	27 × 21	11.3	ST-128
2	方	29 × 25	14.6	//
3	円	37 × 24	—	//
4	方	31 × 24	6.5	ST-129
5	方	20 × 18	—	//
6	方	44 × 37	12.4	//
7	方	40 × 40	18.1	//
8	方	40 × 39	10.9	//
9	方	32 × 31	14.8	//
10	方	52 × 48	6.3	//
11	円	21 × 20	12.2	//
12	方	42 × 38	7.2	//
13	円	21 × 19	9.8	//

Ch.32 ST130 注記表

a 覆土層序

1	褐色の粘質土。
2	暗褐色土に黄褐色砂質土が小ブロック状に少量含まれる。炭化物と灰と若干含まれる。
3	暗褐色土に少量の灰が含まれる。
4	黒色土に多量の灰と粘土を含む。
5	明黄色砂質土。
6	黄褐色砂質土 (地山)

b 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	40 × 39	5.0	
2	方	31 × 29	(6.5)	
3	方	24 × 20	(3.5)	
4	方	28 × 26	(3.0)	
5	方	34 × 32	(6.8)	
6	方	33 × 25	13.5	
7	不	46 × 42	(2.5)	
8	不	48 × 30	(3.7)	
9	方	40 × 39	24.6	
10	円	50 × 47	17.9	
11	方	34 × 31	(9.0)	
12	円	23 × 22	(6.7)	
13	方	34 × 34	8.8	
14	円	39 × 29	18.3	
15	方	51 × 46	75.6	

Ch.33 ST131・SX71 注記表

a 覆土層序

1	暗褐色土に少量の黄褐色砂質土を含む。炭化物若干あり。
2	暗褐色土に多量の黄褐色砂質土を含む。
3	粘質土。
4	暗褐色土に黄褐色砂質土を若干含む。
5	暗褐色土に微量の黄褐色砂質土を含む。
6	暗褐色土。
7	暗褐色土に若干の炭化物を含む。
8	極褐色土に多量の灰を含む。
9	黄褐色砂質土 (地山)

b 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	24 × 23	43.7	
2	方	28 × 28	18.3	
3	方	21 × 21	12.3	
4	方	45 × 43	51.5	
5	方	52 × 46	42.0	
6	方	40 × 36	41.5	
7	円	43 × 43	61.0	
8	方	30 × 29	7.8	
9	方	24 × 19	4.2	

Ch.34 ST132・152 注記表

a 覆土層序

1	暗褐色土と黄褐色砂質土との混層、炭化物若干あり。
2	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層。
3	暗褐色土に多量の炭化物と若干の灰を含む。
4	暗褐色土に多量の灰を含む。
5	暗褐色土に黄褐色砂質土を多量に含む。
6	暗褐色土に黄褐色砂質土を(2)より多く含む。
7	暗褐色土に炭化物を少量含む。
8	暗褐色土に炭化物を若干含む。
9	暗褐色土に黄褐色砂質土と炭化物を若干含む。
10	暗褐色土に黄褐色砂質土を若干含む。炭化物もあり。
11	暗褐色土に多量の炭化物を含む。
12	暗褐色土。
13	黄褐色砂質土。
14	暗褐色土に白っぽい灰を含む。
15	暗褐色土に灰色の灰を含む。
16	黒色土。
17	暗褐色土に若干の黒色土を含む。
18	黄褐色砂質土 (地山)

b 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	35 × 30	21.5	
2	方	38 × 34	15.0	
3	方	45 × 25	12.0	
4	方	32 × 25	30.8	
5	方	30 × 25	31.0	
6	方	34 × 25	27.5	
7	方	40 × 32	70.5	
8	円	24 × 20	13.4	
9	円	27 × 21	35.8	
10	方	34 × 30	7.6	
11	円	25 × 25	53.6	
12	方	19 × 18	19.2	
13	方	53 × 38	38.4	
14	方	22 × 19	12.0	
15	円	30 × 23	35.0	
16	円	20 × 20	12.8	
17	方	15 × 14	10.5	
18	円	22 × 24	23.0	
19	方	25 × 25	19.4	
20	円	25 × 21	22.8	
21	円	39 × 27	—	
22	方	27 × 22	5.5	
23	方	20 × 16	15.9	
24	方	27 × 25	32.0	

25	方	21 × 21	22.2	
26	方	26 × 17	13.0	
27	方	37 × 35	13.0	
28	方	25 × 20	4.7	
29	方	30 × 20	20.0	
30	方	18 × 16	22.3	
31	方	15 × 14	17.8	
32	方	35 × 33	56.7	
33	方	45 × 33	16.4	
34	方	27 × 26	13.4	
35	方	28 × 23	28.7	
36	円	30 × 28	17.9	
37	円	33 × 26	68.5	
38	方	35 × 28	58.2	
39	円	55 × 55	56.5	
40	方	35 × 35	30.0	

Ch.35 ST133 注記表

a 覆土層序

1	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層に微量の灰と炭化物を含む。
2	黄褐色砂質土と少量の暗褐色土が含まれる。
3	黒色土。
4	暗褐色土に灰が多量に含まれる。
5	黄褐色砂質土 (地山)

b 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	31 × 27	26.6	
2	方	30 × 27	7.4	

Ch.36 ST134・SX67 注記表

a 覆土層序

1	暗褐色土。
2	暗褐色土に黄褐色砂質土を小ブロック状に含む。
3	暗褐色土に多量の灰を含む。
4	黒色土に黄褐色砂質土を含む。
5	黄褐色砂質土と黒色土の混層。しまりなし。
6	黄褐色砂質土 (地山)

b 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	20 × 18	7.2	SX-67
2	方	20 × 18	15.4	〃
3	方	20 × 20	22.6	〃
4	方	22 × 18	14.1	〃
5	方	19 × 16	11.3	〃
6	方	23 × 23	18.5	〃
7	方	20 × 18	28.1	〃
8	円	33 × 28	27.9	〃
9	方	19 × 19	3.3	〃
10	方	34 × 31	8.0	〃
11	方	26 × 25	15.1	〃
12	方	35 × 23	10.0	〃
13	方	42 × 37	8.9	ST-134
14	方	19 × 19	9.8	〃
15	方	23 × 19	15.1	〃
16	円	23 × 19	9.3	〃
17	方	21 × 19	16.8	〃
18	方	17 × 17	7.5	〃
19	方	20 × 17	6.2	〃

Ch.37 ST135 注記表

a 覆土層序

1	暗褐色土に黄褐色砂質土を小ブロック状に含む。
2	暗褐色土に灰を多量に含む。
3	暗褐色土に焼土を多量に含む。
4	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層。
5	黄褐色砂質土 (地山)

b 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	40 × 31	35.6	
2	方	26 × 22	23.6	
3	方	44 × 38	35.3	
4	方	44 × 34	40.8	
5	方	27 × 27	27.2	
6	方	34 × 31	41.8	

Ch.38 ST136・146 注記表

a 覆土層序

1	暗褐色土に黄褐色砂質土が少量含まれ炭化物和灰も若干含む。
2	暗褐色土の中に黄褐色砂質土が多量に含まれている。
3	黄褐色砂質土 (地山)

b 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	23 × 22	—	ST-146
2	方	24 × 22	38.5	〃
3	方	32 × 24	27.8	〃
4	円	55 × 48	30.0	〃
5	方	33 × 28	23.4	〃
6	方	44 × 30	29.1	〃
7	方	30 × 27	16.7	〃
8	円	25 × 25	55.0	ST-136
9	方	33 × 32	8.7	〃
10	方	36 × 32	33.1	〃
11	方	25 × 24	11.2	〃
12	円	23 × 22	13.5	〃
13	方	35 × 28	45.9	〃
14	方	34 × 33	20.3	〃
15	方	33 × 33	64.9	〃
16	円	44 × 37	12.9	〃
17	方	58 × 52	19.5	〃
18	方	30 × 25	18.5	〃
19	方	31 × 25	43.6	〃
20	方	24 × 23	6.0	〃
21	方	34 × 29	25.0	〃
22	方	20 × 21	8.4	〃
23	方	21 × 20	9.6	〃
24	方	43 × 30	81.0	〃
25	方	23 × 22	13.7	〃
26	方	26 × 25	12.4	〃
27	方	28 × 28	—	〃

Ch.39 ST137 注記表

a 覆土層序

1	暗褐色土。
2	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層。灰を若干含む。
3	暗褐色土に黄褐色砂質土を若干含む。
4	黄褐色砂質土 (地山)

b 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	円	31 × 26	33.5	
2	円	25 × 25	47.5	
3	方	32 × 30	21.2	
4	方	30 × 27	18.5	
5	方	33 × 31	53.5	
6	方	19 × 17	27.0	
7	方	31 × 28	33.0	
8	不	24 × 20	41.0	
9	方	35 × 31	57.5	
10	方	35 × 31	43.5	
11	方	27 × 24	5.5	
12	方	27 × 21	20.0	

Ch 40 ST138 注記表

a 覆土層序

1	暗褐色土に黄褐色砂質土を粒子状に含み、若干の炭化物も含む。しまり強い。
2	暗褐色土に黄褐色砂質土を粒子状に含み、粘性が強く、(1)より暗い。
3	灰褐色を呈する灰層にブロック状の黄褐色砂質土を含む。
4	暗褐色土に黄褐色砂質土をブロック状に含む。
5	暗褐色土に黄褐色砂質土を若干含む。
6	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層、炭化物を少量含む。しまりあり。
7	暗褐色土に灰 (黒色) と焼土を少量含む。
8	暗褐色土と灰 (黒色) の混層、炭化物を若干含む。
9	暗褐色土に赤褐色砂質土の小さな固まりを若干含む。
10	黄褐色砂質土 (地山)

C SX65 覆土層序

1	褐色土に黄褐色砂質土を小ブロック状に含む。炭化物、褐色粘土も若干含まれる。
2	褐色土に黄褐色砂質土を少量含み、炭化物も含まれる。
3	暗褐色土に黄褐色砂質土小ブロック状に多量に含み、炭化物もある。
4	暗褐色土に黄褐色砂質土を少量含み炭化物もある。
5	褐色土に灰、炭化物が多量に含む。黄褐色砂質土若干あり。
6	黒色土。
7	暗褐色土に多量の黄褐色砂質土を粒子状に含む。
7	暗褐色土に多量の黄褐色砂質土を粒子状に含む。
8	黒色土に粒子状の黄褐色砂質土を多量に含む。
9	黄褐色砂質土 (地山)

b 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	22 × 18	57.3	
2	円	19 × 19	10.6	
3	方	31 × 30	16.6	
4	円	17 × 16	13.2	
5	方	20 × 18	20.5	
6	方	24 × 21	36.0	
7	円	38 × 35	10.3	
8	円	35 × 30	11.5	
9	方	21 × 19	6.8	
10	円	21 × 21	12.5	
11	円	21 × 21	14.9	
12	円	22 × 21	15.8	
13	円	32 × 31	53.3	
14	方	25 × 22	33.3	
15	方	25 × 23	32.5	
16	方	28 × 25	47.7	
17	方	23 × 21	25.5	
18	方	31 × 31	—	
19	方	21 × 19	37.0	
20	方	25 × 25	63.9	
21	不	21 × 17	27.8	
22	方	24 × 24	36.9	
23	方	22 × 17	45.3	
24	方	27 × 22	33.2	

Ch.41 ST139 注記表

a 覆土層序

1	暗褐色土に粒子状の黄褐色砂質土を若干含む。
2	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層。
3	暗褐色土に黄褐色砂質土を粒子状に多量に含む。
4	暗褐色土に多量の炭化物を含む為黒色を呈する。黄褐色砂質土を若干含む。
5	暗褐色土に少量の黄褐色砂質土を含む。
6	白色粘土のかたまり。
7	黄褐色砂質土 (地山)

b 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	20 × 23	52.5	
2	円	25 × 33	69.0	
3	方	24 × 23	56.2	
4	方	24 × 23	55.4	
5	円	30 × 25	58.8	
6	方	23 × 22	—	

Ch.42 ST140 注記表

a 覆土層序

1	暗褐色土に粘質土を少量含み、炭化物も若干含む。
2	暗褐色土に黄褐色砂質土を小ブロック状に少量含む。
3	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層。
4	暗褐色土。
5	黄褐色砂質土 (地山)

b 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	円	35 × 28	58.3	
2	円	28 × 25	56.2	
3	円	28 × 25	62.2	
4	円	27 × 26	58.9	
5	円	30 × 27	53.7	
6	円	27 × 26	59.7	
7	円	27 × 25	52.3	
8	円	28 × 26	60.2	

Ch.43 ST141 注記表

a 覆土層序

1	暗褐色土に黄褐色砂質土を粒子状に若干含む。
2	暗褐色土に黄褐色砂質土を少量含む。
3	暗褐色土に粒子状の黄褐色砂質土を若干含む。炭化物あり。
4	暗褐色土に多量の黄褐色砂質土を含む。
5	暗褐色土に黄褐色砂質土を少量含む。炭化物あり。
6	暗褐色土に礫状の黄褐色砂質土を含む。炭化物あり。
7	暗褐色土。炭化物あり。
8	黄褐色砂質土 (地山)

b 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	円	30 × 27	9.3	
2	円	32 × 31	11.1	

Ch.44 ST142・147 注記表

a 覆土層序

1	暗褐色土。
2	黄褐色砂質土に多量の暗褐色土を含む。
3	暗褐色土に小ブロック状の黄褐色砂質土、炭化物、灰（黒）を若干含む。
4	黒色土。
5	焼土。
6	黄褐色砂質土（Pit覆土）
7	黒色土に暗褐色土、黄褐色砂質土を若干含む。
8	暗褐色土に黄褐色砂質土を含む。
9	白色粘質土。
10	黄褐色砂質土（地山）

b 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	45 × 41	11.5	
2	方	36 × 33	41.7	
3	円	25 × 22	30.3	
4	円	31 × 31	37.9	
5	円	30 × 28	13.2	
6	方	26 × 25	29.0	
7	方	28 × 31	44.0	
8	円	69 × 69	17.0	
9	方	30 × 31	52.0	
10	円	32 × 30	26.5	
11	方	41 × 39	33.0	
12	円	29 × 28	20.5	
13	方	22 × 18	9.0	
14	方	40 × 38	65.0	
15	方	24 × 22	19.8	
16	方	30 × 25	24.0	
17	方	40 × 35	29.0	
18	方	35 × 28	12.0	
19	方	14 × 14	—	

Ch.45 ST143 注記表

a 覆土層序

1	黒色土に黄褐色砂質土を若干含む。
2	暗褐色土に黄褐色砂質土の混層。
3	暗褐色土に粒子状黄褐色砂質土、黒色土を少量含む。
4	黒色土。
5	黄褐色砂質土

b 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	35 × 30	7.3	
2	方	38 × 28	22.5	
3	円	30 × 28	16.7	
4	方	39 × 33	17.0	
5	円	29 × 24	23.4	
6	方	34 × 33	13.0	
7	方	24 × 21	7.7	

Ch.46 ST144 注記表

a 覆土層序

1	暗褐色土。
2	焼土。
3	灰（黒）
4	暗褐色土と小ブロック状黄褐色砂質土の混層、灰（黒）と黒色土を若干含む。

5	黒色土、黄褐色砂質土を若干含む。部分的に（黒）を含む。しまりなし。
6	暗褐色土に黄褐色砂質土と炭化物を若干含む。
7	黄褐色砂質土（地山）

b 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	33 × 25	41.3	
2	方	27 × 18	33.5	
3	方	30 × 29	37.1	
4	方	27 × 18	4.6	
5	方	20 × 19	19.4	
6	方	71 × 71	30.2	

Ch.47 ST145・148・150・151 注記表

a 覆土層序

1	暗褐色土。
2	暗褐色土と焼土と黒色粘質土の混層。黒い灰と炭化物を若干含む。
3	暗褐色土。炭化物と灰を少量含む。しまりあり。
4	緑灰色粘質土に、焼土を若干含む。
5	小ブロック状の黄褐色砂質土。しまりあり。
6	暗褐色土に黄褐色砂質土を粒子状に含む。しまりなし。
7	暗褐色土と黒色土のむらのある混層。
8	暗褐色土に黄褐色砂質土が小ブロック状に少量、炭化物、黒色土を若干含む。
9	灰。
10	暗褐色土に黄褐色砂質土の小ブロックと炭化物を若干含む。
11	暗褐色土に鉄分を含む赤褐色砂質土の小ブロックを含む。
12	暗褐色土に灰を若干含む。
13	暗褐色土に黄褐色砂質土の小ブロックを若干含む。
14	黄褐色砂質土（地山）

b 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	35 × 34	67.7	ST-145
2	方	37 × 34	50.3	〃
3	方	47 × 43	74.5	〃
4	円	36 × 32	61.0	〃
5	方	43 × 41	59.5	〃
6	方	53 × 41	67.0	〃
7	方	40 × 39	31.5	〃
8	方	47 × 35	42.7	〃
9	方	29 × 28	46.0	ST-148
10	方	36 × 25	43.5	〃
11	方	27 × 24	35.8	〃
12	方	21 × 19	12.0	〃
13	方	28 × 28	67.0	〃
14	方	29 × 27	49.0	〃
15	方	30 × 29	47.3	〃
16	方	18 × 18	20.0	ST-151
17	方	27 × 26	29.0	〃
18	円	14 × 13	35.0	〃
19	方	30 × 30	58.5	〃
20	方	26 × 25	47.1	〃
21	方	19 × 19	51.5	〃
22	円	27 × 25	35.0	〃

Ch.48 SE42 覆土層序

1	暗褐色土に炭化物が微量に含む。
2	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層。
3	暗褐色土に黄褐色砂質土が若干含まれ、湿性が強い。
4	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層。(2)よりも暗褐色土が多い。下層になりしだい湿性が強くなる。
5	黄色砂質土。
6	暗褐色土と黒色土の混層に炭化物を含む。
7	砂質土に若干の炭化物を含む。
8	砂質土に多量の炭化物を含む。
9	火山礫

Ch.49 SE43 覆土層序

1	暗褐色土に炭化物を若干含む。
2	暗褐色土に少量の黄褐色砂質土を含む。(1)よりしまりなし。
3	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層。
4	粘土に灰が混入。
5	灰色灰。
6	黄褐色砂質土のブロック視
7	暗褐色土に黒灰を少量含み、灰化物も若干含む。
8	暗褐色土に灰を少量含み、灰化物も若干含む。(7)よりしまりなし。
9	暗褐色土。
10	黒色灰に白色灰が混入している。
11	暗褐色土(9)よりしまりなし。
12	黒色灰。
13	黄褐色砂質土と黒色土の混層。もろい。
14	暗褐色土に炭化物を若干含む。しまりあり。
15	黄褐色砂質土のブロック。
16	暗褐色土に黄褐色砂質土を少量含む。
17	暗褐色土に黄褐色砂質土を多量に含む(16)よりしまりなし。
18	暗褐色土にブロック状の黄褐色砂質土を含む。
19	暗褐色土。しまりなし。
20	黄褐色砂質土。しまりなし。

Ch.50 SE46 覆土層序

1	暗褐色土。しまりあり。
2	暗褐色土に炭化物・灰(黒)を若干含む(1)よりしまりなし。
3	暗褐色土に灰(黒)少量と明黄色砂質土を多量に含む。
4	暗褐色土に灰(黒色)を多量に含むため(2)より黒く黒色土に近い色である。炭化物を若干含む。しまりなし。
5	明黄色砂質土。

Ch.51 SE40 覆土層序

1	暗褐色土に炭化物を若干含む。しまりあり。
2	暗褐色土と灰の混層、炭化物若干含む。
3	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層。炭化物あり。しまりあり。
4	暗褐色土。炭化物あり。しまりなし。
5	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層、炭化物を若干含む。(3)よりしまりなし。
6	暗褐色土に黄褐色砂質土・炭化物が少量含まれる。
7	黒色土と灰の混層、炭化物を若干含む。
8	黄褐色砂質土に暗褐色土が含まれる。

Ch.52 SE44 覆土層序

1	暗褐色土に粘土質を多量に含む。
2	暗褐色土。しまりなし。
3	暗褐色土に若干の炭化物を含む。しまりあり。
4	暗褐色土に若干の黄褐色砂質土、灰、黒色土を含む。
5	灰層

Ch.53 SE45 覆土層序

1	暗褐色土に粒子状の黄褐色砂質土を少量含む。
2	黒色土に炭化物を少量含む。
3	暗褐色土に炭化物を少量含む。
4	暗褐色土に黄褐色砂質土を少量含む。
5	黄褐色土にブロック状の暗褐色土を含む。

Ch.54 SE48 覆土層序

1	暗褐色土に炭化物が若干含まれる。しまりなし。
2	暗褐色土に炭化物が若干、灰が少量含まれる。しまりはなし。
3	灰色灰に黒色灰が若干含まれる。
4	暗褐色土に炭化物あり、しまりあり。
5	暗褐色土、部分的にしまりあり。
6	暗褐色土に黄褐色砂質土が少量含まれる。しまりあり。
7	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層。
8	暗褐色土に炭化物が若干含まれる。部分的にしまりあり。
9	黒色土に多量の炭化物と若干の黒い灰、白い灰が含まれる。
10	暗褐色土と黒色土の混層。
11	灰色灰に黒色灰が若干混入している。
12	黄褐色砂質土に黒い灰が部分的に少量まじっている。しまりなし。

Ch.55 SE50 覆土層序

1	暗褐色土に炭化物が若干含まれている。しまりあり。
2	暗褐色砂質土。
3	暗褐色砂質土。しまりなし。
4	暗褐色砂質土に黒色粘土が多量に含まれる。
5	暗褐色土に褐色砂質土を多量に、炭化物と黒色土を若干含む。しまりなし。
6	暗褐色土に褐色砂質土を少量に炭化物と黒色土と黒い灰を若干含む。
7	暗褐色土に褐色砂質土が少量と炭化物が含まれている。
8	黄白色砂質土に暗褐色土が少量含まれている。

9	暗褐色土に黄白色砂質土と黒い灰を少量含む。
10	黄褐色砂質土（鉄分を多く含んでいる為赤色を呈する）。
11	褐色砂質土。しまりなし。
12	黄白色砂質土。
13	黄白色砂質土。しまりなし。
14	暗褐色土に、褐色砂質土と黒色粘質土を少量含む。
15	黄褐色砂質土、鉄分を多く含む為赤色を呈する。黒色土若干あり。
16	褐色砂質土に黄白色砂質土と暗褐色土が若干含まれる。

Ch.56 SE50 出土陶器注記表

No.	遺物No.	PL.	Fig.	出土区	器種	特徴	備考
1	P 2205	51	68	FG51SE50フク土	天目	美濃系天目碗	P2205（底部）・P2206（胴部）
2	P 2193	〃	67	〃	美濃灰釉	皿、折縁口縁で内面にヒダ削り。	
3	P 2197	〃	—	〃	美濃褐釉	皿、見込みと底に輪ドチ痕有り。	F51SE50フク土 P2189と接着
4	P 2213	〃	68	〃	黄瀬戸手	大皿、見込みに文様と思われる劃線有り。	
5	P 1930	〃	—	〃	美濃褐釉	皿、見込みに輪ドチ痕有り。	FG51SE50フク土 P2201と接着。
6	P 1968	〃	—	〃	〃	皿、底部系切り底。	FG51ST114フク土 P1818・P2115と接着
7	P 2207	〃	69	〃	唐津	碗、硬質に焼成され、薄釉が施されている。	
8	P 1819	〃	〃	〃	〃	皿、見込みに3つのトチ痕有り。	SE50 P1828・P1835・P1948・P1969・P2173・P2185
9	P 2203	〃	〃	〃	〃	皿、見込みに3つのトチ痕有り。	

Ch.57 SE50 出土播鉢注記表

No.	遺物No.	PL.	Fig.	出土区	器種	特徴	備考
1	P 2200	52	70	FG51SE50フク土	播鉢	唐津系。5条の卸目有り。	
2	P 2215	〃	〃	〃	〃	〃。	
3	P 1978	〃	—	〃	〃	越前系。8条	
4	P 2176	〃	—	〃	〃	〃。9条	
5	P 2220	〃	—	〃	〃	産地不詳系。5条の卸目有り。	
6	P 2214	〃	—	〃	〃	備前系。	
7	P 2188	〃	—	〃	〃	〃。	
8	P 2202	〃	—	〃	〃	〃。7条の卸目有り。	

Ch.58 SE51 覆土層序

1	暗褐色土に多量の黄白色粘質土を含む為明るい色を呈する。
2	黒色土（粘性あり）に黄褐色砂質土と炭化物を若干含む。
3	黄白色砂質土（凝灰質浮石層）。
4	暗褐色土に黄白色粘質土を含む為全体的に白味を帯びている。黒色粘質土も若干含まれている。
5	暗褐色土と黄白色砂質土の混層。黒色粘質土と黄褐色砂質土を若干含む。

6	暗褐色砂質土に黄白色砂質土が少量含まれる。
7	暗褐色土に黄褐色砂質土を少量、黒色土を若干含む全体的にやや粘性がある。
8	黄白色砂質土に凝灰質浮石土と暗褐色土を少量含む。
9	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層、黒色粘質土と炭化物と凝灰質浮石土を若干含む。
10	黄褐色砂質土に凝灰質浮石層と若干の暗褐色土を含む。
11	暗褐色泥土。

Ch.59 SX52 覆土層序

1	暗褐色土。しまりあり。
2	暗灰色土、灰を多量に含む。しまりなし。
3	暗褐色土に炭化物を含む。しまりなし。
4	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層。しまりなし。
5	黒色腐植土。しまりなし。
6	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層で若干粘性あり。
7	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層で若干しまりあり。
8	黄褐色砂質土（地山）

Ch.60 SX53 覆土層序

1	暗褐色土に炭化物と黄褐色砂質土を若干含む。
2	黄褐色砂質土。
3	黄褐色砂質土（地山）

Ch.61 SX56 覆土層序

1	暗褐色土。
2	暗黄色砂質土。
3	黄褐色砂質土（地山）

Ch.62 SX61 覆土層序

1	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層、炭化物を若干含む。
2	黄褐色砂質土（地山）

Ch.63 SX64 覆土層序

1	暗褐色土に黄褐色砂質土を若干含む。炭化物も含む。
2	暗褐色土に黄褐色砂質土を少量含む。
3	黄褐色砂質土（地山）

Ch.64 SX68 覆土層序

1	暗褐色土に黄褐色砂質土が少量と灰、炭化物が若干含まれる。
2	黄褐色砂質土（地山）

Ch.65 SX72 覆土層序

1	暗褐色土に若干の粒子状黄褐色砂質土を含む。炭化物あり。
2	暗褐色土に黄褐色砂質土を小ブロック状に多量に含む。炭化物あり。
3	茶褐色土。鉄分を多く含む為赤色を呈する。
4	暗褐色土に若干の黄褐色砂質土を含む。
5	暗褐色土に炭化物を少量含む。
6	暗褐色土に多量の炭化物を含む為黒色を呈する。
7	褐色粘土。
8	暗褐色土と褐色砂質土の混層。
9	暗褐色土に炭化物を若干含む。
10	黄褐色砂質土（地山）

Ch.66 SX80 覆土層序

1	黄白色粘土の中に若干の暗褐色土と炭化物が混在している。
2	暗褐色土に若干の黄白色粘質土と炭化物を含む。
3	暗褐色土。
4	暗褐色土に若干の黄白色砂質土が含まれる。
5	(2)よりも黄白色砂質土が多くレンズ状に入っている。
6	暗褐色土。しまり強し。
7	黒色土。しまり強し。
8	青灰。
9	黄白色粘土。
10	暗褐色土に黄褐色砂質土混入。
11	黄褐色砂質土。

Ch.67 SX88 覆土層序

1	暗褐色土。
2	粘土。
3	暗褐色土にカーボンと若干の黄褐色砂質土を含む。
4	青灰。
5	暗褐色土と焼土の混層。
6	焼土。
7	暗褐色土に黄褐色砂質土をブロック状に含む。
8	黄褐色砂質土（地山）

Ch. 68 青磁注記表

No.	遺物No.	PL.	Fig.	出土区	器形	釉調	胎土	特徴	備考
1	P 2064	62	62	L53I	酒会壺蓋	外：青緑色 内：淡青緑色・赤褐色	灰色	浮彫文	
2	P 838	〃	—	F52SE40フク土	〃	〃	〃	〃	
3	P 1222	〃	62	J53II	香炉	青緑色	〃	劃線文	漆接合痕
4	P 1422	〃	〃	I50ST135フク土	碗	暗黄緑色	暗灰色	外：鑄蓮弁目 内：櫛	
5	P 408	〃	〃	H52I	大皿(盤)	青灰色	灰色		
6	P 1015	63	〃	F53ST117aフク土	碗	青緑色	白色	蓮弁文	
7	P 1273	〃	—	K52IIF	〃	〃	〃	劃線文	
8	P 1741	〃	62	H51III	〃	外：暗緑色 内：暗青緑色	灰色	〃	
9	P 1207	〃	〃	J52III	〃	暗青緑色	〃		
10	P 2007	〃	—	G51SE50dフク土	〃	暗青灰色	暗灰色		
11	P 2083	〃	62	L53Pitフク土	〃	青緑色	灰色		墨付着
12	P 2079	〃	〃	L53Pit内フク土	皿	暗黄緑色	暗灰色	櫛目状流水文	
13	P 1193	〃	〃	J52II	皿	青灰色	〃	見込みに印花文	

Ch. 69 白磁注記表

No.	遺物No.	PL.	Fig.	出土区	器形	釉調	胎土	特徴	備考
14	P 1377	64	63	I50II下	皿	黄白色・橙白色	黄白色		二次焼成
15	P 141	〃	〃	K53II下	〃	黄白色・赤黄白色	〃		
16	P 1258	〃	〃	K52III	〃	青灰白色	灰白色		
17	P 637	〃	—	E53II	〃	白色	〃		
18	P 1215	〃	63	K52II	〃	黄白色	黄白色		
19	P 606	〃	〃	F52II	〃	〃	〃		
20	P 386	〃	〃	H52II	〃	〃	〃		
21	P 1	65	〃	K52I下	〃	緑青白色	黄白色	漆接合	
22	P 2464	〃	〃	F53Pit内フク土	〃	青白色	灰白色		
23	P 594	〃	〃	F53II	〃	白色・茶灰色	〃		
24	P 1711	〃	〃	I52SE43bフク土	〃	青白色	〃		
25	P 2239	〃	〃	K52SX79フク土	〃	白色	白色		
26	P 2137	〃	〃	L53SX78フク土	〃	青白色	灰白色		
27	P 1439	64	〃	I52ST126dフク土	小坏	灰白色	〃	見込み蛇の目	
28	P 1546	〃	〃	K52ST131dフク土	〃	白色	〃	〃	
29	P 1263	〃	〃	K52II	〃	灰白色	〃	〃	
30	P 130	〃	〃	L53I	〃	白色	〃		
31	P 1232	〃	〃	J53III	皿	灰黄白色	黄白色		
32	P 1195	〃	〃	J52II	碗	青緑白色	灰白色	口縁無釉	口縁に黒漆付着
A	P 1084	—	〃	F53ST117fフク土	〃	〃	〃		漆接合痕

Ch.70 染付注記表

No.	遺物No.	PL.	Fig.	出土区	器形	釉調	胎土	文様	備考
33	P 1507	67	64	K53ST129dフク土	碗	青白色	白色		
34	P 372	〃	〃	I52II	〃	青緑色	〃		
35	P 973	〃	〃	H52III上	〃	青白色	〃		
36	P 1226	〃	〃	J53III	〃	青緑色	〃		漆接合痕有り。
37	P 1751	〃	〃	H51III	〃	白色	〃		底に文字(長)有り。
38	P 1896	〃	〃	I48III	〃	青白色	〃	蕉葉文	碁筈底。
39	P 936	〃	〃	G53III上	〃	青灰色	灰色		
40	P 1251	〃	〃	K53II下	〃	青緑色	灰白色		漆接合痕有り。
41	P 2049	68	65	M53Pit内フク土	皿	白色	白色	牡丹唐草文	
42	P 2062	〃	—	L53Pit内フク土	〃	青白色	〃	牡丹唐草文	すず付着
43	P 935	〃	65	G53III上	〃	白色	〃	羯磨文・唐草文	
44	P 2095	〃	—	L53Pit内フク土	〃	〃	〃		
45	P 1767	〃	65	G53Pit内フク土	〃	〃	〃	羯磨文・唐草文	
46	P 1182	〃	〃	I52III	〃	緑灰色	黄白色	玉取獅子文	すず付着
47	P 2078	〃	〃	L53Pit内フク土	〃	青緑色	白色	牡丹唐草文	
48	P 19	69	—	K52I	小 坏	青白色	〃	唐草文	底に文字(大明年造)有り。
49	P 1596	〃	65	K53ST130dフク土	〃	白色	〃		碁筈底
50	P 696	〃	〃	F53ST103フク土	皿	青白色	〃		
51	P 2276	〃	〃	H52III	〃	浮濁色	茶灰色		碁筈底
52	P 887	〃	—	E53ST103eフク土	〃	緑灰色	黄白色		〃
53	P 104	〃	—	K53I	〃	青白色	〃		〃
54	P 842	〃	—	E52ST115bフク土	〃	青緑色	白色		〃
55	P 5	70	—	K52I	〃	青白色	白色		
56	P 724	〃	—	D53ST108床面	〃	青緑色	〃		
57	P 2198	〃	—	FG51SE50フク土	〃	青白色	〃		
58	P 21	〃	—	L52I	〃	〃	〃	四方禪文	
59	P 1203	〃	—	J52III	〃	〃	〃		
60	P 1816	〃	66	G51III	〃	〃	〃	山水人物文	底に文字(福)有り
61	P 2364	〃	〃	I53Pit内フク土	〃	〃	〃	獅子文	〃 (福)有り。
62	P 2110	〃	〃	I48ST145a	〃	〃	〃	龍文	
63	P 704	71	〃	80H54SE21	〃	〃	〃	花鳥折枝文・四方禪文	
64	P 119	〃	〃	K53I	〃	〃	〃	〃	
65	P 1933	〃	—	F51SE50bフク土	〃	青緑色	〃		
66	P 4110	〃	—	80SE22フク土	〃	白色	〃	飛雲文	
67	P 2037	〃	66	I48ST145aフク土	〃	青白色	〃	唐草文	68と接着
68	P 1992	〃	—	I48ST145cフク土	〃	〃	〃		67と接着
69	P 2028	72	—	I48ST145aフク土	〃	乳白色	茶灰色		71と接着
70	P 2027	〃	—	I48ST145aフク土	〃	〃	〃		
71	P 1989	〃	66	J48ST145aフク土	〃	〃	〃		すず付着。見込み蛇の目。
72	P 1712	〃	〃	I52SE43フク土	〃	青緑色	〃		
73	P 1252	〃	—	K53III	〃	〃	〃		
74	P 173	〃	—	K53III	〃	〃	〃		
A	P 2061	—	65	L53Pit内フク土	〃	灰白色	灰白色	牡丹唐草文	
B	P 663	—	〃	D53II下	〃	青白色	白色	唐草文	
C	P 1823	—	66	H53SX72bフク土	〃	〃	〃		底に文字(長)有り。

Ch.71 朝鮮系他注記表

No	遺物No	PL	Fig.	出土区	器種	器形	釉調	胎土	特徴・備考
75	P 60	78	—	L53I下	朝鮮?	碗	緑灰色	灰色	
76	P 411	78	63	I52II	〃?	小坏	茶灰色	黄白~茶灰色	見込み蛇の目。墨付着。
77	P 1473	78	〃	I52ST102cフク土	朝鮮	〃	〃	赤褐色	稜花状口縁。見込みにトチ痕有り。二次焼成のため釉が剥落。
78	P 1453	78	—	I52ST126bフク土	赤絵	壺	乳白色	茶灰色	
79	P 635	78	—	E53II	白磁	小皿	白色	白色	
80	P 356	78	—	I52II	〃	壺	〃	〃	すず付着。
81	P 1823	78	63	F51SE50bフク土	青白磁	高坏型小坏	青白色	灰白色	見込み蛇の目
82	P 68	78	—	K52I	白磁	〃	白色	〃	底部片。

Ch.72 美濃灰釉陶器注記表

No	遺物No	PL	Fig.	出土区	器形	釉調	胎土	特徴	備考
83	P 107	74	67	K52I	壺	緑色	灰色	釉溜り有り。	
84	P 963	74	—	G53SE41aフク土	〃	〃	〃	〃	二次焼成
85	P 2435	74	67	K53Pit	小皿	黄緑色	黄白色		
86	P 39	74	〃	L51I	皿	緑色	〃	釉溜り有り。	
87	P 2479	74	—	K52I	〃	〃	〃		
88	P 55	74	67	L52I	〃	黄緑色	〃		
89	P 1262	74	〃	K52III	〃	緑色	〃		
90	P 857	74	〃	F53ST117cフク土	碗	黄緑色	〃	蓮弁文	
91	P 1236	74	—	H52ST123bフク土	鉢	〃	灰色		
92	P 2246	74	—	K52SX79dフク土	大皿	〃	〃		
93	P 1810	74	67	G51II	皿	〃	〃	菊皿	
94	P 1766	74	〃	H50II	〃	黄白色	黄白色		
95	P 919	74	〃	G52III上	〃	〃	〃	見込みに印花文。底に輪ドチ痕有り	
96	P 1356	74	〃	I50I	〃	〃	〃	〃	
97	P 1500	74	〃	I53ST102fフク土	〃	黄緑色	〃	底に輪ドチ痕有り。	
98	P 1876	74	〃	H52SX73a	〃	緑色	灰色		
99	P 1716	74	—	I52SE48フク土	〃	〃	〃		
100	P 2346	74	67	F53SX83フク土	〃	黄緑色	黄白色	見込みに印花文。底に輪ドチ痕有り。	
101	P 2387	74	—	北表採	〃	〃	〃	〃	
A	P 165	74	—	K53II上	〃	〃	〃	〃	

Ch.73 美濃褐釉陶器注記表

No	遺物No	PL	Fig.	出土区	器形	釉調	胎土	特徴	備考
102	P 75	76	67	FG51SE50フク土	皿	黒褐色	赤褐色	見込みと底に輪ドチ痕有り。	
103	P 1930	76	〃	F51SE50aフク土	〃	〃	黄白色	見込みに輪ドチ痕有り。	
104	P 1296	76	〃	K53II下	〃	茶褐色	〃	見込みにトチ痕。底に輪トチ痕有り。	
105	P 1818	76	〃	G51ST114bフク土	〃	黒褐色	灰白色	見込みにトチ痕有り。底部糸切り底。	
106	P 2030	76	—	I48ST145bフク土	瓢箪型壺	〃	黄白色		

Ch.74 天目注記表

No.	遺物No.	PL.	Fig.	出土区	器形	釉調	胎土	特徴	備考
107	P 2365	76	—	I53Pit内フク土	碗	黒褐色	灰白色		
108	P 88	76	68	L53I	碗	黒褐色	灰白色		
109	P 140	76	76	K52I	碗	黒褐色	灰白色		
110	P 1998	76	—	I48ST150フク土	碗	黒色	黄灰色		二次焼成
111	P 2406	76	—	I53	碗	黒褐色	茶灰色		76
112	P 188	76	68	K53II	碗	黒褐色	黄灰色		76

Ch.75 黄瀬戸手・唐津・志野他注記表

No.	遺物No.	PL.	Fig.	出土区	器種	器形	釉調	胎土	特徴・備考
113	P 388	77	68	H52II	黄瀬戸手	大皿	黄白色	黄白色	
114	P 1922	77	—	F51SE50dフク土	絵唐津	碗	暗灰緑色	暗灰色	
115	P 1929	77	—	77 c	碗	碗	碗	碗	
116	P 2243	77	68	I48SX75aフク土	志野	皿	灰白色	赤黄色	
117	P 1794	77	77	H48III	碗	碗	碗	碗	
118	P 2147	77	77	L53SX78フク土	美濃系	卸皿	緑白色	灰白色	内面に卸目若干有り。
119	P 75	77	77	K52I	瀬戸系 褐釉	壺	褐色	77	外面に縦位の篋削り痕と横位の櫛目有り。
120	P 2310	77	—	F51Pit内フク土	美濃瀬戸系 褐釉	皿	黄灰色	黄白色	見込み外側と底部外側に釉溜り有り。
121	P 1913	77	69	I48III	不明	碗	黒褐色	77	
122	P 1190	77	77	I52III	碗	碗	碗	碗	
A	P 2242	—	77	I48SX75aフク土	唐津	碗	灰色	赤茶色	見込みにトチ痕有り。
B	P 2317	—	77	F51Pit内フク土	碗	碗	灰緑色	77	77
C	P 2218	—	77	FG51SE50フク土	碗	碗	碗	灰色	

Ch.76 越前注記表

No.	遺物No.	PL.	Fig.	出土区	器形	釉調	胎土	特徴	備考
123	P 1560	78	71	K52ST131cフク土	甕	—	暗灰色		
124	P 2419	78	—	L52ST132フク土	碗	—	黒色		
125	P 1544	78	71	KL52ST131fフク土	碗	灰緑色	暗灰色	窯灰色(王1)有り。	釉流れあり。
126	P 1547	78	—	L52ST131dフク土	碗	—	78		128と接着。焼斑あり。
127	P 2241	78	—	K52SX79フク土	碗	灰緑色	78		
128	P 1556	78	71	K52ST131aフク土	碗	—	78		焼斑あり。
129	P 1562	78	71	KL52ST131cフク土	碗	黄白色	78	内面に灰釉。	78
130	P 1535	78	—	K52ST131bフク土	碗	—	78		
131	P 146	78	—	K52II上	碗	黄白色	78	内面底部に若干の灰釉。	
132	P 2247	78	—	K52SX80dフク土	碗	緑灰色	78	内面底部に灰釉。	K52SX79 P 2250と接着
133	P 1560	78	—	K52ST131cフク土	碗	黄白色	78	内面に灰釉。	80I57 P 384・80I56 P 3203と接着

Ch.77 信楽注記表

No.	遺物No.	PL.	Fig.	出土区	器形	釉調	胎土	特徴	備考
134	P 1743	79	—	H51III	甕	—	暗灰色	胎土に大粒の石英が多量に含まれる。	
135	P 1792	〃	—	H48III	〃	灰緑色	〃	〃	
136	P 2434	〃	—	H50	〃	〃	〃	〃	

Ch.78 播鉢注記表

No.	遺物No.	PL.	Fig.	出土区	分類	色調	胎土	特徴	備考
138	P 307	80	—	78L69SD02直上	珠洲系	灰色	灰色	口縁部に櫛目波状文	
139	P 870	〃	—	81F53III上	〃	〃	〃	〃	
140	P 879	〃	—	8055ST64cフク土	〃	青灰色	〃	〃	
141	P 2262	〃	—	79K60 II	〃	灰色	〃	〃	
142	P 4473	〃	—	79I60 II	〃	暗灰色	〃	〃	
143	P 3379	〃	—	80K56SE22フク土	〃	灰色	〃	〃	
144	P 4759	〃	—	79ST31フク土	〃	〃	〃	片 □	
145	—	〃	—	80E54Pitフク土	〃	〃	〃		
146	P 518	〃	—	80E55 II	〃	〃	〃		
147	P 577	〃	—	80H54 II	〃	〃	〃		漆付着
148	P 908	81	—	80K55SE20フク土	越前系	赤褐色	赤黄色	9条の櫛目	すす付着
149	P 133	〃	70	81M53SX52フク土	〃	黒・黄褐色	灰白色	10 〃	
150	P 202	〃	—	80PQ55フク土	〃	赤褐色〃	〃	9 〃	
151	P 545	〃	70	80G54 II	〃	赤灰色	〃	9 〃	
152	P 4564	〃	—	79表採	〃	黄褐色	赤灰・灰色	11 〃	
153	P 1125	〃	—	78H47I	〃	〃	〃	10 〃	
154	P 1479	〃	—	78N47III T4	〃	黒～緑灰色	暗灰色	9 〃	
155	P 2507	82	—	81H53III上	備越系	赤褐色	赤褐色		
156	P 1764	〃	—	81H50III	〃	茶褐色	灰色	5条の櫛目	
157	P 127	〃	—	80K54I	〃	〃	暗灰色		
158	P 332	〃	—	80PQ55	〃	〃	灰色	片 □	
159	P —	〃	—	81FG51SE50フク土	〃	赤褐色	赤褐色	7	
160	P 83	82	—	81L53I	備前系	茶褐色	暗灰色		
161	P 2060	〃	—	81H51I	〃	〃	茶灰・暗灰色		
162	P 12	〃	—	81J53I	〃	〃	暗灰色		
163	P 91	〃	—	78NG91	〃	茶灰・茶褐色	茶灰・暗灰色		
164	P 2214	〃	—	81FG51SE50フク土	〃	〃	〃		
165	P 2188	〃	—	81F51SE50フク土	〃	暗灰・茶褐色	〃		
166	P 2518	〃	—	81H52III上	〃	茶褐色	〃		
167	P 79	〃	—	81L52I	〃	〃	〃		
168	P 965	83	70	81G53SE41bフク土	〃	赤褐色	赤褐色	9条の櫛目	
169	P 1279	〃	〃	78K47Pitフク土	〃	〃	〃		
170	P 933	〃	—	81G53 II上	〃	〃	〃		
171	P 597	84	—	80E54SX21aフク土	III a	赤褐色	赤黄・暗灰色	6条の櫛目	
172	P 892	〃	—	81F52SX58aフク土	〃	〃	〃	6 〃	
173	P 1981	〃	—	80I57SX36フク土	〃	赤黄色	赤黄・暗灰色	6条の櫛目	
174	P 863	〃	—	81F52SX56dフク土	〃	黒・赤褐色	黒・赤褐色	5 〃	
175	P 1617	〃	—	79I59 II	〃	黒	黒	6 〃	
176	P 1772	〃	70	81H48III	〃	黒・赤褐色	黒・赤褐色	7 〃	
177	P 1380	85	—	78I47I	〃	赤灰色	灰色		
178	P 861	〃	—	81F52III上	〃	灰色	〃		
179	P 1175	〃	—	80I57SX34aフク土	II b	〃	〃		

180	P	3393	//	—	79ST26fフク土		灰 色	灰 色		
181	P	1393	//	—	78H47ST08NW —10cm		赤 灰 色	〃	10条の櫛目	
182	P	1706	85	—	81G52SE43フク土		灰 色	灰 色		
183	P	561	//	—	80H54II		暗 灰 色	暗 灰 色		
184	P	3316	//	—	79ST19aフク土		灰 色	灰 色	12条の櫛目	
185	P	535	//	—	81F52II		〃	〃	12 〃	
186	P	1157	//	—	80I57II上	II b	〃	〃	13 〃	
187	P	603	//	—	81F52II		緑 灰 色	緑 灰 色		
188	P	474	//	—	80M57Pit454		灰 色	灰 色		
189	P	2217	86	70	81FG51SE50フク土		黒・灰色	〃	8条の櫛目	
190	P	1318	//	—	78K47SH04フク土		灰・暗灰 色	灰白・黒色	8 〃	
191	P	29	//	—	80L55ST51cフク土		黒 色	〃	8 〃	
192	P	977	//	—	81H52III上		黒・灰白 色	灰 白 色	6 〃	
193	P	2402	//	—	81K53SD15Pit内		黒 色	灰 色		すす付着。
194	P	930	//	—	81G52III上		黒・灰白 色	灰 白 色	6条の櫛目	
195	P	438	//	—	81H53II		黒・黄白 色	黄 白 色		すす付着。
196	P	201	//	—	81K53II		灰 白 色	灰 白 免 片 口。	6条の櫛目。	
197	P	1035	//	—	81F52ST118フク土		黒・灰白 色	〃	6条の櫛目	
198	P	1196	//	—	80I57ST81a床面		〃	黄 白 色	5 〃	
199	P	846	//	—	81F52SE40bフク土		〃	赤黄・灰白 色		
200	P	844	//	—	81E52ST115bフク土		〃	灰 白 色		
201	P	1278	//	—	80J54Pit内床面		黒・灰白 色	灰 色	6条の櫛目	
202	P	1488	//	—	78ST08NWフク土		灰・黄白 色	黄 白 色	5 〃	
203	P	1055	//	—	79J60II		黒・黄白 色	赤 褐 色	7 〃	
204	P	1747	86	—	81H51III		黒・灰白 色	灰 白 色		
205	P	2510	//	—	81I47Pitフク土		黒・茶褐 色	黄 白 色		すす付着
206	P	1511	//	—	81J53SE46フク土		黒 色	暗 茶 灰 色		
207	P	357	//	—	80PQ55		〃	黒 色		
208	P	2612	//	—	81H50.50I		黒色・灰白 色	黒・灰白色		
209	P	1460	//	—	81I52ST126cフク土		黒 色	灰・灰白色	9条の櫛目	
210	P	2372	//	—	81I50ST1346bフク土		黒色・灰白 色	黄 白 色		
211	P	2617	//	—	81I48II		茶 灰 色	黒 色		
212	P	80	//	—	80G55I		黒 色	〃	7条の櫛目	
213	P	4474	86	—	79SH03フク土		黒・黄白 色	赤 黄 色	9条の櫛目	
214	P	1940	//	—	81F51SE50aフク土		黒 色	灰 白 色	5 〃	
215	P	1170	//	—	81I52III		〃	黒・灰白色		
216	P	1419	//	—	81I50ST135cフク土		〃	暗 灰 色	9条の櫛目	
217	P	1469	//	—	81I51SX68bフク土		黒・黄白 色	黄 白 色	5 〃	
218	P	454	//	—	81H52II	黒 色	灰白・暗 灰色			
219	P	3896	//	—	79SE10bフク土		灰 色	赤 黄 色		
220	P	2526	//	—	81H52ST121フク土		黒・茶灰 色	茶褐・黒色	9条の櫛目	
221	P	1238	//	—	80J54III上		黒 色	黒 色	口縁部に櫛目 波 状 文	
222	P	1533	//	—	79I59II		〃	〃	7条の櫛目	
223	P	1214	//	—	80I57ST81フク土		〃	〃	7 〃	

Ch.79 瓦器注記表

No.	遺物No.	PL.	Fig.	出土区	器形	文様	特徴	備考
224	P 1755A	87	—	H50II	手焙り	巴文	外面黒色研磨	
225	P 1347	//	71	I52ST126フク土	//	松葉文 ・十字文	外面研磨	
226	P 889	//	—	F53SX60aフク土	壺形	雷文・巴文	//	
227	P 2352	//	71	F53SX83フク土	//	//	//	
228	P 1047A	//	—	F53ST118dフク土	//	巴文	//	
229	P 339	//	—	K53III	//	雷文・巴文	//	
230	P 2107	//	—	L53III	手焙り	—	//	
231	P 2045	//	—	M53Pitフク土	//	—	//	
232	P 2607	//	—	K53II下	//	—	//	
233	P 1513	//	71	K53ST130フク土	壺形	雷文・巴文	外面黒色研磨。輪積み痕有り。	
234	P 1491	//	71	I53ST102フク土	手焙り	→	部分的に黒色を呈する彫り込み文様	(脚) 円形状
235	P 1009	//	—	H53SE41cフク土	//	巴文	外面黒色研磨	
236	P 1762	//	—	H50III	//	—	外面研磨	脚

Ch.80 かわけ注記表

No.	遺物No.	PL.	Fig.	出土区	特徴	備考
237	P 2420	88	72	I52ST102フク土	糸切り底。	
238	P 2618	//	//	J52III	//。すす付着。	
239	P 2240	//	//	K52Pit内フク土	//。	

Ch.81 溶解物付着土器(埴埴)・須恵器・他注記表

No.	遺物No.	PL.	Fig.	出土区	器種	器形	特徴	備考
240	P 2275	89	72	H51III	須恵器	坏	火ダスキ有り。篋書き記号有り。(V)。	
241	P 229	//	72	H51SX85フク土	//	//	// (V)。	
242	P 1472	//	72	I52ST102aフク土	土器	壺		
243	P 1081	//	72	F53ST117dフク土	溶解物付着土器	埴埴	銅付着。	
244	P 1140	//	—	I52II	//	//	//	
245	P 709	//	—	E53ST103dフク土	//	//	//	
246	P 2308	//	—	I50Pit内フク土	//	//	//	
247	P 2307	//	—	I49Pit内フク土	//	//	未使用。	
248	P 1228	//	—	I53II下	//	//	銅付着。	
249	P 2322	//	—	F53Pit内フク土	//	//	//	

Ch. 82 土師器・他注記表

No.	遺物No.	PL.	Fig.	出土区	器種	器形	特徴	備考
250	P 2306	90	72	K52SX81フク土	土師器	坏	底部に砂付着。	
251	P 2032	〃	〃	H50SD32フク土	〃	〃	底部は糸切り底。	
252	P 2644	〃	—	HI50SD32フク土	〃	〃	〃 内	
253	P 2643	〃	72	HI50SD32フク土	〃	〃	〃 で再調整。内黒。	
254	P 2304	〃	72	K52SX81フク土	〃	〃	〃	
255	P 2641	〃	—	G51カクラン層	〃	〃	〃	
256	P 2299	〃	72	G51カクラン層	須恵系土器	〃	〃	
257	P 2302	〃	—	K52SX81フク土	土師器	甕	底部に砂付着。	
258	P 2100	〃	—	H50SD32フク土	〃	坏	底部は糸切り底。	
259	P 2642	〃	72	K52SX81フク土	須恵系土器	〃	〃 墨書有り。	

Ch. 83 鉄製品注記表

No.	遺物No.	PL.	Fig.	名称	出土区	長さ×幅×厚さ(cm)	備考
260	F 230	91	73	轡	E53ST103c床面		
261	F 746	〃	〃	刀	I52ST102f床面	59.45×2.4×0.62	390 g
262	F 1060	〃	—	火 箸	G53SE57フク土	38.0×0.6×0.6	
263	F 76	92	—	小 刀	I53II上	20.2×1.4×0.5	
264	F 72	〃	—	〃	I53ST102フク土	18.1×1.30×0.36	
265	F 795	〃	—	〃	H51ST140フク土	16.36×1.6×0.4	
266	F 1007	〃	—	〃	I52ST124フク土	17.925×1.29×0.595	
267	F 810	〃	73	打 根	G51ST144aフク土	12.55×1.6×1.545	
268	F 811	〃	〃	〃	G51ST144aフク土	13.4×1.36×1.36	
269	F 327	〃	—	〃	G52ST117aフク土	11.41×1.38×1.14	
270	F 520	〃	—	鉄 鏃	H53ST127aフク土	8.0×1.0×1.08	
271	F 993	〃	—	〃	F53SF18フク土	9.645×0.63×0.585	
272	F 908	〃	—	〃	I48ST145aフク土	8.335×1.2×0.82	
273	F 1089	〃	73	〃	J53ST129cフク土	9.04×2.47×0.56	
274	F 265	〃	—	〃	F53III上	10.88×0.92×0.90	
275	F 36	〃	73	打 根	K53II上	12.94×2.22×2.17	
276	F 873	〃	—	苧 引 金	H51ST140cフク土	9.70×5.855×0.34	
277	F 843	〃	—	不 明	G51ST144bフク土	10.39×1.74×0.38	
278	F 365	〃	73	小 札	G53ST119dフク土	6.71×3.20×0.30	
279	F 311	〃	〃	〃	H52III上	6.92×1.92×0.26	
280	F 550	〃	〃	〃	K53ST130bフク土	8.61×3.3×0.4	
281	F 720	〃	—	〃	I52SE43フク土	4.0×2.41×0.34	
282	F 287	92	73	小 札	H52III上	4.23×3.63×0.24	
283	F 945	〃	—	〃	L53SX78フク土	6.98×2.18×0.335	
284	F 846	〃	—	〃	H51ST140cフク土	6.075×2.0×0.34	
285	F 306	〃	73	〃	F53ST117	6.24×2.25×0.39	
286	F 243	〃	—	かすがい	〃	5.80×0.67×0.62	
287	F 358	〃	—	釘	〃	10.12×1.38×0.74	
288	F 466	〃	—	〃	〃	4.45×1.52×0.63	木付着
289	F 475	〃	—	〃	〃	5.74×1.22×0.82	〃
290	F 471	〃	—	〃	〃	3.29×1.62×0.78	〃
291	F 141	93	—	鋸 鎌	F53II	18.5×2.0×0.22	

292	F	128	93	—	小 刀	E53II	19.5×1.53×0.36	
293	F	721	〃	—	〃	I53ST102フク土	13.81×1.8×0.52	
294	F	792	〃	—	かすがい	H51III	6.6×1.0×0.54	
295	F	880	〃	—	不 明	K53III	9.9×2.5×0.9	
296	F	2156	〃	—	〃	I53ST102fフク土	14.43×2.0×0.49	
297	F	108	〃	—	〃	F53I	16.87×1.5×1.48	
298	F	896	〃	—	釘	I48ST145cフク土	4.28×1.12×0.54	
299	F	135	〃	—	〃	F53II	4.98×0.98×0.74	
300	F	259	〃	—	〃	F52II下	5.765×0.48×0.4	
301	F	2122	〃	—	〃	KL52ST131aフク土	4.76×1.2×0.63	
302	F	725	〃	—	〃	I52SE43cフク土	4.9×0.675×1.12	
303	F	342	〃	—	〃	H52ST121フク土	4.5×0.74×0.94	
304	F	890	93	—	釘	I48ST145フク土	5.765×0.9×0.815	
305	F	764	〃	—	〃	L52ST138	7.8×1.7×1.295	
306	F	895	〃	—	〃	I48ST145cフク土	6.72×1.72×1.25	
307	F	1052	〃	—	〃	F53SX83フク土	6.62×1.80×1.015	
308	F	165	〃	—	〃	D53II	7.24×1.28×0.9	
309	F	901	〃	—	〃	I48ST145フク土	7.185×0.84×0.68	
310	F	570	〃	—	〃	I52ST126dフク土	5.24×1.36×0.9	
311	F	1003	〃	—	〃	I48SX75aフク土	3.355×0.19×0.515	木付着
312	F	483	〃	—	〃	H52ST123フク土	3.25×0.88×0.74	
313	F	916	〃	—	〃	M53SX76aフク土	4.74×0.7×0.695	木付着
314	F	814	〃	—	〃	G51ST144bフク土	6.08×1.24×0.76	
315	F	337	〃	—	〃	H52ST121フク土	5.42×1.42×0.67	
316	F	756	〃	—	〃	I52SE43aフク土	8.17×0.96×0.455	
A	F	740	—	73	内 耳 鍋	L52ST132aフク土	10.6×10.8×0.48	
B	F	169	—	73	鉄鍋・皿?	D53Pitフク土	12.6×3.2×0.8	三足あり。

Ch.84 銅製品注記表

No.	遺物No.	PL.	Fig.	名 称	出 土 区	長さ×幅×厚さ(cm)	備 考
317	F 505	93	—	銅 滓	K52III	4.885×3.0×0.445	
318	F 10	〃	—	〃	L53I下	2.745×1.495×0.93	
319	F 457	〃	—	〃	F53ST118cフク土	3.55×3.19×0.715	
320	F 1095	〃	—	〃	K53ST130フク土	4.54×2.9×1.36	
321	F 2134	〃	—	〃	L52ST132aフク土	13.16×3.06×1.0	
322	F 406	〃	—	〃	H52ST121aフク土	8.35×6.47×0.91	
323	F 244	94	74	切 羽	F53ST117eフク土	3.72×2.4×0.16	
324	F 351	〃	〃	鐺	H52ST121cフク土	6.76×6.76×0.44	
325	F 119	〃	—	小 柄	G53II	10.1×1.2×0.34	
326	F 77	〃	—	〃	H52I	9.66×1.5×0.48	
327	F 788	〃	74	〃	H51II	9.56×1.4×0.4	
328	F 322	〃	—	〃	G52ST119dフク土	9.1×1.28×0.5	
329	F 352	〃	74	筭	H52ST121dフク土	16.8×1.28×0.46	
330	F 74	〃	〃	〃	I53埋土	16.2×1.06×0.28	
331	F 481	〃	—	〃	H52ST123dフク土	12.54×1.16×0.4	
332	F 170	〃	74	〃	D53ST104bフク土	8.44×1.32×0.35	
333	F 427	〃	—	〃	H52ST122bフク土	12.3×1.06×0.24	
334	F 497	〃	74	火 繩 鉄	K52II	10.14×0.48×0.58	
335	F 62	〃	〃	鉄 砲 玉	K53II	1.22×1.22×1.22	
336	F 502	〃	〃	〃	G53III	1.32×1.3×1.32	
337	F 23	〃	〃	鐺	L53I	5.26×0.94×0.1	

338	F	394	94	74	鋳	H52ST124	3.44×0.56×0.11	
339	F	942	〃	〃	受皿	L52攪乱フク土	4.08×0.64×0.06	
340	F	132	〃	〃	銅滓	F53II	3.9×1.8×0.56	
341	F	565	〃	74	不明銅製品	M52ST132cフク土	10.5×0.98×0.12	
342	F	758	〃	〃	蓮弁型銅製品	I52ST102cフク土	13.58×7.26×0.24	
343	F	784	〃	〃	毛抜き	F53Pit内フク土	7.95×1.48×0.1	
344	F	59	〃	〃	取手	J53II	5.54×2.0×0.5	
345	F	213	〃	〃	銅管	D52ST104フク土	7.31×1.48×0.24	
A	F	496	—	〃	鏡	K52II	8.7×1.26×0.5	
B	F	8	—	〃	キセル	M53I下	6.58×1.2×1.18	木付着

Ch. 85 石製品注記表

No.	遺物No.	PL.	Fig.	名称	出土区	縦(径)×横(径)×高(厚) cm	石質	備考
346	S 115	95	—	白	H50III	19.7×19.7×12.87	安山岩	
347	S 29	〃	—	〃	F53ST117fフク土	28.70×28.70×2.17	〃	
348	S 60	〃	—	〃	H53III	17.13×17.13×10.8	〃	
349	S 110	〃	—	〃	I52SE43bフク土	12.72×12.72×9.3	〃	
350	S 165	〃	—	〃	G53SD50フク土	14.72×14.72×10.86	〃	
351	S 49	〃	—	〃	H53SE41bフク土	2.90×4.16×2.86	〃	
352	S 62	〃	—	〃	L52II下	23.12×23.12×10.75	〃	
353	S 33	〃	—	〃	G52III上	8.26×8.26×12.02	〃	
354	S 140	〃	—	〃	I48SB18Pitフク土	27.5×19.5×12.5	〃	
355	S 117	〃	—	石鉢	G51ST144aフク土	18.29×13.82×6.14	〃	H51III上 S121と接着
356	S 64	〃	—	〃	J53II下	18.36×24.118×9.35	〃	
357	S 61	〃	—	〃	L52II下	17.41×14.98×3.42	〃	
358	S 75	96	72	硯	KL52ST131dフク土	3.66×5.80×1.08	粘板岩	
359	S 72	〃	—	〃	I51II下	6.56×6.42×1.12	〃	
360	S 10	〃	—	〃	K53II上	10.3×5.51×2.475	〃	
361	S 17	〃	—	砥石	F53II	11.7×6.24×4.76	砂岩質凝灰岩	
362	S 169	〃	—	〃	I51ST134cフク土	12.54×6.2×5.24	〃	
363	S 147	〃	—	〃	K52SE52フク土	13.59×6.72×6.73	〃	
364	S 108	〃	—	〃	I52SE43aフク土	10.24×4.16×2.69	〃	
365	S 1	〃	—	〃	K52I	5.99×3.86×3.99	〃	
366	S 102	〃	—	〃	I49III	6.37×6.94×4.29	〃	
367	S 171	〃	—	〃	I49III	5.09×4.86×1.79	〃	
368	S 145	96	—	砥石	F51SE50フク土	5.4×4.88×3.91	〃	
369	S 136	〃	—	〃	M53SX76フク土	9.04×3.42×2.22	〃	
370	S 119	〃	—	〃	H48III	11.45×6.94×5.70	〃	

Ch. 86 古銭計測表

No.	C-No.	名称	出土区	計測値 (外径×内径×厚さ) cm	備考
1	C 1	判読不能	K53I下	2.42×0.65×0.18	
2	C 2	〃	〃	2.3×0.6×0.1	
3	C 3	天聖元宝	M53I下	2.3×0.63×0.12	
4	C 4	洪武通宝	L53I下	2.3×0.58×0.17	裏に「銭」の文字あり
5	C 5	寛永通宝	K53I	2.35×0.64×0.11	
6	C 6	無文銭	〃	1.75×0.64×0.04	
7	C 7	〃	K52I下	1.75×0.82×0.08	
8	C 8	〃	K53II上	1.65×1.25×0.04	
9	C 9	政和通宝	〃	2.44×0.56×0.14	
10	C 10	洪武通宝	K53II	2.24×0.54×0.145	
11	C 11	無文銭	L52II	—×—×0.05	
12	C 12	永楽通宝	I52ST102フク土	2.34×0.67×0.1	
13	C 13	判読不能	J53IV	2.12×0.69×0.07	
14	C 14	〃	I53II	2.28×0.65×0.08	
15	C 15	〃	〃	2.30×0.66×0.11	
16	C 16	永楽通宝	H52II	2.45×0.54×0.14	
17	C 17	一 銭	H52	2.3×—×0.145	
18	C 18	寛永通宝	G52I	2.25×0.66×0.1	
19	C 19	〃	G53II	2.35×0.59×0.11	
20	C 20	一 銭	表採	2.3×—×0.145	
21	C 21	〇〇通宝	E53ST103フク土	2.99×0.65×0.17	
22	C 22	永楽通宝	〃	2.53×0.58×0.15	
23	C 23	十 銭	D53II	2.2×0.44×0.14	
24	C 24	無文銭	F53ST103フク土	1.78×0.7×0.05	
25	C 25	無文銭	D53ST104aフク土	1.85×0.61×0.06	
26	C 26	寛永通宝	E53II	2.34×0.54×0.13	
27	C 27	皇宋通宝	E53II下	2.44×0.75×0.1	
28	C 28	洪武通宝	〃	2.12×0.53×0.9	裏に「銭」の文字あり
29	C 29	〇宋通宝	E53ST111フク土	2.38×0.68×0.12	
30	C 30	開元通宝	〃	1.36×0.64×0.12	欠損
31	C 31	永楽通宝	F53ST118フク土	2.45×0.95×0.17	
32	C 32	元祐通宝	E53II	2.36×0.67×0.12	
33	C 33	〇〇〇宝	L53・54ST101フク土	—×—×0.16	
34	C 34	無文銭	E53ST103フク土	1.90×0.74×0.08	
35	C 35	聖宋元宝	E53ST103フク土	2.36×0.55×0.14	
36	C 36	至和元宝	〃	2.28×0.67×0.09	
37	C 37	熙寧元宝	E52ST107フク土	2.35×0.69×0.13	
38	C 38	寛永通宝	D52II	2.39×0.64×0.12	
39	C 39	無文銭	D53ST108フク土	1.76×0.1×0.06	
40	C 40	判読不能	J53II	2.34×0.71×0.09	
41	C 41	皇宋通宝	D52ST104フク土	2.3×0.72×0.11	
42	C 42	洪武通宝	D54ST105フク土	1.97×0.64×0.09	
43	C 43	〃	〃	2.3×0.5×0.13	
44	C 44	聖宋元宝	E52I	2.43×0.6×0.11	
45	C 45	元符通宝	E53ST111フク土	2.43×0.66×0.13	
46	C 46	〇寧元〇	E53ST103床面	—×—×0.1	
47	C 47	洪武通宝	E53ST111フク土	2.1×0.5×0.16	
48	C 48	元豊通宝	F52II下	2.48×7.4×0.12	
49	C 49	無文銭	E52II下	2.22×0.79×0.1	
50	C 50	〃	〃	2.16×0.63×0.08	
51	C 51	祥符元宝	F52SE40フク土	2.5×0.61×0.11	
52	C 52	熙寧元宝	F51ST116フク土	2.27×0.69×0.12	
53	C 53	元豊通宝	F51III上	2.23×0.6×0.16	
54	C 54	政和通宝	F52SE40フク土	2.38×0.64×0.13	
55	C 55	洪武通宝	F53ST117フク土	2.31×0.57×0.16	
56	C 56	無文銭	〃	1.90×0.65×0.08	
57	C 57	天禧通宝	〃	2.27×0.64×0.12	
58	C 58	判読不能	〃	2.35×0.62×0.14	

59	C	59	無文銭	F53ST117フク土	1.90×0.69×0.06	
60	C	60	元祐通宝	〃	2.36×0.65×0.14	
61	C	61	判読不能	〃	2.44×0.72×0.18	
62	C	62	景德元宝	〃	2.45×0.57×0.14	
63	C	63	判読不能	E53III上	2.33×0.19×0.11	
64	C	64	〃	〃	2.25×0.50×0.11	
65	C	65	開元通宝	F52SE40フク土	2.2×0.62×0.1	
66	C	66	無文銭	F52ST113フク土	—×—×0.1	
67	C	67	至和元宝	〃	2.35×0.58×0.12	
68	C	68	開元通宝	〃	2.4×0.69×0.12	
69	C	69	元豊通宝	〃	2.44×0.67×0.11	
70	C	70	洪武通宝	F52III	2.26×0.62×0.13	
71	C	71	判読不能	F52II	2.28×0.46×0.1	
72	C	62	〃	F52ST113フク土	—×—×0.12	
73	C	73	至和通宝	F53ST117フク土	2.45×0.72×0.11	
74	C	74	判読不能	〃	—×—×0.09	
75	C	75	洪武通宝	F52ST113床面直上	2.28×0.57×0.14	
76	C	76	嘉祐元宝	〃	2.33×0.63×0.12	
77	C	77	紹聖元宝	F52ST113フク土	2.48×0.66×0.14	
78	C	78	判読不能	〃	2.14×0.66×0.1	
79	C	79	無文銭	F53III上	2.28×0.62×0.1	
80	C	80	永樂通宝	E53ST103フク土	2.55×0.57×0.13	
81	C	81	判読不能	F53SX60フク土	—×—×0.21	
82	C	82	〃	F52ST113フク土	2.36×0.72×0.13	
83	C	83	〃	E52II上	2.32×0.7×0.11	
84	C	84	無文銭	F53ST118ビットフク土	1.25×0.56×0.07	
85	C	85	〃	H53III	2.14×0.61×0.09	
86	C	86	〃	G53III上	—×—×0.05	
87	C	87	皇宋元宝	〃	2.38×0.64×0.16	
88	C	88	五銭	〃	1.92×0.32×0.14	
89	C	89	洪武通宝	G53SE41フク土	2.93×0.4×0.2	
90	C	90	〃	〃	2.3×0.67×0.1	
91	C	91	天禧通宝	G53ST120フク土	2.06×0.61×0.14	
92	C	92	判読不能	〃	2.21×0.68×0.1	
93	C	93	〃	H52ST121フク土	—×—×0.09	
94	C	94	〃	〃	2.4×0.66×0.1	
95	C	95	〃	〃	2.3×0.59×0.11	
96	C	96	〃	〃	—×—×0.1	
97	C	97	判読不能	H52ST121フク土	—×—×0.09	
98	C	98	開元通宝	〃	2.36×0.69×0.14	
99	C	99	〇〇通宝	〃	2.38×0.95×0.14	
100	C	100	判読不能	〃	1.73×0.92×0.12	
101	C	101	無文銭	〃	—×—×0.04	
102	C	102	判読不能	〃	2.27×0.75×0.1	
103	C	103	〃	〃	1.83×0.68×0.09	
104	C	104	〃	〃	2.17×0.65×0.12	
105	C	105	無文銭	〃	2.14×0.68×0.08	
106	C	106	〃	〃	2.06×0.66×0.08	
107	C	107	判読不能	H53SE41フク土	—×—×0.15	
108	C	108	〃	〃	2.44×0.52×0.15	
109	C	110	〃	〃	—×—×0.16	
110	C	111	洪武通宝	F52ST113フク土	2.33×0.61×0.15	
111	C	112	開元通宝	〃	2.44×0.62×0.12	
112	C	113	祥符元宝	G53ST120フク土	2.4×0.58×0.12	
113	C	114	紹聖元宝	G53SE41フク土	2.4×0.68×0.15	
114	C	115	判読不能	F53ST118フク土	2.64×0.71×0.19	
115	C	116	無文銭	H52ST121フク土	1.84×0.73×0.09	
116	C	117	〃	〃	—×—×0.07	
117	C	118	〃	〃	1.85×0.7×0.08	
118	C	119	判読不能	〃	2.36×0.68×0.14	
119	C	120	〃	〃	2.44×0.58×0.16	

120	C	121	○宋元宝	F52ST113フク土	2.37×0.68×0.1	
121	C	122	永樂通宝	H53SE41フク土	2.5×0.56×0.12	
122	C	123	判読不能	F53ST118フク土	2.64×0.6×0.28	
123	C	124	〃	〃	2.51×0.6×0.2	
124	C	125	〃	H52ST121フク土	—×—×0.06	
125	C	126	無文銭	〃	1.93×0.69×0.05	
126	C	127	熙寧元宝	〃	2.22×0.66×0.13	
127	C	128	朝鮮通宝	〃	2.29×0.66×0.17	
128	C	129	元祐通宝	F53ST117フク土	2.46×0.71×0.14	
129	C	130	洪武通宝	〃	2.28×0.54×0.14	
130	C	131	○○○宝	H53SE41フク土	—×—×0.15	
131	C	133	判読不能	H52ST121フク土	2.44×0.77×0.13	
132	C	135	〃	〃	1.82×0.97×0.19	
133	C	137	〃	〃	2.16×0.68×0.12	
134	C	138	〃	〃	2.25×0.33×0.22	
135	C	139	洪武通宝	〃	2.32×—×0.13	
136	C	140	天聖元宝	F53ST117フク土	2.49×0.61×0.13	
137	C	141	洪武通宝	〃	2.35×0.5×0.13	
138	C	142	紹聖元宝	〃	2.36×0.66×0.14	
139	C	143	洪武通宝	H53SE41フク土	2.27×0.57×0.17	
140	C	144	開○通宝	F53ST117床面	2.50×0.73×0.12	
141	C	145	洪武通宝	I53III	×0.58×0.1	
142	C	146	聖宋元宝	I52II下	2.43×0.64×0.13	
143	C	147	祥符元宝	I52III	2.86×0.71×0.08	
144	C	148	○○○宝	〃	—×—×0.08	
145	C	149	○○元○	J52III	—×—×0.07	
146	C	150	皇宋通宝	〃	2.44×0.62×0.17	
147	C	151	無文銭	K52II	2.06×0.7×0.1	
148	C	152	至道元宝	〃	2.46×0.6×0.12	
149	C	153	熙寧元宝	〃	2.34×0.62×0.165	
150	C	154	元豊通宝	J53III	2.96×0.64×0.13	
151	C	155	皇宋通宝	G52III	2.45×0.73×0.15	
152	C	156	洪武通宝	K52II下	2.38×0.65×0.17	
153	C	157	咸平元宝	J53III	2.44×0.62×0.12	
154	C	158	皇宋通宝	L52II下	2.34×0.74×0.12	
155	C	159	洪武通宝	L52II下	2.34×0.54×0.2	
156	C	160	永樂通宝	K53II下	2.57×0.57×0.17	
157	C	161	洪武通宝	L53II下	2.0×0.7×0.08	
158	C	162	判読不能	〃	2.3×0.64×0.14	
159	C	163	熙寧元宝	H53ST127フク土	2.44×0.64×0.16	
160	C	164	開元通宝	I52ST102フク土	2.51×0.6×0.13	
161	C	165	判読不能	L53III上	2.44×0.68×0.16	
162	C	166	洪武通宝	G53SX61床面	2.28×0.55×0.19	
163	C	167	無文銭	I52ST102フク土	1.91×0.5×0.08	
164	C	168	判読不能	J53ST128フク土	2.56×0.66×0.21	
165	C	169	○元通宝	I51II下	2.19×0.65×0.1	
166	C	170	政和通宝	H51II下	2.4×0.56×0.13	
167	C	171	判読不能	G52SX63床面直上	2.26×0.62×0.14	
168	C	173	○○○宝	G52SX63フク土	—×0.45×0.14	
169	C	174	○元通宝	I52ST102フク土	2.46×0.75×0.12	
170	C	175	紹聖元宝	K52ST130フク土	2.4×0.68×0.15	
171	C	176	洪武通宝	K53ST130フク土	2.09×0.65×0.12	
172	C	177	判読不能	〃	2.27×0.67×0.12	
173	C	178	無文銭	〃	2.1×0.76×0.1	
174	C	179	〃	〃	—×1.05×0.05	
175	C	180	〃	〃	2.17×0.75×0.11	
176	C	181	咸平元宝	〃	—×—×0.13	
177	C	182	永樂通宝	I50SD32フク土	—×0.46×0.17	
178	C	183	洪武通宝	I52SE43フク土	2.33×0.56×0.16	
179	C	184	無文銭	〃	1.83×0.74×0.08	
180	C	185	〃	〃	1.85×0.84×0.07	

181	C	186	洪武通宝	I52SE43フク土	2.26×0.68×0.14	
182	C	187	嘉定通宝	〃	2.47×0.7×0.11	
183	C	188	景德元宝	〃	2.45×0.61×0.12	
184	C	189	開元通宝	I52ST102フク土	2.38×0.66×0.12	
185	C	190	無文銭	〃	2.38×0.69×0.13	
186	C	191	聖宋元宝	I52ST125フク土	2.48×1.05×0.11	
187	C	192	洪武通宝	〃	2.44×0.54×0.14	
188	C	193	〃	〃	2.14×0.49×0.17	裏に「一銭」の文字あり
189	C	195	○宋通宝	L52ST132フク土	2.64×0.79×0.12	
190	C	196	永樂通宝	〃	2.42×0.56×0.14	
191	1197		天聖元宝	K52ST131フク土	2.43×0.55×0.13	
192	C	198	判読不能	〃	2.22×0.7×0.1	
193	C	199	○豊○	K52ST131フク土	－×0.4×0.16	
194	C	200	開元通宝	K53ST130フク土	2.45×0.64×0.15	
195	C	201	天禧通宝	K53ST129フク土	2.49×0.66×0.13	
196	C	202	咸平元宝	I52ST102フク土	2.47×0.62×0.15	
197	C	203	判読不能	K53ST130フク土	－×－×0.15	
198	C	204	熙寧元宝	J52SX64フク土	2.41×0.7×0.15	
199	C	205	○武通宝	I52ST102フク土	－×0.5×0.15	裏に「一銭」の文字あり
200	C	206	判読不能	I51ST134フク土	2.58×0.72×0.13	
201	C	207	〃	I52ST102フク土	2.38×0.63×0.12	
202	C	208	無文銭	〃	2.21×－×0.2	
203	C	209	〃	J52SX64フク土	2.1×0.74×0.13	
204	C	210	○○通宝	I51ST133フク土	2.36×0.6×0.13	
205	C	211	判読不能	I52ST102フク土	2.26×0.77×0.15	
206	C	212	無文銭	J53ST128フク土	1.71×－×0.06	
207	C	213	洪武通宝	I52ST102フク土	2.0×0.54×0.14	裏に「一銭」の文字あり
208	C	214	皇宋通宝	J52SX64フク土	2.5×0.64×0.14	
209	C	215	紹聖元宝	I52ST102フク土	2.41×0.71×0.12	
210	C	216	熙寧元宝	〃	2.33×0.67×0.14	
211	C	217	天○○宝	〃	2.4×0.6×0.12	
212	C	218	治平元宝	I53ST102フク土	2.43×0.63×0.14	
213	C	219	景祐元宝	〃	2.48×0.41×0.11	
214	C	220	元○○宝	〃	2.34×0.71×0.35	
215	C	221	咸平元宝	〃	2.41×0.59×0.12	
216	C	222	紹聖元宝	J53SE44フク土	2.41×0.6×0.12	
217	C	223	洪武通宝	L52ST138フク土	2.28×0.56×0.17	
218	C	224	無文銭	J53SE44フク土	1.84×0.84×0.1	
219	C	225	判読不能	I52SE43フク土	2.17×0.67×0.1	
220	C	226	政和通宝	I52ST133フク土	2.5×0.58×0.09	
221	C	227	元豊通宝	I51ST133フク土	2.48×0.67×0.1	
222	C	228	判読不能	I51ST134フク土	2.59×0.14×0.17	
223	C	229	開元通宝	J53SE44フク土	2.44×0.69×0.19	
224	C	230	元祐通宝	J53SE46フク土	2.4×0.66×0.13	
225	C	231	開元通宝	I52ST102フク土	2.36×0.64×0.11	
226	C	232	洪武通宝	〃	2.43×0.58×0.19	
227	C	233	判読不能	〃	2.43×－×0.11	
228	C	234	開元通宝	〃	2.31×0.65×0.13	
229	C	235	判読不能	K53ST130フク土	－×－×0.14	
230	C	236	聖宋元宝	J53SE44フク土	2.4×0.66×0.17	
231	C	237	○○元宝	J53ST128床面	2.41×0.68×0.11	4箇所に穿孔あり
232	C	238	景德元宝	〃	2.43×0.58×0.15	
233	C	239	洪武通宝	K53ST130フク土	1.9×0.65×0.07	
234	C	240	皇宋通宝	I52ST125フク土	2.3×0.57×0.09	
235	C	241	判読不能	K52ST131フク土	2.13×0.67×0.15	
236	C	242	○○○宝	L52ST138フク土	2.5×0.76×0.17	
237	C	243	洪武通宝	J52ST124フク土	2.35×0.5×0.19	裏に葉が付着
238	C	244	天禧通宝	E52ST113フク土	2.4×0.64×0.17	
239	C	245	熙寧元宝	K52ST130フク土	2.4×0.73×0.13	
240	C	246	紹聖元宝	L52ST138フク土	2.49×0.8×0.12	
241	C	247	開元通宝	H51III	2.45×0.68×0.13	

242	C	248	鉄 銭	I50表採	2.53×0.77×0.23	
243	C	249	判読不能	H48III	2.24×0.68×0.11	
244	C	250	寛永通宝	H48II	2.42×0.61×0.11	
245	C	254	二 銭	G51III	3.18×—×0.22	
246	C	255	無 文 銭	F52ST114フク土	2.2×0.86×0.1	
247	C	256	政和通宝	F51SE50フク土	2.45×0.62×0.13	
248	C	257	洪武通宝	〃	1.87×0.61×0.11	
249	C	258	咸平元宝	I48III	2.48×0.6×0.14	△共伴
250	C	259	元豊通宝	〃	2.43×0.6×0.14	△共伴
251	C	260	祥符通宝	〃	2.55×0.64×0.1	△共伴
252	C	261	○元○宝	I48III	2.37×0.57×0.13	
253	C	262	皇宋通宝	I48III	2.3×0.74×0.12	SB19に伴う
254	C	263	無 文 銭	F51SE50フク土	1.74×0.92×0.06	
255	C	264	判読不能	G51SE48フク土	2.33×0.55×0.14	
256	C	265	天聖通宝	H50ST146フク土	2.21×0.68×0.12	
257	C	266	天禧通宝	F51SE50フク土	2.3×0.65×0.12	
258	C	267	皇宋通宝	G51SE48フク土	2.48×0.74×0.1	
259	C	268	咸平元宝	F51SE50フク土	2.99×0.65×0.13	
260	C	269	無 文 銭	〃	1.76×0.95×0.05	○共伴
261	C	270	〃	〃	1.76×0.1×0.08	○共伴
262	C	271	〃	〃	1.69×0.1×0.05	○共伴
263	C	272	開元通宝	H51ST141フク土	2.38×0.67×0.12	
264	C	273	咸平元宝	H51ST133フク土	2.40×0.58×0.12	
265	C	274	無 文 銭	F51SE50フク土	1.76×0.9×0.09	
266	C	275	判読不能	H48ST142フク土	2.3×0.66×0.34	
267	C	276	無 文 銭	I48ST145フク土	1.74×0.83×0.09	
268	C	277	〃	〃	1.9×—×0.06	
269	C	278	〃	H48ST142フク土	1.91×0.64×0.05	
270	C	279	〃	〃	1.95×0.76×0.1	
271	C	280	〃	I48ST145フク土	1.62×0.62×0.08	
272	C	281	〃	〃	—×—×0.08	
273	C	282	〃	〃	1.7×1.3×0.06	
274	C	283	〃	〃	1.55×0.84×0.07	
275	C	284	至大通宝	H48ST142フク土	2.3×0.64×0.11	
276	C	285	皇宋元宝	H50SD32フク土	0.42×0.69×0.12	
277	C	286	無 文 銭	I48ST145フク土	1.7×0.8×0.08	
278	C	287	〃	〃	1.8×1.08×0.1	
279	C	288	至大通宝	L53ピット内フク土	2.39×0.5×0.17	
280	C	289	○○○室	L53ピット内フク土	—×0.58×0.14	
281	C	290	無 文 銭	K53ピット内フク土	1.74×0.69×0.05	
282	C	291	判読不能	M53ST149フク土	2.38×0.64×0.13	
283	C	292	元祐通宝	M63ピット内フク土	2.36×0.58×0.12	
284	C	293	紹熙元宝	L53ピット内フク土	2.46×0.62×0.14	
285	C	294	判読不能	H52II	2.4×0.6×0.17	
286	C	295	〃	L53ピット内フク土	2.42×0.6×0.15	
287	C	296	〃	L53III	2.24×0.62×0.14	
288	C	297	大中通宝	L53III	2.2×0.55×0.14	
289	C	298	判読不能	L53III	2.12×0.66×0.14	
290	C	299	〃	〃	2.4×0.7×0.13	
291	C	300	洪武通宝	K52ST130フク土	2.2×0.58×0.12	
292	C	301	皇宋通宝	K53SX78フク土	2.31×0.61×0.11	
293	C	302	太平通宝	K53攪乱層	2.44×0.59×0.1	
294	C	303	判読不能	〃	2.27×0.79×0.14	
295	C	304	〃	L53SX78フク土	—×—×0.1	
296	C	305	天禧通宝	F53ST118フク土	2.38×0.67×0.12	
297	C	306	寛永通宝	H48ST143フク土	2.36×0.61×0.12	
298	C	307	判読不能	K53III下	2.28×0.64×0.1	
299	C	308	〃	I52SE43フク土	2.20×0.61×0.11	
300	C	309	朝鮮通宝	K53ピット内フク土	2.43×0.58×0.13	
301	C	310	元祐通宝	I48ピット内フク土	2.41×0.73×0.13	
302	C	311	判読不能	K53IV	2.14×0.71×0.12	

303	C	312	判読不能	K53IV	2.26×0.61×0.12	
304	C	313	無文銭	〃	2.3×0.69×0.11	
305	C	316	政和通宝	I51IV	2.48×0.62×0.15	
306	C	317	〃	I48ST147フク土	2.31×0.67×0.12	
307	C	318	無文銭	〃	2.0×0.75×0.14	薬が付着
308	C	319	永楽通宝	I48ビット内フク土	2.05×0.53×0.12	SB19付属ビット
309	C	320	洪武通宝	〃	2.64×0.58×0.17	〃
310	C	321	永楽通宝	〃	—×—×0.11	〃
311	C	322	嘉祐通宝	K52SE43フク土	2.40×0.71×0.14	
312	C	323	永楽通宝	K53ST128フク土	2.51×0.56×0.14	
313	C	324	判読不能	L52ST38フク土	—×0.45×0.13	
314	C	325	元〇通宝	〃	2.45×0.65×0.15	
315	C	326	〇〇〇宝	I51SE52フク土	—×—×0.14	
316	C	327	熙寧元宝	I48SE49フク土	2.36×0.75×0.14	
317	C	328	無文銭	I48ST147フク土	2.0×0.74×0.09	
318	C	329	〃	〃	1.9×0.79×0.12	
319	C	330	判読不能	〃	2.24×0.63×0.12	
320	C	331	〃	〃	2.3×0.63×0.14	
321	C	332	〃	〃	2.16×0.62×0.1	
322	C	333	無文銭	〃	1.9×0.54×0.08	
323	C	334	判読不能	〃	2.2×0.64×0.2	
324	C	335	〃	〃	2.48×0.7×0.25	
325	C	336	〃	〃	2.3×0.64×0.12	
326	C	337	〃	〃	2.4×0.67×0.23	
327	C	338	無文銭	〃	1.93×0.83×0.07	
328	C	339	判読不能	〃	2.18×0.7×0.24	
329	C	340	景德元宝	F51SEフク土	2.45×0.59×0.13	
330	C	341	無文銭	〃	—×—×0.06	
331	C	342	判読不能	I48ST147フク土	2.2×0.64×0.17	
332	C	343	〃	I52ビット内フク土	2.16×0.66×0.17	
333	C	344	洪武通宝	I51SE52フク土	2.14×0.7×0.1	
334	C	345	元豊通宝	I51IV	2.5×0.64×0.13	
335	C	346	淳化元宝	K52SX79フク土	2.4×0.56×0.12	
336	C	347	無文銭	I48ST145フク土	1.7×0.69×0.06	
337	C	348	熙寧通宝	H48III	2.05×0.65×0.17	
338	C	349	大観通宝	〃	2.2×0.55×0.07	
339	C	350	判読不能	〃	2.27×0.61×0.13	
340	C	351	無文銭	H48ビット内フク土	1.92×0.95×0.06	
341	C	352	〃	〃	2.13×0.74×0.09	
342	C	353	〇〇〇宝	L52ST138フク土	2.48×0.62×0.2	
343	C	354	永楽通宝	I52III	2.36×0.57×0.15	
344	C	355	判読不能	I55III	2.18×0.67×0.08	
345	C	357	皇宋通宝	〃	2.46×0.69×0.12	
346	C	358	判読不能	〃	2.31×0.71×0.12	
347	C	359	元符通宝	F52SX58フク土	2.47×0.7×0.14	
348	C	360	景德元宝	F52SX62フク土	2.43×0.61×0.13	
349	C	361	元祐元宝	〃	2.43×0.77×0.13	
350	C	362	至大通宝	F53SX83フク土	2.41×0.54×0.17	
351	C	363	判読不能	〃	2.3×0.63×0.1	
352	C	364	〃	〃	2.12×0.72×0.08	
353	C	365	〃	〃	2.25×0.69×0.1	
354	C	366	〃	〃	2.04×0.69×0.08	
355	C	367	〃	〃	2.52×0.52×0.14	
356	C	368	判読不能	F53SX83フク土	2.29×0.725×0.12	
357	C	369	〃	〃	2.21×0.63×0.12	
358	C	370	元豊通宝	F53III下	2.55×0.71×0.14	
359	C	371	判読不能	H48ST142フク土	2.26×0.64×0.12	
360	C	372	無文銭	F53ビット内フク土	1.7×0.98×0.05	
361	C	373	無文銭	F53ビット内フク土	1.35×—×0.04	
362	C	374	〃	〃	—×—×0.04	
363	C	375	至道元宝	G53SE57フク土	2.35×0.63×0.11	

364	C	376	永楽通宝	〃	2.46×0.52×0.14	
365	C	377	無文銭	〃	—×—×0.16	
366	C	379	至道元宝	H53III	2.43×0.63×0.12	
367	C	380	祥符〇〇	E52ST113フク土	2.21×0.6×0.1	
368	C	381	判読不能	E53II	—×—×0.12	
369	C	382	〃	K52II	—×0.5×0.1	
370	C	383	無文銭	K53II上	—×—×0.12	
371	C	384	治平元宝	表採	2.41×0.64×0.13	
372	C	385	無文銭	〃	1.84×0.96×0.08	
373	C	386	皇宋通宝	L52ST132フク土	2.47×0.69×0.1	※付着して出土
374	C	387	判読不能	〃	2.43×0.62×0.13	※付着して出土
375	C	388	〇〇元宝	〃	2.46×0.6×0.12	※付着して出土
376	C	389	無文銭	H52ST121フク土	1.78×0.68×0.05	
377	C	390	天聖元宝	表採	2.47×0.67×0.14	
378	C	391	判読不能	〃	2.37×0.6×0.12	
379	C	392	〃	F53ピット内フク土	2.49×0.64×0.22	
380	C	393	景德元宝	H53II	2.26×0.6×0.11	
381	C	394	判読不能	L52SX65フク土	—×—×0.1	
382	C	395	無文銭	J52ピット内フク土	—×—×0.08	
383	C	396	判読不能	〃	2.39×0.65×0.1	
384	C	397	半銭	〃	2.2×—×0.63	
385	C	398	判読不能	F51SE50フク土	—×—×0.1	

浪岡城跡 V

昭和 58 年 3 月 25 日 印刷

昭和 58 年 3 月 31 日 発行

発行 浪岡町教育委員会

印刷 青森オフセット印刷株式会社

Fig. 4 発掘調査区全体図(1)A区 (1/100)

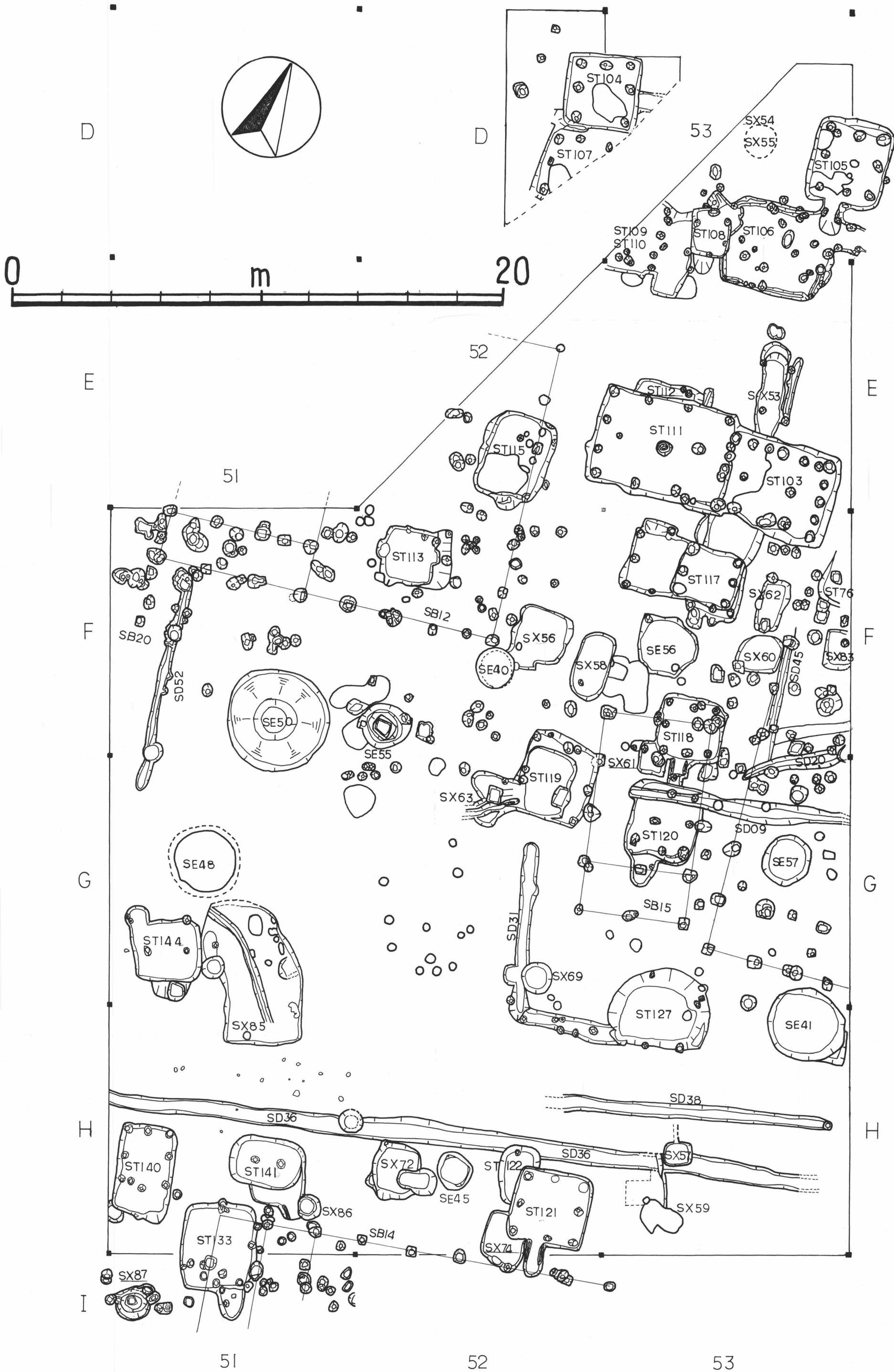


Fig. 5 発掘調査区全体図(2)B区 (1/100)

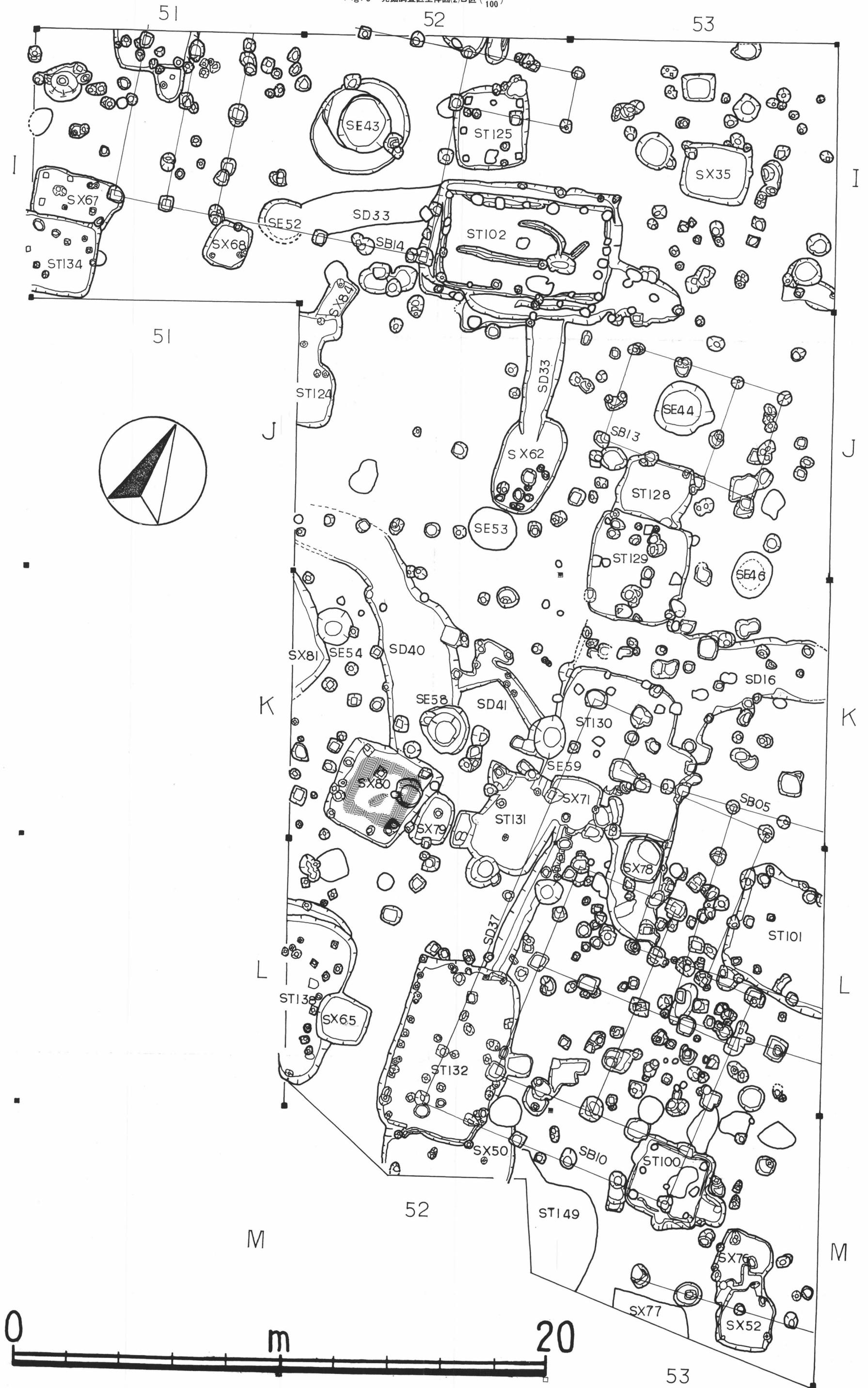


Fig. 6 発掘調査区全体図(3)C区 (1/100)

